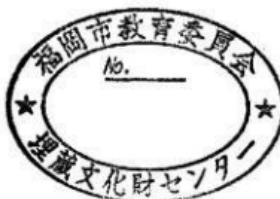


# 板付周辺遺跡調査報告書

(3)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第36集



1976

福岡市教育委員会

正誤表

頁	行	誤	正
P 3	3行目	鳥栖口一ム層を中	鳥栖口一ム層中
P 3	下から5行目	横など調整	横など調整
P 5	16行目	石英・微細	石英・微砂
P 6	下から10行目	方法ものは	方法とするものは
P 8	2行目	前期末・中期初頭	前期末～中期初頭
P 15	下から7行目	第22号竪棺墓	第23号竪棺墓
P 17	下から12行目	一条の りつけ	一条の貼りつけ
P 27	15行目	根痕	板痕
P 38	21行目	平坦を	平坦を
P 38	24行目	施してる。	施している。
P48～P54			執筆は山口
P 49	14～15行目	除いたが	除く折には
P 51	19行目	鉢型	鉢形
P57～P60			執筆は沢
P 60	9行目	平坦	平坦
P 93	7行目	年令は	残存歯から推定年令は
P 113	Tab.3-1 No2	小円内碟	小円碟
P 117	21行目	器碗	器窓
P 122	4行目	0.75×10.5cm	0.75×1m
P 123	15行目	安定感を与える	安定感を与える
P 125	No.20	氷裂多し	冰裂多し
P 125	No.95	淡緑色	淡綠色
P 127	12行目	エンボ盛土	エンボで盛土
P 146	2行目	砂質出土	砂層出土

# 板付周辺遺跡調査報告書

(3)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第36集

1976

福岡市教育委員会

## 序 文

近年、福岡平野における土地開発の増加は、弥生時代初頭の農耕集落址として著名な板付遺跡周辺にも及び、急速に宅地化が進んでおります。

福岡市教育委員会では、板付遺跡保存整備事業の一環として、昭和48年度から国庫補助事業により、周辺地域の緊急調査を実施しております。

この報告書は、昭和50年度に実施した縄文時代から近世に至る生活址・墓地の調査報告であり、夜白式土器の検出、板付遺跡の弥生時代の墓域の広がり等多くの成果をあげることができました。

これはひとえに、地元の方々や関係者各位の埋蔵文化財に対するご理解とご援助によるもので、感謝に堪えません。

今後も文化財の保護を推進して行く所存でございますので、皆様方のなお一層のご理解とご協力を願ってやみません。

昭和51年3月

福岡市教育委員会

教育長 古村澄

## 本文目次

序 本年度調査地と調査経過.....	(沢 皇臣) ..... 1
第1章 G-5a地点.....	3
I 調査概要.....	(山口義治) ..... 3
II 弥生時代の墓地.....	(山口・原俊一) ..... 3
III 弥生時代の竪穴と出土遺物.....	(浜石哲也・原) ..... 57
IV 墓茶褐色粘質土層出土遺物.....	(横山邦輔・山口) ..... 79
V 中世以降の竪穴と出土遺物.....	(横山) ..... 86
VI 近世墓.....	(横山) ..... 89
VII 表土層・表採の遺物.....	(横山) ..... 97
VIII まとめ.....	(山口) ..... 97
第2章 F-8 地点.....	(横山) ..... 101
I 位置.....	101
II 調査と成果.....	101
第3章 B-12a 地点.....	(横山) ..... 103
I 調査概要.....	103
II 古墳時代以降の遺構と遺物.....	103
III まとめ.....	113
第4章 諸岡遺跡E区.....	(横山) ..... 117
I 調査概要.....	117
II 遺構と出土遺物.....	117
III 表面採集遺物.....	123
IV まとめ.....	124
第5章 諸岡遺跡F区.....	(沢) ..... 127
I 調査概要.....	127
II 出土遺物.....	130
III まとめ.....	146
あとがき.....	(山口) ..... 149

## 図版目次

PL. I 1 G-5a地点A区遺構出土状態.....	
2 G-5a地点第13~15号櫛棺墓出土状態.....	
PL. II 1 G-5a地点A区遺構出土状態.....	
2 G-5a地点B区遺構出土状態.....	
PL. III 1 G-5a地点A区第1号櫛棺墓出土状態.....	

PL. III	2	G-5a地点A区第24号櫛棺墓出土状態
	3	G-5a地点A区第33号櫛棺墓出土状態
	4	G-5a地点A区第36号櫛棺墓出土状態
PL. IV	1	G-5a地点A区第1号上坟墓出土状態
	2	G-5a地点A区第10号木棺墓出土状態
	3	G-5a地点A区第14号木棺墓出土状態
	4	G-5a地点B区第10号竖穴出土状態
PL. V		G-5a地点B区第10号竖穴出土土器
PL. VI	1	諸岡E区遺構出土状態
	2	B-12a地点遺物出土状態
PL. VII	1	諸岡F区Bトレンチ
	2	諸岡F区Aトレンチ南壁土層
	3	諸岡F区出土土器
	4	諸岡F区出土石器

## 摂 図 目 次

### 一序一

Fig. 1-1 G-5a地点地形図

### 第一章一

Fig. 1-1 G-5a地点地形図

Fig. 1-27 第29号櫛棺実測図

Fig. 1-2 G-5a地点遺構配図 (別添)

Fig. 1-28 第30号櫛棺墓・櫛棺実測図

Fig. 1-3 第1号櫛棺墓実測図

Fig. 1-29 第31・32号櫛棺墓・櫛棺実測図

Fig. 1-4 第1号櫛棺・棺内出土石刀実測図

Fig. 1-30 第33号櫛棺墓・櫛棺実測図

Fig. 1-5 第2・3号櫛棺墓実測図

Fig. 1-31 第34号櫛棺墓・櫛棺実測図

Fig. 1-6 第2・3号櫛棺墓実測図

Fig. 1-32 第35・36号櫛棺墓実測図

Fig. 1-7 第4・5号櫛棺墓・櫛棺実測図

Fig. 1-33 第35・36号櫛棺・第35号櫛棺墓々塚出土土器

Fig. 1-8 第6・7・8号櫛棺墓実測図

Fig. 1-34 第37・38号櫛棺墓・櫛棺実測図

Fig. 1-9 第9・10号櫛棺墓・櫛棺実測図

Fig. 1-35 第39・40・41・42号櫛棺墓実測図

Fig. 1-10 第11・12号櫛棺墓・櫛棺実測図

Fig. 1-36 第39・40号櫛棺墓実測図

Fig. 1-11 第13・14・15号櫛棺墓実測図

Fig. 1-37 第41・42号櫛棺墓実測図

Fig. 1-12 第13・14・15号櫛棺墓実測図

Fig. 1-38 第1・2号土塚墓実測図

Fig. 1-13 第16・17号櫛棺墓・櫛棺実測図

Fig. 1-39 第3・4号土塚墓実測図

Fig. 1-14 第18号櫛棺墓・櫛棺実測図

Fig. 1-40 第5号木棺墓実測図

Fig. 1-15 第19号櫛棺墓実測図

Fig. 1-41 第6号木棺墓実測図

Fig. 1-16 第19号櫛棺墓出土石核実測図

Fig. 1-42 第7・8号木棺墓実測図

Fig. 1-17 第20・21号櫛棺墓・櫛棺実測図

Fig. 1-43 第9号木棺墓実測図

Fig. 1-18 第22号櫛棺墓・櫛棺実測図

Fig. 1-44 第10号木棺墓・第11・12・13号土塚墓実測図

Fig. 1-19 第23・24号櫛棺墓実測図

Fig. 1-45 第14号木棺墓・第15号土塚墓実測図

Fig. 1-20 第23・24号櫛棺・第23号櫛棺墓出土遺物実測図

Fig. 1-46 第16・17号木棺墓実測図

Fig. 1-21 第25・26号櫛棺墓実測図

Fig. 1-47 第18・19・20・22号木棺墓・第21・23号土塚墓実測図

Fig. 1-22 第25・26号櫛棺墓実測図

Fig. 1-48 各木棺墓・土塚墓埋上内出土土器

Fig. 1-23 第27号櫛棺墓実測図

Fig. 1-49 第2号竖穴・竖穴出土土器実測図

Fig. 1-24 第27号櫛棺墓実測図

Fig. 1-50 第2号竖穴・出土土器実測図

Fig. 1-25 第28号櫛棺墓・櫛棺実測図

Fig. 1-51 第3・4号竖穴・第3号竖穴出土土器

Fig. 1-26 第29号櫛棺墓実測図

Fig. 1-52 第5号竖穴・竖穴出土土器実測図

Fig. 1-53	第6号竪穴・竪穴出土土器実測図	63
Fig. 1-54	第10号竪穴・竪穴出土土器実測図	64
Fig. 1-55	第10号竪穴出土土器実測図	66
Fig. 1-56	第10号竪穴出土土器実測図	69
Fig. 1-57	第11号竪穴・竪穴出土遺物実測図	72
Fig. 1-58	第12号竪穴・竪穴出土遺物実測図	73
Fig. 1-59	第13号竪穴・第24号上部墓室実測図	74
Fig. 1-60	第14号竪穴・竪穴出土遺物実測図	75
Fig. 1-61	柱穴状小ピット出土土器実測図・拓影図	77
Fig. 1-62	暗茶褐色粘質土層出土土器拓影図	80
Fig. 1-63	暗茶褐色粘質土層出土土器実測図	81
Fig. 1-64	暗茶褐色粘質土層出土土器実測図	82
Fig. 1-65	黑色粘質土層出土土器実測図	83
Fig. 1-66	第1号竪穴・竪穴出土遺物実測図	85
Fig. 1-67	第7号竪穴(井戸)出土土器実測図	86
Fig. 1-68	第7号竪穴(井戸)出土土器実測図	86
Fig. 1-69	第9号竪穴(井戸)実測図	87
Fig. 1-70	第9号竪穴(井戸)出土土器実測図	88
Fig. 1-71	第1号近世木棺墓・出土土器実測図	90
Fig. 1-72	第2号近世木棺墓・出土遺物実測図	91
Fig. 1-73	第2号近世木棺墓銅鏡銅銭拓影図	92
Fig. 1-74	第3号近世木棺墓実測図	93
Fig. 1-75	第3号近世木棺墓銅鏡銅銭拓影図	94
Fig. 1-76	第1・2号近世木棺墓・出土遺物実測図	95
Fig. 1-77	第1号近世木棺墓銅鏡銅銭拓影図	96
Fig. 1-78	表上・表下土器実測図・拓影図	97
<b>一 第2章 -</b>		
Fig. 2-1	F-8地点測量図	101
Fig. 2-2	F-8地点土層柱状図・堆积遺物実測図	102
<b>一 第3章 -</b>		
Fig. 3-1	B-12a地点遺構出土状況図	103
Fig. 3-2	B-12a地点北壁土層図	104
Fig. 3-3	B-12a地点溝出土状況図	105
Fig. 3-4	B-12a地点木材・土器出土状況図	106
Fig. 3-5	B-12a地点出土土器実測図	107
Fig. 3-6	黒色粘質土層出土土器拓影図(1)	108
Fig. 3-7	黒色粘質土層出土土器拓影図(2)	110
Fig. 3-8	出土木器・坑窓実測図	112
<b>一 第4章 -</b>		
Fig. 4-1	諸岡E区測量図	118
Fig. 4-2	諸岡E区遺構出土状況図(1)…(羽添)	119
Fig. 4-3	遺構出土遺物実測図(1)	119
Fig. 4-4	遺構出土遺物実測図(2)	120
Fig. 4-5	E区出土石器実測図	120
Fig. 4-6	表探触器・瓦実測図	122
<b>一 第5章 -</b>		
Fig. 5-1	諸岡F区トレント配置図およびAト レンチ南壁・北壁土層断面図	128
Fig. 5-2	諸岡F区トレント配置図およびBト レンチ西壁・Cトレント西壁土層断面図	129
Fig. 5-3	諸岡F区砂層出土土器実測図	130
Fig. 5-4	諸岡F区黒色粘質土層出土土器実測図(1)	132
Fig. 5-5	諸岡F区黒色粘質土層出土土器実測図(2)	133
Fig. 5-6	諸岡F区黒色粘質土層出土土器実測図(3)	134
Fig. 5-7	諸岡F区黒色粘質土層出土土器実測図(4)	136
Fig. 5-8	諸岡F区黒色粘質土層出土土器実測図(5)	137
Fig. 5-9	諸岡F区黒色粘質土層出土土器実測図(6)	139
Fig. 5-10	諸岡F区黒色粘質土層出土土器実測図(7)	141
Fig. 5-11	諸岡F区出土石器実測図(1)	143
Fig. 5-12	諸岡F区出土石器実測図(2)	144
Fig. 5-13	諸岡F区出土石器実測図(3)	145

## 表 目 次

### 一 第1章 -

Tab. 1-1	G-5a地点便橋裏・甕表	56
Tab. 1-2	G-5a地点木棺裏・上地裏・甕表	57
Tab. 1-3	柱穴状小ピット・甕表	77
Tab. 1-4	近世墓廟銅鏡銅銭表	94
Tab. 1-5	第3号木棺墓出土陶器吸耗度	95
<b>一 第3章 -</b>		
Tab. 3-1	B-12a地点出土遺物・甕表	113

Tab. 3-2	溝底出土土器・甕表	116
Tab. 3-3	B-12a表探触器・甕表	116
Tab. 3-4	黒色粘質土層直出土土器・甕表	116
Tab. 3-5	杭列及び流木付近出土遺物	116
Tab. 3-6	B-12a黒色粘質土層出土遺物	116
<b>一 第4章 -</b>		
Tab. 4-1	諸岡E区出土遺物・甕表	124
Tab. 4-2	表面采集遺物・甕表	126

## 一 れいげん一

- 本報告書は、福岡市教育委員会が国庫補助を受けて、1975年度に実施した福岡市博多区板付周辺地区的民間宅地造成・建築にともなう緊急発掘調査報告書である。
- 実測図は調査担当者、参加学生により、製図は主に各項目担当者が当たった。
- 調査においては、九州大学医学部井上昌文教授、同木村幾多郎助手の指導助言を得た。
- 今真は、遺構は山口、原、遺物は沢が担当した。
- 本報告の執筆分担は本文目次に示した。編集は、沢、横山の協力を得て山口が行なった。



Fig. 1 緊急調査地点と板付地区の遺跡

1. B-12a地点
2. F-8地点
3. G-5a地点
4. 藩間遺跡(E区)
5. 藩間遺跡(F区)(今年度調査)
6. 清閑道路
7. D-9a地点
8. D-E-9地点
9. D-9-10地点
10. D-6-7地点
11. A-B-13地点
12. H-8地点
13. 板付市営住宅遺跡(1971-1974年調査)
14. 板付遺跡

## 序 本年度調査地と調査経過

昨年・一昨年にひきつづき、国庫補助事業として、板付周辺地域の緊急調査を実施した。調査はいずれも宅地造成・住宅建設に伴うものであり、次の5ヶ所で行った。

1. G-5a地点 福岡市博多区板付2丁目9-6。合庭久男氏所有地1353m<sup>2</sup>。発掘面積約600m<sup>2</sup>。

2. F-8地点 福岡市博多区板付5丁目7-124。長谷川カズ子氏所有地100m<sup>2</sup>。発掘面積約30m<sup>2</sup>。

3. B-12a地点 福岡市博多区板付6丁目10-3。広田康輝氏所有地1494m<sup>2</sup>。発掘面積約400m<sup>2</sup>。

4. 諸岡遺跡E区 福岡市博多区大字諸岡字岡ノ前454-3。大和富江氏・杉谷光二氏所有地550m<sup>2</sup>。発掘面積はほぼ全域。

5. 諸岡遺跡F区 福岡市博多区諸岡2丁目10-7。川上亮一氏所有地567m<sup>2</sup>。発掘面積約37m<sup>2</sup>。

G-5a地点は、板付遺跡の環溝北側にある。この地点はすでに甕棺墓の存在が予想されており、その墓地の範囲を確認する上で重要な地点である。<sup>(註)</sup>

F-8地点は、板付の南台地が沖積層と接する地点で、遺構の存在を予想したが、沖積層上に埋土しており、また沖積層にも何らの遺構も存在しなかった。

B-12a地点は、板付丘陵の南方、麦野の丘陵東側沖積地にある。この方面的水田址の確認という意味で調査を行い、古墳時代と思われる溝と杭列が出土している。

諸岡E区は、前年度調査地（D区）に接する北東側にある。中世の土塙などの存在を予想したが、時期不詳の土塙と、中世以降の溝が調査された。

諸岡F区は、諸岡丘陵の東麓にあたり、沖積層と接する地点である。水田址、あるいは丘陵端の遺構の存在を予想したが、それなく、夜白式の包含層が確認された。

調査期間は4月から11月までの間に行った。

調査を担当したのは福岡市教育委員会社会教育部文化課板付遺跡調査事務所で、現場作業は山口謙治・横山邦雄・沢賀臣がそれぞれ責任者となって行った。事務は船崎幸利、草場九男、安田正義が担当した。

なお、G-5a地点の第3号近世木棺墓出土の歯については、九州大学医学部永井昌文教授、同木村幾多郎助手の鑑定による。

調査に当っては下記の方々から多くの援助を受けた。記して感謝する（敬称略）。

中原志外顕、下条信行（九州大学考古学研究室助手）、高倉洋彰（九州歴史資料館）、後藤直（福岡市立歴史資料館）、尖川順一（東京都遺跡調査会）、有限会社川上土木。

地主・合庭久男、長谷川カズ子、広田康輝、大和富江、杉谷光二、川上亮一。

調査作業員・大部茂久、広田熊雄、中牟田顕薰、山内営、副島三好、星山利久、舎川キチエ、山本敏子、岸原松枝、早見イワ、柴田セイ、北原フミエ、中牟田栄子、井上トミエ、半田フミカ。

序 本年度調査地と調査経過

調査員：原俊一、浜石哲也、玉永光洋

参加学生：野尻雄三（東洋大学生）、小林義彦（明治大学生）、稻富和裕（法政大学生）、  
福田義彦（國學院大学生）、植村敏文、長野徹郎、樋口満朗、西尾真一郎（以上福岡大学生）、  
草場啓一、奥村俊久（以上別府大学生）

整理作業：木村良子、永松伊都子、上村淳一（東洋大学生）、木川雅樹

註）環溝調査中甕棺一基の出土があり（森貞次郎・岡崎敬1961「福岡県板付遺跡」、「日本農耕文化の生成、  
東京）、板付市営住宅遺跡調査の際にG-5a地点に隣接する第2区より甕棺片 多数の出土があった。また1974  
年にG-5a地点南側水路改修中に第6・7・8号甕棺墓が出土している。

# 第1章 G-5a地点

## I 調査概要

板付丘陵は、標高11m前後で南北にのびており、弥生時代をはじめとする各種の遺構が分布している。今回の調査地点は、通津寺を中心とする環溝からわずかに40m北に離れた所に位置している。板付丘陵を巡る環溝の改修工事の際、3基の甕棺墓等が鳥栖ローム層を中心に存在していることが確認された。また板付北小学校庭の調査の際には弥生時代の竪穴・甕棺墓・木棺墓等が多数出土したことから、この地點も、上部は削られているにせよ甕棺墓等の分布が予想された。

調査は宅地化のため、70~100cmの盛土が行なわれているので、盛土を除くことから始めた。北側中央部に家があり、西側には側溝・東側はブロックと植木があったが、可能な限り調査を行なった。西側をA区とし、東側の8m×10mの発掘区をB区とした。A区は、盛土の下には22cmの水田耕土層があり、その下に弥生時代等の土器、陶器等を含む暗茶褐色粘質土層が30cm鳥栖ローム層の上に堆積していた。(Fig.1-2)遺構としては、弥生時代の竪穴遺構が5基・甕棺墓が43基(側溝工事中に出土したものを第6・7・8号とした)・木棺墓13基・土塚墓11基が密集して分布している。また第7号竪穴(井戸状遺構)のように弥生時代の遺構を切って、中世から近世と考えられる竪穴が3基・近世の甕棺墓が2基・木棺墓が3基確認された。この近世の甕棺墓等の遺構が削平されているところから、この周辺の大部分は近世墓地築造以降に削平されたと考えられる。B区は、弥生時代の祭祀遺構と考えられる第10号竪穴や、中世の第9号竪穴(井戸状遺構)が確認された。A・B区とも古墳時代以降のものと考えられる多数の柱穴状ビットが確認されたが、建築址としてのまとまりは確認できなかった。

## II 弥生時代の墓地

### 1. 甕棺墓と甕棺

#### 第1号甕棺墓 (Fig. 1-3, 1-4)

削平された時にふされたと考えられ、原形を保っているのはローム層に接している部分である。上下腰とも大形の圓形土器を用いた接口式成人用棺である。棺は、ほぼ水平に、N34°Wの方向で埋設されている。上蓋(北蓋)の口縁近くの中央部、ほぼ甕棺底で枯板岩製磨製石剣の鉢片が出土した。人骨は残っていないが、鉢片であること、金隈・スダレ跡等の例があることから、副葬されたものとは考えられない。

**上蓋** 外側へ出ないT字形口縁をもち、口縁直下に三条の沈線を巡らし、胴部中位の腰に一条の貼りつけ三角突帯を巡らしている。口縁部、突帯部横など調整。内面の一部に黒色部があり、黄褐色を呈する。胎土は石英粒、細砂を多く含み焼成も良好である。口径68cm、器高90cm、器壁1~1.2cmの厚さをもっている。

**下蓋** 上蓋と同様の口縁をもち、胴部中位に一条の貼りつけ三角突帯を巡らしている。口縁部・突帯部は横なで調整で、内面に黒斑がみられ、外面胴部中位に煤の付着がみられるが、全体

第一章 G - 5a地点

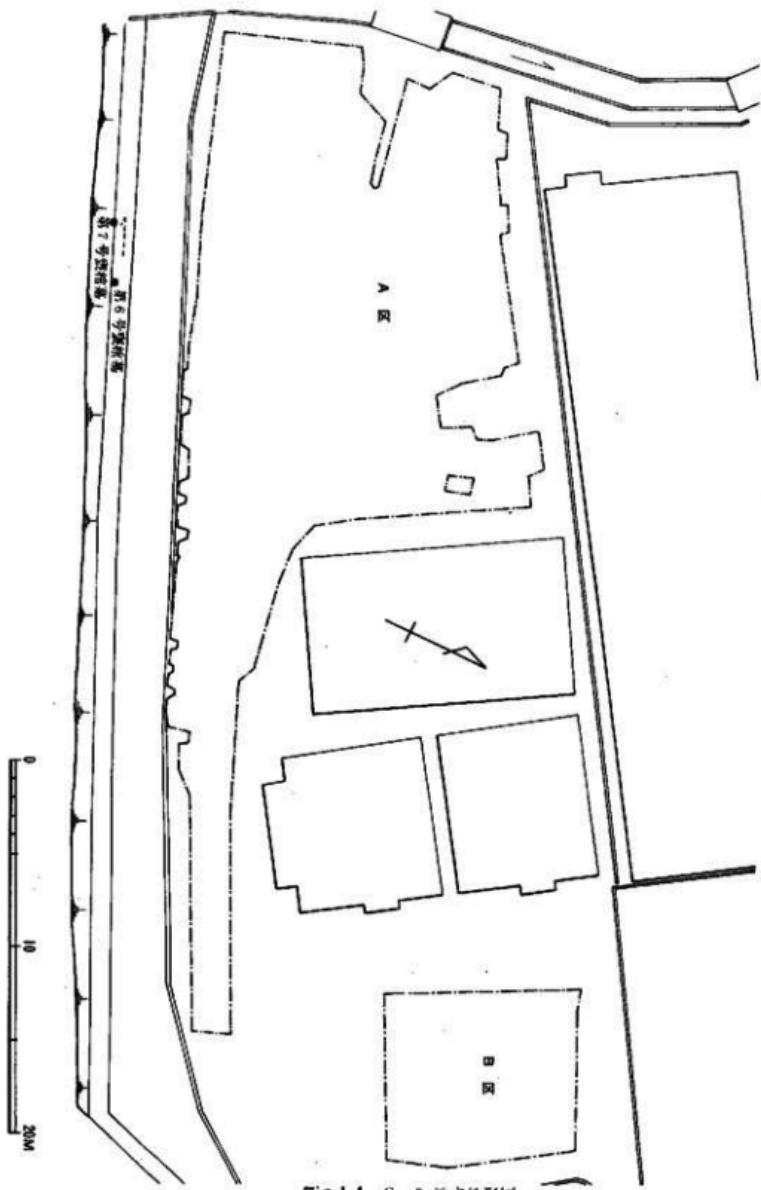


Fig. 1-1 G - 5a地点地形图

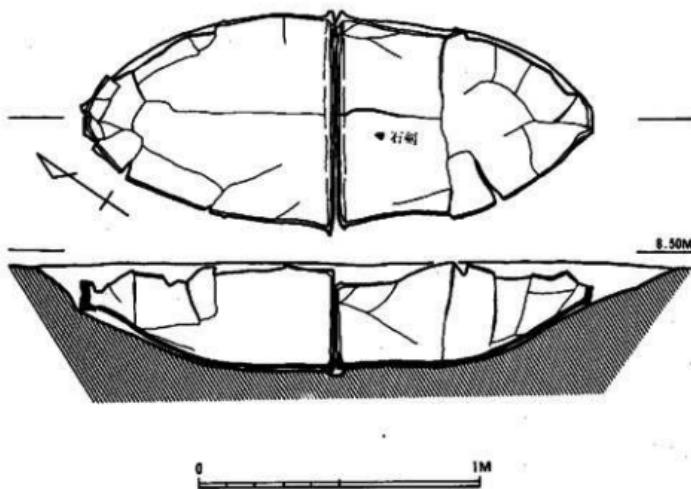


Fig. 1-3 第1号甕棺墓実測図

的に褐色を呈している。石英粒、細砂を多く含み、焼成も良好である。口径69.2cm、器高86.8cm。器壁1.5cmの厚さをもっている。

以上から、第1号甕棺墓は、中期前葉のもので、他の甕棺墓群から1基だけ離れていることを指摘しておく。

#### 第2号甕棺墓 (Fig. 1-5, 1-6)

第3号甕棺墓塚中にあり、約半分削平されているが、上蓋は鉢形土器を、下蓋は小形の甕形土器を用いた接口式小児用棺である。棺の傾斜は-5°で、N88.5°Wの方向で埋置されている。  
**上蓋** 鉢形土器で、口縁部は外反し、逆L字状をなし、端に刻目が施こされている。口縁直下には、一条の貼りつけ三角突帯を巡らしている。底部はやや上げ底になり、底部から腰にかけて縱の刷毛目調整が行なわれているが、口縁から胴部中位にかけては、なで調整である。器面は、底部近くが黒色を呈し他は灰褐色。口縁から胴部中位までは丹が塗られている。胎土は細砂を含み、焼成は普通でややもろくなっている。口径33.8cm、器高21.8cm、口縁部6mm、器壁4~6mm、底部1.6cmの厚さをもっている。

**下蓋** 口縁部は外反し逆L字状をなし、端に刻目が施され口縁直下に一条の三角突帯が巡らされている。口縁部・突帯部は横で調整で、口縁直下と胴部は刷毛目調整。器表面は赤褐色。内面は褐色を呈し、胎土は石英・微細を含み、焼成は良好である。口径30.4cm、推定器高37cm、厚さは器壁0.6~0.8cm。

以上から第2号甕棺墓は中期初頭といえる。

## 第3号覆棺墓 (Fig. 1-5, 1-6)

長さ2.3m、幅1.7mの墓塚の東壁にはほぼ水平にN75°Wの方向で埋置されている。棺は上下とも大形の壺形土器を用いた接口式成人用棺である。

**上蓋** 補強された外反した口縁端の上下に竪らしき工具で刻目が施されている。胴部は下位ですばまる安定した形をしている。口縁部が横なで調整されているほかは刷毛目調整が著しい。器表面は、底部付近が黒色で大部分は褐色である。胎土は石英粒・砂粒を多く含み焼成は普通。口径56.8cm、器高68cm。口縁部2.1cm・器壁1cm前後、底部4.3cmの厚さをもっている。

**下蓋** 補強された外反する口縁端に棒状工具による刻目が上下に施されており、最大径は胴部下位にあり、底部は若干上げ底になっている。刷毛目調整が著しく、口縁部横なで調整、口縁直下では刷毛目調整の上から横なで調整が施されている。全体的に赤褐色から褐色を呈し、胎土には細砂、小砾を含み緻密で、焼成は良好である。口径52.3cm、器高69.7cm。口縁部2cm・器壁1cm・底部4cmの厚さをもっている。

以上から第3号覆棺墓は前期末といえる。前期末の覆棺で、このような棺の埋置の方法ものは少ないところから興味がもたれる。また、この時期の覆棺は本地点では、この1例のみである。

## 第4号覆棺墓 (Fig. 1-7)

上部は削平され、第3号覆棺墓に接した形で出土した。棺は、上蓋が壺形土器の口縁打欠きで、下蓋は壺形土器が用いられた接口式小児用棺で、接口面には粘土張りがされ、二段に掘り込んだ墓塚に土を固め、ほぼ水平にS84.5°Wで埋置されている。

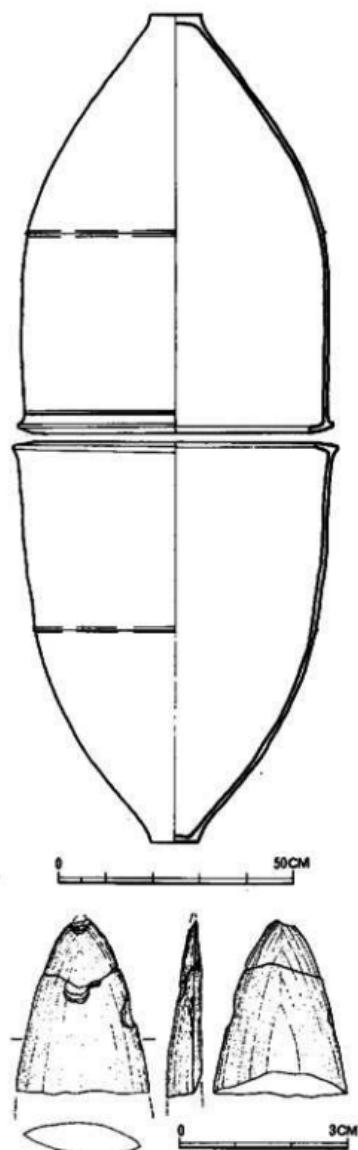


Fig. 1-4 第1号覆棺・覆棺内出土石器実測図

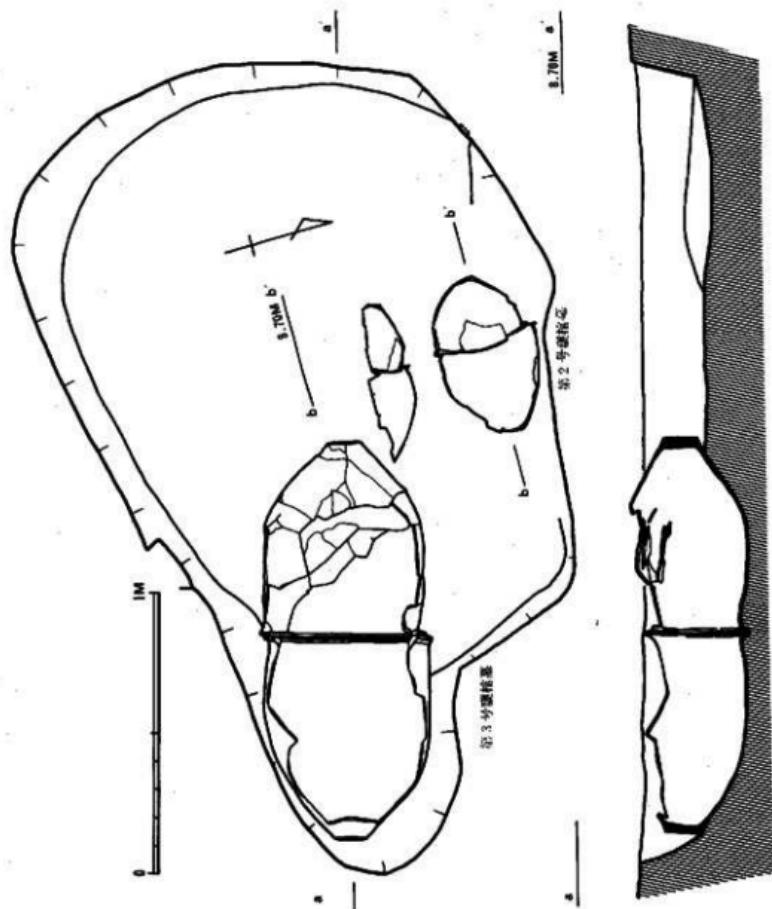


Fig. 1-5 第2・3号墳棺墓実測図

**上巻** 頸部直下で打欠かれているが、一部は頸部のつけねまで残っている。胴部の最大径は中央部にある。器表面は磨耗しているが、なで調整で整形されている。外面は淡赤褐色から暗褐色、内面は黒灰色を呈し、胎土は砂粒を含んでいて、焼成は良好。打欠き部径24.4cm。胴部最大径31.6cm。推定残高24.9cm。器壁0.7cmの厚さをもっている。

**下巻** 口縁は丸味をもちやや外側にたれており、最大径は胴上半部にある。口縁部は横なで調整で、胴上半部は刷毛目調整。外面は暗褐色から淡赤褐色、内面は黄味をおびた赤褐色を呈し、胎土には石英粒を多く含み、焼成は普通だがややもろくなっている。口径28.8cm。推定器高25.6cm。

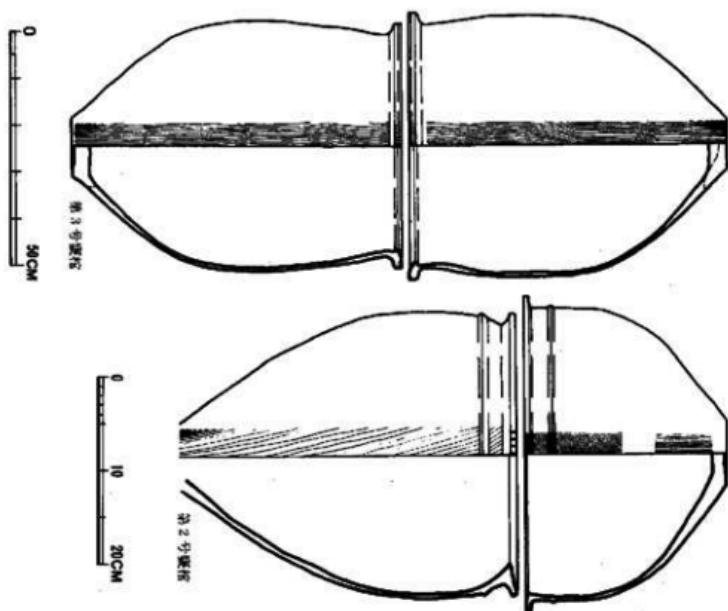


Fig. 1.6 第2・3号墓実測図

器壁は0.5cmの厚さをもっている。

以上から、第4号墓棺墓は、前期末・中期初頭といえる。

#### 第5号墓棺墓 (Fig. 1.7)

墓の一部は削平されているが上下とも變形土器を用いた後口式小児用棺で、接口面には粘土による目張りかけられている。棺は墓壇の傾斜にそって下腰を上げる形で-7°の傾斜をもち、ほぼ東西であるN39.5°Wの方向で埋葬されている。

**上蓋** 口縁部は外反し、逆L字状を呈し口縁直下に一条の三角突帯が巡っており、底部はやや上げ底になっている。口縁から突帯までは、横なで調整、胴部から底部までは刷毛目調整が著しい。器表面は赤褐色から暗褐色を呈し、胴部下半部に煤の付着がみられる。胎土には、石英粒や微砂粒を含み、焼成は良好。口径33.2cm、器高41cm、口縁1cm、器壁は0.5~0.8cm、底部は1.7cmの厚さをもっている。

**下蓋** 口縁部は外反し逆L字状を呈し、口縁直下には一条の張りつけ突帯を巡らして、底部は上げ底。口縁部から突帯にかけては横なで調整、底部にかけては、三つの工具による刷毛目調整が施されている。器内外面とも黄褐色を呈し、胴部中位には煤の付着がみられる。胎土は、微

II 弥生時代の墓地

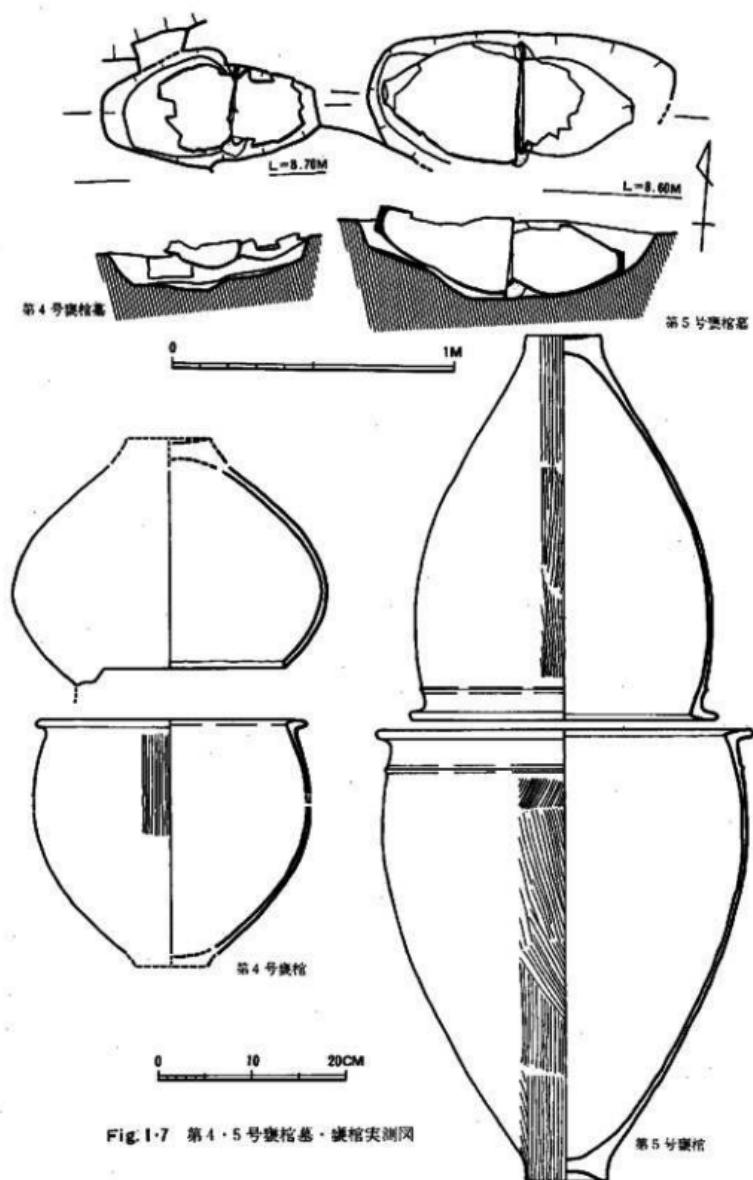


Fig. I-7 第4・5号墳基・墳室実測図

砂粒を含んでおり、ややもろくなっている。口径40.8cm、器高48.2cm、口縁1cm、器壁0.6cm・底部1.5cmの厚さをもっている。

以上から、第5号腰棺墓は中期前葉のものといえる。

#### 第6号腰棺（Fig. 1-1, 1-8）

側溝工事の際出土した腰棺墓で、平面図はそれなかった。上蓋は壺形土器を、下蓋には壺形土器を用いた接口式小児用棺で、棺はほぼ水平、ほぼ東西の方向で埋置されていた。

**上蓋** 朝顔状にひろがる口縁は彌状口縁をもち、口縁下30cmで頭部が最大にすぼまり、胴部上位に最大径があり貼りつけのM字突帯が、そのすぐ上にも同じM字の突帯が巡っている。頸部には6条単位の暗文が施されており、頸部の内面から口縁部にかけては横なで調整痕がみられる。器面は褐色から淡褐色を呈し、胎土中には雲母、細砂を含み焼成は良好である。口径37cm、肩部径22cm、胴部最大径41.3cm、器高43.8cm、口縁1cm、頸部器壁0.7~1cm、器壁0.6~1cm、底部1.6cmの厚さをもっている。

**下蓋** 逆L字状口縁端には刷目が施され、口縁直下に一条の貼りつけ三角突帯を巡らし、最大径は胴部上位にある。口縁部から突帯部までは横なで調整で、突帯部から底部までは刷毛目調整が著しい。口縁部は明褐色を、胴部は暗褐色、内面は淡褐色を呈している。胎土は、砂粒を多く含み緻密で焼成も良好である。口径39.6cm、推定器高48cm、口縁1cm、器壁0.5~0.7cmの厚さをもっている。

以上から、上蓋は下蓋に比べて時期的に新しいと考えられることから、中期中葉といえる。

#### 第7号腰棺墓（Fig. 1-1, 1-8）

側溝工事中に、切断面にかかって出土した。上下蓋とも小形の壺形土器を用いた接口式小児用棺で、約10°の角度で西向きに埋置されていた。

**上蓋** 口縁部は外反し逆L字状をなし、器表面は磨耗がはげしく、胎土は、石英、細砂粒を含んでいるが焼成は良くない。口径29.3cm、口縁1.5cmの厚さをもつ。

**下蓋** 採集できなかつたが、上蓋から第7号腰棺墓は中期前葉といえる。

#### 第8号腰棺墓（Fig. 1-8）

G-5a地点からH-5地点へぬける側溝工事の際、G-5a地点とH-5地点の接点から出土した成人用大形腰棺である。

**腰棺** 口縁は内側に張り出すT字形口縁で、横なで調整。器表面は丹塗りで、胎土には石英粒を含み焼成は良好。口径69.6cm。

以上から、第7号腰棺墓は中期前葉のものであるといえ、第1号腰棺墓とのかねあいから、出土状況が確認できなかつたのが残念である。

#### 第9号腰棺墓（Fig. 1-9）

第23号腰棺墓墓塚の上に埋置されており、他の腰棺と同様削平されているが、墓塚底に密着した部分が残っていた。上下蓋とも小形の壺形土器を用いた接口式小児用棺で、ほぼ水平にN 10° E の方向で埋置されている。

**上蓋** 逆L字状口縁を呈し、口縁直下に一条の貼りつけ三角突帯を巡らし、器表は繊の刷毛

II 弥生時代の墓地

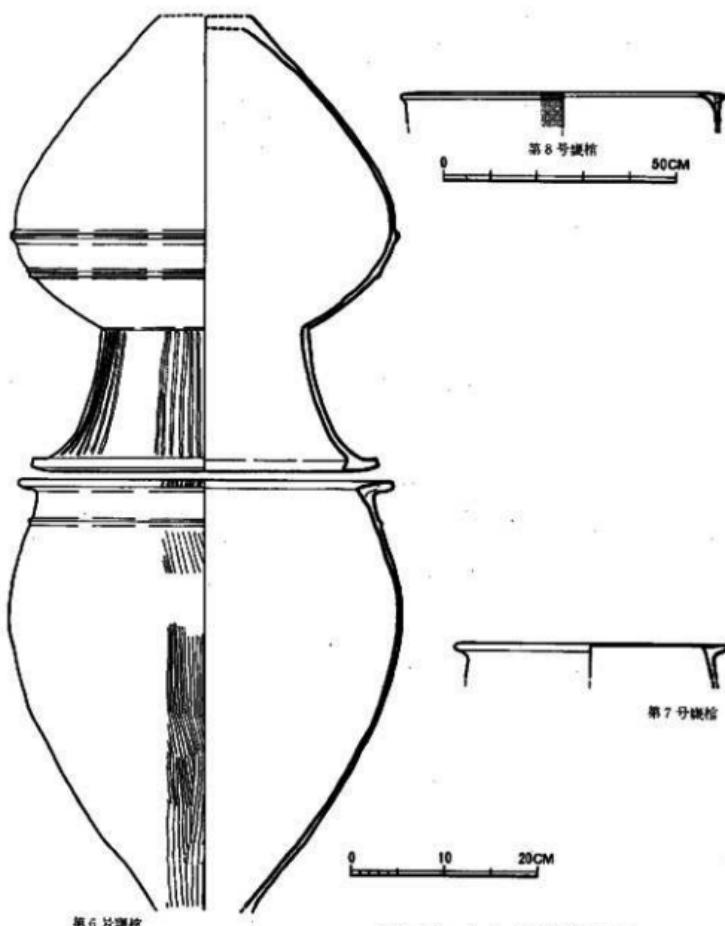


Fig. 1-8 6・7・8 号墓棺実測図

目調整が著しいが、口縁部は横なで調整、口縁直下から突帯部までは刷毛目調整の上から横なで調整をされている。胴部下半の一部に黒変しているところがみられるが全体的に暗褐色を呈している。胎土は石英・細砂粒を多く含み、焼成は良好である。口径30.6cm。器高37.7cm。口縁部0.8cm・器壁0.5~0.7cmの厚さをもっている。

**下巻** 外反する逆L字状の口縁をもち、口縁直下に一条の貼りつけ三角突帯を巡らして、口

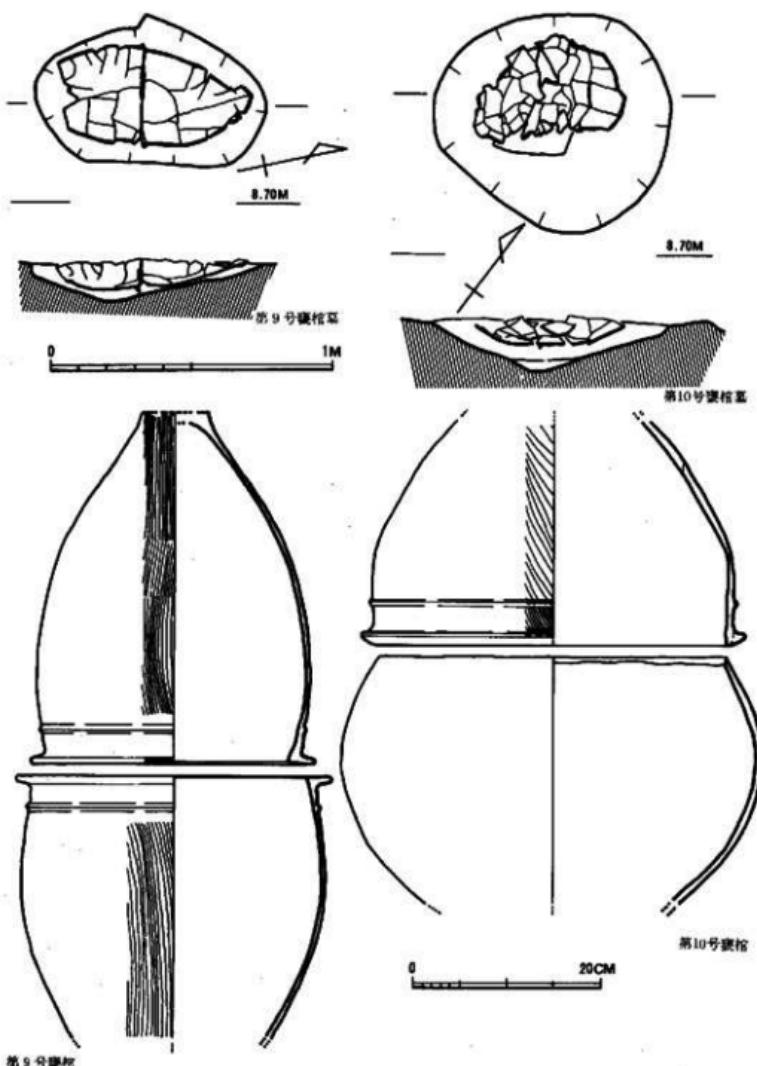


Fig. 1-9 第9·10号墓墓室、墓室实测图

## II 幼生時代の墓地

縁から突帯部までは横なで調整で、突帯部下からは縦の刷毛目調整が施されている。全体的に器表は暗黄褐色。胎土は石英・砂粒を含み、焼成は良好。口径34cm。推定器高38cm。口縁部0.8cm・0.5cm前後の厚さをもっている。

以上から第9号甕棺墓は、中期前業といえる。

### 第10号甕棺墓 (Fig. 1-9)

大部分は削平されて、墓坑に入っている棺底がかろうじて残っており、上蓋に鉢形土器を、下蓋に打欠きの壺形土器を用いた接口式小児用棺であることが判別できる。棺はほぼ水平にN 51°E の方向で埋置されている。なお、墓塚は第23号甕棺墓から切られている。

**上蓋** 外へたれる口縁下端に刻目が施され、口縁直下には、一条の貼りつけ三角突帯が巡り、突帯にも刻目が施されている。丸味をもつ口縁と突帯部は横なで調整で、口縁直下は細い刷毛目調整、突帯下は粗い刷毛目調整がなされている。器面は赤褐色、胎土は石英粒、小礫を多量に含んでおり、焼成は良くない。口径41cm。推定器高29cm。器壁は0.6~1cmの厚さをもっている。  
**下蓋** 脊部最大径の10cm上で打欠き、打欠き部分はほぼ水平にそろえられている。器表面は横なで調整で暗褐色から赤褐色を呈している。打欠き部径37cm。脊部最大径44.8cm。推定残高35cm。器壁は0.7cm前後の厚さをもっている。

以上から第10号甕棺墓は、中期初頭と考えられる。

### 第11号甕棺墓 (Fig. 1-10)

削平されているが上下とも小形の壺形土器を用いた接口式小児用棺で、ほぼ水平にN 0.5°E の方向で埋置されている。

**上蓋** 口縁は外反し逆L字状をなし、脛部中位に一条の貼りつけ三角突帯が巡り、底部がやや上げ底になる。口縁部をはじめ全體的に調整が施されている。器面は、口縁部に丹痕もみられ底部及び脣部中位が黒変化しているが黄褐色から赤褐色を、内面は灰褐色を呈している。胎土は微砂粒を含み緻密で、焼成も良好である。口径37.6cm。器高41.2cm・口縁部1cm 器壁0.6~0.8cm・底部は1.2cmの厚さをもっている。

**下蓋** やや外反する丸味をもつ口縁をもち、脣部上半部に低い二条の貼りつけ三角突帯が巡らされており、全体的に丸味をもっている。器面はなで調整で、暗赤褐色を、内面は灰褐色を呈している。脣部上半部に丹痕がみられること、上蓋の口縁部に丹痕がみられるところから、すくなくとも脣部上半部までは丹塗りであったと考えられる。胎土は、石英粒、砂粒を含み緻密で焼成も良好である。口径35.6cm。器高38.8cm。器壁0.6cm・底部1.2cmの厚さをもっている。

以上から第11号甕棺墓は、中期前業のものといえる。

### 第12号甕棺墓 (Fig. 1-10)

第23号甕棺墓の墓塚上部に埋置されているが、他の甕棺と同様削平されている。上蓋には打欠きの壺形土器を下蓋には小形の壺形土器を用いた覆口式小児用棺で、ほぼ水平にN 38°E の方向で埋置されている。

**上蓋** 脣部上半部に最大径があり、最大径の7cm上でほぼ水平に打ち欠かれている。器面は丹念なで調整、器表面は、打欠き部の一部に丹痕が見られるが、黄褐色から淡褐色を呈し、内

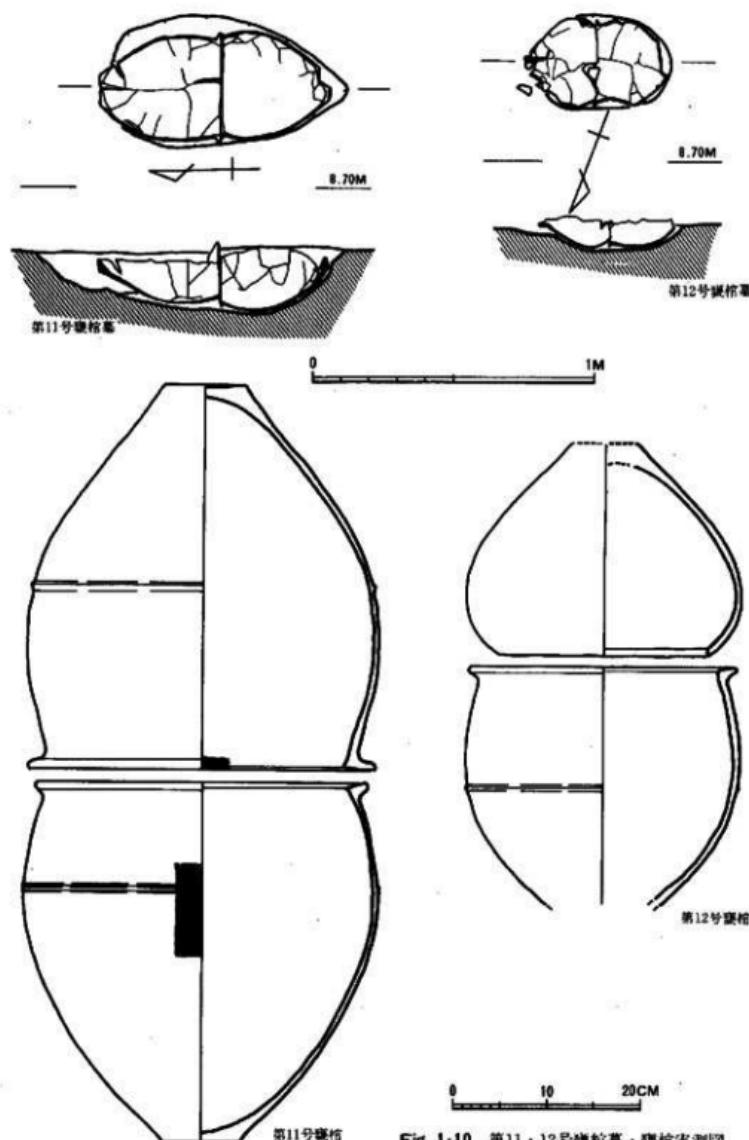


Fig. 1-10 第11·12号墓棺墓·墓棺实测图

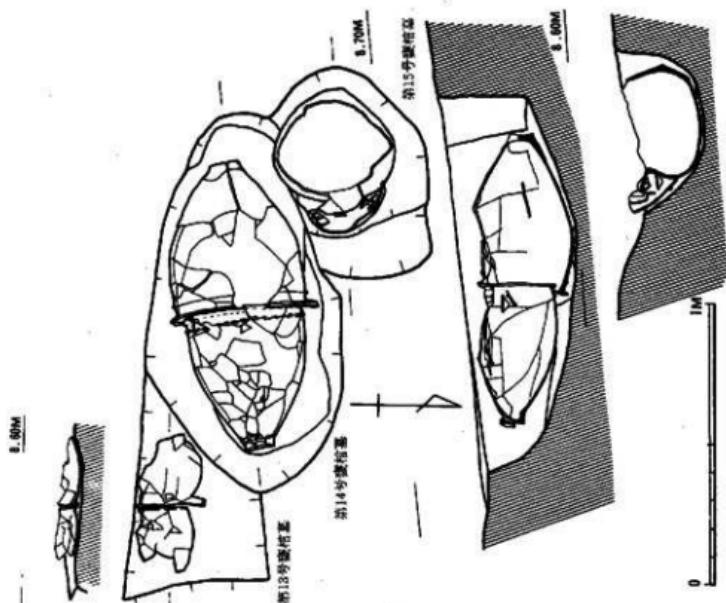


Fig. 1-11 第13・14・15号壺棺墓実測図

面は暗褐色を呈する。打欠き部径22.2cm、最大径29.4cm、残高23cm。器壁は0.7~0.9cmの厚さをもっている。

**下壺** 外反する口縁をもち、胸部中位に最大径があり、一条の低い貼りつけ三角突帯が巡らされている。器面はなで調整が施されているが磨耗している。器表面は暗黄褐色、内面は暗灰色を呈し、胎土には、石英・砂粒を含み焼成は良好である。口径28.8cm、推定器高27cm。器壁は0.6~0.9cmの厚さをもっている。

以上から第12号壺棺墓は中期前葉といえる。

#### 第13号壺棺墓 (Fig. 1-11, 1-12)

墓址は東側で第22号壺棺墓を切り、第14号壺棺墓と切りあっているが、新旧は判別できなかった。さらに、第2号溝等によって削平されているが、わずかに棺底が残っていた。上下壺とも小形の變形土器を用いた接口式小児用棺であることが確認できた。棺はほぼ水平にN86°Eの方向で埋置されている。

**上壺** 外反する口縁をもち、全体的に磨耗しているが、口縁直下から縫合の刷毛目調整の痕跡がみられる。器面は黄褐色で、胎土には石英・砂粒を多く含み、粗糙で焼成もあまり良くない。口径25cm。器壁0.5cmの厚さをもっている。

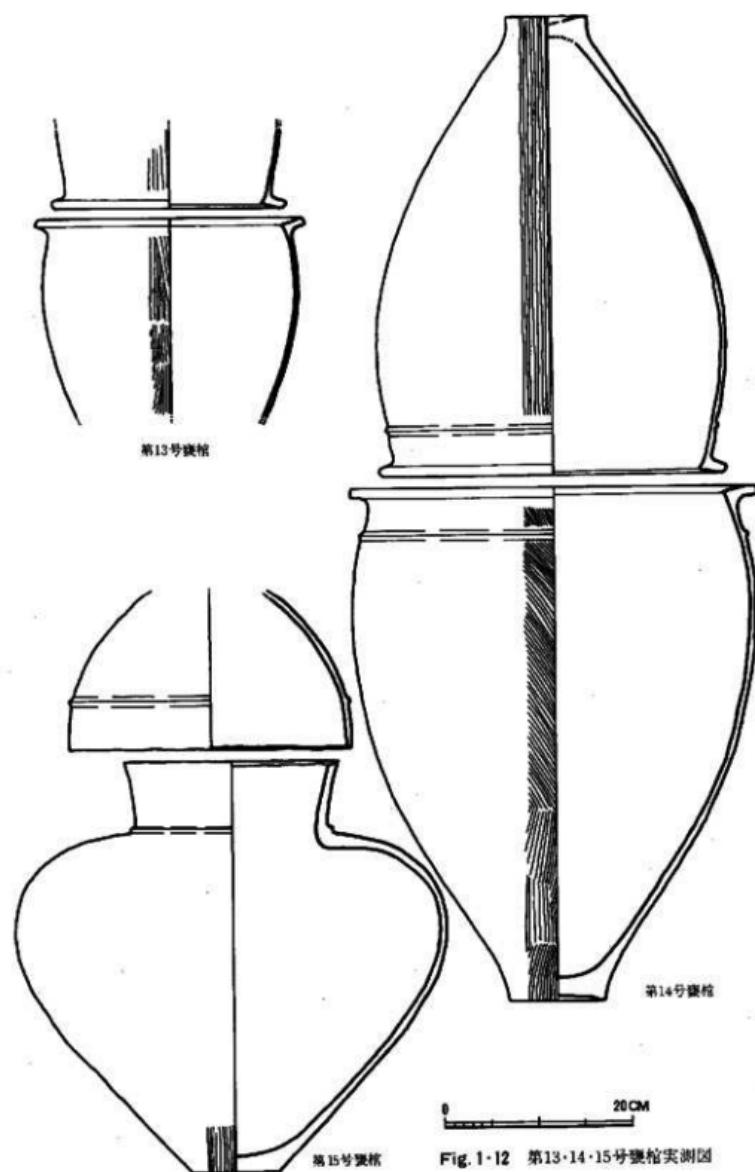


Fig. 1-12 第13·14·15号彝棺实测图

## II 阿生時代の墓地

**下窓** 外反する分厚い逆L字状口縁をもち、口縁部は横なで調整、口縁直下から下部は刷毛目調整である。器表面の副部に煤の付着がみられ、口縁部は赤褐色、内面は灰褐色を呈している。胎土には、石英・砂粒を含むが焼成は良くない。口径29cm。推定高33cm。口縁部0.8cm・器壁0.5cmの厚さである。

以上から第13号窓棺墓は中期前葉といえる。

### 第14号窓棺墓 (Fig. 1-11, 1-12)

第15号窓棺墓の墓塚を切る不整長楕円形の墓塚をもち、棺は上下窓とも小形の窓形土器を用いた接口式小児用棺で、墓塚の傾斜にそって30°でN84°Eの方向で埋置されている。

**上窓** 外反する逆L字状口縁をもち、口縁直下に一条の貼りつけ三角突帯を巡らし、胴部上半部に最大径をもち、底部はやや上げ底になっている。口縁部から突帯部にかけては横なで調整、突帯部から下は窓の刷毛目調整が著しい。器表面は、底部が黒灰色で、内面の底部近くに炭化物の付着がみられるが全体に赤褐色を呈している。胎土には、石粒・雲母砂粒を多く含み緻密で焼成も良好である。口径34.6cm。器高49cm。口縁部1.3cm・器壁0.6~0.8cm・底部1.4cmの厚さをもっている。

**下窓** 外反する逆L字状口縁をもち、口縁直下に一条の貼りつけ三角突帯が巡らされており、底部はあげ底。口縁部、突帯部は横なで調整、口縁直下から下は刷毛目調整が施されており、胴上半部には煤の付着がみられ、底部は黒色化しているが全体的には表面が暗褐色、内面が黒灰色を呈している。胎土には石英・雲母・砂粒を多く含み緻密で焼成も良好である。口径44cm。器高54.9cm。口縁部1.1cm・器壁0.8cm・底部2.2cmの厚さをもっている。

以上から第14号窓棺墓は中期前葉で、第13号窓棺墓とはほぼ同時期といえる。

### 第15号窓棺墓 (Fig. 1-11, 1-12)

第14号窓棺墓に墓塚を切られ、他の窓棺同様近世以降の削平によって上窓が削られている。上窓には打欠きの鉢形土器、下窓には打欠きの壺形土器を用いた覆口式小児用棺で、墓塚にそって28°でN84°Eの方向で埋置されている。

**上窓** ほぼ口縁直下で水平に打欠き、その部分から5cm下に一条の、りつけ突帯が巡らされている。器面は表裏面とも丹念になで調整が施され、赤褐色を呈している。打欠き部径30.2cm。推定残高18.5cm。器壁0.7cm前後の厚さをもっている。

**下窓** 口縁直下で打欠かれ、頭部のつけ根に一条の貼りつけ三角突帯を巡らしている。最大径は胴上半部にあり、頭部は口縁に向ってややひらいている。器面は全体的に丹念になで調整が施され、研磨されているが剥落している。表面は灰色から黒灰色を、内面は赤褐色から黄褐色を呈している。胎土には石英・雲母・砂粒を多く含み緻密で焼成は良好である。打欠き部径23cm。最大径46cm。残高44cm。器壁1~1.2cmの厚さをもっている。

以上から第15号窓棺墓は中期初頭といえる。

### 第16号窓棺墓 (Fig. 1-13)

第9号木棺墓の墓塚を切って不整楕円形の墓塚の中に、上下窓とも小形の窓形土器を用いた接口式小児用棺が埋置され、接口には粘土による目張りがされている。棺はほぼ水平にS65°E

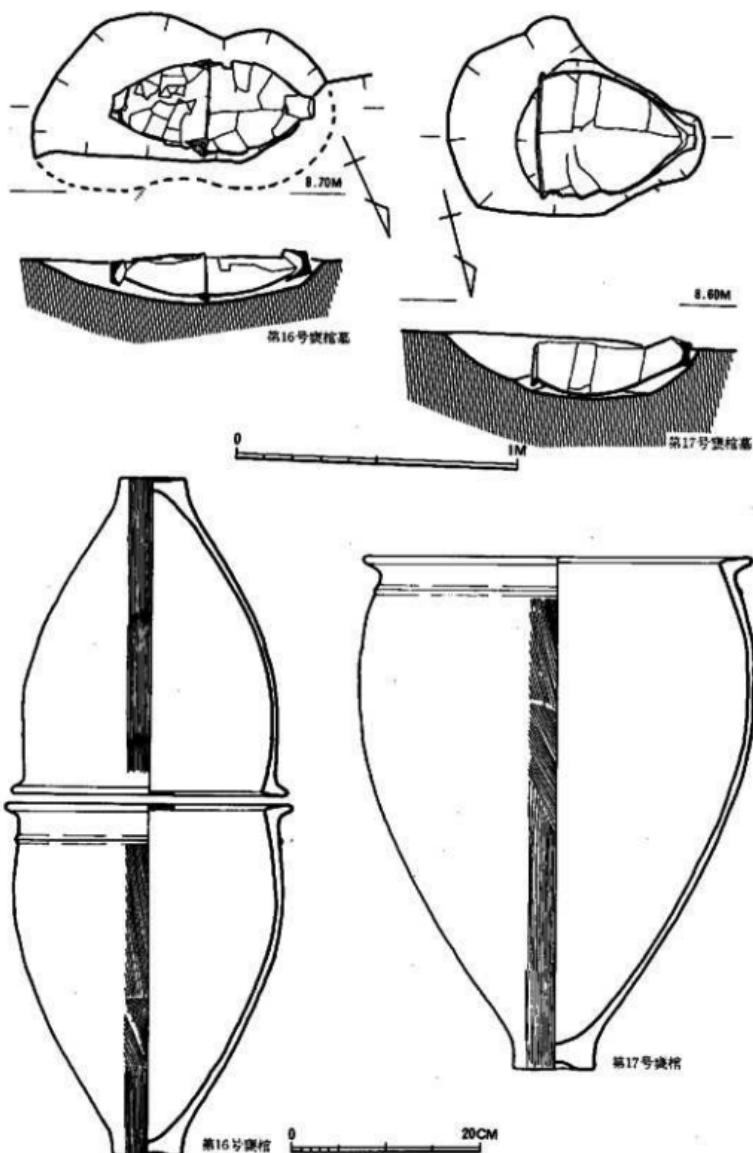


Fig. 1·18 第16号·17号墓棺墓·墓棺实测图

の方向である。

**上窓** 外反する逆L字状の口縁をもち底部は若干上げ底である。口縁部は横なで調整で、口縁直下から底部までは刷毛目調整が著しい。口縁部に丹がかけられ、底に煤の付着がみられるが全体に淡褐色から暗褐色を呈し、胎土は石英・細砂粒を含み焼成も良好である。口径29.6cm。器高33.9cm。口縁部0.8cm・器壁0.6cm・底部1cmの厚さをもっている。

**下窓** 外反する逆L字状口縁をもち、口縁直下には一条の貼りつけ三角突帯が巡らされており、底部は上げ底である。口縁部の内側には、指による調整がみられ、口縁から突帯部にかけては横なで調整が、胴部は刷毛目調整が著しい。器面は口縁部のみに丹がかけられ底部は黒色化している。全体に褐色から赤褐色。胎土は、石英・砂粒を含み緻密で焼成も良好である。口径30.8cm。器高37.6cm。口縁部0.7cm・器壁0.7cm・底部1.2cmの厚さをもっている。

以上から第16号櫛棺墓は、中期前葉といえる。

#### 第17号櫛棺墓 (Fig. 1-13)

削平されているが第24号櫛棺墓と同様の埋葬方法がとられていたものと考えられる。棺は小形の甕形土器を用いた単式小児用葬で、ほぼ水平にS 75° E の方向で埋置されている。

**櫛棺** 外反する逆L字状口縁をもち、口縁直下には一条の貼りつけ三角突帯を巡らし、最大径は胴上半部にあり底部は上げ底になっている。口縁

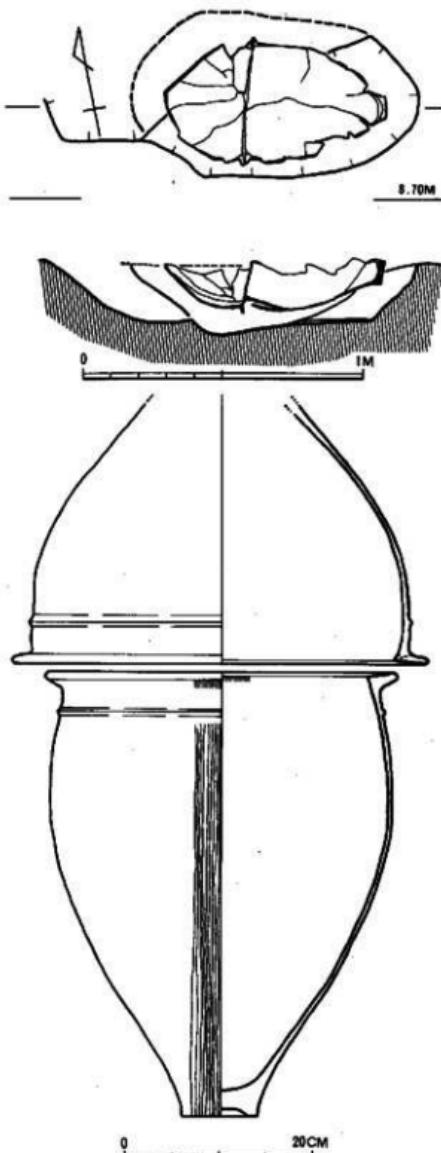


Fig. 1-14 第18号櫛棺墓・櫛棺内部測図

部から突帯部にかけては横なで調整で、突帯直下から底部までは刷毛目調整が著しい。器面は胴部、底部が黒色化しているが全体的に暗褐色を呈し、胎土は、砂粒を含み焼成は普通であるがややもろくなっている。口径41.6cm、器高54.5cm、口縁部0.8cm、器壁0.6~0.8cm、底部1.9cmの厚さをもっている。

以上から第17号腰棺墓は中期前葉といえる。

#### 第18号腰棺墓 (Fig. 1-14)

第19号腰棺墓の墓塚を切っているか棺の上半分は削平される。上蓋に体形土器、下蓋に小形の菱形土器を用いた接口式小児用棺で8°の傾斜でN78°Wの方向で埋置されている。

**上蓋** 外反する逆L字状口縁をもち、口縁直下に一条の貼りつけ三角突帯を巡らし、器面は丹念になで調整が施されており、赤褐色を呈し、胎土は、石英、細砂粒を含み緻密で焼成も良好である。口径44.6cm、推定器高32cm、口縁部0.9cm、器壁0.7cm前後の厚さをもっている。

**下蓋** 外反する逆L字状口縁をもち、口縁直下には一条の貼りつけ三角突帯を巡らし、底部は上げ底で、口縁部から突帯部にかけては横なで調整。突帯直下から底部までは縱の刷毛目調整が著しい。器面は口縁部に丹痕がみられ底部が黒色化しているが、表面は淡赤褐色、内面は灰色から黄褐色を呈している。胎土には石英・雲母・細砂を含み緻密で焼成も良好である。口径

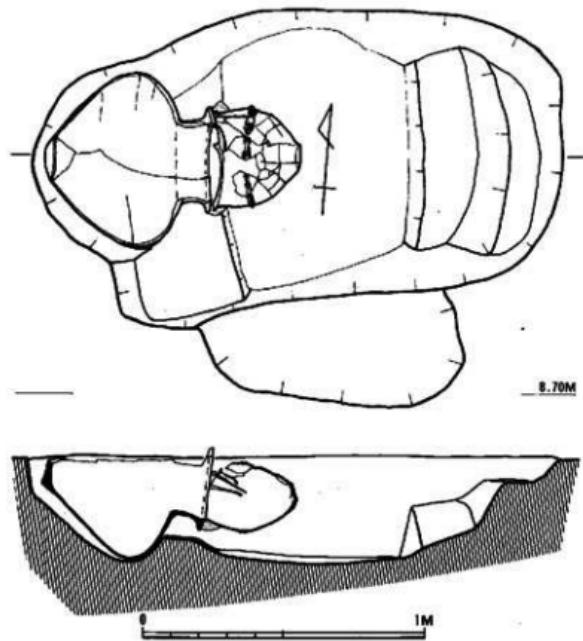


Fig. 1-15 第19号腰棺墓実測図

II 生生時代の墓地

38cm、器高47.5

cm。口縁1.3cm。

器壁0.6cm前後・

底部 2.2cmの厚

さをもっている、

以上から第18

号腰棺墓は中期

前葉といえる。

**第19号腰棺墓**

(Fig.1·15,

1·16)

第18号腰棺墓

に墓坑を切られ

ているが、墓坑

は隅九長方形で

ほぼ原形をたも

ち、東側は階段

状になっている。

上蓋に鉢形土器

に近い変形土器

を用い、下蓋に

変形土器を用い

た接口式小児用

棺で、上蓋の下

には、ロームブ

ロック等で固定

し接口面には粘

土による目張り

を行ない、-7°

でN85°Eの方向

で埋置されてい

る。

上蓋 ほぼ水平

口縁で逆し字状

をなし、口縁端

には刻目が施さ

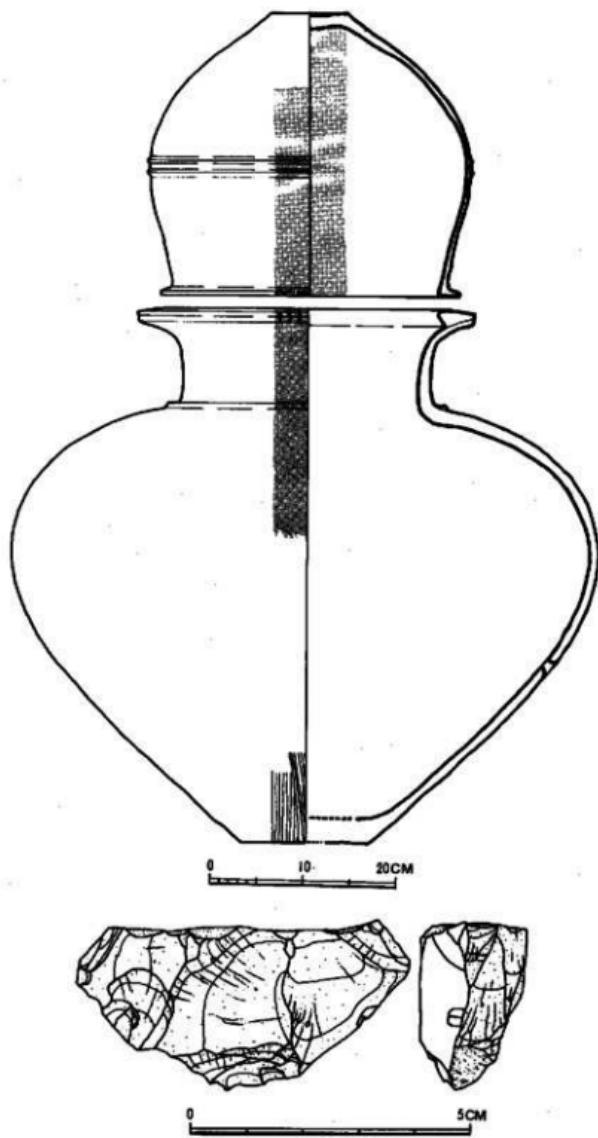


Fig. 1·16 第19号腰棺・墓坑出土石核実測図

第1章 G-5a地点

れ、胴部中位に最大径をもち、二条の貼りつけ三角突帯が巡り、底部は上げ底になっている。口縁部、突帯部は横なで調整で、器面はなで調整後研磨されている。また底部の内部は指調整の跡がみられ、内面及び胴下半部まで丹塗りである。胎土には石英粒を含み焼成は良好である。口径32cm、器高25.5cm、器壁0.6~0.8cm、底部1.6cmの厚さをもっている。

**下図** 補強された外反する口縁をもち、口縁端には上下に刻目が施されている。頸部はほぼ垂直で肩に二条の貼りつけ三角突帯を巡らし、最大径は胴上半部にあり、胴下半部は焼成後外側から穿孔されている。器面は、なで調整で整形され、研磨の痕跡もみられる。口縁部内面か

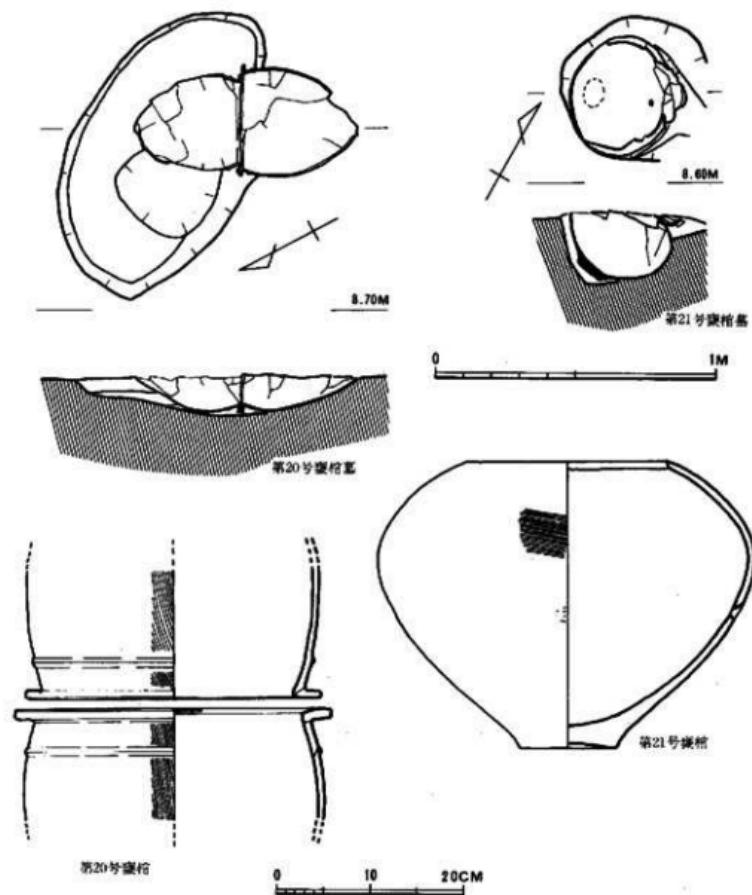


Fig. 1-17 第20-21号腰椎基・腰椎実測図

## II 弥生時代の墓地

ら刷上半部は丹塗りであり底部及び胴部は黒色化しているが全体は赤褐色である。胎土は石英・砂粒を含み緻密で焼成も良好である。口径35.8cm、肩部径26.7cm、最大径62.3cm、器高57.5cm、口縁1.8cm・器深1.2~1.5cm・底部2.7cmの厚さをもっている。

以上から第19号櫛棺墓は中期初頭といえる。

### 第20号櫛棺墓 (Fig. 1-17)

不整橢円形の墓壇をもっているが削平されて墓壇に密着した部分のみが残っていた。上下裏とも小形の櫛形土器を用いた接口式小児用棺で、ほぼ水平にN26°Eの方向で埋置されている。

**上蓋** 外反しや端がたれる逆L字状口縁をもち口縁直下に、低い一条の貼りつけ突帯を巡らしている。口縁部、突帯部は横なで調整を施し、口縁直下、胴部は刷毛目調整が著しい。接口面には丹がかけられているが、全体的に黒色から黒褐色を呈し、胎土は微砂粒を多く含み緻密であるが、焼成は悪く非常にろくなっている。口径31.6cm、推定器高43cm。器壁は0.7cm前後の厚さをもっている。

**下蓋** 外反する逆L字状口縁をもち口縁部直下に一条の貼りつけ三角突帯を巡らしている。口縁部、突帯部は横なで調整で、口縁直下、胴部は刷毛目調整が施されている。接口面には丹がかけられているが、表面は黒褐色を内面は灰色を呈し、胎土は少量の砂粒を含みしまりがなく焼成も悪く非常にろくなっている。口径33.6cm、推定器高47cm。器壁0.6~0.7cmの厚さをもっている。

以上から第20号櫛棺墓は中期前葉といえる。

### 第21号棺櫛棺墓 (Fig. 1-17)

削平されているため原形はわからないが、鉢形土器または櫛形土器を上蓋とし、下蓋に打欠きの壺形土器を用いた覆口式小児用棺と考えられる。棺は47.5°の傾斜をもちN60.5°Eの方向で埋置されている。

**下蓋** 頸部直下ではほぼ水平に打欠かれており、肩上半部に最大径をもち、底部は上げ底で胴部下半部に焼成後の穿孔がみられる。器面はなで調整が施され、一部に刷毛目調整もみられるが、その上を研磨している。器面は赤褐色を呈し、胎土は石英・砂粒を含み緻密で焼成も良好である。打欠き部径21cm、最大径40.2cm、残高31cm。器壁0.6~0.7cm・底部2cmの厚さをもっている。

以上から第21号櫛棺墓は中期初頭から前葉と推定される。

### 第22号櫛棺墓 (Fig. 1-18)

隅丸方形の墓壇をもち、西側に横穴を掘り埋置されている。上下裏とも小形の櫛形土器を用いた接口式小児用棺で、墓壇の傾斜にそって5°でN70°Eの方向で埋置されていた。下蓋からは、幼児のものとを考えられる歯が數本出土した。

**上蓋** 外反する逆L字状の口縁をもち、口縁部直下には一条の貼りつけ三角突帯を巡らし、最大径は、胴部上位にあり、底部は上げ底になっている。口縁部・底部は横なで調整で胴部には刷毛調整が施されている。胴部上位に、タイル状の黒色異物の付着がみられるが、表面は黄褐色を、内面は黄褐色から灰褐色を呈している。胎土は石英・雲母・砂粒を含み緻密で焼成も良

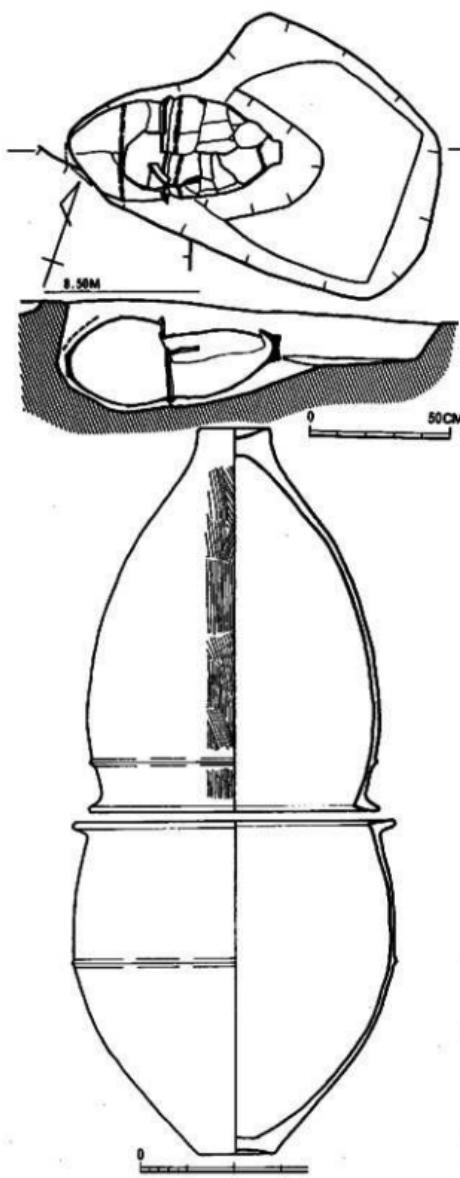


Fig. 1-18 第22号寝棺墓・寝棺実測図

好である。口径31.2cm、器高41.1cm  
器壁0.6~0.8cm・底部2.1cmの厚さ  
をもっている。

**下蓋** 外反する逆L字状口縁を  
もち、胴部中位に一条の貼りつけ突  
端を巡らし、底部は上げ底で、全体  
的に丸味をもっている。器面は丹念  
になで調整が施され、淡褐色から暗  
褐色を呈している。胎土は石英・雲  
母・砂粒を含み緻密で、焼成も良好  
である。口径34.6cm、器高35.75cm  
器壁0.6~0.8cm・底部1.5cmの厚さ  
をもっている。

以上から、第22号寝棺墓は中期前  
葉といえる。  
(山口謙治)

#### 第23号寝棺墓 (Fig. 1-19, 1-20)

墓塚は削平を受けてはいるが、平  
面はほぼ不整形の隅丸長方形に掘り  
込む。さらに墓塚の両側に南に向け  
て、棺の埋置塚をほぼ水平に掘り込  
んでいる。南棺底部付近の残存状態  
から、棺の埋置は挿入する方法を用  
いている。墓塚北側部分においては  
余地をもつが、棺の埋置塚は必要最  
小限の空間である。

棺は小児用の接口式合口寝棺で、  
長軸をN13°Eの方向にとり、-15°  
の傾斜をもつ。合口部での粘土等の  
補強は認められない。上部に第9号、  
第12号寝棺墓がのり、西北側では墓  
塚が10号寝棺墓を切っている。西側  
では墓塚上部を中世の溝から切られ  
ている。

**上蓋** 異形土器を使用する。口縁部  
はやや肥厚し、口縁上面は内傾して、  
ふくらみをもち、内側張り出しは弱

II 胎生時代の墓地

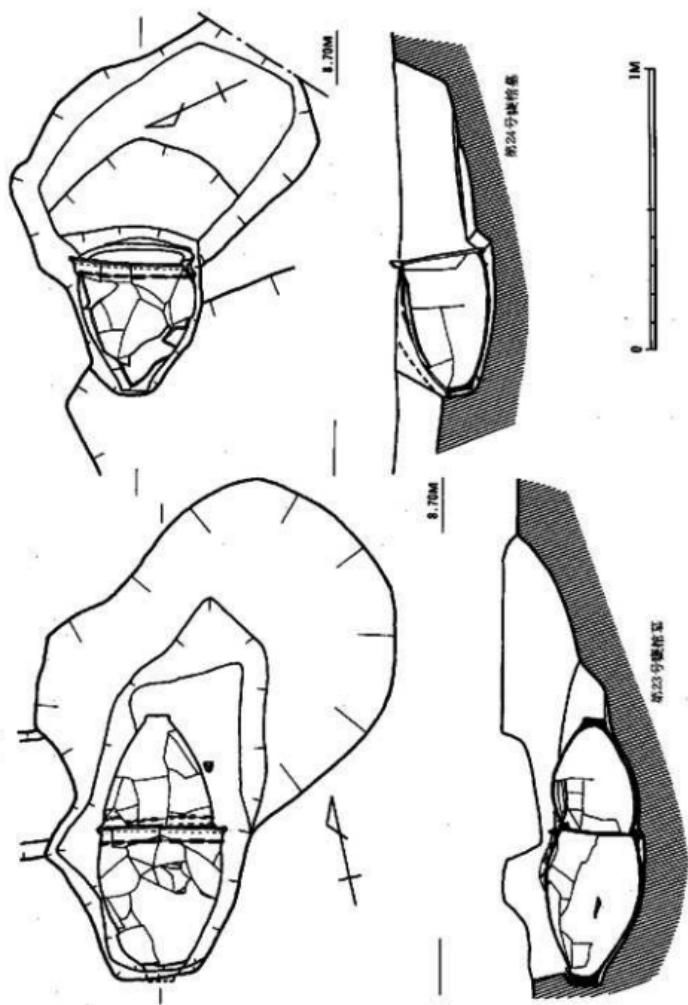


Fig. 1-19 第23・24号墓棺墓実測図

い。口縁部直下には、断面三角形の突帯を一条巡らしている。突帯を少し下るところで最大径を有して、やや上げ底の肥厚する底部へとつながる。口縁部周辺は磨減しているが、横なで調整を施し、脚部から底部にかけて、繊刷毛目調整を施している。脚部最大径を、少し下る範囲

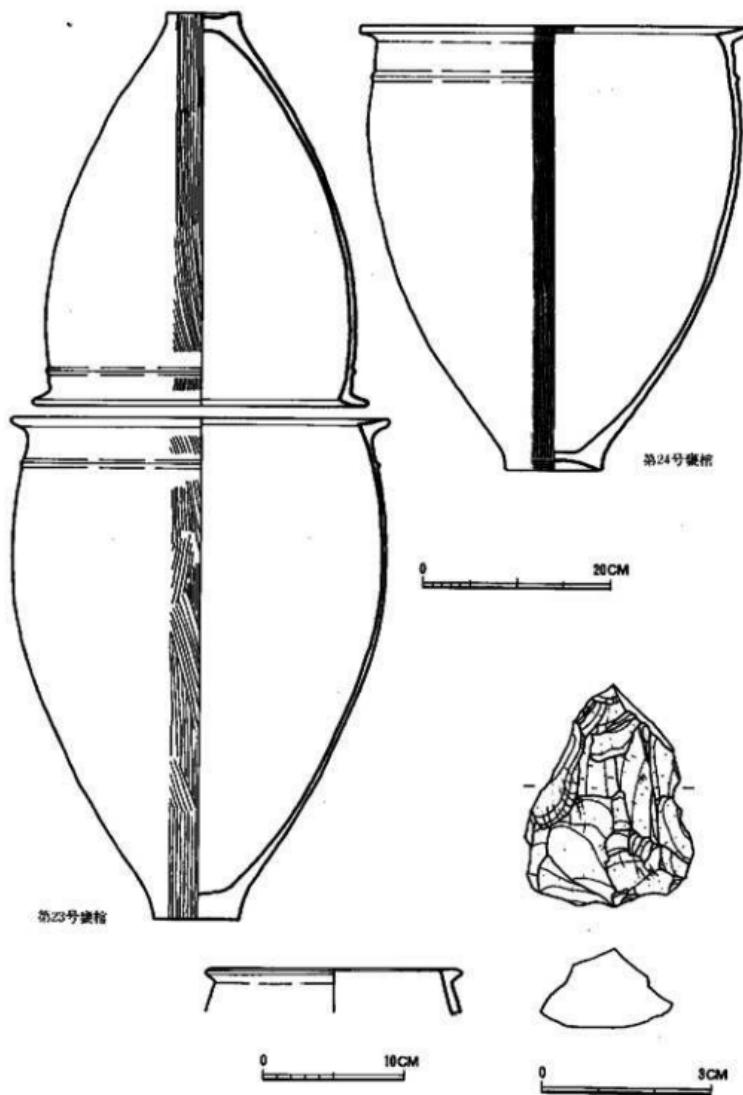


Fig. 1-20 第23·24号墓棺·第23号墓棺墓坑出土遗物示意图

## II 弥生時代の墓地

で、一部に煤が付着し、底部内側では一部黒変を有する。器内外面とも淡赤褐色から黄褐色を呈し、石英細粒砂を多く含む。胎土、焼成とも良好である。口径36.2cm、器高42cm。

**下巣** 瓢形土器を用いる。口縁部はやや肥厚し、口縁上面は内傾して、やや凹む。口縁直下には小さな断面三角形の突帯を一条巡らす。突帯より少し下るところに最大径を有し、肥厚する底部へとつながる。口縁部周辺は横なで調整。胴部から底部へはやや幅の広い、縦、あるいは斜めの刷毛目調整を施している。最大径部より、下方に30cm程の幅で全体に煤が付着する。器面は、外側淡褐色、内側は灰褐色を呈し、石英粒砂を含み、焼成はややもろい。棺外からサヌカイト製の石鎌未製品と、中期初頭と思われる甕の口縁部破片を出土している。口径40.8cm、器高53.5cm。中期前葉。

### 第24号甕棺墓 (Fig. 1-19, 1-20)

墓塚は削平を受けているが、ほぼ隅丸長方形状に掘り込む。西北部において、西側方向に向けて棺の埋置坑を掘り込んでいる。棺の上部で天井は有しないが、第23号甕棺墓等から見て、棺は挿入の方法を用いたと思われる。墓塚全体では東側部分に充分な余地を有し、埋置坑は挿入に必要なだけの掘り込みをもっている。墓塚南側部分で、木掘部分をもち、西側部分では近世木棺墓が切り込んでいるが、実測可能な状態で残ったのは幸いであった。

棺は小児用の单棺で、おそらく木蓋を用いたものと思われるが、根旗は明らかにすることはできなかった。長軸を S 63° E の方向にとり、水平より口縁部の方をややもちあげている。粘土等の施設は見あたらなかった。

**豐櫻** 瓢形土器を用いたもので、内傾する口縁上面はやや凹みをもつ。口縁直下に断面三角形の突帯を一条巡らす。突帯を少し下るところで最大径となり、上げ底を呈する底部につながる。口縁部と突帯付近、さらに底部に横なで調整を施す。器面外側には縦刷毛目調整を施しており、底部付近に一部横刷毛目調整、底面はなで調整を施す。器面外側と口縁上面には丹痕を認める。器面は外側灰褐色、内側灰色を呈し、胎土に石英粗粒砂を含むが緻密である。焼成は良好、口径41.6cm、器高47.6cm。中期前葉。

### 第25号甕棺墓 (Fig. 1-21, 1-22)

墓塚は東側を半分以上、第29号甕棺墓に乗る形で墓塚を壊しているが、少なくとも、棺まで壊したものではないと思われる。墓塚の形状は詳細にとらえにくいか、西側部分の墓塚の立ち上がり方、東側に余裕のある空間から、西側棺を挿入して埋置した可能性がある。

棺は小児用の接口式合口甕棺で、長軸を N 49.5° E の方位にとり、ほぼ水平に位置しており、粘土等の施設はない。

**上巣** 瓢形土器を用いる。口縁部の張りは弱く、やや肥厚して、内傾する口縁上面は丸みを有する。口縁部直下に断面三角形の突帯を一条巡らしており、さらに少し下るところで最大径となる。底部は肥厚して、若干の上げ底となる。口縁部、突帯付近と底面近くに横なで調整を施す。器面外側には縦刷毛目調整を施し、口縁上面と外側一部に埋葬時の丹塗りを認める。<sup>(註2)</sup> 内側胴部上半では、底による横なで調整を有する。器面は全体に、ていねいな調整を行なっている。

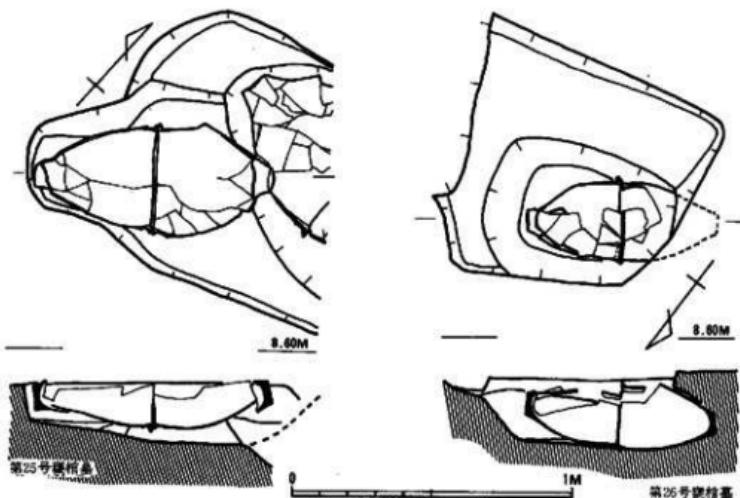


Fig. 1-21 第25・26号櫛棺墓実測図

器面は淡黄褐色を呈し、石英粒砂を含む。焼成は良好である。口径31.8cm、器高41.5cm。

**下窓** 豊形土器を用いる。やや肥厚する口縁部の口縁上面は内傾して若干凹む。直下には断面三角形の突帯一条を巡らし、さらに下るところで最大径となる。底部は肥厚してやや上げ底となる。口縁部から突帯にかけて横なで調整。器面外側は細くていねいな縦刷毛目調整、その上に突帯を貼付け、横なで調整を施している。器面外側は淡赤褐色～暗褐色、内側は暗褐色を呈する。石英粒砂を含むが、胎土、焼成ともに良好。口径32cm、器高42cm。中期前葉。

#### 第26号櫛棺墓 (Fig. 1-21, 1-22)

墓塚は西側を第27号櫛棺墓に切られているがほぼ隅丸方形状に掘り込んでいる。さらに棺の埋置塚を東側において掘り込んでいる。埋置塚は西側に少し空間をもち設置に必要なだけに掘り込み、挿入する方法を用いている。棺は小児用の接口式合口櫛棺で、長軸をN54°Eの方位にとる。5°の傾斜をもち、粘土等の施設はない。

**上窓** 豊形土器を用いる。口縁上面は内傾して若干の凹みをもち、やや上げ底を呈する底部へつながる。口縁部は横なで調整、器面外側は縦刷毛目調整を施す。底面には焼成時の黒変を有する。器面外側は黄褐色、内側は淡褐色を呈し、石英粒砂を含む。焼成は良好である。口径26.8cm、器高33cm。

**下窓** 豊形土器を用いる。内傾する口縁上面はやや凹み、上げ底の底部につながる。口縁部は横なで調整。器面外側には縦刷毛目を施し、全体に磨滅がある。器面は外側は淡褐色～褐色、内側は明褐色を呈し石英粒砂を含む。焼成は良好である。小児の白歯を採取している。中期前葉。口径28cm、器高34.5cm。

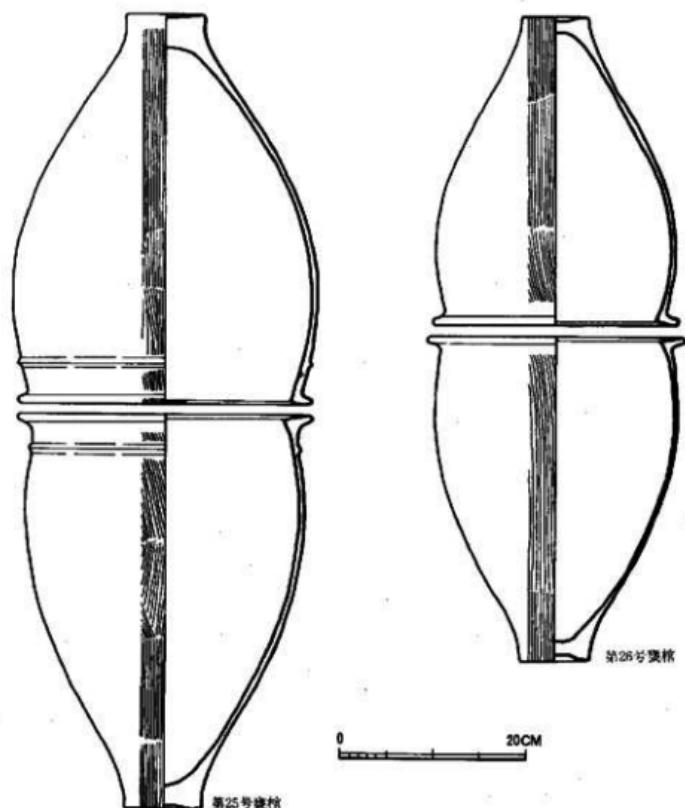


Fig. 1-22 第25・26号墓棺実測図

## 第27号墓棺墓 (Fig. 1-23, 1-24)

墓址は東側を近世木棺墓に一部切られており、上部も削平されているので墓壇はもっと大きいと思われる。掘り方も棺の埋置に必要なだけ掘り込まれている。棺は小児用の呑口式合口漆棺で、長軸S 47°E の方位にとり、9.5° の傾斜をもつ。粘土等の施設はない。

**上塗** 壺形上器を用いる。頭部の立ち上がり部分で打欠いている。ここから最大径にかけて大きくふくらみ厚みのある底部へとつながる。底面部分は破損している。最大径部に断面三角形の突帯を二条、さらに少し上ったところに同様の突帯を一条、それぞれ巡らしている。突帯付近は横なで調整。器面外側全体に横方向の磨研。器面外側黒褐色～暗褐色。内側は黒色を呈する。少量の石英粒砂を含む。焼成は良好である。残高47cm。

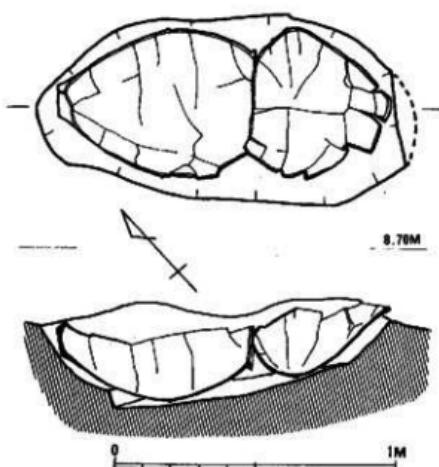


Fig. 1-28 第27号喪棺墓実測図

棺は小児用の接口式合口喪棺で、長軸をS80°Eの方位にとり1°の傾斜をもつ。粘土貼り等の施設はない。

**上塗** 変形土器を用いる。口縁上面は外端が下向しており、その外端の上下縫いいっぱいに刻目を施す。口縁部直下に断面三角形の突帯を一条巡らす。突帯下で最大径となり、上げ底の肥厚する底部へと大きくすぼまる。口縁部から突帯付近には横なで調整。器面外側には継刷毛目調整を施している。胴部最大径を中心として煤の付着をみとめる。器面は外側で暗赤褐色～褐色、内側は淡褐色～暗灰褐色を呈する。石英粒砂を多く含み、焼成は良好である。口縁上面には埋葬時の丹塗りの可能性がある。口径33.6cm。器高41.8cm。

**下塗** 変形土器を用い、口縁部は全体に丸みをもっており、外端には刻目を施す。口縁部直下に断面三角形の突帯を一条巡らす。

突帯下の最大径部から肥厚する上げ底の底部に向って大きくすぼまる。口縁部と突帯部付近で横なで調整。器面外側には継刷毛目調整を施しており、とくに突帯付近の斜め刷毛目は規則的である。口縁上面と底部内側で一部焼成時の黒変があり、胴部では、最大径を中心として、煤が付着する。外側は暗赤褐色～褐色、内側は黄褐色～灰褐色を呈し、石英粒砂を多く含み、焼成は良好である。口縁上面に埋葬時の丹塗りの可能性があり、中期初頭。口径28.6cm。器高36cm。

#### 第29号喪棺墓 (Fig. 1-26, 1-27)

墓塙は第25号喪棺墓に切られているが、第28号喪棺墓を切っている。ほぼ隅丸長方形を呈しており、棺は東側に充分の埋置空間をもっている。

**下塗** 変形土器を用いる。口縁部は内端で2つの縫をもち、外端は上下縫の間が少し凹む。口縁上面は内傾する。最大径直下に断面三角形の突帯を一条巡らしておらず、平底の底部へとつながる。底内側には指の押圧調整。口縁部は横なで調整、器面外側には継刷毛目を施している。器面は内外面とも褐色を呈し、石英粒砂を含む。焼成は良好である。中期前葉。口径38cm。器高69cm。

#### 第28号喪棺墓 (Fig. 1-25)

墓塙は西北側で第29号喪棺墓に切られているが、ほぼ隅丸長方形で東側部分に充分な空間を有している。西側棺の底部付近で天井をもっており、棺は挿入する方法を用いている。

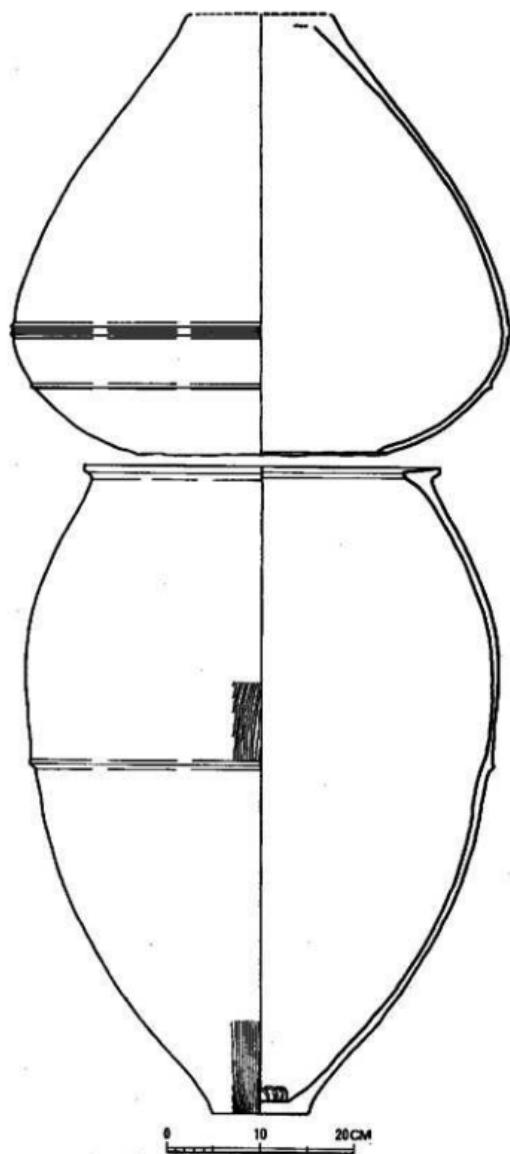


Fig. 1-24 第27号要棺尖測図

棺は小児用の接口式合口要棺で、長軸を S $85^{\circ}$ E の方位にとり 6° の傾斜をもつ。粘土貼り等の施設はない。

**上蓋** 壺形土器を用いる。最大径直上で断面三角形の突帯を二条巡らしているが、むしろM字形突帯に近い。突帯直上で打欠いている。底部はやや肥厚して若干の上げ底となる。突帯付近には横なで調整。底部付近で縦の磨研、さらに上部に向けては横方向の磨研を施している。器面外側は茶褐色、内側は黒褐色を呈し、石英粒砂を含む。焼成は良好である。残高27.3cm。

**下蓋** 壺形土器を用いる。やや肥厚する口縁部の口縁上面は丸みをもって内傾する。口縁直下に断面三角形の突帯を一条巡らしている。胴部中央やや上部で最大径となり、肥厚する上げ底の底部へとつながる。口縁部、突帯付近と底面近くには横なで調整。器面外側は縱刷毛目を施している。口縁部には埋葬時

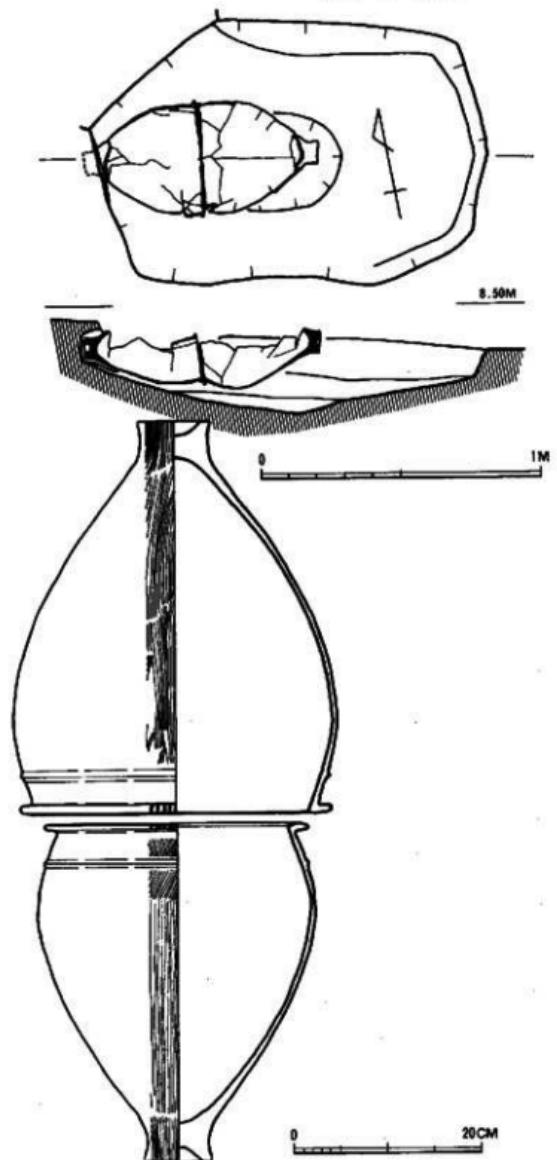


Fig. 1-25 第28号墓棺墓・壺棺実測図

の丹塗りの可能性をもつ。器面外側は赤褐色～淡茶褐色、内側は淡黒褐色を呈する。石英粒砂を含み、焼成は良好である。口径43.6cm、器高52.4cm、中期前業。

### 第30号壺棺墓

(Fig. 1-28)

墓壇は削平を受けてはいるが、ほぼ隅丸長方形を呈し西側部分で、さらに棺を挿入するための埋置壇を掘り込んでいる。天井部を少し残す。東側部分では空間を充分保っており、棺の埋置部分は必要限度の掘り込みをもつ。

棺は小児用の谷口式合口壺棺で、長軸をN 81°Eの方位にとり-9°の傾斜をもつ。粘土貼り等の施設はない。

**上壺** 壺形土器を用いる。頸部の立ち上り部分近くで打欠かれており、最大径部分で断面三角形の棱の明確な突帯を一条巡らしており、弱い上げ底の肥厚する底部へとつながる。突帯付近で横なび調整。器面外側全体に横擦研が施しており、内側も調整がていねいになさ

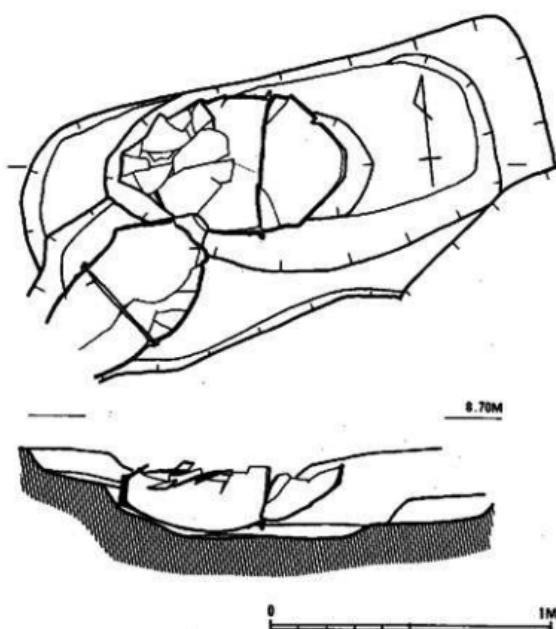


Fig. I-28 第29号墓棺墓実測図

調整。器面外面は綿刷毛目調整を施す。胴下半部で一部焼成時の黒変を有する。口縁上面と内側一部に埋葬時の丹塗りあり、全体に淡褐色を呈する。石英粒砂を含み、焼成は良好である。口径34cm。器高41.1cm。中期初頭。

#### 第31号墓棺墓 (Fig. I-29)

墓地は第32号墓と第33号墓との切りあいをもつが、先後関係はわからない。北側で、充分の空間をもち、南側では天井を有してはいないが、棺を挿入する方法を用いたものと思われる。粘土貼り等の施設はない。

棺は小児用の接口式合口櫛棺で、長軸をN6°Wの方位にとり、5°の傾斜をもつ。

**上部** 装形土器を用いる。口縁部はやや肥厚し、口縁上面は少し内傾して凹む。胴部最大径は胴上半部にあり、肥厚して上げ底をなす底部へつづく。口縁部と底部で横なで調整。器面外側は綿刷毛目を施している。口縁部上面に埋葬時の丹塗りの可能性をもつ。器面内外とも淡褐色を呈する。石英粒砂を含み、焼成は堅緻である。口径28.8cm。器高33.1cm。

**下部** 装形土器を用いる。口縁部は肥厚し、口縁上面は内傾して凹む。口縁部直下に断面三角形の突帯を一条巡らしている。底部は少し上げ底となり、肥厚する。口縁部から突帯にかけ

れている。外側は丹塗り。底部内側は凸凹が激しい。また外側は範なで調整を有する。器面内・外とも暗褐色を呈する。石英粒砂を含み、焼成は堅緻である。残高28.6cm。

**下部** 装形土器を用いる。口縁上面は丸味をもつ。口縁直下で断面三角形の突帯を一条巡らす。突帯下の最大径部から極端に肥厚し、上げ底となる底部へとつながる。底部の端では範調整。胴部に漆が付着する。口縁部と突帯付近は横なで調整。

口縁部内側では横刷毛目調整を施している。

さらに下ると指の押圧

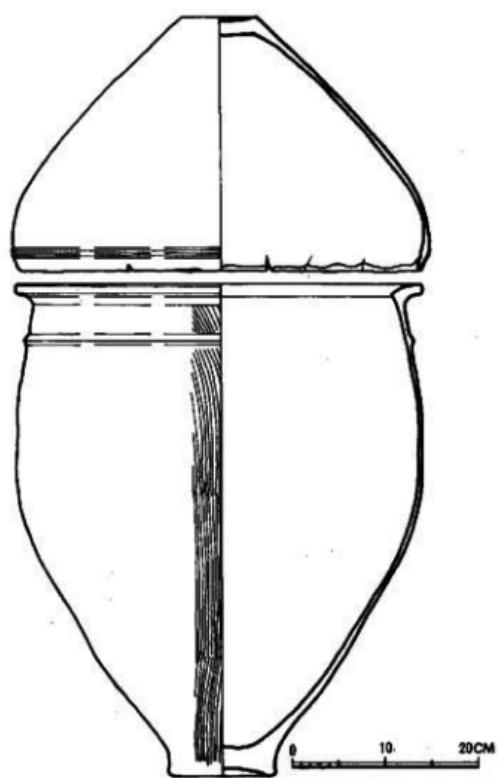


Fig. 1-27 第29号墓室実測図

**部最大径で断面三角形の突帯を二条巡らし、底部はやや上げ底となる。突帯部分に横なで調整。器面外側は、胴部上半で横方向、下半では縱方向の笠磨研を施している。器面内外に丹塗りを有する。器面は黒褐色を呈する。石英粒砂を含み、焼成は良好である。残高32cm。**

**下窓** 瓦形土器を用いる。口縁上面は凹んで内傾する。最大径直下で断面三角形の突帯を一条巡らしているが、突帯の部位には、貼つけの目印として、沈痕を一条巡らしている。底部はやや上げ底となって肥厚する。口縁部から突帯部で横なで調整。器面外側は口縁部から突帯部にかけて、窓による横方向のなで調整、器面内側も同様に横方向のなで調整を施す。口縁上面に埋葬時の丹塗りあり。器面内外とも暗褐色を呈する。胎土は石英粒砂を含むが、精選されている。焼成は堅緻である。口径36.8cm、器高41.1cm、中期前業。

て横なで調整。器面外側は縦刷毛目調整を施している。口縁上面と外側に埋葬時の丹塗りを有する。器面内外とも黄褐色を呈する。石英粒砂を含み、焼成は良好である。口径30.4cm、器高35.1cm、中期前業。

#### 第32号墓棺 (Fig. 1-29)

墓塙は第31号墓棺と切りあっているが先後関係はわからない。北側では第12号土塙墓、第16号木棺墓の上に乗っており、床に当たる部分に厚さ20cm～5cmの粘土をはっている。墓塙のもとの掘り込みはわからない。北側に充分の空間をもち、南側で穴井を有するところから、挿入する埋置方法を用いている。

棺は小児用の呑口式合口墓棺で長軸をN6°Wの方位にとり、20°の傾斜をもつ。合口部の粘土貼り等の施設はない。

**上窓** 壺形土器を用いる。頭部の立ち上がり部をやや下るところで打欠かれている。胸

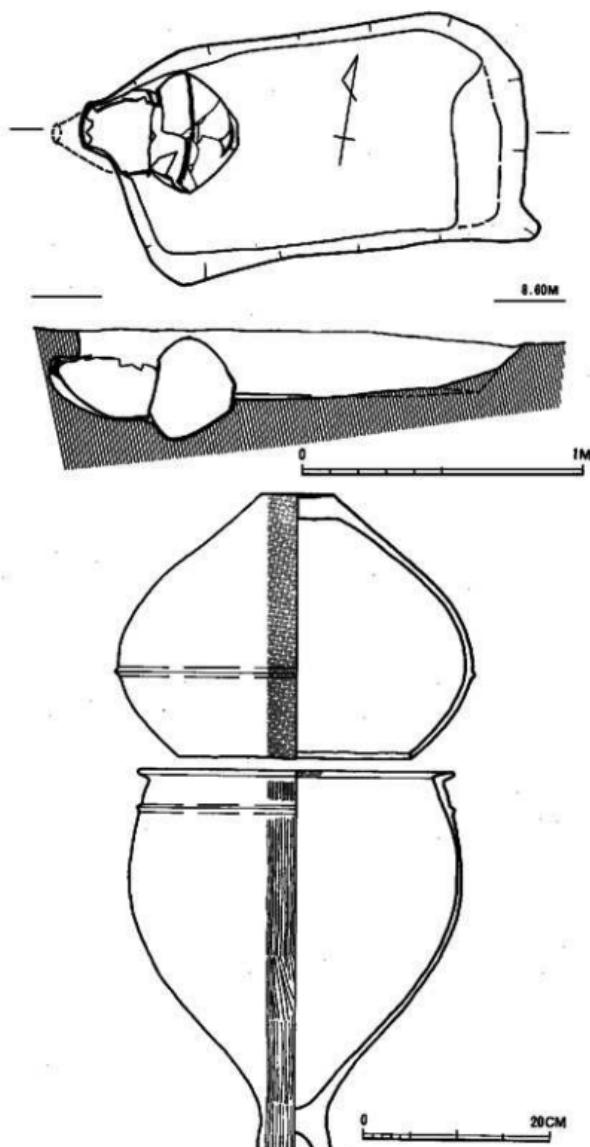


Fig. 1-28 第30号墓棺基·墓棺穴测图

II 生生時代の墓地

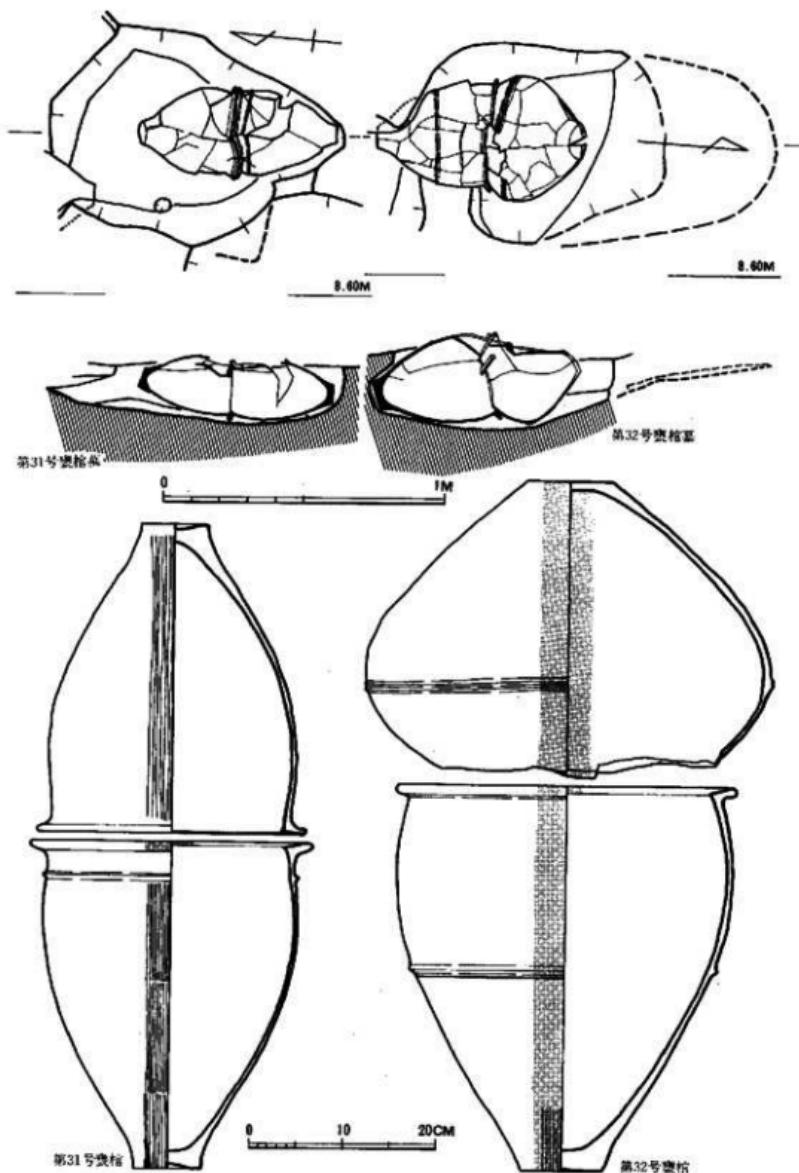


Fig. 1-29 第31・32号墓塚墓・墓塚実測図

II 発生時代の墓地

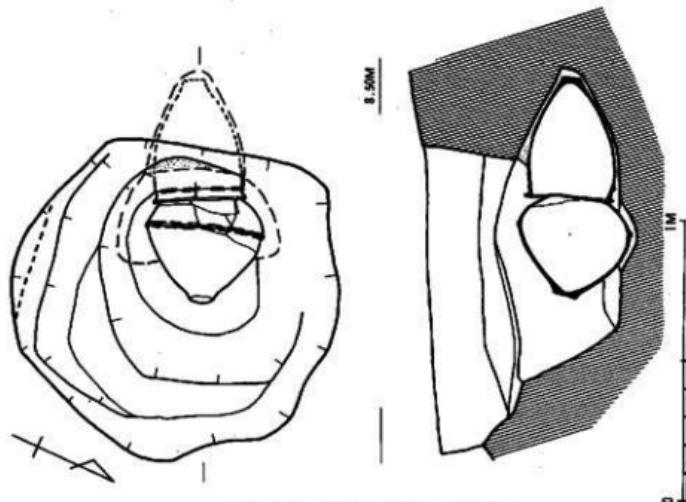
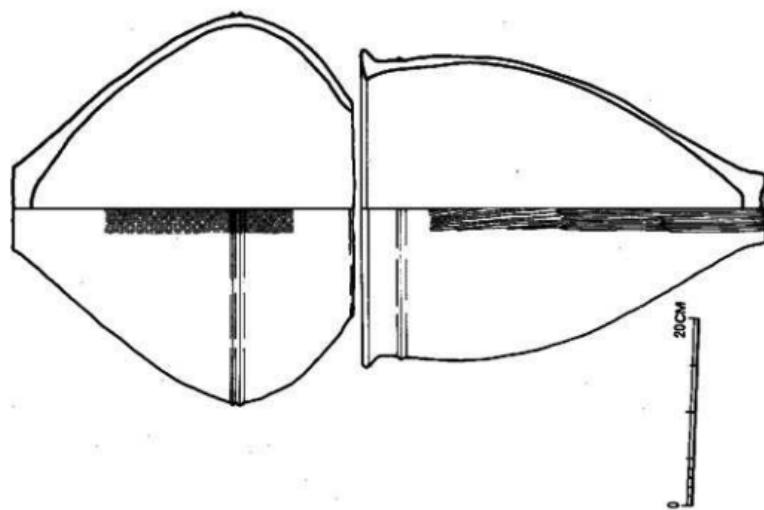


Fig. 1-30 第33号寝棺墓・寝棺実測図

### 第33号壺棺墓 (Fig. 1-30)

#### 第1章 G-5a地点

墓塚は第31号壺棺と切り合っているが、先後関係はわからない。第30号壺棺墓との切り合いでは本壺棺墓が後出する。削平を受けてはいるが掘り込みが深く、平面は隅丸方形形状をなす。東側に充分な空間をもち、西側の壁に挿入している。挿入する棺の振り込みに最小限度の空間をもち、粘土を貼って補強している。

棺は小児用の呑口式合口壺棺で、長軸を N 66° E の方位にとり 2° の傾斜をもつ。

**上巻** 壺形土器を用いる。頸部最大径で断面三角形の突帯を二条巡らしている。頸部の立ち上がり部分で打抜いており、この部分でも、突帯の残欠を認める。底部は肥厚して弱い上げ底となる。器面外側は全体に竈による横方向の磨研を施し、一部器面内側の上部におよぶ。底部付近では縱方向の磨研にかかる。全体に煤が付着しているが、口縁部上面にのみ埋葬時と思われる丹塗りを施している。器面内外とも暗褐色を呈し、粘土は精選されているが、石英粒砂を含む。焼成は堅緻である。残高 36.6cm。

**下巻** 壺形土器を用いる。口縁部は肥厚し、口縁上面は内傾し、全体に丸みをもつ。口縁部直下に断面三角形の突帯を一条巡らし、底部は肥厚して上げ底となる。口縁部から突帯にかけて横なで調整。器面外側には縱刷毛目調整を施し、胴部には煤が付着する。器面内外とも赤褐色を呈する。石英粒砂を含み、焼成は堅緻である。口径 34.2cm。器高 43.4cm。中期前葉。

### 第34号壺棺墓 (Fig. 1-31)

墓塚は削平を受けて棺の上半部は壊されている。西側に段を有して空間をもっており、埋置のための掘り込みも、やや余裕をもっている。

棺は小児用の接口式合口壺棺で、長軸を S 80° W の方位にとり、42° の傾斜をもつ。粘土貼り等の施設はない。

**上巻** 鉢形土器を用いる。口縁部内外端は丸みをもち、口縁上面は平坦をなす。口縁部直下には断面三角形の突帯を一条巡らす。底部はやや肥厚して弱い上げ底となる。口縁部と突帯部に横なで調整。器面外側は口縁部から突帯周辺にかけて横方向の磨研。底部にかけては縱方向の磨研を施してある。口縁上面は埋葬時の丹塗り。器面外側は褐色から茶褐色、内側は淡褐色を呈する。石英粒砂を含み、焼成は良好である。口径 31.4cm。器高 22.3cm。

**下巻** 壺形土器を用いる。外反しながら立ち上がる頸部に連なる口縁部は肥厚して、口縁上面は内外端がやや垂れる。頸部の立ち上がり部分に断面三角形の突帯を一条巡らしており、そこから最大径にかけて大きくふくらむ。底部はやや肥厚する上げ底になる。口縁部から外側頸部にかけて横なで調整。胴部から底部にかけて竈による横方向の磨研を行ない、底部付近ではそれが縱方向になる。器面内側は竈によるなで調整が全体に及んでいる。口縁上面には埋葬時の丹塗りをもつ。器面内外とも暗赤褐色を呈する。石粒砂を含み、焼成は堅緻である。口径 29.4cm。器高 49.8cm。中期前葉。

### 第35号壺棺墓 (Fig. 1-32, 1-33)

墓塚は削平をうけるが、棺はほぼ原形を保っている。南側に未掘部を有するが、ほぼ隅丸長方形の振り込みをもつ。東側で充分な空間をもっており、棺も余裕をもって置かれている。

棺は小児用の接口式合口壺棺で、長軸を N 80° E の方位にとり、-4.5° の傾斜をもつ。棺の床

II 弥生時代の墓地

の部分には粘土を敷きつめている。棺外より弥生式土器片を出土している。

**上變** 變形土器を用いる。口縁上面は内傾する。口縁外端には刻目を施している。口縁直下に弱い断面三角形突帯を一条巡らす。底部は上げ底をなし、肥厚する。胴部には煤が付着する。口縁部と突帯部で横なで調整。器面外側は、継刷毛目調整を施し、口縁上面は埋葬時の丹塗りである。器面内外とも灰色を呈する。石英細粒砂を含み、焼成は良好である。口径29.4cm、器高36cm。

**下變** 壺形土器を用いる。頸部立ち上がり近くで打欠きを有し、やや上げ底の肥厚した底部に達する。胴部上半では縦あるいは斜めの刷毛目調整の上から横なで調整を行ない、胴下半では竪による横あるいは縦に走るなでを有する。胴部に煤が付着する。胴部上半で、埋葬時の丹を認める。器面外側は淡褐色、内側は黒褐色を呈する。石英粗粒砂を含み、焼成は良好である。残高30.3cm。中期初頭。

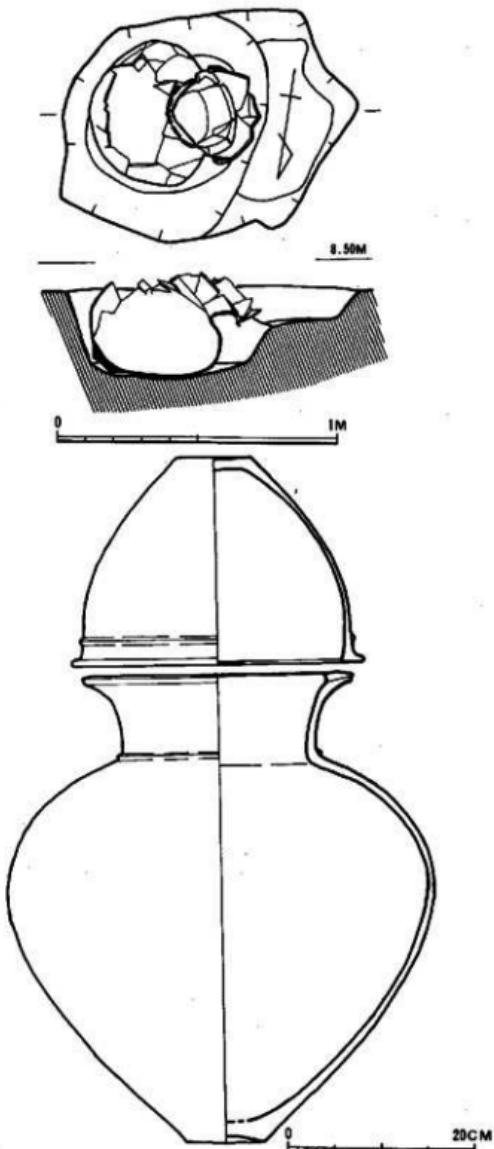


Fig. I-31 第34号変形壺・変形実測図

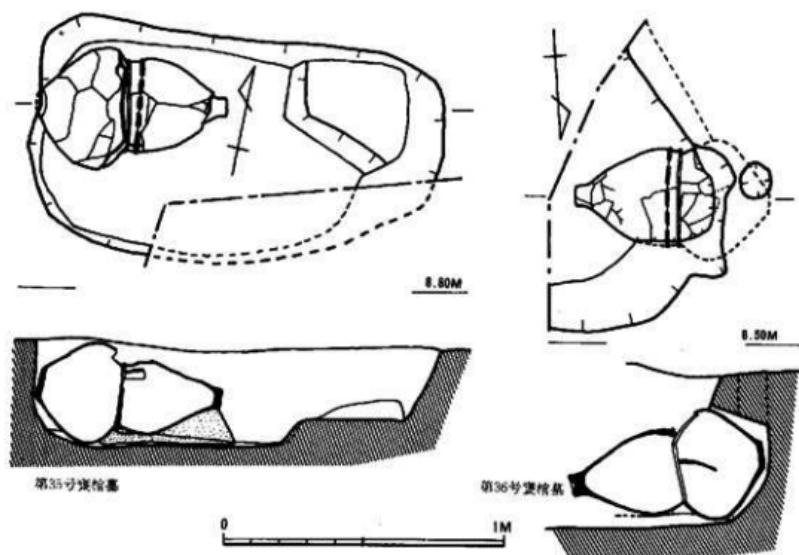


Fig. 1-32 第35・36号斐棺墓実測図

## 第36号斐棺墓 (Fig. 1-32, 1-33)

墓壇は東側で未掘部分をもつが、ほか隅丸方形状の掘り込みが推定できる。東側で充分な空間を保ち、棺を西側壁に挿入する埋置方法をもちいている。柱穴状小ピットが墓壇と切りあっているが、時期的には柱穴状小ピットが古いと考えられる。

棺は小児用の覆口式合口斐棺で、長軸を S85°W の方位にとり、-11° の傾斜をもつ。墓壇を振り上げた白色粘質土で、埋置の際に棺を補強している。

**上蓋** 斐形土器を用いる。口縁部はやや肥厚して、丸みをもっている。口縁直下には弱い断面三角形の突帯を巡らす。底部は肥厚して上げ底となる。口縁部から突帯にかけては横なで調整。器面外側は細い刷毛目を縱に施している。胴部には煤が付着する。器面外側は赤褐色～淡黄褐色、内側は黄褐色を呈する。石英粒砂を含み、焼成は良好である。口径31.4cm。器高39.2cm。

**下蓋** 斐形土器を用いる。頸部立ち上がり付近で打欠いている。底部はやや上げ底である。底部付近で縱刷毛目調整の上から縱方向の磨研を行い、胴部上半にかけて横方向の磨研をしている。最大径部より上部には煤が付着し、口縁上面には埋葬時の丹塗りがある。器面内外とも黄褐色を呈する。石英粒砂を含み、焼成は良好である。残高30.6cm。中期初頭。

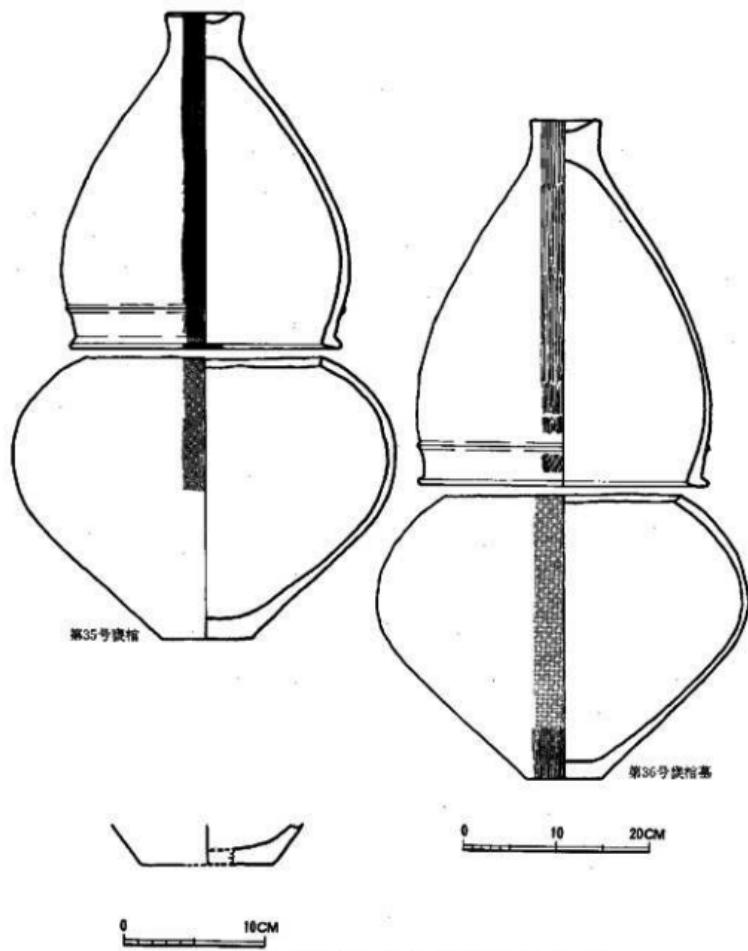


Fig. 1-33 第35・36号鏡棺・第35号鏡棺墓址出土土器実測図

## 第37号鏡棺墓 (Fig. 1-34)

墓址は大部分削平を受けており、南側では未掘部分をもつ。掘り込みの形状は推測できない。棺は小児用の接口式合口鏡棺で、長軸をN20°Wの方位にとり、ほぼ水平に埋置される。合口部で粘土貼りの施設を有する。

**上窓** 長形土器を用いる。口縁部は肥厚して、口縁上面は凹みをもっており内傾する。口縁直下には断面三角形の弱い突帯を一条巡らしている。口縁部から突帯部にかけて横なで調整。

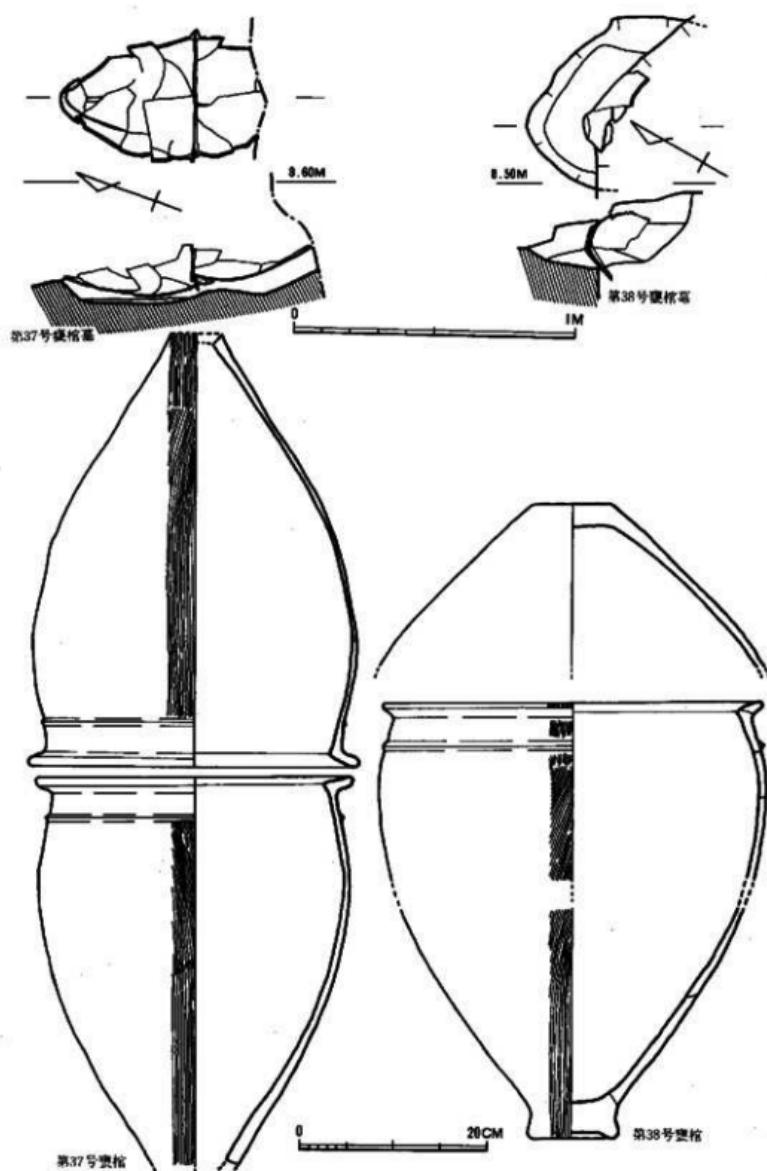


Fig. 1-34 第37·38号墓结构剖面图

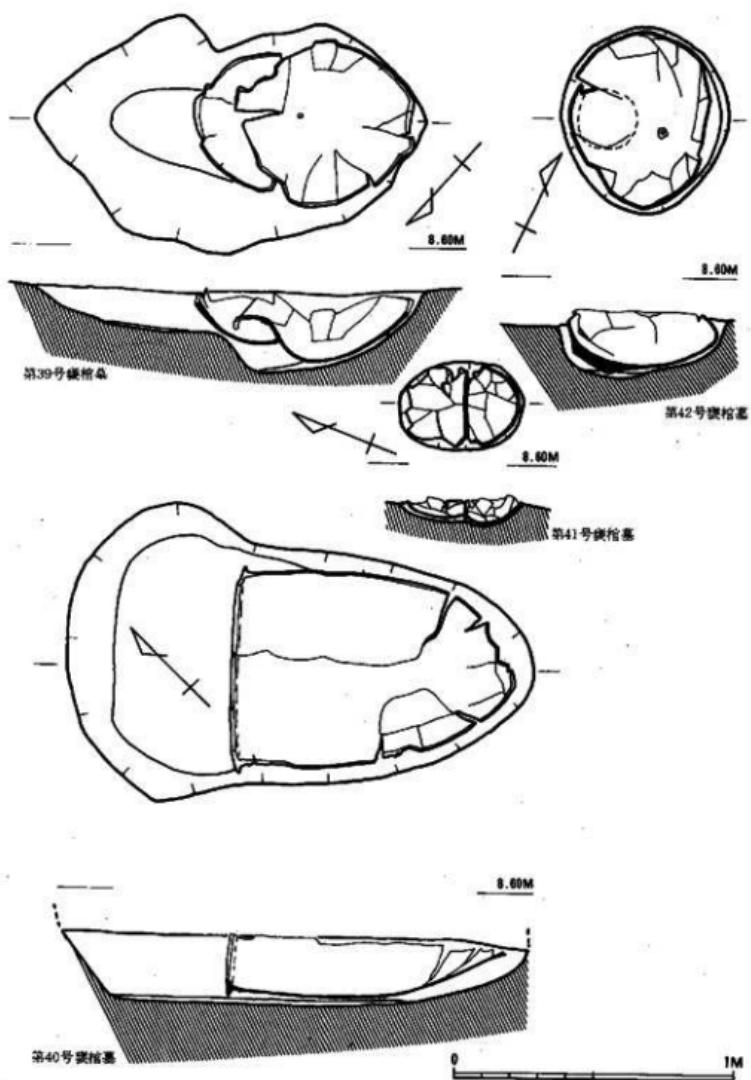


Fig. 1-35 第39-40-41-42号墓实测图

II 弥生時代の墓地

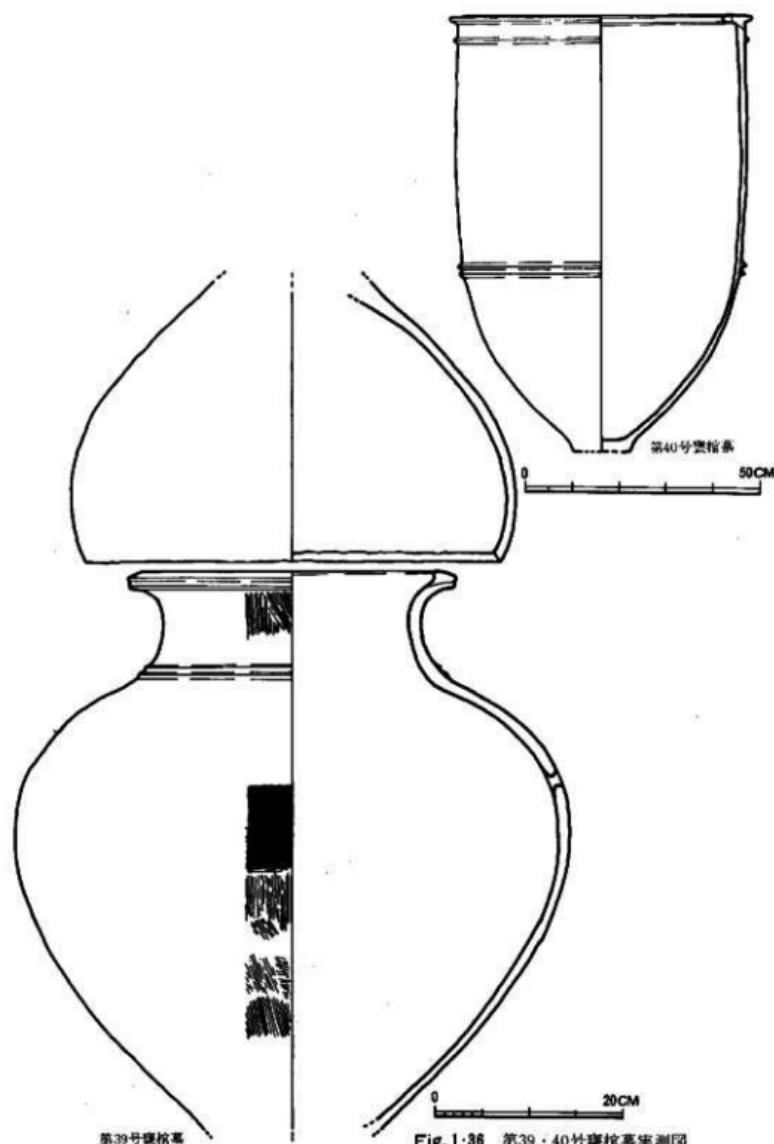


Fig. 1-36 第39・40号墳棺墓実測図

## II 弥生時代の墓地

器面外側は縦刷毛目調整を施している。器面外側は褐色、内側は灰褐色を呈する。胎土中に若干の石英砂を含み、焼成は良好である。口径35.4cm。器高41.3cm。

**下斎** 壺形土器を用いる。口縁部は少し肥厚して、全体に丸みをもち、口縁上面は凹んで内傾する。口縁直下には断面三角形の小さな突帯を一条巡らしている。底部は破損している。口縁部から突帯部にかけて横なで調整。器面外側には縦刷毛目調整を施している。器面内外とも褐色を呈する。胎土中に石英粒砂を含み、焼成は良好である。口径34cm。残高36.8cm。中期前葉。

### 第38号壺棺墓 (Fig. 1-34)

墓地は南側から、第7号竪穴（井戸状遺構）によって大部分を切られている。竪穴中には、棺の破片が落ち込んでいた。北側では第43号壺棺墓と切りあっているが、先後関係はわからぬ。

棺は小児用の合口壺棺で、長軸はS 30°E の方位をもつ。上下関係はわからないが墓塙に残った棺は壺形土器であり、他の壺棺墓から推測すると、残った壺形土器は上蓋と考えられる。

**上斎** 壺形土器を用いる。肥厚する底部をもち胴部は大きくくづくらむが、半分以上が破損しており原形は推測し難い。器面外側は丹塗りである。器面外側は褐色、内側は淡褐色を呈する。石英粒砂を多く含み、焼成は良好である。残高17.7cm。

**下斎** 壺形土器である。胴部を一部欠いている。口縁部は外端に刻印を施しており、口縁上面は丸みを帯びて内側する。口縁直下には、断面三角形の小さな突帯を一条巡らしている。底部は肥厚して上げ底となる。胴部に煤が付着する。口縁部と突帯部で横なで調整。器面外側には縦刷毛目を施している。器面内外とも褐色～黒褐色を呈する。胎土中には石英粒砂を多く含み、焼成は良好である。口径40.8cm。器高45cm。中期初頭であるがやや新しい。

### 第39号壺棺墓 (Fig. 1-35)

墓地は削平を受けて全体の形状は明らかではないが、東北側に充分な空間を有する。棺の埋置のためにさらに掘り込みをもっている。

棺は覆口式合口壺棺で、長軸をN 48°E の方位をとる。粘土貼り等の施設はない。

**上斎** 壺形土器を用いる。底部は破損しており、最大径部直上で打欠いている。胴部に煤の付着あり。器面外側は暗褐色～黒褐色、内側は灰褐色を呈する。石英粗粒砂を多く含み、焼成はややもろい。残高29.2cm。

**下斎** 壺形土器を用いる。大きく外反して立ち上がる頸部につながる口縁部は肥厚して内側では段を有する。口縁上面は丸みをもつて外傾する。頸部立ち上がり部分では、断面三角形の弱い突帯を二条巡らす。最大径直上で外側から焼成後の穿孔を行っている。底部は破損している。口縁部から、突帯部分には横なで調整。器面外側では刷毛目調整を施したあとに荒磨研を行う。底部付近では縦に内側で調整をしている。最大径直上部分には一部焼成時の黒変を有し、器面内側には縦なで調整を行う。外側器面は丹塗りである。器面外側は赤褐色～暗赤褐色、内側は黄褐色～暗褐色を呈する。胎土中に石英粒砂を多く含み、焼成は良好である。口径35cm。残高50.8cm。中期初頭。

### 第40号壺棺墓 (Fig. 1-35, 1-36)

墓坑は第14号竪穴の上部に埋置している。北側部分に充分の空間を保っており、棺の埋置のための掘り込みは、ほぼ最少限度になされている。

棺は成人用の単棺で長軸をN44°Wに方位をとり、ほぼ水平を保っている。棺の閉塞のための施設は見い出せなかった。

**要棺** 成人用の大形壺を使用したもので、T字状口縁の内側張り出しは強く、外端はやや外傾する。口縁直下には断面三角形の明瞭な突帯を一条、胴下半部にも同様の突帯を二条巡らしている。底部は一部分欠けてはいるが平底で肥厚する。器面は外側で赤褐色、内側で淡灰褐色を呈する。石英粒砂を含み緻密である。焼成は良好。口径64.8cm、器高94cm。中期中葉。

#### 第41号要棺墓 (Fig. 1-35, 1-37)

墓坑は削平を受けており、原形を認め得ない。

棺は小児用の接口式合口要棺で、長軸をN21°Wの方位にとりほぼ水平を保つ。粘土等の施設はない。上下壺の別はわからないが、レベルの低い壺の方を下壺としておく。

**上壺** 壺形土器を用いる。口縁部は全体に丸みをもち口縁上面はややふくらみをもって内傾する。外端には刻目を施している。口縁直下には断面三角形の小さい突帯を一条巡らす。底部

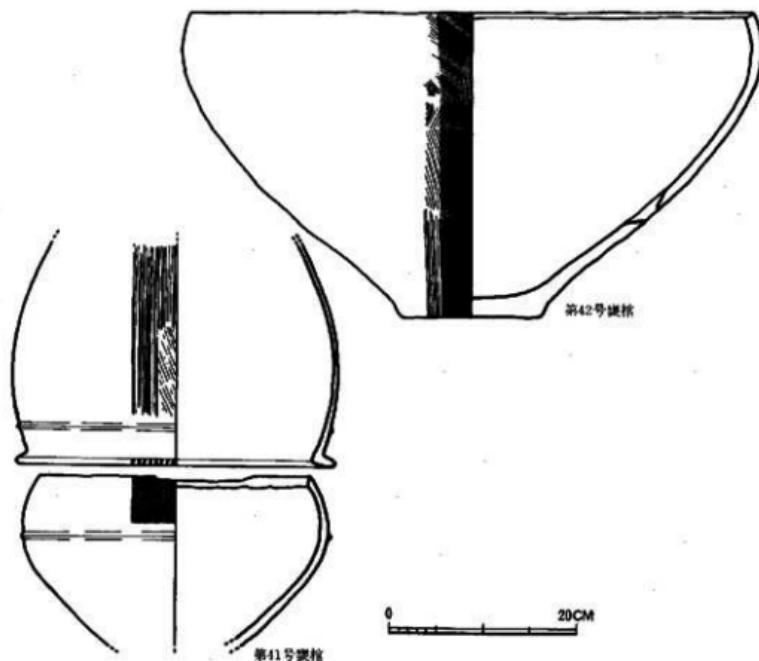


Fig. 1-37 第41・42号要棺墓実測図

## II 弥生時代の墓地

周辺を欠失している。口縁部から突帯部にかけて横なで調整。器面外側には縦の細刷毛目調整を施している。口縁上面には埋葬時の丹塗りの可能性がある。器面外側は淡赤褐色、内側は灰褐色を呈する。石英粒砂を含み、焼成は少しもろい。口径34.2cm、残高24cm。

**下斎** 壱形土器を用いる。底部は破損し最大径直上で打欠いている。最大径近くで断面三角形の突帯を一条巡らしている。突帯部に横なで調整。器面外側では底部近くで櫛方向、胴部上半にかけては横方向の篦磨研を行っている。丹塗りである。器面外側では暗赤褐色～暗褐色、内側では灰褐色を呈する。石英粒砂を含み、焼成は良好である。残高18.4cm。中期前葉。

### 第42号壹棺墓 (Fig. 1-35, 1-37)

墓塚は削平をうけており形状はわからない。掘り込みは埋置に対して最少限のものである。

棺は小児用で残存部では単棺であるが、合口壹棺の可能性をもつてゐる。長軸をN65°Eの方位にとり63°の傾斜をもつてゐる。

**壹棺** 壱形土器を使用しており最大径直上で打欠かれている。底部は平底で肥厚する。焼成後外側からの穿孔を1つ有する。器面外側の底部近くで焼成時の黒変を有し、外側全体には縦方向の細い刷毛目調整を施している。丹塗りである。器面内外とも暗赤褐色～暗褐色を呈する。石英粗粒砂を含み、焼成はもろい。残高32.5cm。中期初頭。

### 第43号壹棺墓 (Fig. 1-2)

墓塚のみを残し棺は存在しない。

(原後一)

(註1) 金隈遺跡では、第97号壹棺墓で、2個の石剣鉾が人骨に密着して出土している(折尾学編1971金隈遺跡第2次調査概報)。スグレ遺跡は、徳波町椿に所在する遺跡で、第3号壹棺墓から、石剣鉾が人骨刺突の状態で出土している。(福岡県教育委員会文化課橋口達也氏の教示による。)

(註2) 壱形土器の口縁部に、焼成後の丹塗りが施されているが、大部分は剥落している。また、胴部等に煤の付着がみられるものもあるところから、壹棺として使用する時に丹塗りを施したと考えられる。

## 2. 木棺墓・土塚墓

### 第1号土塚墓 (Fig. 1-38)

長さ 1.1m、幅55cm、深さ70cmの隅丸長方形の土塚墓で、夜白式土器を出土する第2号竪穴によって切られているところから同竪穴より時期は少し古いと考えられる。副葬遺物はなかつたが、上部に中期初頭と考えられる土器片が数点出土した。主軸はN70°Wである。

### 第2号土塚墓 (Fig. 1-38)

長さ 1.3m、幅55cm、深さ20cmの長方形で、埋土中から土器の縁片、黒曜石削片が数点出土した。主軸はN84°Eである。

### 第3号土塚墓 (Fig. 1-39)

長さ 1.8m、幅50cm、深さ15cmで、埋土中には遺物はふくまれていなかった。埋土を除いた段階で西壁と中央部に小ピットが確認され、小口かとも思われるが側板の痕跡が無く東側に墓塙が伸びているところから土塚墓とした。主軸はN43°Eである。

### 第4号土塚墓 (Fig. 1-39)

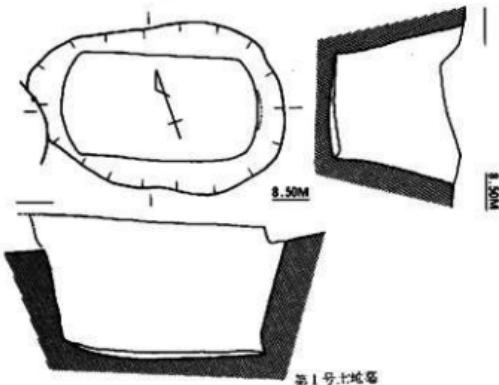
表面でプランは確認されなかったが埋土を除くと、二段目の掘り込みがあり、長さ1.3m、幅40cm、深さ20cmの隅丸長方形の土塚墓である。主軸はN87°Eである。

### 第5号木棺墓 (Fig. 1-40)

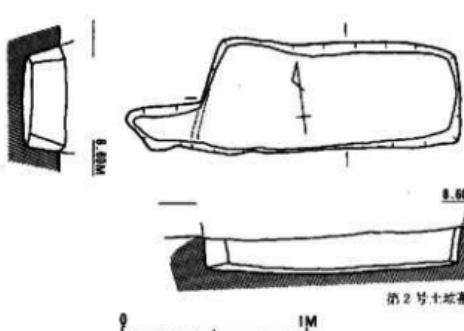
長さ 1.2m、幅30cm、深さ30cmの長方形の木棺墓である。西側の小口板は、側板に挟まれ、東側の小口板は側板でとめられ、小口板、側板は埋土で固め固定されていた。主軸はN47°Wである。

### 第6号木棺墓 (Fig. 1-41)

長さ 1.1m、幅1mの隅丸長方形の墓塙の中に小口を掘り込み両小口板が側板に挟まれた木棺墓で、側板は立てか



第1号土塚墓



第2号土塚墓

Fig. 1-38 第1・2号土塚墓実測図

## II 弥生時代の墓地

けられたと考えられる。棺の長さ 0.6m、幅25cmで、墓壇は北東隅が第7号竪穴（中世井戸）に切られている。主軸はN82°Eである。

### 第7号木棺墓 (Fig. 1-42)

大半は削平されているが、長さ40cmの小口の掘り込みが確認された所から、棺の長さ80cm、幅40cmの木棺墓である。主軸はN64°Eである。

### 第8号木棺墓 (Fig. 1-42)

長 1.4m、幅50cmのプランが表面で確認でき、埋土を除いたが側板、小口板は確認できなかった。埋土を完全に除くと、東側に小口板の痕跡があり、西側には小口の掘り込みがあり、棺の長さ75cm、深さ40cmの木棺墓と推定される。主軸はN80.5°Eである。

### 第9号木棺墓 (Fig. 1-43)

長さ 1.5m、幅 1 m の隅丸長方形のプランが表面で確認され埋土を除くと、二段目の掘り込みがあり、長さ 1 m、幅35cm、深さ 30cm の木棺墓が確認された。小口板を埋めこみ側板をたてかけたもので、側板は小口板に挟まれていた。この墓壇中から板付II式の甕の口縁 (Fig. 1-48) が出土したことから、この木棺墓は、弥生時代前期末と考えられる。主軸はN79°Eである。

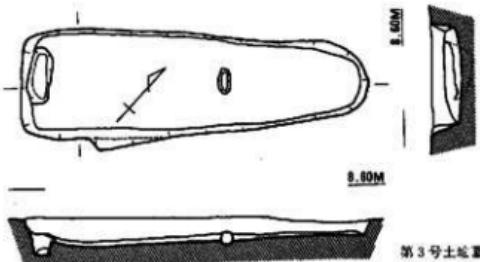


Fig. 1-39 第3・4号土塚墓実測図 (1/30)

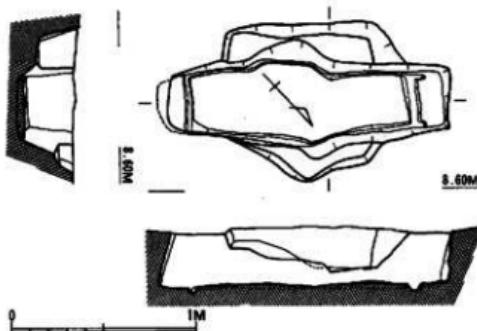


Fig. 1-40 第5号木棺墓実測図 (1/30)

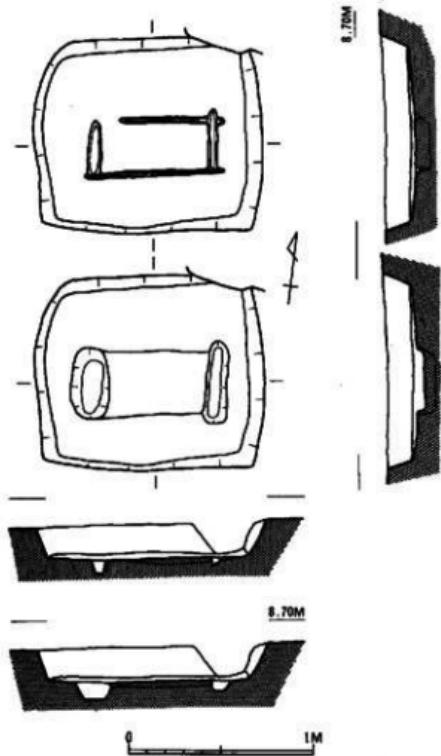


Fig. 1-41 第6号木棺墓実測図 (1/30)

抽状の形状をしているが、本米のプランは上面が削平されているためわからない。主軸はN80°Eである。

#### 第12号土塙墓 (Fig. 1-44)

表面で長さ1m、幅60cmの隅丸長方形のプランが確認された。埋土を除くと、長さ50cm、幅25cm、深さ25cmの二段目の掘り込みを持つ土塙墓である。この土塙墓は、第16号土塙墓と表面で切り合っているが、前後の差は確認できなかった。主軸はN87.5°Eである。

#### 第13号土塙墓 (Fig. 1-44)

表面で長さ1.3m、幅75cmのプランが確認でき埋土を除くと、中央部に、二段目の掘り込みがあった。長さ50cm、幅30cm、深さ25cmの土塙墓である。主軸はN86°Eである。

#### 第14号木棺墓 (Fig. 1-45)

長さ135cm、幅90cm、深さ50cmの不正隅丸長方形の墓壇の中に、小口板を埋め、側板を固定

**第10号木棺墓 (Fig. 1-44)**  
 東側に植木があり完掘できなかったが、長さ2.3m、幅1.3mの隅丸方形のプランが確認され、埋土を除くと、西側の小口板と北側の側板が確認され、南側の側板はたてかけられていた木棺墓である。さらに、木棺墓を10cm掘り込む形で、木棺墓と同じ長さ(135cm)で、幅30cmの土塙墓が作られている。土塙墓と木棺墓の埋土の違いは確認できなかったが、9点の土器片が出土し3は、中期初頭の甕の口縁であり、5は、板付II式の甕の口縁であり、4は、前期の甕の底部である(Fig. 1-48)ところから、木棺墓と土塙墓の時期差は考えられない。以上から改葬合葬されたとも考えられる。主軸はN83°Eである。

#### 第11号土塙墓 (Fig. 1-44)

長さ60cm、幅30cm、深さ25cmの隅丸長方形の土塙墓で、西隅の両端に浅いピットがある

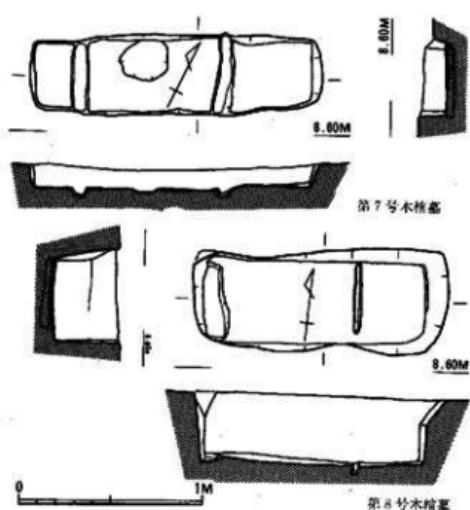


Fig. 1-42 第7・8号木棺墓実測図 (1/30)

25cm。側板は埋められた小口板によって固定されている。棺内で、裏・鉢型土器の口縁等(Fig. 1-48)の細片が出土しており、棺内出土の土器と同時期と考えられる。主軸はN12°Wである。

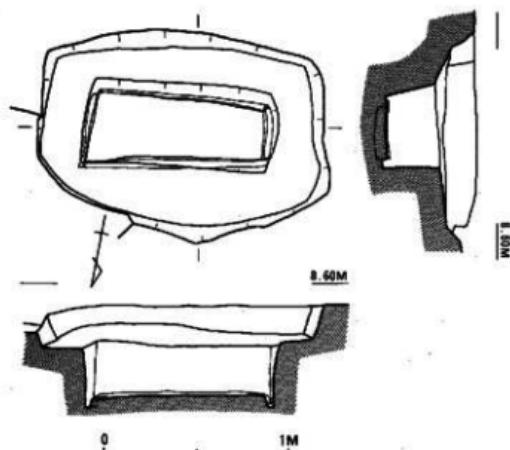


Fig. 1-43 第9号木棺墓実測図 (1/30)

した木棺墓である。棺の長さ70cm、幅30cmである。主軸はN80.5°Eである。

#### 第15号土塙墓 (Fig. 1-45)

長さ80cm、幅40cm、深さ25cmの隅丸長方形の土塙墓で、上部は第2号溝に切られている。主軸はN86°Wである。

#### 第16号木棺墓 (Fig. 1-46)

長長さ95cm、幅40cmで、小口板、側板とも立てかけられていたと考えられるが、第32号木棺墓によって切られており、その時にこの木棺墓の上面は壊されたと考えられる。主軸はN85°Wである。

#### 第17号木棺墓 (Fig. 1-46)

長さ1.4m、幅50cm、深さ

25cm。側板は埋められた小口板によって固定されている。棺内で、裏・鉢型土器の口縁等(Fig. 1-48)の細片が出土しており、棺内出土の土器と同時期と考えられる。主軸はN12°Wである。

#### 第18号木棺墓 (Fig. 1-47)

長軸の両端に小口板の痕跡が確認され、棺の長さ90cm、幅35cmであるが、大部分は削平されている。主軸はN51°Eである。

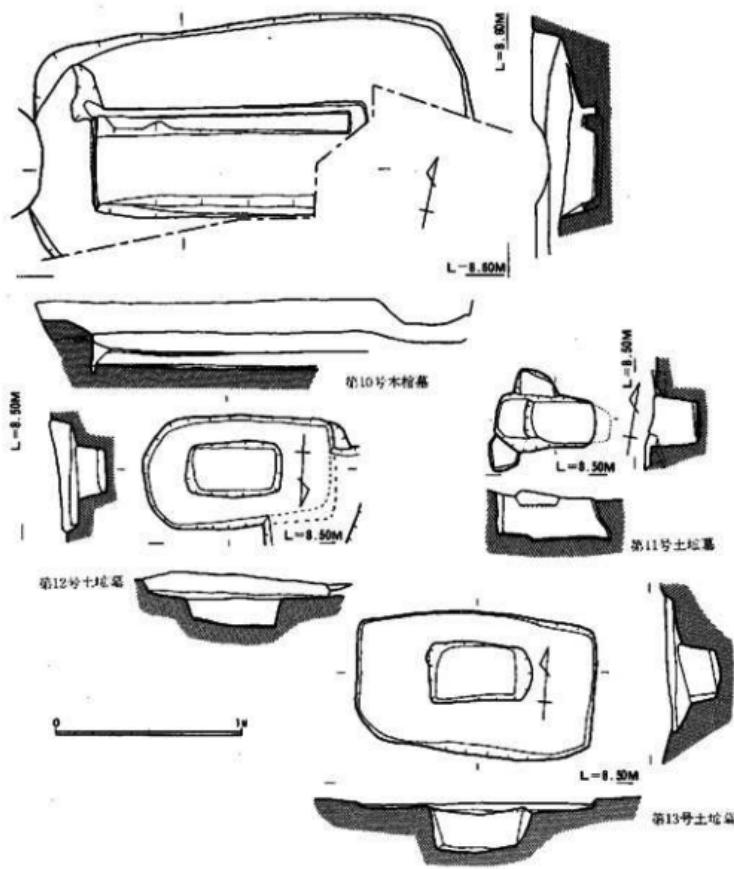


Fig. 1-44 第10号木棺墓第11-12-13号土坟墓実測図 (1/30)

**第19号木棺墓 (Fig. 1-47)**

完全に削平されていたが、25cmの小口板が小口の掘り方の中に確認でき、棺の長さ85cmの木棺墓である。主軸は N69°E である。

**第20号木棺墓 (Fig. 1-47)**

削平されてはいるが、小口板と側板の痕跡が確認され、棺の長さ60cm、幅30cmと推定できる。主軸は N55°W である。

## 第21号土塙墓 (Fig. 1-47)

第20号木棺墓同様削平されているが、長さ1.3m、幅30cmの不正隅丸長方形で、主軸はN $73^{\circ}$ Wである。

## 第22号木棺墓 (Fig. 1-47)

大部分削平されているが、わずかに床面が残っており埋土を除くと、側板はわからなかつたが小口板が確認された。小口板から棺の長さ70cm、幅25cm。主軸はS $86^{\circ}$ Wである。

## 第23号土塙墓 (Fig. 1-47)

長長さ1m、幅30cmの不正隅丸長方形で、南壁で腰形土器の底部が出土したが(Fig. 1-48)大部分は削平されているため埋土中とはいえない。主軸はN $2^{\circ}$ Eである。

## 第24号土塙墓 (Fig. 1-47)

長さ1.2m、幅70cmの隅丸長方形で、上部は、第13号豎穴に切られているが、第13号豎穴の床面はほぼ水平で土塙墓の上面にはローム張りがみられるところから、豎穴と土塙墓はほぼ同時期と考えられる。主軸はN $73^{\circ}$ Eである。

以上、木棺墓13基・土塙墓11基、が腰形土器と同一の分布を示して出土した。まず木棺墓からみていくと、棺の長さ、幅の関係によって、第5・9・10・17号腰形土器を成人用とし、他を小児用とした。木棺の組合せは第5・6・10号がA式組合せで、第7・9・14・17・18号がB式組合せであり、他の5基は判別できなかった。上塙墓は、第1号土塙墓が成人用である。第2～4・24号は成人用と考えられる。他は小児用である。木棺墓・土塙墓の主軸の方向は第5・17・20号木棺墓、第23号土塙墓がN $2^{\circ}$ EからN $55^{\circ}$ Wの方位をとる他は、N $70^{\circ}$ WからN $85^{\circ}$ W・N $43^{\circ}$ EからN $87.5^{\circ}$ Eと一定している。いずれも副葬品と考えられる遺物は出土しなかつたが、墓坑内から出土した土器は前期末から中期初頭のものである。また、第1号土塙墓が、夜臼式土器期のものである第2号豎穴から、第12号土塙墓・第16号木棺墓が、中期前葉の第32号腰形土器から、第24号土塙墓は、第13号豎穴から切られている。また、土塙墓・木棺墓は、前述のよう

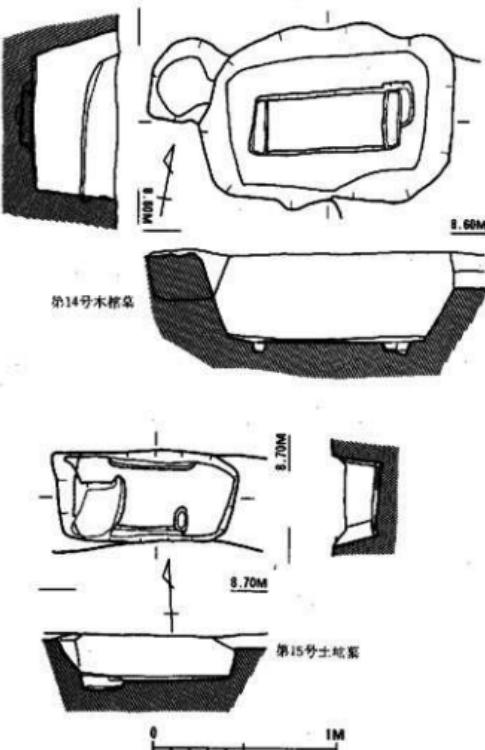


Fig. 1-45 第14号木棺墓・第15号土塙墓実測図 (1/30)

第1章 G-Sa地点

に、槨棺墓と同一の分布をしているが切り合い関係がないこと、第32号槨棺墓の墓塚がローム張りしてあることなどから、槨棺墓より少し古いか同一時期に埋葬されたものと考えられる。弥生時代前期末から中期前葉までのものといえる。

(註) 柳田康雄1970「木棺墓(土塚墓)と槨棺墓」『津古内畠遺跡』

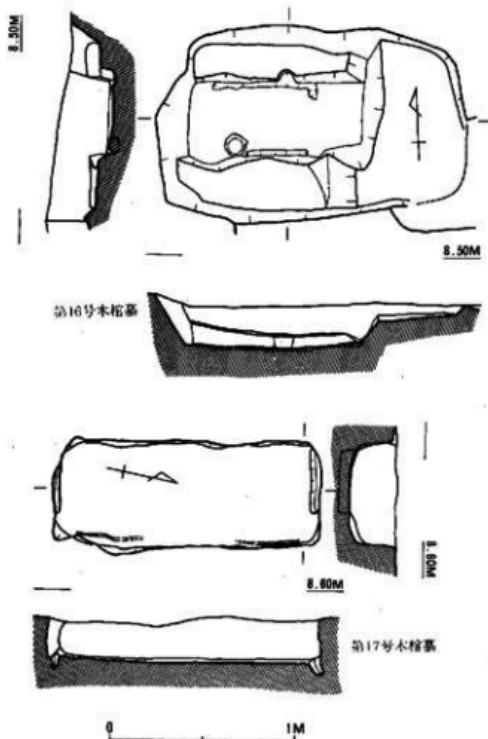


Fig. 1-46 第16・17号木棺墓実測図 (1/30)

II 遺生時代の墓地

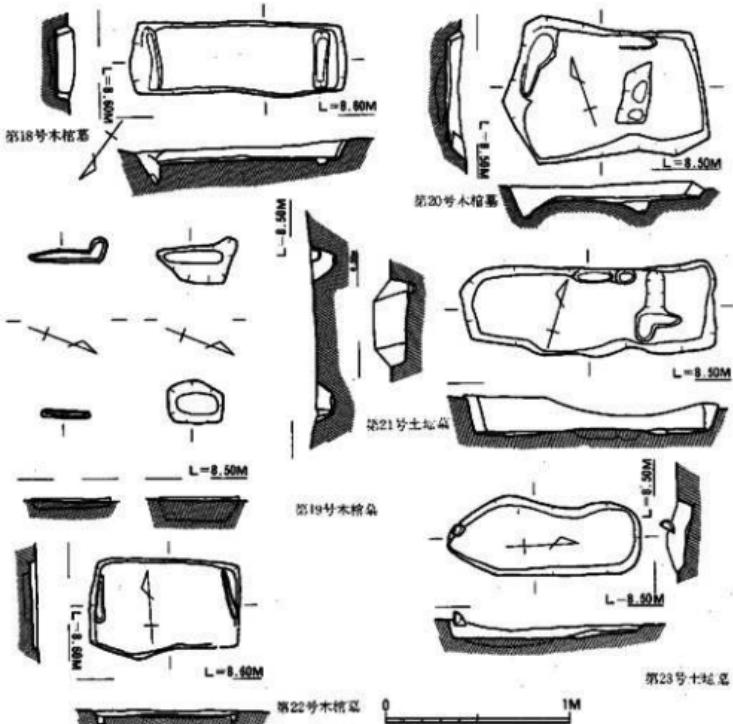


Fig. 1-47 第18・19・20・22木棺墓、第21・23・1:塚墓実測図(1/30)

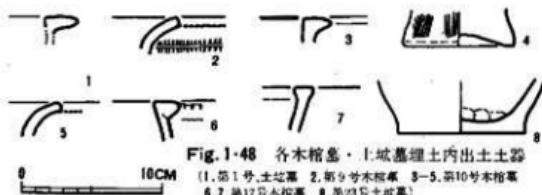


Fig. 1-48 各木棺墓・土塚埋土内出土土器

(1.第1号・土壙墓 2.第9号木棺墓 3-5.第10号木棺墓  
6-7.第17号木棺墓 8.第23号土壙墓)

## 第1章 G-5a地点

Tab. 1.1 G-5a地点 窯棺墓一覧表

No.	方位	傾斜	形状	墓域	時期	備考
1	N 34° W	ほぼ水平	接口 妻 + 妻		中期前葉	或人用 上蓋に石制有り
2	N 88.5° W	- 5°	接口 妻 - 妻		中期前葉	小兒用 K-3墓域中
3	N 75° W	ほぼ水平	接口 妻 - 妻	隅丸長方形	前期末	成人用
4	S 84.5° W	ほぼ水平	接口 妻 + 妻		中期前葉	小兒用
5	N 89.5° W	- 7°	接口 妻 + 妻		中期前葉	小兒用
6		ほぼ水平	接口 妻 + 妻		中期中葉	小兒用
7	W 向き	10°	接口 妻 + 妻		中期前葉	小兒用
8			妻		中期前葉	成人用
9	N 10° E	ほぼ水平	接口 妻 + 妻		中期前葉	小兒用 K-23墓域中
10	N 51° E	ほぼ水平	接口 妻 + 妻		中期前葉	小兒用 K-23墓域に切られる
11	N 0.5° E	ほぼ水平	接口 妻 + 妻		中期前葉	小兒用 K-23墓域中
12	N 38° E	ほぼ水平	覆口 妻 + 妻		中期前葉	小兒用
13	N 86° E	ほぼ水平	接口 妻 + 妻		中期前葉	小兒用 K-23墓域を切る
14	N 84° E	+30°	接口 妻 + 妻		中期前葉	小兒用 K-15墓域を切る
15	N 84° E	-28°	覆口 妻 + 妻		中期前葉	小兒用 K-14墓域に切られる
16	S 65° E	ほぼ水平	接口 妻 + 妻		中期前葉	小兒用 D-9墓域を切る
17	S 75° E	ほぼ水平	平 妻	隅丸長方形	中期前葉	小兒用
18	N 28° W	+8°	接口 妻 + 妻		中期前葉	小兒用 K-19墓域を切る
19	N 85° E	-7°	接口 妻 + 妻	隅丸長方形	中期前葉	小兒用 K-18墓域に切られる
20	N 26° E	ほぼ水平	接口 妻 + 妻	隅円形	中期前葉	小兒用
21	N 60.5° E	-47.5°	覆口 妻 + 妻		中期前葉	小兒用
22	N 70° E	+5°	接口 妻 + 妻		中期前葉	小兒用
23	N 13° E	-1.5°	接口 妻 + 妻	不規則丸長方形	中期前葉	小兒用 K-26墓域を切りK-11-12墓域に切られる
24	S 63° E		平 妻	隅丸長方形	中期前葉	小兒用
25	N 49.5° E	ほぼ水平	接口 妻 + 妻		中期前葉	小兒用 K-29墓域を切る
26	N 54° E	+5°	接口 妻 + 妻	隅丸長方形	中期前葉	小兒用 K-27墓域に切られる
27	S 47° E	+9.5°	覆口 妻 + 妻		中期前葉	小兒用
28	S 80° E	+1°	接口 妻 + 妻	隅丸長方形	中期前葉	小兒用 K-29墓域に切られる
29	S 85° E	+6°	接口 妻 + 妻	隅丸長方形	中期前葉	小兒用 K-28墓域を切りK-25墓域に切られる
30	N 81° E	-9°	接口 妻 + 妻	隅丸長方形	中期前葉	小兒用
31	N 6° W	+1.5°	接口 妻 + 妻		中期前葉	小兒用
32	N 6° W	-20°	覆口 妻 + 妻		中期前葉	小兒用
33	N 66° E	+2°	覆口 妻 + 妻	不規則丸長方形	中期前葉	小兒用 K-30墓域を切る
34	S 80° W	+42°	接口 妻 + 妻		中期前葉	小兒用
35	S 80° E	-4.5°	接口 妻 + 妻	隅丸長方形	中期前葉	小兒用
36	S 85° E	-11°	覆口 妻 + 妻	隅丸長方形	中期前葉	小兒用
37	N 20° W	?	接口 妻 + 妻		中期前葉	小兒用
38	S 30° E	?	接口 妻 + 妻		中期前葉	小兒用
39	N 48° E	?	覆口 妻 + 妻		中期前葉	小兒用
40	N 44° W	ほぼ水平	平 妻		中期中葉	成人用
41	N 21° W	ほぼ水平	接口 妻 + 妻		中期前葉	小兒用
42	N 65° E	+63°	?	?	中期前葉	小兒用
43	?	?	?	?		墓域のみ

中期前葉は本文中では全埋葬跡等の成果から、中期初頭と中期前葉に分けて記した。

## II 弥生時代の墓地

Tab. 1.2 G-5a地点 木棺墓・土塚墓一覧表

No	種類 方位	墓域寸法 〔北-東+南北幅〕	棺寸法 〔北-東+南北幅〕	時期	備考
D 1	土塚墓 N 70° W		110+55+70	消期	成人 P・2に切られる
D 2	土塚墓 N 84° E		130+55+20(残)		成人?
D 3	土塚墓 N 43° E		180+50+15(残)		成人?
D 4	土塚墓 N 87° E		130+40+20(残)		成人?
D 5	木棺墓 N 47° W		120+30+30		成人
D 6	木棺墓 N 82° E	110+100+18	60+25+18(残)		小児 P・7に切られる
D 7	木棺墓 N 64° E		80+40+10(残)		小児
D 8	木棺墓 N 80.5° E		75+50+40		小児
D 9	木棺墓 N 79° E	150+100+20	100+35+30	中期前業	成人 K・16墓域に切られる
D 10	木棺墓 N 83° E	230+130+10	135+30+28?		成人
D 11	土塚墓 N 80° E		60+30+25		小児
D 12	土塚墓 N 87.5° E	100+60+12	50+25+25	中期前業	小児 K・32墓域に切られる
D 13	土塚墓 N 86° E	130+75+5	50+30+25		小児
D 14	木棺墓 N 80.5° E	135+90+50	70+30+50		小児
D 15	土塚墓 N 86° W		80+40+25		小児 2号溝に切られる
D 16	木棺墓 N 85° W		95+40+20(残)	中期前業	小児 K・32墓域に切られる
D 17	木棺墓 N 12° W		140+50+25		成人
D 18	木棺墓 N 51° E		90+35+8(残)		小児
D 19	木棺墓 N 69° E		85+25+?		小児
D 20	木棺墓 N 55° W		60+30+10(残)		小児
D 21	土塚墓 N 73° W		130+30+20(残)		小児
D 22	木棺墓 N 86° W		70+25+4(残)		小児
D 23	土塚墓 N 2° E		100+30+6(残)		小児
D 24	土塚墓 N 75° E		120+70+	中期中業以前	成人? P・13に切られる

## III 弥生時代の豊穴と出土遺物

## 第2号豊穴 (Fig. 1-49)

上部を大部分削平されている。本来的には、辺約120cmの隅丸方形を呈するものと考えられるが、東壁の一部ははっきりしない。北西隅は若干深くなり、西壁の一部が袋状を呈しているが、本来袋状豊穴であったかどうかは不明。北東側で第1号土塚墓を切っている。現存の深さ24cm。北東側から西側に向かって、甕3個体分が重なって出土した。

出土遺物 甕3個体と甕破片8、壺口縁1、底部2が出土した。

10は、やや外縁気味の口縁外側に刻目突起を巡らし、底部へとゆるやかにすぼまる。底部は平底で、直角に近い。刻目は棒状のもので押さえられており、かなり不規則である。外面は口縁下に斜め、それ以下は縫の条痕が施される。底部は円盤貼り付けのようになる。器面はあれど、特に火にあたった形跡が外面に認められる。胎土には石英粒砂を多量に含み、焼成は器面のあれど、口縁部には良い。暗褐色、明褐色を呈する。11も同様に口縁外側に刻目突起を巡らすが、口縁部は直立気味である。胎部は急速にすぼまり、鉢に近い器形となる。刻目

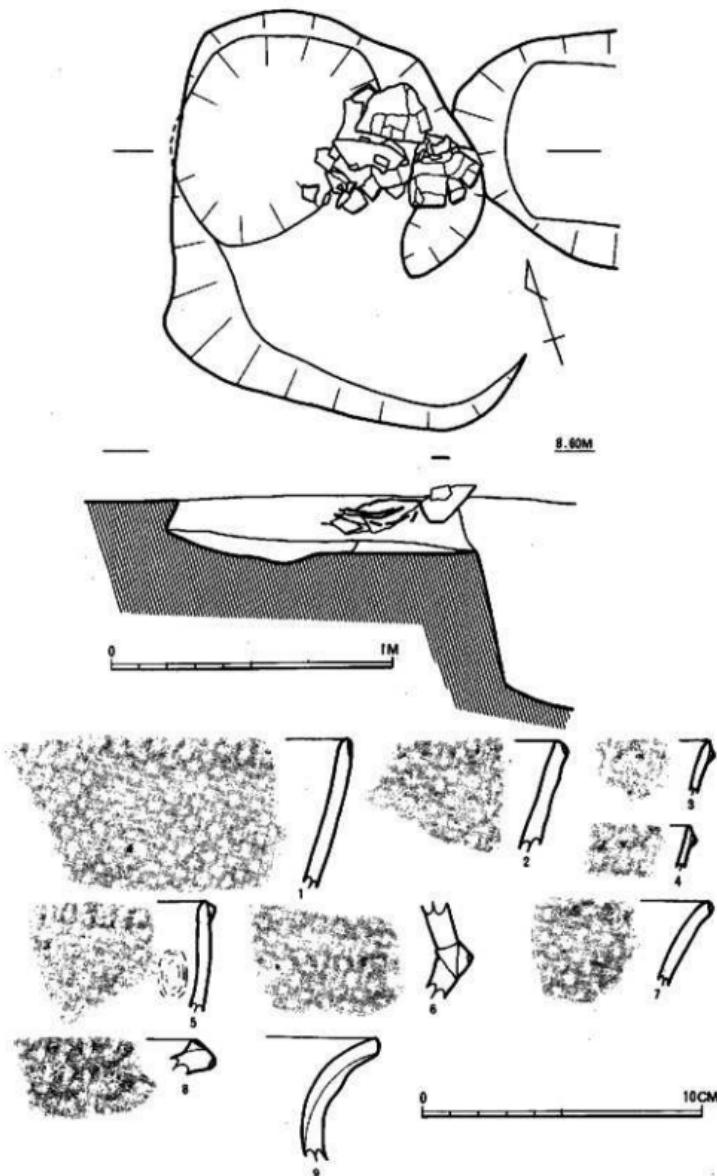


Fig. 1-49 第2号祭祀穴出土土器实测·拓影图

III 弁生時代の堅穴と出土遺物

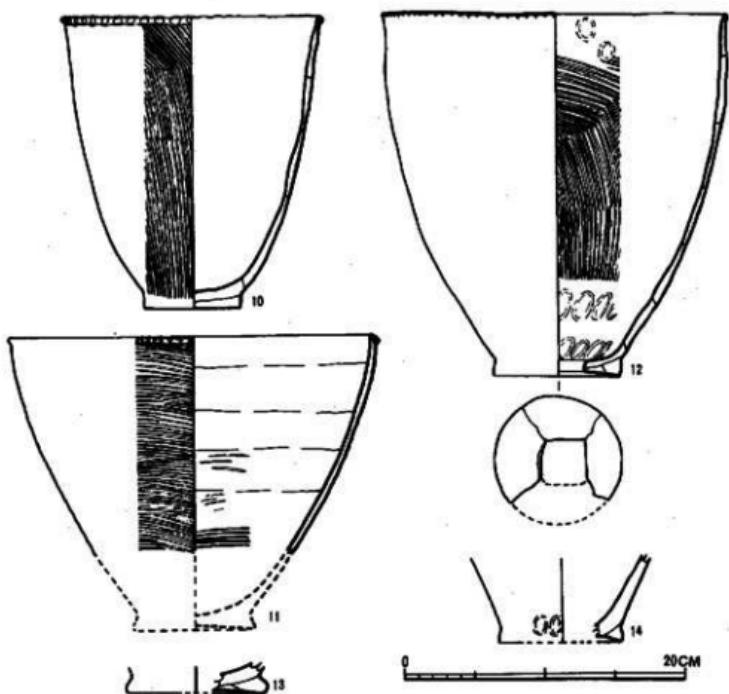


Fig. 1-50 第2号堅穴出土土器実測図

は棒状か範状の工具を用いて施され、不規則であり、強く押されて一部口縁下までつけられる。外面は横あるいは斜めの条痕が施され、内面は擦痕が認められる。口縁内側は横なで調整。外面に煤が付着。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色。3～5も刻目突帯をもつ口縁部で3・4は口縁端より下につけられる。いずれも器面があれれている。胎土に石英粒砂(3)・砂(4)を含み、焼成良好、黄褐色。5は内面に指の押圧痕。胎土に砂を含み、焼成。黄褐色。6は胴部破片で内面の接合痕が沈線状に残る。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。黒色。1・2・12は突帯をもたない。12はやや外反する口縁の外端に刻目を施す。外面は範状の工具で縱なでを行ない、内面は斜めあるいは縦の条痕。口縁内面と、底部の内面に指の押圧調整。底部は若干上げ底を呈し、焼成後に約3 cmの穿孔が方形になされている。外面に煤の付着もあり、鐵として利用されたものであろう。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色。1・2も同様に口縁端に刻目を施しているが、1の刻目は大きい。内面は横なで調整。2の外面に煤付着。ともに石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色。7は外反する口縁の端の縦一杯に刻目を施したもので、胎土に石英粒砂を含み、焼成は不良。暗褐色。8は口縁上端が肥厚し、口縁端の上下両端に刻

目が施される。胎土に砂を含み、焼成良好。淡暗褐色。9は壺の口縁部で口縁外側が若干肥厚する。横なで調整。胎土に若干の石英粒砂を含み、焼成良好。淡赤褐色。13・14は壺の底部である。ともに上げ底を呈する。14は外面に指の押さえがあり、内面には炭化物の付着。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。黄褐色(13)、暗褐色(14)。

これらの土器は、8を除き、いずれも夜白式・板付I式に比定され、豊穴の時期も前期前葉と考えられる。なお8は後世の混入であろう。

#### 第3号豊穴 (Fig. 1-51)

遺構はA区の中央付近に位置して、第6号豊穴の北側に接する。平面形は梢円状で、底面は平坦である。北～西側にかけて、遺構上面に段を有する。壁の立ち上がりは東側と南側が急で、北側と西側でゆるやかな傾斜をもつ。西側部分ではやや掘り過ぎてしまった。遺構の性格は貯蔵穴とも思われるが、よくわからない。

**出土遺物** 土器のみで、总数16片を数える。1は底部片で、平底をなし、底面には木葉痕をもつ。円盤状貼り付け部分の外側器面には指による押圧痕を認める。器面外側淡褐色、内側暗褐色を呈し、胎土中に石英粒砂を含み、焼成は良好である。2も底部片で、磨滅してはいるが、円盤状貼り付けをもつ平底のものである。淡黄褐色を呈する。胎土は石英細粒砂を含み、精選されている。焼成は良好である。1・2とも夜白式土器である。他の遺物は弥生式土器の小片であり、中に、板付II式の壺形土器の口縁部片があり、ほぼこの頃に遺構の時期を設定できる。

#### 第4号豊穴 (Fig. 1-51)

A区の北東に位置しており、第2号豊穴、第5号豊穴より約350cmの距離にある。遺構は削半を受けており、北側から東側にかけては壁を失っている。平面形は約1.8m×1.4mの方形状をなしており、中央部に弱い掘り込みをもつが、底面は平坦を保つ。壁際には2個の小豊穴をもつが、遺構との関係はわからない。遺構の性格も貯蔵穴かと思われるが不明。

**出土遺物** 総数13片を出土しているが、小片のために実測不可能のものばかりである。土器はほとんど弥生式土器片で、夜白式土器の胴部片を1片と、弥生時代前期の壺形土器の胴部片と思えるものを認めることができる。第2号豊穴に近く、平面の形状が似ているところから、両遺構は関連するものと考えられる。

#### 第5号豊穴 (Fig. 1-52)

遺構は第6号豊穴の東側に位置し、第4号豊穴から約3.5m、第2号及び第6号豊穴より約4mの距離にある。複数の豊穴の重なり合いと考えられるが、はっきり判別することはできなかった。長軸を中心部で2つに切るようにして豊穴を2つ推測できるが、なお詳細なところはわからない。底面は全体に平坦を保ち、壁の立ち上がりも急である。遺構の性格は貯蔵穴とも思われるが、よくわからない。

**出土遺物** 総数約60片を数える。1は壺形土器の胴部上半にあたり、内側の上部には指の押圧痕が残る。器面外側の調整はていねいであり、横方向に走る箇所。内側の上部付近では箇所による横方向の調整痕をもつ。器面は外側暗褐色、内側は暗灰褐色を呈する。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好である。2は小型の壺形土器の口縁部上半で外側となる。口縁先端に向

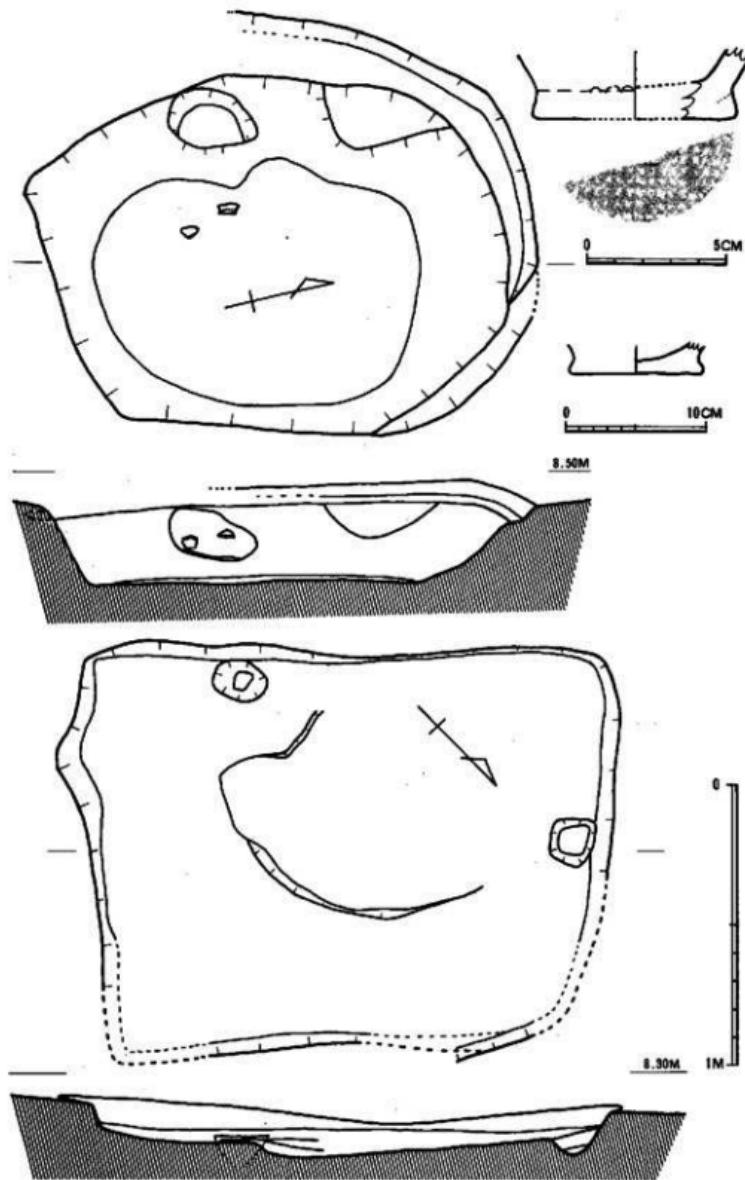


Fig. 1-51 第3·4号竖穴·第3号竖穴出土土器实测图·拓影图

III 赤生時代の整穴と出土遺物

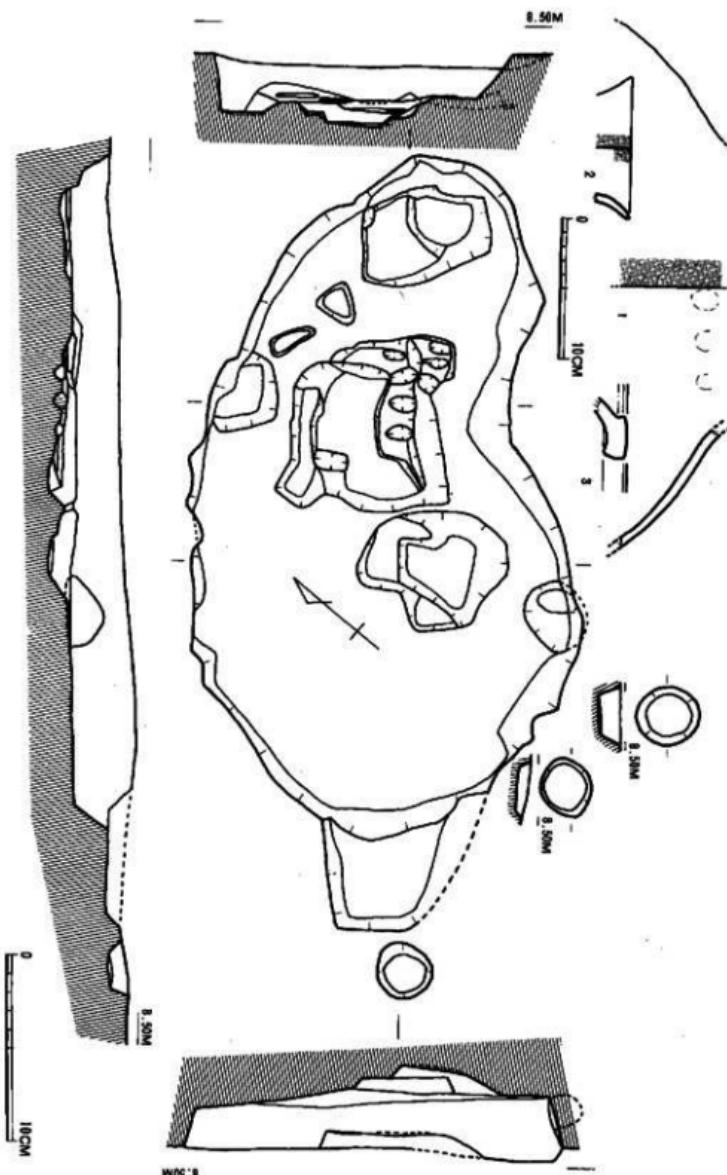


Fig. 1-52 第5号竪穴・出土土器実測図

て厚さが減少する。口縁先端付近の内外で横なで調整。器面内外は丹塗りである。器面内外とも淡黄褐色を呈する。石英微砂を含むが、精選されている。焼成は良好である。器面内外には丹塗りを施す。3は壺形土器の口縁部で、口縁上面は丸みをもって、内外端が弱く垂れる。外側上下端の棱ははっきりしている。器面は横なで調整を施している。器面は暗褐色を呈する。石英粒砂を含み、焼成良好。1と3は同一個体の可能性をもっている。他の遺物の中で夜臼式土器数片と板付II式の口縁部破片と中期初頭と思われる口縁部破片を各1片づつ出土しており、この堅穴の當なまれた時期は、前期後半—中期初頭と考えられる。

#### 第6号堅穴 (Fig. 1-53)

造構は、第3号堅穴の南側に接して、平面は橢円状を呈している。底面はほぼ平坦であり、南側の立ち上がりは急な傾斜をもち、北側と西側ではゆるくなる。現状で約1.4m×1mの規模で、最大の深さは約33cmを測る。造構は貯藏穴と考えられる。

**出土遺物** 出土総数は17片で、2片を実測した。1は壺形土器の口縁部片で、強く外反しながら立ち上がり、口縁上端で厚みがなくなる。器面外側は調整が難で凹凸がみられ、内側では笠のなで調整痕をもつ。器面内外とも黄褐色を呈する。石英粒砂を含むが胎土自体はしっかりしている。焼成は堅緻である。2は口縁部片で、小破片のため傾きは正確ではない。器面外側の突起部の頂上部分に、小さな刮目を施しており、夜臼式土器ともとれるが、むしろ亀ノ甲タイプの土器に近いと思われる。器面内側は褐色、外側は灰褐色を呈する。石英粒砂を含み、焼

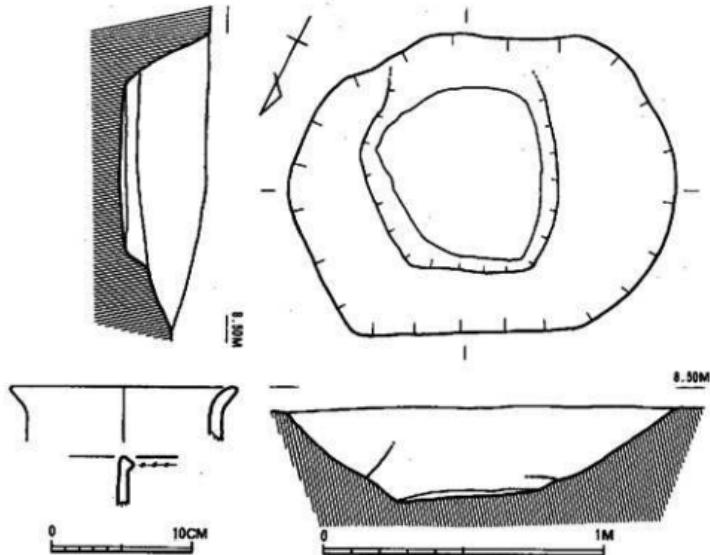


Fig. 1-53 第6号堅穴・出土土器実測図

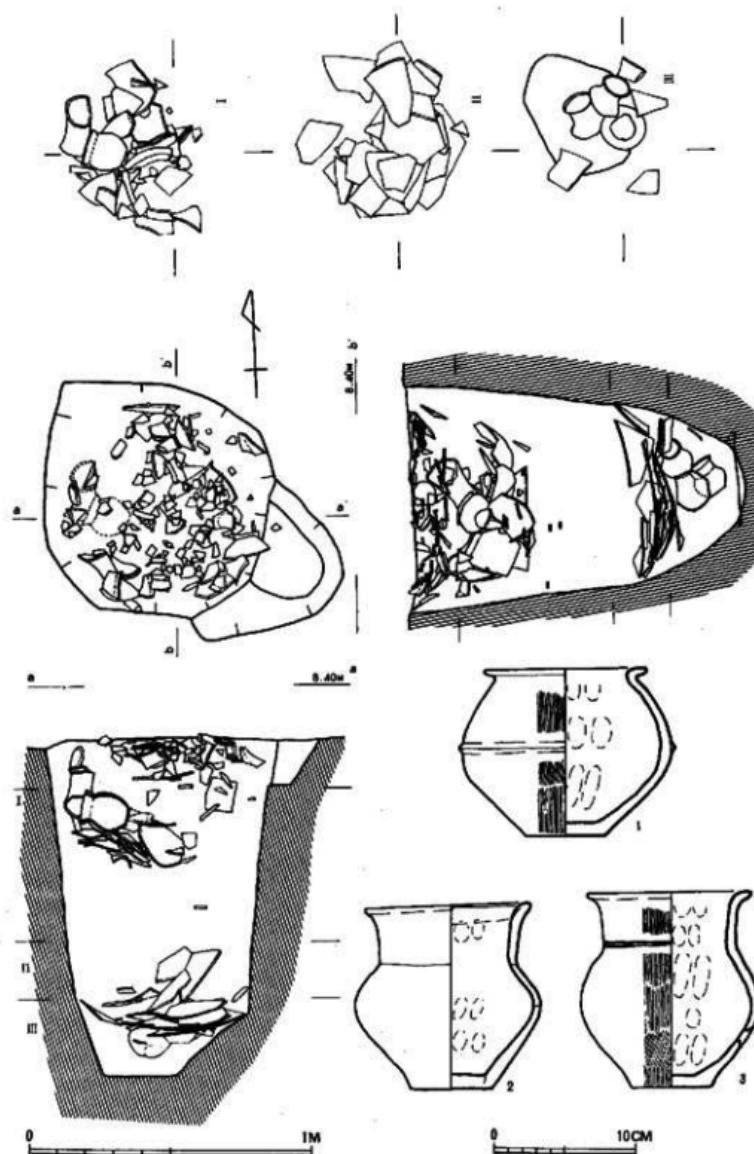


Fig. 1-54 第10号竖穴·出土土器及测图

成は良好である。磨滅してはいるが、胎土はきめが細かい。他の破片は、壺形土器胴部片と思われるものの他は、器形もあきらかでない。以上の遺物から、この豊穴は、前期後半～中期初頭の時期に比定できる。

(原俊一)

#### 第10号豊穴 (Fig. 1-54)

この遺構はB地区の西側、中央部付近に位置する。東側を径40cmほどの小ピットによって切られ、また一部角がある所もあるが、おおまかには径約80cmの円形をなす。径が次第に縮まり、地山面から約120cmの所で底に達する。いわば井戸状の遺構であるが、灰色粘質土が充満した中に、二層にわたって土器の堆積が見られた。一つは地山表面から深さ45cm付近までの上器堆積であり（上部）、もう一つは地山表面から深さ75cm以下底部までの土器堆積である（下部）。その中間は土器数片を出土しただけの殆ど遺物を含まない部分である。上部はまさに堆積というに似つかわしい程、完形土器を混えた破片が層をなしている。下部はまず大形壺の破片が積み重ねられ、その下に3個の完形の小型壺形上器が横位もしくは正位で置かれていた。他には甕あるいは壺の丹塗り口縁細片が十数片出土しただけであった。

土器については後述するが、上部の土器と下部の土器は器形形態上殆ど差異が見られない同時に、下部の三個の土器を覆う様に積み重ねられていた土器片が復元により大型の壺形土器（23）となり、それを組み合せた40片ほどの破片の4分の1以上が上部出土のもので補なされた。この事から上部下部とも時期差がないことを示していると考えられる。一部上部表面の流れ込みの土器片を除けば、他はすべて中期後葉に属する。また流れ込み以外の土器には壺形土器が多く、器台を除くすべての器種に丹塗り土器があり、出土個体数に対して丹塗り土器の割合も40%以上にのぼる。この事はこれらの土器が日常土器としての用途から離れていることを示している。

以上の事柄をまとめると、この遺構は単なる土器溜りではなく、祭祀的な性格を持ったものと考えられる。遺構の形状から見れば井戸における祭祀とも受け取れるが、表面から底部まで土層は一定であり、井戸として使用された痕跡は明確でない。下部に土器を置いてから殆ど時期の経過しないうちに（或いは直後に）上部の土器を入れた可能性が強いことを考慮すれば、この遺構は井戸の祭祀とはまた別の性格をもった祭祀の豊穴と考えることもできる。その製作時期は土器から中期後葉に比定できよう。

**出土土器** この遺構中より出土した遺物は、太形蛤刃石斧の頭部残片および方柱状石斧と思われる石片を除けばすべて土器であった。番号を付して取り上げた土器（片）は251で、その他に30片ほどの破片を取り上げた。完形が多い反面、細片も多く、復元などを行なう認知をした個体数は30位にすぎなかった。流れ込みの上器を除いた5分の4の土器がすべて中期後葉に属すると思われるものであった。以下その特徴等を述べる。

#### 壺形土器 (Fig. 1-54-1～3, Fig. 1-55-4～19)

完形および器形の明瞭なものは15個体である。他に口縁部細片があったが復元不可能で個体数として認知できなかった。1～3が底部から出土した以外は、すべて上部よりの出土である。器形はその口縁形態から三種類に大別できる。

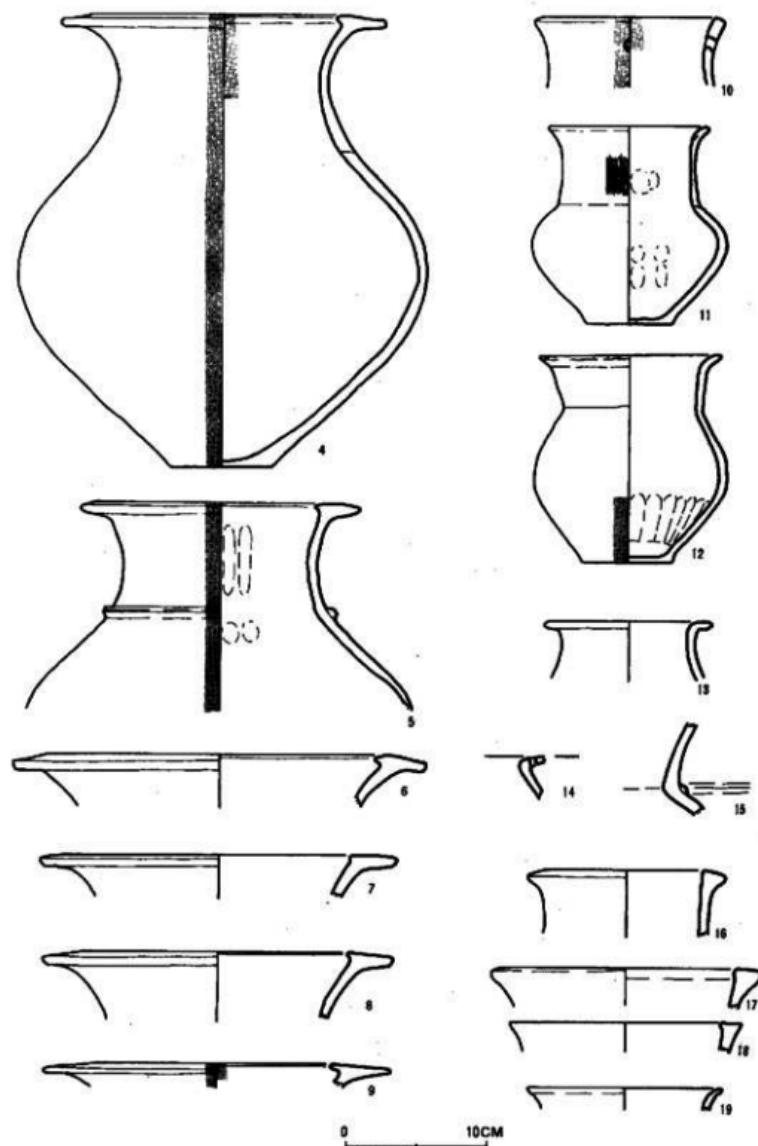


Fig. 1-55 第10号竖穴出土土器尖测图

### III 弥生時代の整穴と出土遺物

第1類は所謂鋤先状口縁を持つもので(4~9)やや大形のものである。4は口縁径23cm、胴部最大径28.8cm、高さ32.3cmを計り、たまねぎ状の胴部から頸部がゆるやかに外反し、内側に0.5cm、外側にやや垂れ下がり気味で3cmほど突出した鋤先状の口縁を形成する。底部は若干あげ底になり、外の部分と比べ器壁も薄い。外面は籠状工具により上から下へ丁寧になで降した上に、丹を全面に施している。内面には指押えの痕がわずかに認められる他、頸部近くまで丹が施塗されている。胎土には石英微粒砂を混え、焼成はやや軟かめで触ると土が付着する。丹の剥落した器面は淡赤褐色を呈する。5は口縁部から胴部まで残存する丹塗りの壺である。器形的には4と殆ど変る所はないが、4における胴部と頸部の接合部にM字状の突帯を巡らす。外面は丹塗り研磨、内面は指押えによる器面調整後頸部付近まで丹塗りが見られる。石英微粒砂を混えた胎土で、焼成良好、器面黄褐色を呈する。6~9はいずれも頸部から口縁部の破片で、7が口縁内側への張り出しが殆どないのを除けば形態的に大きな違いは認められない。口縁端はいずれもやや垂れ気味である。磨滅しており調整痕は明確でないが部分的に横なでが窺われる。9は内外面とも丹塗り、7・8の外面にも丹らしき痕跡が認められる。4片の口縁部共に微粒砂を混えた胎土を用い、焼成は6が堅敏である他はやや軟かめで、いずれも黄褐色を呈する。15の三角突帯をもった肩部破片もこの手の口縁形態を示すと考えられ、胎土、焼成、色調とも一致する。

第2類は胴部から頸部が殆ど直立し、その端がわずかに外反し口縁部を形成しているものである(2・3・11~13)。この手の壺は第1の形態を示すものと比べ小形である。2・3・11・12は器形形態から見て殆ど変化が見られない。2は口径11.2cm、胴部最大径12.8cm、高さ14.3cmを計る。器壁は胴部から頸部にかけてやや薄めの他は全体的に厚みがあり、頸部がやや開きかけんで、口縁の反転部内側は肥厚する。外面は口縁から頸部が横なで、胴部が籠状工具による縱のなで、内面は指押えによる調整が行なわれている。胎土はわずかに微粒砂を混えるか精選された良質のものあり、焼成も堅敏である。外面に一部焼成時の黒変が見られる以外は黄褐色~淡褐色を呈する。3は口径11.7cm、胴部最大径12.8cm、高さ13.8cmを計る。2に比べ器壁も一定の厚みをもち、直立した頸部からの口縁部の外反の度も大きい。胴部下方に焼成前の内面からの穿孔をもつ。また頸部と胴部の接点に三条のやや不明瞭な細い沈線を有し、その上に横なで調整を行っている。口縁部から内面頸部にかけては横なで、内面胴部は指押え、外面頸部および胴部には細い刷毛目調整が施されている。胎土は石英粒を混えるが概して良質で、焼成は堅敏、底部付近に焼成時の黒変が見られる。他は淡褐色、淡黄褐色の器表色調を示す。11は接合完形で破片が部分的に欠如するが、口径11.4cm、胴部最大径13.8cm、高さ14.2cmを計る。前述の2・3に比べ器壁が薄めで、特に底部は籠状工具によるなでで、2・3の半分近くの薄さになっている。剥落で器面調整は明確でないが、口縁部および頸部と胴部の接合部には横なで、頸部外面には細い刷毛目調整、内面には指押えの痕跡が認められる。また外面全体と内面頸部付近まで丹が施されている。胎土には石英微粒砂を混え、焼成良好、全体に黄褐色を呈する。12は口径13cm、胴部最大径13.9cm、高さ14.7cmを計り、頸部がやや短い。器壁は11と同様薄く、内面底部付近に指押えが密に行なわれ、段を持つ様に薄い底部へと連なる。調整は明瞭

でないが、全体的に横なでの板があり、また外面胴部から底部にかけて舟が認められ、全面丹塗り土器であった可能性を窺わせる。石英粒砂を混えた胎土で、焼成は良好。外面が一部黒変しており、器面色調は灰色、黄褐色、赤褐色など堀らである。**13**は内向した頸部から急な外反をした口縁部が平坦になったものである。口縁反転部から外面にかけて横なでによる器面調整が見られる。石英粒砂を混えた胎土で、焼成度極、暗黄褐色を呈する。

第3類は無頸壺の類である(1・10・14)。1はたまねぎ状に横に膨らんだ胴の最大径の所に二角突帯を一条巡らし、胴の付け根が丸く外反して短い口縁を形成したものである。口径11.7cm、突帶上径15.5cm、高さ11.8cmを計る。外面は細い綿刷毛目調整の上をなでて消し、内面も指押えの後、なでて仕上げている。突帶部および内面胴部と底部に舟の痕跡があり、内外面ともに丹塗りであった可能性が強い。石英粒を含んだ胎土で焼成は堅緻、外面に一部焼成時の黒変があるが他は黄褐色～淡褐色を呈す。14は口縁部のみ残存するが、形態的には1と同じで胴部から丸く口縁が反転している。ただ口縁中央部に径0.4cmの穿孔を持つ。磨滅で器面調整は明確でない。石英粒を混えた胎土で焼成良好、黄褐色を呈する。10は上に挙げた2つの無頸壺とは形態を異なる。いわば頸部がゆるやかに外反し、口唇よりやや下った所に径1cm弱の穿孔を持つ。石英微砂を混えた良質の胎土を用い、焼成は良好、外面と内面穿孔下まで明確な丹塗痕を認める。器面は黄褐色を呈する。

この他に頸部が直立、もしくは少し外開きになり、口縁端が肥厚した類がある(16～18)。これらは先に挙げた第2類に近いと考えられるが、口縁細片のためその全体についての詳細はわからない。器面調整は17・18になでて見られるだけである。いずれも石英粒を混え、焼成は良好、16が暗赤褐色、17が暗褐色、18が褐色を呈する。これらとは別に4条の沈線をもつた板付II式の壺の肩部片と、器形の不明な口縁部片(19)が表面近くから出土しており、流れ込みと考えられる。

**菱形土器**(Fig. 1-56, 20～33) 菱形土器は数的に少なく、流れ込みと考えられる夜白式土器片を除けば、全形がわかるもの3個体と口徑が判るもの1個体のみで、残りは殆ど口縁・胴部などの細片で、大方は図示しえなかった。このうち**24・25・28**は「L」の字状口縁に近いが、反転部に明瞭な段を持たず、口縁も丸味を持っている。**24**は口縁下に一条の二角突帯を巡らし、最大胴部径21.2cmで胴の張りが大きい。口径17.4cm、高さ21.0cm、と推定される。器面が磨滅し調整痕は不明瞭だが、わずかに外面底部付近に綿刷毛目、口縁部から突帯部にかけて横なでが認められる。胎土には石英細粒を多く混え、焼成は良好で堅く、淡黄褐色～灰褐色を呈する。**25**は胴部が殆ど張らず、中間を欠くが**26**の底部へと続く器形である。口径は30.3cm、推定器高は30cm前後になると考えられる。外面には幅1mm平均の細い丁寧な綿刷毛目(底部付近は若干斜め)調整を行なった上に舟を施している。口縁部には横なでを行う。石英細粒を胎土に混え、焼成良好、主として淡褐色を呈する。**28**は口縁部しか残存しないが、傾きから胴部はやや張るものと考えられる。内面反転部から外面にかけて横なでの器面調整が見られる。石英微砂を主に粗砂を混えた胎土で、焼成良好、黄褐色を呈する。**25**は腰棺に用いられる大形壺であるが、ここでは前述した様に明らかに用途を異にしていた。最大径は胴部にあり、突帶上で65.6cmを

III 弥生時代の堅穴と出土遺物

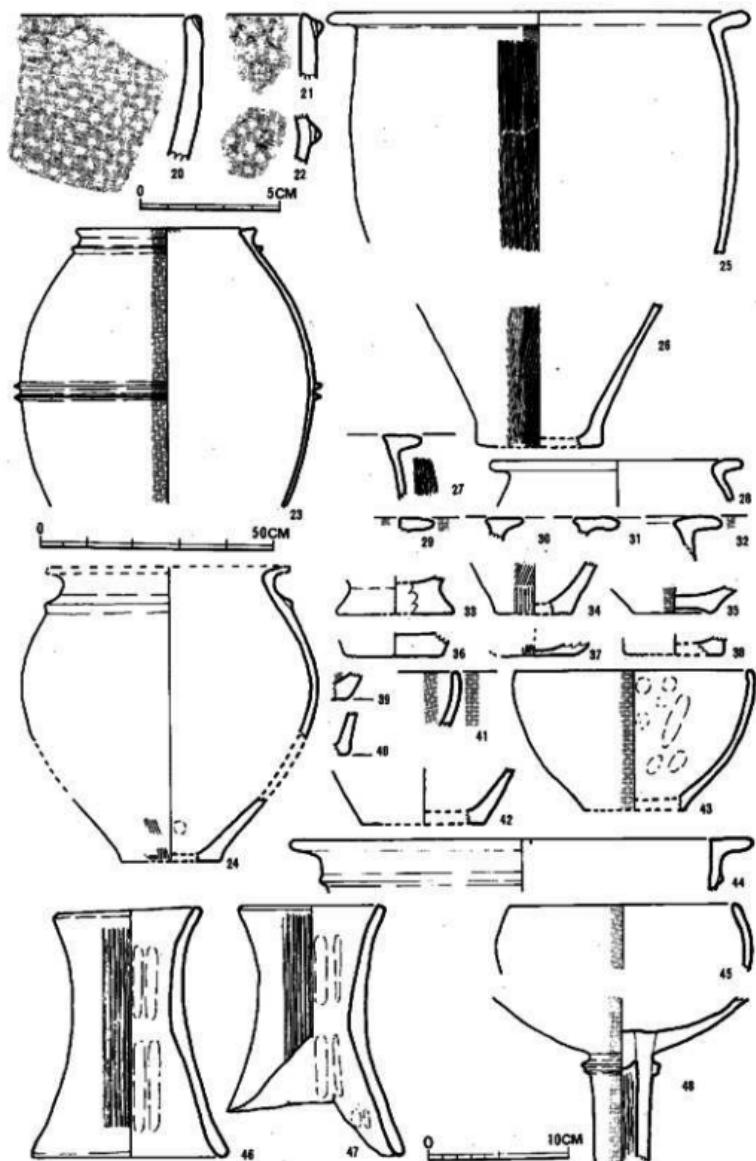


Fig. 1-56 第10号堅穴出土遺物拓影図実測図

計り、口径39.0cm、現存器高は64.7cmである。すなわち胴部の一一番膨らんだ所からゆるやかに15cmほど上に内向した所に寸ばかりの「L」字状の口縁部が内側に傾いて作られている。口縁下に一条、胴部最大径の場所に二条の三角突帯を巡らす。器壁は口縁から胴部突帯付近まで一定の厚さを見せるが、それより下は漸次薄くなる。口縁部および突帯部には横なでが、また外側全体に丹が施されている。胎土に石英粗粒を多く混えるが器面調整が良く器表面には砂粒が目立たず滑らかである。焼成は堅緻で緊りがよく淡赤褐色を主に黄褐色～黄白色の器面色調を呈する。27・29・32は所謂逆「L」字状口縁の残片である。いずれも口縁が内側にわずかに張り出し、上面はやや丸みを帯びる。27は上部土器群と下部土器群の中間で出土した。外面口縁下に継の刷毛目、口縁から内面には横なでの器面調整を施す。外面灰褐色、内面黄褐色を呈し、石英粒を混えた胎土で、焼成は堅緻である。29・32は共に横なでの器面調整を行い、石英粒を混えた胎土で、焼成良好、黄褐色を呈す。うち29・32には丹塗りの痕跡が認められる。

以上の変形土器に加え、4片の夜白式土器を検出した(20・22・33)。いずれも上部からの出土であり、流れ込みと考えられる。20は口縁端に押しつける様にして粘土帯を巡らし、その上に鏝状工具で刻目を入れたもので、器壁の厚さは底部に向いや内傾する胴部と殆ど変りがない。外面には斜めの条痕が走る。石英粒を混えた胎土で焼成堅緻、暗褐色を呈する。21は口縁端から少し下って刻目突帯をつける。胎土に石英紋を混え、焼成良好、黄褐色を呈する。22は胴部突帯、33は台形状の底部である。胎土、焼成、色調ともに21と変る所がない。

**鉢形土器 (Fig. 1-56, 41~45)** 上部から4片の出上を見た。44は口径33.0cmを計る逆「L」字状口縁の下に一条の三角突帯を巡らす深鉢の破片である。石英粒を混えた胎土で、焼成良好、黄褐色示す。口縁上面から外面にかけて横なでが施されている。41・43・45は浅鉢で器形形態的には41・43に比べ45の胴が張るという違いがあるが、その他の相違は殆ど見られない。器面は丁寧な横なでを行なっており、石英粒を混えた胎土を用い、焼成は良好。剥落が著しいがいずれも丹塗りであり、器面は黄褐色を呈する。

**器台 (Fig. 1-56, 46・47)** 共に上部出土で、46はほぼ完形、47は破片で検出された。46は上径10.5cm、底径12.0cm、器高18.0cm、47は上径10.5cm、推定底径13.0cm、高さ18.0cmで、大きさおよび器形形態に大差はない。くびれ部はやや上位にあり、その部分の器壁は厚みを増す。外面は粗い刷毛目調整、内面は指で押さえながら上げている。47には上端部および下端部付近に横なでが行なわれている。胎土には石英粗粒を共に多量に混えるが、46は器面調整が悪い為か器表に砂が浮き出している。焼成は良好。ただ47に比べ46の焼きが若干あまい感じである。色調は画面とも断然で、46は外面が暗褐色・灰褐色・暗赤褐色の混り合い、内面が暗赤褐色、また47は赤褐色を主に淡褐色・黄褐色が混る。この他に2個体とは別の器台破片が数片出土している。

**高環形土器 (Fig. 1-56, 48)** 壺下部から頸部を残す破片で、上部出上である。壺身は頸部から広い角度をもって外に開き、頸部付け根の少し下に「M」字状の突帯が一条巡り、頸部は直線的に下向する。外面丹塗り、頸部内面には弱いしばりがある。他の調整痕は剥落のため認めることができない。石英微粒を含んだ胎土で焼成良好、外面および内面は黄褐色を呈する。

他に高環脚部端の違ったものが4片出土している。

**底部・その他 (Fig. 1-56, 34~40・42)** 35は上げ底で胎土精良。焼成堅緻な丹塗りの底部で壺形土器と考えられる。39は細片だが内面に丹を塗る。42は剥落で丹こそ認められないが、胎土・焼成・色調で前述の浅鉢形土器と類似し、器形のゆがみを考慮すれば、3片のうちのいずれかの底部とも考えられる。34は外面に刷毛目調整を行なった焼成堅緻な底部で、壺形土器もしくは鉢形土器と考えられる。これら底部の他に支脚と思われる破片などが出土している。

(浜田哲也)

### 第11号堅穴 (Fig. 1-57)

B区内の東側に位置しており、第9号堅穴からは約2m離れている。上部に削平を受けて原形は推定し難いが、全体として、南北に長い楕円状を呈するものと思われ、南側で深い掘り込みをもつ。深さにして約20cmである。床面は小さな凹凸があるが、ほぼ平坦になっている。遺構の性格はわからない。

**出土遺物** 土器は総数119片を数える。ほとんど灰白式土器である。1は壺形土器口縁部で、口径約20cmを計る。外反は小さく、口縁上端近くでやや肥厚する。器面は磨滅しているが、丹塗りの可能性がある。器面内外とも淡黄褐色を呈する。胎土中に多量の石英粒砂を含み、焼成は良好である。2も壺形土器口縁部で、口径約18cmを計る。丹塗り磨研であり、口縁上端部は丸みをもち1とは少し異なる。器面内外とも褐色を呈する。胎土中に石英粒砂を多く含み、焼成は良好である。3も壺形土器口縁部で、器面外側に丹痕が有る。外側淡褐色、内側灰色を呈する。胎土中に石英粒砂を含み、焼成は堅緻である。4は浅鉢形土器と思われ、内側は素直に開き、外側では「く」の字形となる。器面外側褐色、内側は黒色を呈する。胎土は精選されており、石英粒砂を含み、焼成良好である。5は壺形土器口縁部片で、内側から口縁端にかけて丹塗りの可能性がある。器面も調整が丁寧であり、しっかりしている。淡褐色を呈する。石英粒砂を含み、焼成は堅緻である。6・7は底部片で、6はやや上げ底になる。褐色を呈する。石英粒砂を含み、焼成は良好である。8~11は刻目突帯を有する壺形土器口縁部片で、傾きは正確でない。8は内側丹塗りで、器壁は厚く、剥みもはっきりと口縁上端にかぶさるようにして口唇に施している。口縁上端は平坦ではない。暗褐色を呈し、石英粒砂を含み、焼成は堅緻である。9は内傾して立ち上がる口縁部上端に右下がりの斜めの刻目をもつ。器壁は薄く、内側褐色、外側は暗褐色を呈する。石英粒砂を含み、焼成は良好。10は8・9と違い口縁上端をやや下る位置に刻目突帯をめぐらし上部を、上から下へと縱に押さえつけている。褐色を呈し、石英粒砂を含み、焼成は良好。11は9と同様の刻目突帯を有しており、器壁は薄く、突帯下には煤が付着する。12は外反する口縁部の上端に箒状工具による刻目をほどこしている。器面内外に横なで調整。外側は黒色、内側は淡黄褐色を呈する。焼成堅緻。板付I式である。13は「く」の字形に折れる胴中位に刻目突帯を巡らし、外面器面には煤が付着する。14は内外器面に横方向の条痕をもつ。淡黄褐色。石英粗粒砂を含み、焼成堅緻である。15の刻目突帯は後に丸みをもち、器壁は薄く、ややもろい。16は底面に糸切りを有しており、环と思われ、中世の流れ込み土器と考えられる。石英細粒砂を含み、黄褐色を呈して、焼成は堅緻である。17

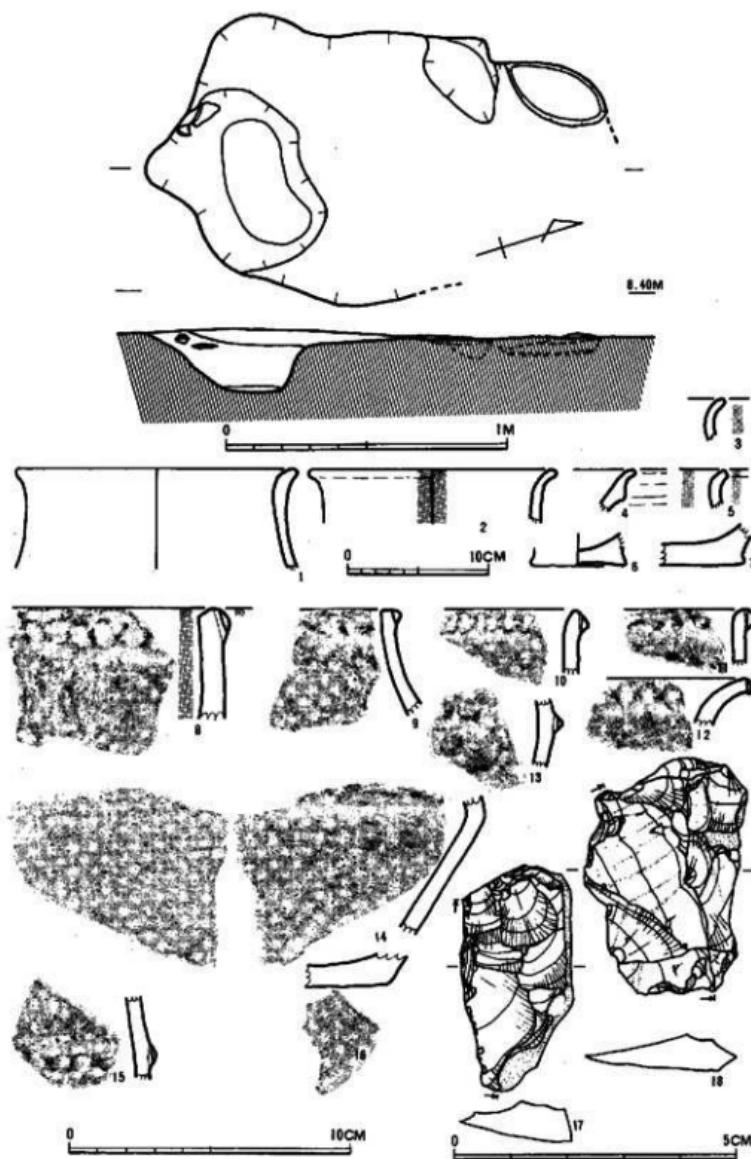


Fig. 1-57 第11号竖穴·出土遗物拓影图·实测图

### III 弥生時代の堅穴と出土遺物

は黒曜石製の縦長剣片で縁辺に使用痕が見られる。18は黒曜石製の不定形剣片の縁辺に使用痕が見られる。

以上の遺物から、この堅穴の時期は縄文晩期終末より弥生時代前期の頃常なまれたものと思われる。

#### 第12号堅穴 (Fig. 1-58)

A区の西南隅に位置し、第13号・第14号堅穴の南側に位置しており、各々の堅穴は約50cmの距離を保っている。ほぼ不整円形を呈し、上部は削平を受けている。約2.0m×2.2mの規模をもっている。壁の立ち上がりは全体に急であり、床面もほぼ平坦である。遺構の性格はわからないが、あるいは貯蔵穴であろうか。

出土遺物 総数8片を数える。1は夜白式土器片で、刻目突帯の位置は口線上端部に接し、棒状の工具を使用している。土器の傾きは正確とはいえない。器壁は薄く、胎土・焼成とももらい、暗褐色を呈し、石英粒砂を含む。2は黒曜石製の剣片で、右核の打面再調整の際生じたものと考えられる。他の遺物は弥生式土器片であり、前期の壺形土器の破片を一片有するが、他は小片で器形はわからない。

この堅穴の時期は遺物が少ないのでわからない。

#### 第13号堅穴 (Fig. 1-59)

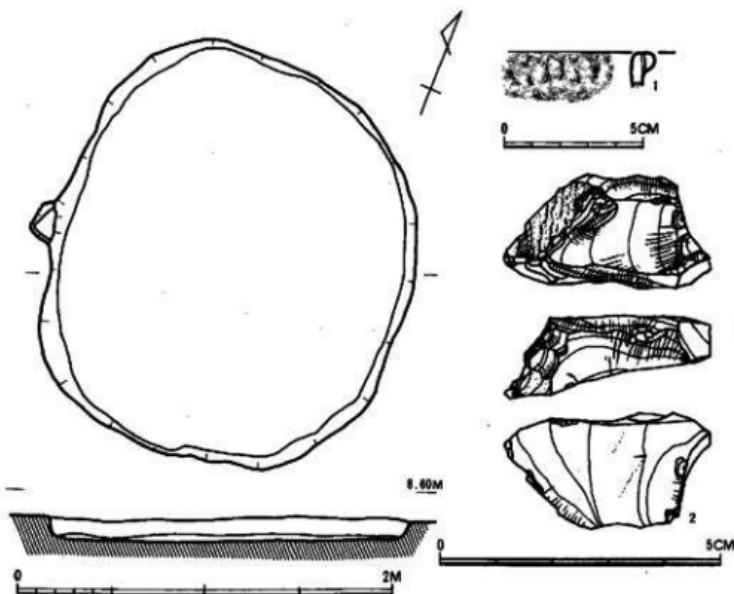


Fig. 1-58 第12号堅穴・出土遺物実測図

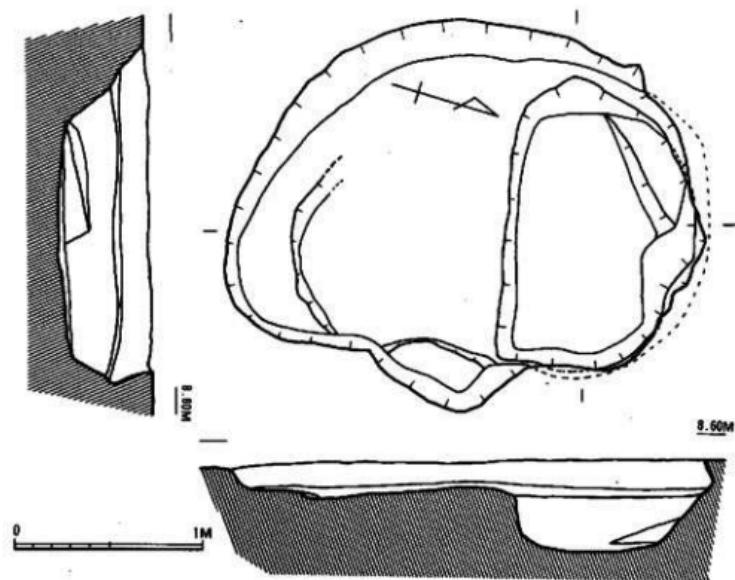


Fig. 1-59 第13号豊穴・第24号土塙墓実測図

A区の西北隅に、第12号豊穴の北側に位置し、第24号土塙墓の上部に土を貼って、豊穴を造っている。平面は約 $2.6m \times 2.1m$ の規模を有し、不整の円形状を呈する。北側壁は小さく袋状をなして立ち上がる、床面はほぼ平坦になっており、南側床面には小さな段を有する。遺物は出土していないので、遺構の性格は明確でなく、あるいは貯蔵穴であろうか。豊穴の時期はわからぬ。

#### 第14号豊穴 (Fig. 1-60)

A区の西南隅に第12号豊穴より北側に位置し、第40号腰棺墓がこの豊穴を壊さない範囲で、上部に墓壠を形成している。平面は不整の隅丸方形状をなし、南側隅では凹地が切っているが、この凹地は遺構とは認め難い。壁の立ち上がりはしっかりしており、床面はほぼ平坦である。遺構の性格はわからないが、あるいは貯蔵穴であったかもしれない。

**出土遺物** 純数36片が出土しており、1は壺形土器の口縁部片で、外反し、口縁上端部は丸みをもつ。器面調整は丁寧で、横などで調整である。器面内外の粘土接合部で段を有する。丹塗りであり、黄褐色を呈する。石英粗粒砂を含み、焼成は良好である。板付口式である。2の器形はよくわからない。器壁は薄く、石英粗粒砂を含む。口縁部分は内青気味であり、器壁全体に凹凸を有する。器面外側は黄褐色、内側は灰色を呈する。焼成はもろい。3はサヌカイト製の

III 弓生時代の豈穴と出土遺物

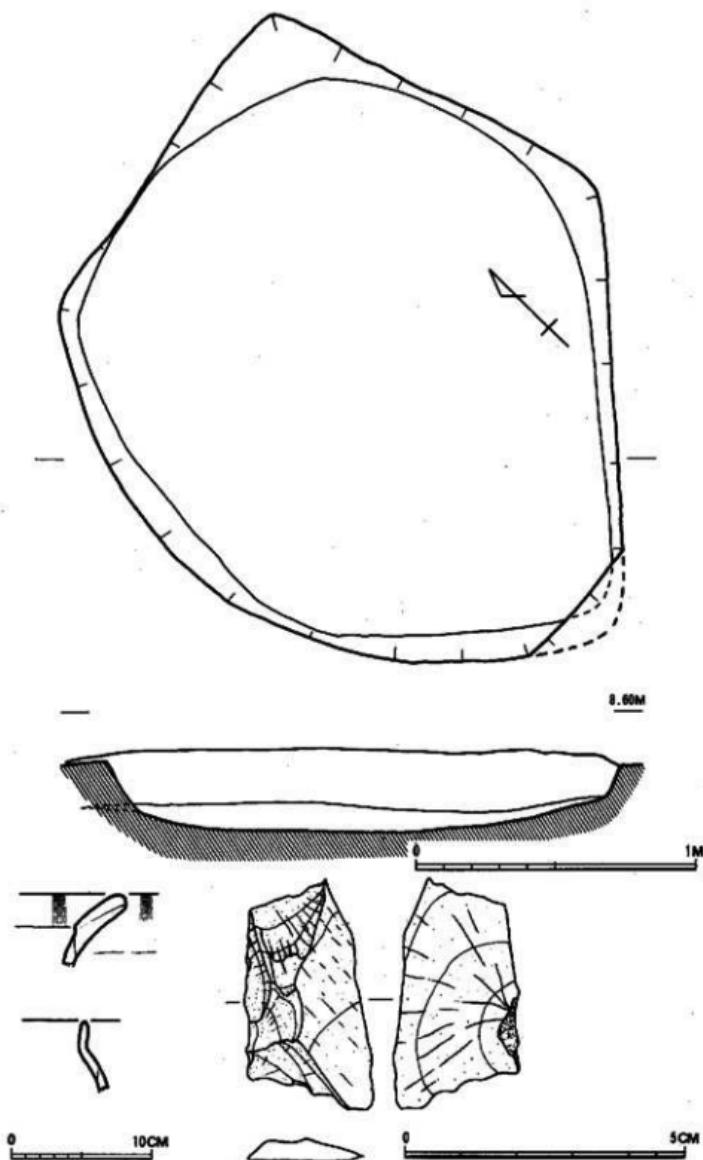


Fig. 1-60 第14号豈穴及T形出土遺物実測図

剥片である。上部に中期中葉の裏棺が乗っており、中期中葉か、それより早い時期にこの豊穴は位置すると思われる。

以上10基の弥生時代の豊穴が確認できた。第14号豊穴は、第12号・第13号豊穴に近接して、平面の形状等も近似していることからも、3つの豊穴は同時期に當られたものと考えられる。A区の北東隅では第2号豊穴～第6号豊穴までまとまりをもち、第2号豊穴を除くと、他の豊穴は平面形や土器等の比較から、ほぼ前期後半より中期初頭の時期に存在したと考えられるところから、A区西南隅の第12号～第14号豊穴のまとまりは少なくとも中期初頭の時期に主体を占めていたのではないかと考えられようである。

#### 柱穴状小ビット出土遺物 (Fig. 1-61)

A区では、円形・隅丸方形のプランをもち、黒色粘質土がつまつた柱穴状小ビットが38個分布しているが、住居址としてのまとまりをもつものはなかった。

B区では、91個の柱穴状小ビットが全面に分布している。第39柱穴状ビット（以下S-P.39とする）・S-P.119のように隅丸方形の掘り方をもつもの等は、弥生時代以降と考えられる。S-P.80等のように弥生式土器を包含するもの、土師器を混入するもの等があり、明確に時期決定できるものではなく、住居址としてまとまりをもつものはなかった。(Tab. 1-3)。S-P.80は、弥生時代中期の高環の脚部が出土し、土器の性格、そばの第10号豊穴が同時期の遺物を包含していること等から、第10号豊穴と何らかの関連をもつものと考えられる。

全てB区より出土。1は壺の口縁部で、器面は暗褐色を呈する。石英細粒砂を含み、焼成は良好である。内側には煤が付着する。2は壺の口縁部で灰白色を呈する。石英微粒砂を含み、焼成良好。4は丹塗りが施された前期の壺形土器と思われるが、小片のため詳細はわからない。焼成は良好。6・7は夜白式土器底部片で、淡黄褐色を呈する。石英粗粒砂を含み、焼成は良好である。8は底部小片で、器面には縱方向の調整痕をもつ、石英粒砂を含み、焼成は良好である。9は壺形土器の肩部突帯部片と思われる。突帯部分には横なで調整を施す。黄褐色を呈するが、焼成時の黒変をもつ。石英粗粒砂を含み、焼成は良好である。10は高環の脚部で、丹塗りで縱方向の範磨研を施す。縦部器面は横なで調整。柱状部分には内側にしほりを有する。器面外側は黄褐色、内側は灰白色を呈する。石英粒砂を含み、焼成は良好である。現高22cmを計る。第10号豊穴とは約2.2mの距離を計り、2つの遺構の関連を求めることも可能であると考える。14は壺形土器の口縁部上端に縦の刻目を施しており、直下には縱刷毛目調整を有する。内側には横刷毛目を認める。暗褐色を呈する。石英粒砂を含み、焼成は良好である。板付I式であろう。他の拓影は全て夜白式土器で、口縁上端より下ると共に刻目突帯をもつもの(11)、刻目突帯の粘土貼り付けが、口縁上端まで及ぶもの(12・15・18)、刻目突帯部の縫が口縁上端の位置に近いもの(13・16)、貼り付けた粘土を間隔をもって、口縁上端方向に押し上げたもの(17)がある。正確な傾きはわからない。黄褐色(11・12・13・15)、暗褐色(16・17)、灰褐色(18)を呈するが、いずれも石英粒砂を含み、焼成良好である。

III 弥生時代の堅穴と出土遺物

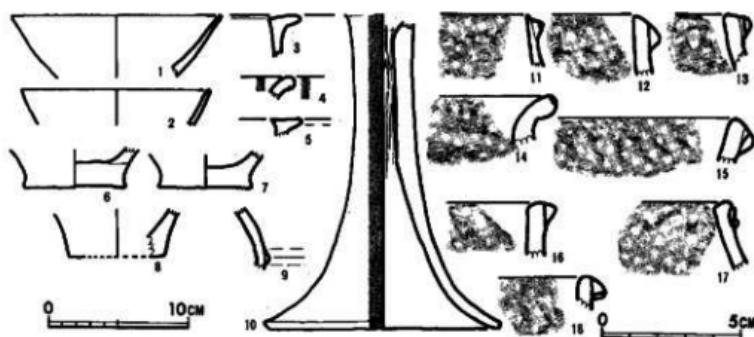


Fig. 1-61 柱穴状小ピット出土土器実測図・拓影図

(1-63, 2-127, 3-1-41, 4-45, 5-38, 6-115, 7-121, 8-13-18-44, 9-55)  
(10-80, 12-104, 14-124, 15-91, 16-39, 17-85)

Tab. 1.3 柱穴状小ピット一覧

No	形狀	上端径 (cm)	上端標高 (m)	深さ (cm)	備考	No	形狀	上端径 (cm)	上端標高 (m)	深さ (cm)	備考
1	不整円形	24×30	8.45	9.5		21	円 形	20×20	8.45	15.5	
2	円 形	40×40	8.47	21		22	隅丸方形	32×32	8.48	24.5	
3	不整円形	46×44	8.47	17.5		23	隅丸方形	25×25	8.48	12.5	
4	楕円形	26×20	8.47	18.5		24	円 形	15×15	8.50	11	
5	隅丸方形	36×28	8.45	34.5		25	円 形	15×15	8.50	12	
6	隅丸方形	20×20	8.46	40		26	隅丸方形	30×25	8.50	23	
7	不整円形	20×25	8.45	9		27	隅丸方形	20×20	8.40	10.2	
8	隅丸方形	35×35	8.48	43		28	隅丸長方形	70×45	8.40	6	
9	隅丸方形	20×20	8.41	37		29	円 形	15×15	8.40	9.5	
10	不整楕円形	20×15	8.47	16		30	不整円形	20×25	8.13	7.5	
11	隅丸長方形	27×20	8.47	13		31	不整円形	24×24	8.13	7	
12	円 形	26×26	8.45	10		32	隅丸方形	18×20	8.19	13	
13	隅丸方形	30×30	8.47	10		33	隅丸方形	15×20	8.25	10	
14	隅丸方形	28×30	8.47	10		34	隅丸方形	15×20	8.35	12	
15	楕円形	8×6	8.48	13		35	隅丸方形	12×20	8.34	17.5	
16						36	円 形				
17	隅丸方形					37	隅丸方形				
18	隅丸方形	37×32	8.51	30		38	隅丸方形	35×35	8.27	21.5	
19	円 形	30×30	8.51	9		39	隅丸方形	45×45	8.25	21	二段掘込み
20	円 形	20×20	8.51	7.5		40	不整円形	30×30	8.25	11.5	二段掘込み

## 第1章 G-5a地点

No	形状	上端径 (cm)	上端標高 (m)	深さ (cm)	備考	No	形状	上端径 (cm)	上端標高 (m)	深さ (cm)	備考
41	不整円形	35×35	8.25	27	二段掘り込み	87	不整円形	40×25	8.28	10	
42	不整円形	32×32	8.25	13.5		88	円形	16×20	8.27	14.5	
43	隅丸方形	50×45	8.26	21	二段掘り込み	89	隅丸方形	30×35	8.27	16.5	
44	不整円形	38×38	8.26	37.5	二段掘り込み	90	円形	17×17	8.29	6	
45	隅丸長方形	40×20	8.26	33	二段掘り込み	91	隅丸長方形	43×30	8.28	21.5	
46	隅丸方形	30×30	8.26	20	二段掘り込み	92	隅丸方形	33×30	8.27	27	
47	隅丸長方形	42×27	8.26	14.5	二段掘り込み	93	隅丸方形	21×21	8.29	14.5	二段掘り込み
48	隅丸長方形	45×40	8.26	15	二段掘り込み	94	隅丸方形	28×28	8.29	29.5	二段掘り込み
49	隅丸方形	20×23	8.26	35		95	隅丸方形	40×30	8.28	15.5	
50	円形	24×24	8.27	15		96	円形	18×18	8.29	18.5	
51	隅丸方形	33×33	8.27	16.5		97	隅丸方形	33×30	8.24	11.5	
52	隅丸方形	20×20	8.25	12.5		98	円形	27×27	8.24	7	
53	隅丸方形	40×40	8.25	16	二段掘り込み	99	隅丸長方形	25×20	8.28	2	
54	円形	20×20	8.25	5		100	円形	32×32	8.28	16	二段掘り込み
55	隅丸長方形	40×32	8.25	30.5	二段掘り込み	101	隅丸方形	31×31	8.28	10.5	
56	隅丸方形	32×32	8.25	18.5	二段掘り込み	102	隅丸長方形	33×13	8.28	10.5	
57	隅丸方形	32×32	8.25	25.5	二段掘り込み	103	円形	20×20	8.28	17	
58	隅丸方形	25×25	8.25	5.5		104	円形	32×32	8.28	33	
59	不整円形	50×35	8.25	6.5		105	隅丸長方形	41×32	8.28	27.5	
60	隅丸方形	30×28	8.25	37		106	隅丸長方形	48×39	8.28	27.5	二段掘り込み
61	隅丸方形	28×28	8.25	12	二段掘り込み	107	隅丸長方形	38×29	8.28	14	
62	不整円形	37×37	8.25	18	二段掘り込み	108	隅丸長方形	29×23	8.28	30.5	
63	隅丸長方形	35×22	8.25	10.7	二段掘り込み	109	不整円形	28×28	8.26	23	
64	隅丸方形	10×10	8.25	5.5		110	隅丸方形	29×29	8.26	17	
65	隅丸長方形	20×17	8.27	4.5		111	隅丸長方形	23×18	8.26	9.5	
66	円形	26×26	8.29	10.8		112	不整円形	14×14	8.23	9.5	
67	不整円形	27×27	8.25	5		113	隅丸方形	32×32	8.23	27	
68	隅丸方形	20×20	8.24	26.5		114	隅丸長方形	42×32	8.23	39	二段掘り込み
69	隅丸方形	30×30	8.24	11		115	隅丸方形	22×22	8.23	47	二段掘り込み
70	隅丸方形	18×18	8.24	9		116	隅丸方形	25×25	8.23	6	
71	円形	30×30	8.23	21		117	楕円形	20×15	8.23	7	
72	円形	28×28	8.23	23		118	隅丸長方形	45×35	8.23	17	二段掘り込み
73	隅丸方形	52×52	8.25	28		119	隅丸方形	25×25	8.23	26	二段掘り込み
74	隅丸方形	40×40	8.25	31		120	隅丸方形	30×30	8.23	21	
75	円形	27×27	8.25	13		121	隅丸方形	30×25	8.29	11.5	
76	隅丸長方形	30×30	8.25	23		122	隅丸方形	34×34	8.29	41	二段掘り込み
77	隅丸方形	28×28	8.25	21		123	隅丸長方形	23×15	8.29	18	
78	円形	21×21	8.27	35		124	隅丸方形	22×22	8.29	36.5	二段掘り込み
79	楕円形	20×15	8.27	8.5		125	隅丸方形	23×25	8.29	14.5	
80	隅丸長方形	45×27	8.19	41.5		126	隅丸長方形	25×23	8.29	8	
81	隅丸方形	18×18	8.19	11		127	隅丸方形	40×35	8.29	19.5	
82	隅丸方形	13×13	8.27	5.5		128	隅丸方形	36×30	8.29	19	
83	楕円形	31×26	8.27	11.5		129	円形	18×18	8.25	19.5	
84	隅丸方形	26×26	8.27	14		130	楕円形	42×30	8.26	30	
85	円形					131	隅丸方形	56×34	8.26	27	二段掘り込み
86	隅丸方形	47×38	8.29	26							

## IV 暗茶褐色粘質土層出土遺物

A、Bトレンチを通じて耕作土下に拡がる粘質土層出土遺物を一括した。遺物は夜白式土器、弥生式土器、土師器、石器類である。

## 土器 (Fig.1-62~1-64)

**夜白式土器 (Fig. 1-62, 1-64)** 瓢は各れも刮目突帯を有し、口縁に直接貼付けるもの(4)これよりやや下った位置に貼付けるもの(1~3)とがあり、2、3は刻みが深い。器面は内外ともに横位の条痕が残り、色調は黒色~暗黄褐色。5、38は底部。5は安定した特徴的な木葉底。内面は搔き回した条痕を残す。38は外側暗褐色でヨコナデ、内面黄褐色を呈し、搔き上げの条痕を残す。底部はかなりいびつである。各れも胎土に石英砂の混入多く焼成不良。6、32は鉢。外側とも暗褐色を呈し、横位の条痕を残す。口縁はナデによって外面に若干垂れている。胎土・焼成ともに良好。32は研磨浅鉢。外側褐色を呈し、横位の研磨が著しい。頭部及び胴屈曲部より上った位置では沈線状となる。胎土精成、焼成良好。10、27は壺。胴部に複線山形文、頭部に一条の沈線を有し、頭部内面は粘土接合部が段状に突出する特徴的な製作法を示し、上半は横位の条痕。褐~暗黄褐色を呈し、焼成良好。27は暗褐~黒色を呈し、内面は横位の条痕の後になで調整。胎土に石粒の混入多く、焼成不良。

**弥生式土器 (Fig. 1-62, 1-63, 1-64)** 7、8はともに直口する口縁下端に刮目を施し、暗褐~暗赤褐色を呈する。器面は磨滅している。焼成不良。9は口縁に直接粘土を貼って小さい平坦口縁をつくり、外側に約7mm間隔の整然とした浅い刮目を施す。暗黄褐色~赤褐色を呈し、器面ナデ調整。以上は板付II式相当である。次にFig.1-63, 64~26, 28~31 33~37, 39~41に示した土器類は全て中期次降の所産と考えられる。出土数では瓢が最も多數を占め、壺・高環等は僅少である。以下器形ごとに説明を加える。

**瓢 (Fig. 1-63)** 瓢は小破片であるが、口縁部の形態から、①外方に伸びの良好な平坦口縁を有する類(14~21)、②口縁が「く」字形に屈曲する類(24, 25)、③その他(22, 23)に区別される。①類は14~器色灰~黒灰色。15~外側灰褐色で荒目の刷毛調整。内面灰色。16~暗赤褐色。口縁直下強い横撫で。17~褐色。外側細い縱刷毛調整。18~褐色。内面口縁直下強い横撫で。19~外側暗黄褐色、内面暗赤褐色。全体撫で調整。20~外側褐色、内面赤褐色。全体横撫で。21~褐色。外側全体丹塗りで内面に垂れる。横撫で調整を加えて全体に焼成は良くなく、18, 20, 21の様に口縁上面が彎曲するものを含み時期的には中期中葉に比定できよう。②類は24~器色暗褐色。口縁は上方に肥厚する。25~外側赤褐色、内面黄褐色であり、胎土に石英粒の混入多く、焼成不良。後期前半であろう。③類は口縁直下に一条の三角突帯を有する22(器色外側灰褐色、内面褐色)や同時に口縁端が若干垂れ気味の23(器色赤褐色、内面口縁直下に強い横撫で)があり、ともに石英粒の混入多く、焼成不良。中期後葉と考えられる。

**壺** -26は朝顔状にひらく頭部に内側が頭著な隆起をみせる口縁をのせている。外面は全て丹塗りで頭部に6本単位の暗文、口縁上面に同様短直線文を施す。口径21.6cm、中期後葉。

**高環 (28, 29)** 各れも環部のみで、平坦口縁が若干垂れ、直下に三角突帯一条を巡らす。28

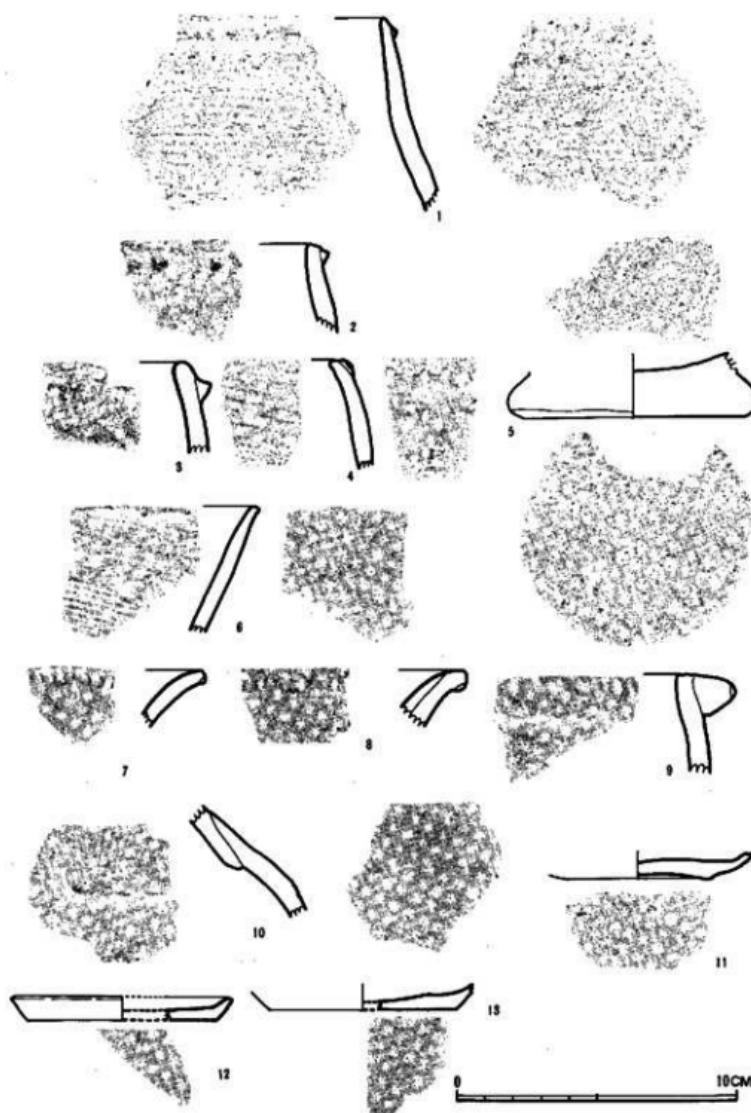


Fig. 1-62 暗茶褐色粘质土层出土器物拓影

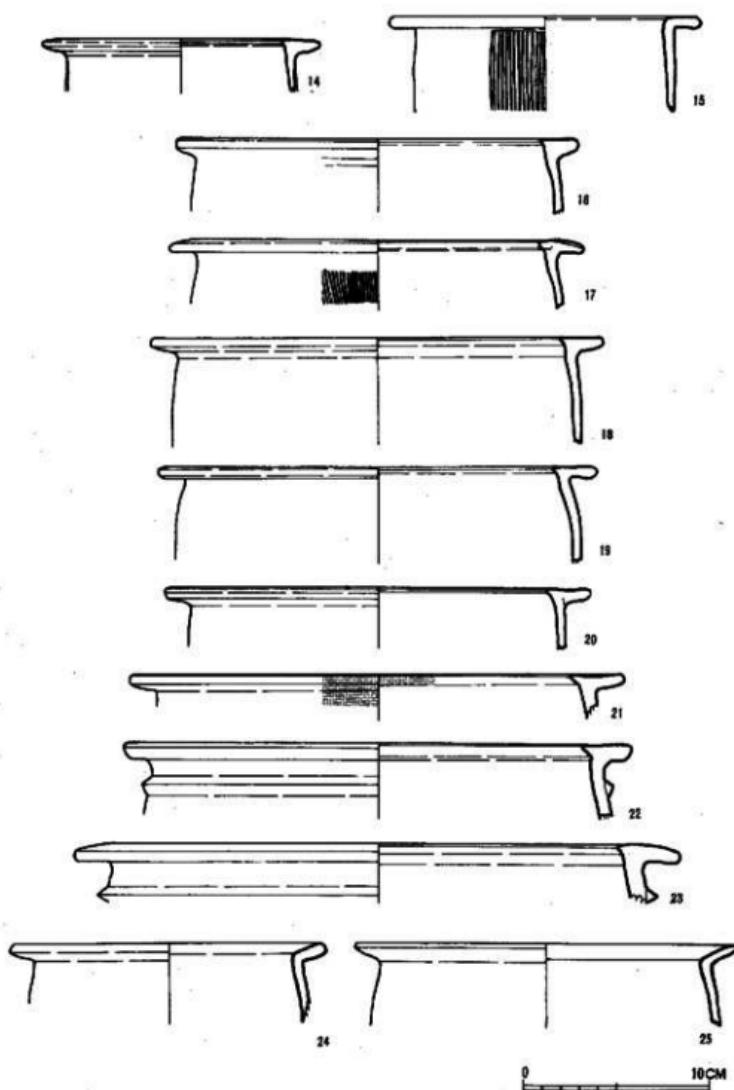


Fig. 1-63 G-5a地點暗茶褐色粘質土層出土土器実測図(1)

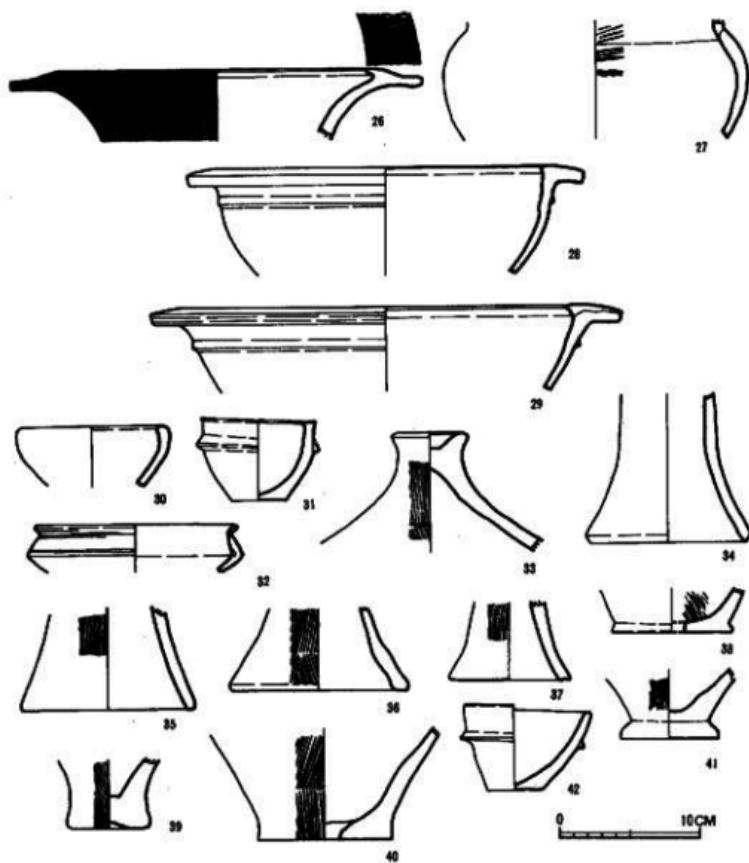


Fig. 1-64 暗茶褐色粘質土層出土土器実測図(2)

は外面丹塗りで横なで調整。突帯は細く低い。内面は暗褐色、胎土は精成され、焼成良好。外口径28.4cm。29は内外面ともに丹塗りで横位の範磨きによる器面調整。胎土に若干の石英粒の混入があるが、焼成は堅緻、外口径33.8cm、いずれも中期後葉か。

**鉢 (30, 31, 42)** 鉢は全て小型品である。30は口縁付近で上方に肥厚しながら内脣する。器色暗赤褐色を呈し、横撫で調整。口径9.8cm。31は胴部上半に一条の三角突帯を巡らし、以下は縦の範磨き、以上は横撫で調整である。口縁は横撫で。外面は褐色で半周に焼成時の黒斑あり、内面は暗褐色。胎土に石英粒の混入多く、焼成は良好。42も同様の器形で口縁は丸みをもつ。外面暗赤褐色、内面は赤褐色で横撫で調整。胎土に石英の混入多く、焼成不良。口径9 cm。

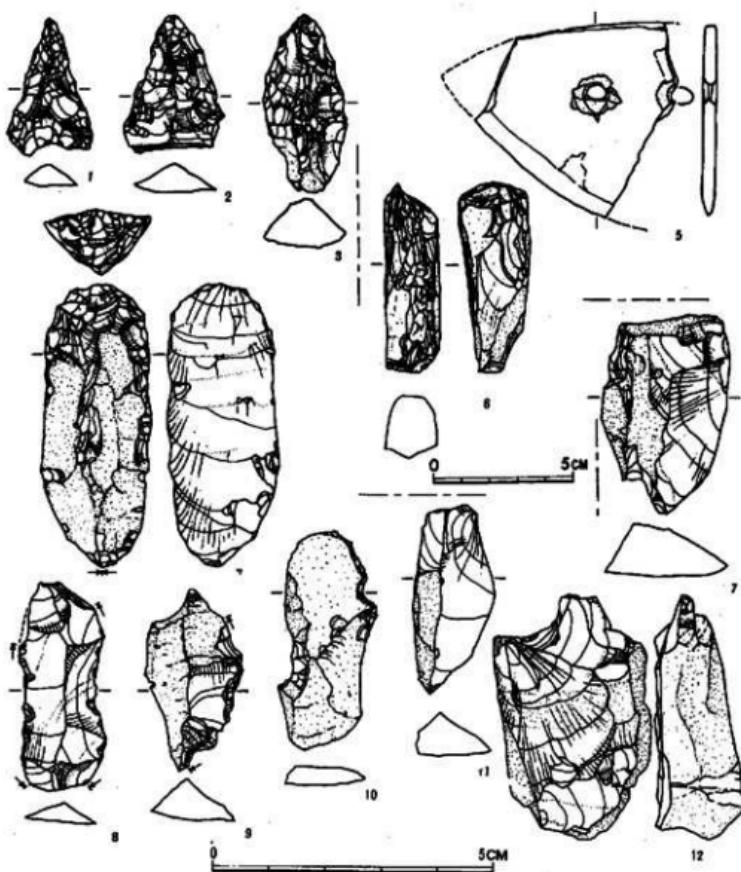


Fig. 1-65 暗茶褐色粘質土層出土石器実測図

蓋（33） 器面の荒れがはげしく、頭部は窪みを設けている。外面は非常に細かい綿刷毛調整。器厚は均一で丁寧なつくり、径に比して高さの低い中期の形態であろう。胎上に石英細砂の混入非常に多く、焼成良好。

器合（34～37） 34は淡い黄褐色を呈し、下端を斜めに削っている。胎上精成、焼成良好。底径11.2cm。35は内外面淡い褐色を呈し、外面上半は細かい綿刷毛目。下半横撫で調整。胎土、焼成とともに非常に良好。底径12.2cm。36は内外面ともに暗褐色を呈し、脚端部は横撫で、胎土は砂質で焼成不良。底径11cm。37は外面暗褐色、内面褐色を呈する。脚端部は中央が盛む。外

面上半は細かい縦刷毛調整で、内外面下半は横撫で、胎上、焼成ともに良好。底径7.2cm

**底部 (39~41)** 39は外面褐色、内面暗褐色を呈し、若干あげ底。外面は細かい縦刷毛目、同底部は同様の刷毛で撫で回している。底径 5.8cm、40は内外面褐色。外面は荒い縦刷毛目。底部中央に外方より二次穿孔がみられる。底径 9.6cm。41は外面赤褐色、内面暗褐色を呈し、円盤貼付けの手法をもつ。外面は細かい縦刷毛目調整。胎土は精成され、焼成は良好。底径 6.8cm。

**土器 (Fig.1-62)** 11は褐色を呈し、系切り底で若干あげ底となる皿。胎土は精良で焼成は堅緻。底径 5.1cm。12は灰褐色を呈し、底部に板状の圧痕を残す皿。内外とも縦撫で。胎土、焼成ともに不良。口径 6.6cm、高さ 0.8cm。13も同様な圧痕を有し、黄褐色を呈する。胎土は精良で焼成脆弱。底径10.6cm。

(横山)

#### 石器 (Fig.1-65)

出土石器は、比較的すくなく、特別に注記しない限り暗茶褐色土層出土の石器である。

**石庵丁 5** は、頁岩質砂岩を用いた杏仁形石庵丁で、刃部は両刃で背部はやや外側しており、器面も同様入念に研磨が加えられている。穿孔は表裏から行なわれている。

**柱状片刃石斧未製品 6** は油質頁岩を用い、器面に敲打が加えられている。

**石鎌 1** は良質黒曜石を用いた石鎌で、基部はやや内側している。2は気泡の多い黒曜石製の剥片を用いた二角鎌である。表は粗い剝離加工を加え、裏面は剝離加工によって先端部にある打痕を除いているが、先端と基部には自然面が残っている。第59柱穴状小ビット出土、**3** は良質の黒曜石製の柳葉形石鎌で表裏とも粗い剝離加工で整形されており表面基部には自然面が残っている。第2号溝出土。

**先刃擴品、4** は良質の黒曜石製の縦長剥片の刃面に刃済し状の加工を加え、エッジをつくり出している。なおエッジは消耗している。

**リフレイク (使用痕ある剥片石器) 8~10** は良質黒曜石製の縦長剥片の縁辺に使用痕がみられる。9は、第73柱穴状小ビット出土。

**剥片 7~11** は、良質黒曜石製の縦長剥片である。

**石核 12** は、良質黒曜石角礫を用いた石核で3cm前後の不定形剥片が剥出されている。

以上の石器は、いずれも造様に伴なわなないが、包含層から出土している土器は弥生式土器であり、袋状豊穴にもみられること等からいずれも弥生時代前期から中期に属するものといえる。

(山口)

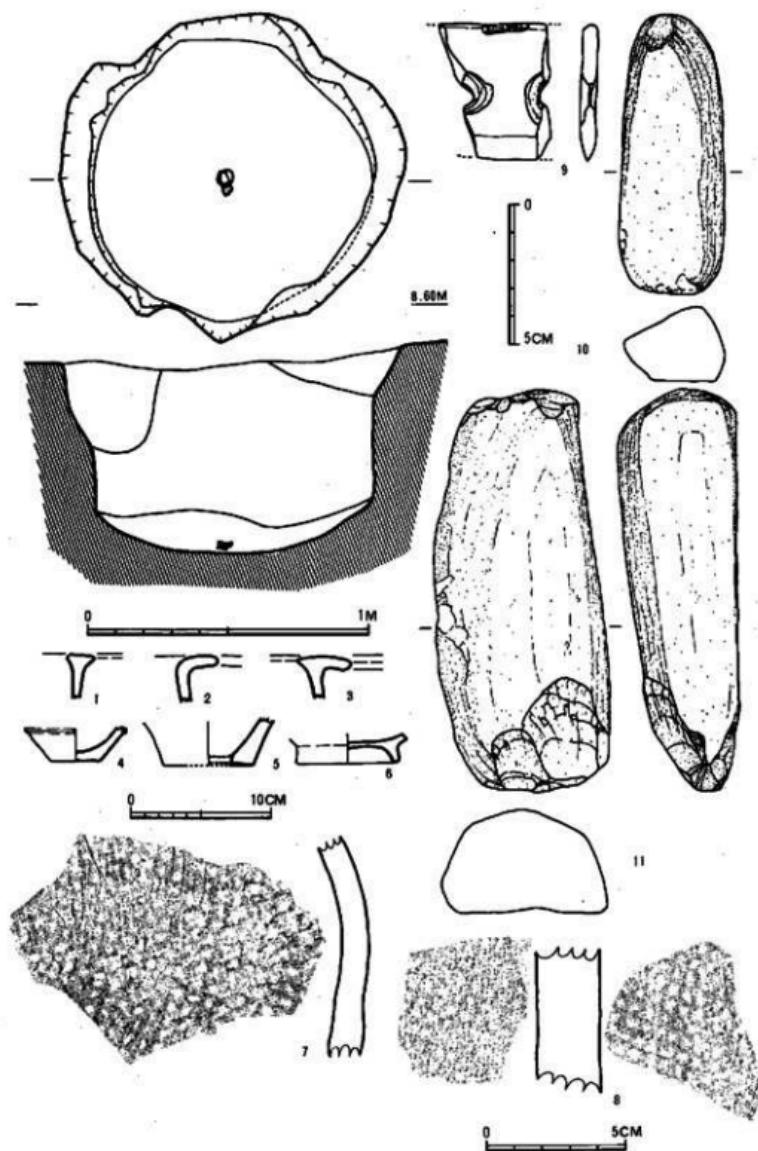


Fig. 1-66 第1号竖穴·出土遗物实测·拓影图

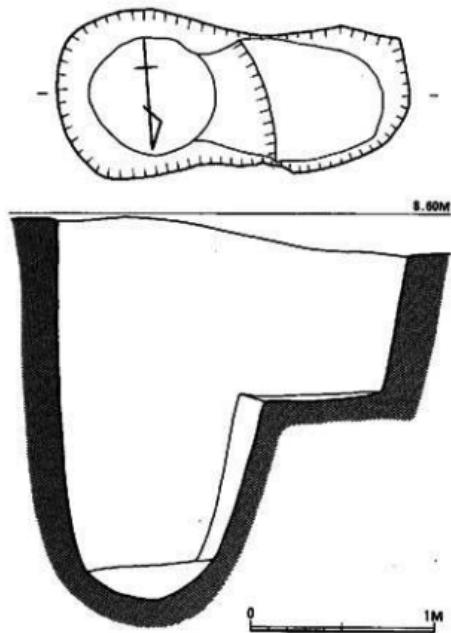


Fig. 1-67 第7号豊穴(井戸)実測図

打刺を有する礫。礫器として使用されたと考えられるが時期不明。花崗岩製。3. 土鍋。7は胴部破片。調整は器表に正方形格子叩きを加えた後非常に荒い継の刷目毛。内面は荒い条痕に似た横位調整。外面煤が厚く付着し、内面灰色。また器壁は暗赤褐色を呈し多量の石英粒を混入して

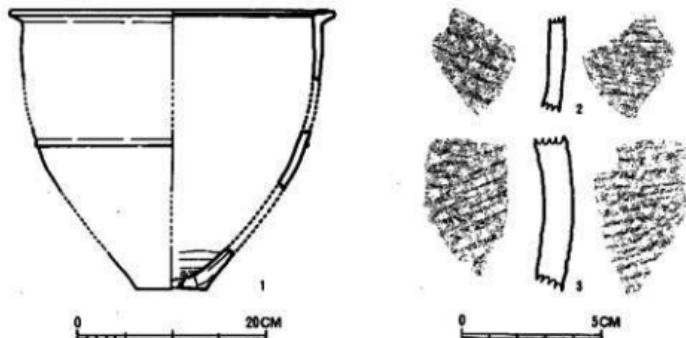


Fig. 1-68 第7号豊穴(井戸)内出土遺物実測図・拓影図

## V 中世以降の豊穴と出土遺物

### 第1号豊穴 (Fig. 1-66)

上部の削平と壁面の剥落が激しいが、旧状は径1m程度の豊穴と推定される。覆土中より弥生式土器、石器類、土鍋、瓦片、また底面で上絵質土器、礫が出土した。

**出土遺物 (Fig. 1-66)**

1. 弥生式土器 (1~5) 1~3は縁口縁部全て小破片。4は小型鉢口縁下に一条の三角突帯を巡らす。5は縁底部か。いずれも流れ込み。前中期～中期の所産である。
2. 石器類、礫 (9, 10, 11)、9は石庖丁。身幅の狭い形態で両刃。孔間3cmをはかり両面穿孔。頁岩質砂岩製。
- 10は硬質砂岩製の長円礫。底面出土。
- 11は長さ14cm、幅6cm、厚さ4cmをはかる大形長円礫の両端部分に

いる。焼成不良。

4・瓦。8は平瓦破片。上面は窓切りか。下面是1cm平方に経縫が各々8~10本を数える布目模を有する。灰色を呈し、石英粒の混入少量。5・土師質土器。6は塊であろう。器身の荒れが激しく赤褐色を呈する。高台部とともに丁寧で胎土精成。最下面出土。

以上のうち底面出土遺物によって竪穴の使用時期は中世と考えられる。

#### 第7号竪穴(井戸) (Fig. 1-67)

調査区南辺に検出された。後世の削半があるものと考えられ、現存部で深さ約2m、径1.1mをはかり、 $0.8 \times 0.7$ m程度の長方形。西側に段状造構を付設する素掘り井戸である。覆土内からは弥生式土器、須恵器破片、青磁器小破片等が出土した。使用時期については詳細を知り難いが第9号竪穴と関連ある時期のものと考えられる。

**出土遺物 (Fig. 1-68)** 1は弥生式土器。いずれも小破片であるが器面調整、色調、胎土から同一個体であろう。口縁はゆるく内傾する逆「L」字形となり、胴部には低い三角突帯一条を巡らす。器面は内外ともに丁寧な横面磨きを加えており、底部内面では特に著しい。器表淡褐色、裏面暗褐色を呈す。胎土に混入砂多く、焼成は堅微。口径34.8cm。時期は中期前葉。2、3は須恵器破片。いずれも器色は暗い灰色を呈し、内面青海波、外面敲目をのこす。胎土、焼成とともに非常に良好。

#### 第9号竪穴 (Fig. 1-69)

造構は現存部分で上部径85~90cmをはかる不整な円形で、深さは1.5~1.6mを残す。中位ではやや胴張りとなる井戸である。底部には木枠等の施設はなく素掘りである。覆土は下部で砂質が強く、上部に従って粘性が強い。遺物は黒灰色砂層、黒灰色粘質砂層とこれより上層で出土した。

**出土遺物 (Fig. 1-70)** 1は耳付黑色土器である。扁球状の胴に短い直立する口縁を有する。扁平な耳は一対と考えられ、焼成前に径8mmの孔を穿っている。外面は全体に煤の付着が著しく黒~黒褐色を呈し、指紋が各所にみられる。口縁部では荒い櫛の刷毛目調整後に横撫で。また頭部では荒い櫛撫で。内面は暗褐~黒褐色で胴部には指調整痕が多く残し、耳の固着部は特に丁寧であり、この後に指撫でを加える。口縁内面は指撫で調整。胎土は帶白~灰褐色で石粒の混入は非常に少なく、焼成は堅微である。類品は周防国衝塙等にみられ「湯釜」かと思われる。口径13.6cm。2、3は摺鉢である。2は体部内面以上に5本単位の荒い櫛撫き文を有し、最下端に使用による窪みが幅1.5cm程度で全周に残る。見込み中央には棒状のものによって「匂」の文字様のものが描かれているが磨耗のため判然としない。内外ともに黒~黒褐色を呈し焼成

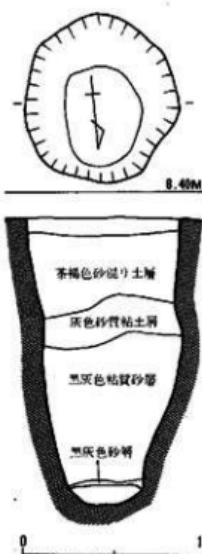


Fig. 1-69 第9号竪穴(井戸)  
実測図

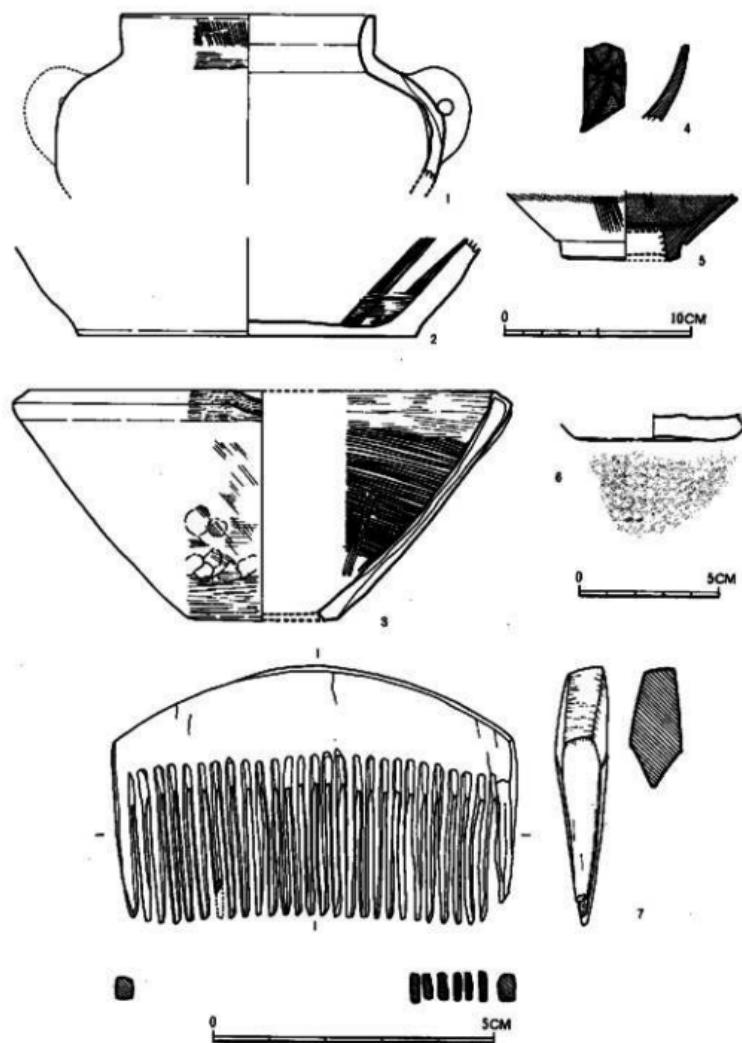


Fig. 1-70 第9号窖穴内出土遗物实测图

は堅緻。底径18cm。3は一ヶ所片口を有し、口径は内側気味に肥厚する。体部内面に5本単位の荒い縦の備描き文を施す。外面は横撫で仕上げて处处に指頭痕がみられ、縦の細かい亀裂が多い。内面は荒めの均一な斜め刷毛後に口縁近くを撫で調整。器色は内外面褐色を呈し、器壁は内部の生焼けの黒色部分を除いて褐色。底部付近の断口は剥落後火に遭って煤付着。胎土に石英の混入多く、焼成は堅緻。口径24.6cm。器高12.3cm。以上は黒灰色粘質砂層出土。4、5は青磁器。4は碗頭部。内外に均一な淡緑色釉を施す。内面には備描き曲線を施した後に笠状のもので花文を描いている。胎土は灰色。5は碗底部。全体に稜角の鋭い作品。内面と外面の一部に淡緑色の施釉。低い高台は内外面ともに斜めに笠切りを加え、直線的に外反する。体部との境は明瞭な段を有している。また油溜には釉のとどまりが厚く、見込みとの境は断面三角形の隆起によって区別される。文様では外面に8本単位の縱備描き。内面は笠状のものによる幅広い線文様の一部がこる。底径4.8cm。6は土師器。器面の荒れがひどい。糸切り底で、内面は輪綻なで、胎土は精成されているが焼成は不良。器色は暗褐色を呈する。底径5.4cm。7は木製櫛。背部が彎曲する挽歯式の横櫛で全長7.1cm、幅4.4cmをはかる。握りは厚さ約6mmで歯部に向って厚さを増し9.5mm程度となる。歯部の冴えはシャープであり現存部で2.3cm、歯部間は1~1.5mmの間隔をもっている。梳櫛として使用されたものかと考えられる。材は柘植か。熊本県竹崎城址で類例がみられる。黒灰色砂層出土。

以上黒灰色粘質砂層出土遺物からこの縫穴の時期は鎌倉時代後半期に比定されよう。

註1) 福山敏雄・小田富士雄・齋久嗣郎(1967)『周防の国』

註2) 桑原應彰(編)(1975)『竹崎城一城址調査と竹崎季長一』熊本県文化財調査報告第17集

## VII 近世墓

近世墓はG-5の地点では弥生時代墓地と重複して近世墳墓と考えられる木棺墓3基、覆棺墓2基が各々検出された。木棺墓は施設の形状、配置からほぼ同一時期に営まれており、副葬の銅鏡(寛永通寶)によって覆棺墓とともに寛永以降に墓地を形成していたことが知られる。以下個別に説明を加える。

### 1. 木棺墓

#### 第1号木棺墓 (Fig. 1-71)

北辺を他造構と切合する掘方はほぼ1.7×1.05mの長方形を呈し、この中央部に0.85×0.47mの浅い同形の掘込みを設け、黄褐色粘土を厚さ約2cmに貼っている。粘土上には棺材の一部が残り、副葬と考えられる糸切り底を有する土器皿4個が出土し、遺骨はない。皿は各れも器面の荒れが著しく、口縁部が不安定である。胎土は精成され、焼成は脆弱で褐色を呈す。1は口径6.9cm。高さ1.3~1.7cm。2は口径7cm。高さ1.5~1.6cm。3は口径6.9cm。高さ1.3~1.7cm。4は口径6.7cm。高さ1.3~1.6cm。

#### 第2号木棺墓 (Fig. 1-72)

南、西辺を他造構と切合しているが、ほぼ1×1.4mの長方形掘方を想定できる。この中央

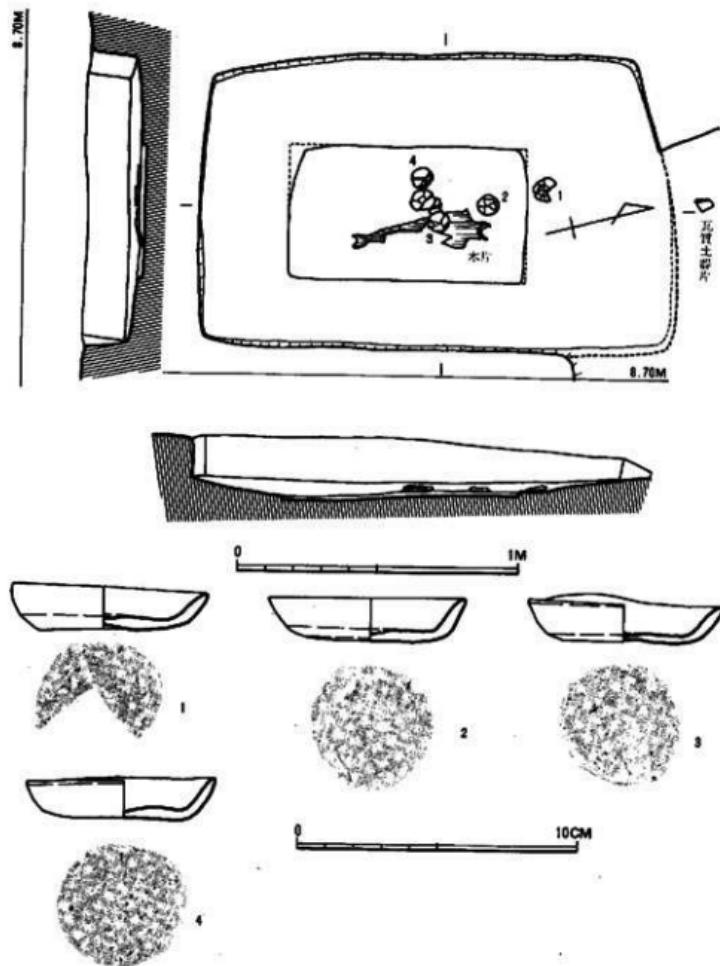


Fig. 1-71 第1号近世木棺墓・出土土器実測図

には、長軸を若干東に向けて78×47cmの浅い同形の掘り込みがあり、厚さ0.5~0.8cmをはかる棺の底材と考えられる木板が残る。木板上では北隅に2~3個体の漆器、土師質土器破片(21)、中央部に銅錢15枚(1~14)、これらと混在してガラス玉4個、木製櫛1個、青磁器1個(19)があり、木板外に土師器皿1個(15, 16)、土師質土器破片1(17)、砾石1(18)が出土した。

**出土遺物 (Fig. 1-69, 70)** 漆器(22~25)は全て高台付きの壺形で径10cm内外の製品であるが

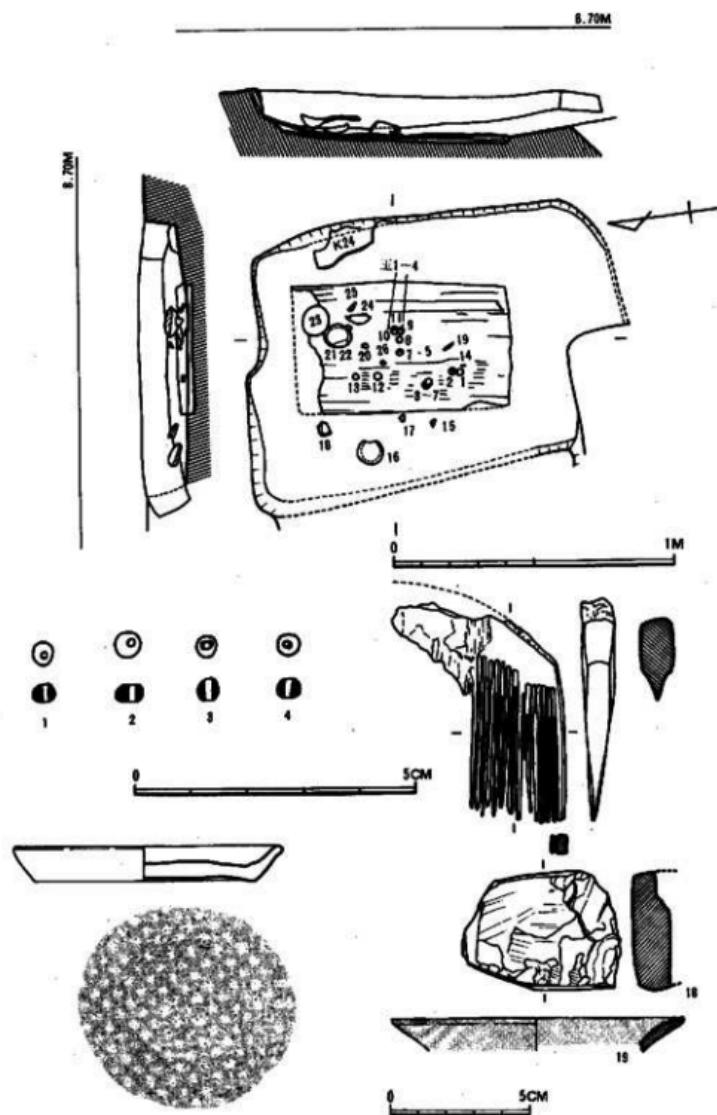


Fig. 1-72 第2号近世木棺墓・出土遺物実測図

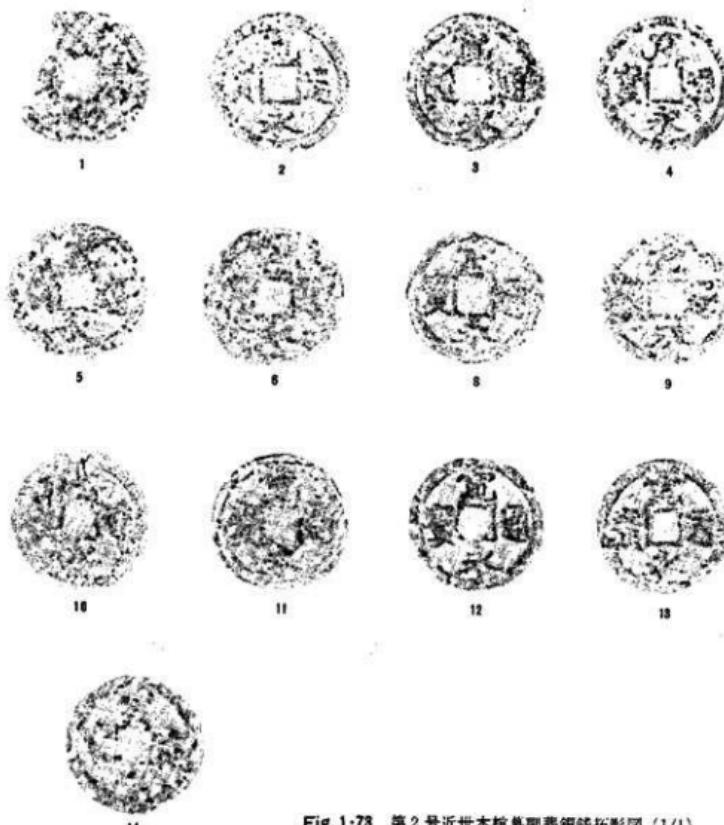


Fig. 1-73 第2号近世木棺墓副葬銅錢拓影図 (1/1)

調査時の乾燥のため損耗した。1~14は銅銭。全て「寛永通寶」であり、径 2.5cm、重量 2.5g のものが多く、皆背無である。個別法量は Tab. 1.4 に示した。1~4のガラス玉は数珠の一部と考えられる小玉であり、1-径 4mm、孔径 1mm、2-径 4.5mm、孔径 1mm、3-径 3.5mm、孔径 1.5mm、4-径 4mm、孔径 1.5~2mm を各々測ることができる。色は濁った真珠色をしている。木製櫛は現存幅 4cm をはかり、握りが彎曲する挽齒式の横櫛である。基部で幅 3mm、厚さ 0.5mm の歯部は非常に精巧に造られ、歯間は 1mm 程度である。梳櫛として使用されたものと考えられる。19-は青磁器。内外面に帶褐色緑色釉を施した小形器。いずれも氷裂が著しい。胎土白色。重か。口径 12.4cm。木板外に出土した 15、16 は上師器皿。全体に磨滅がはげしく糸切り離して若干あげ底気味である。褐色を呈し、内面輪輪なで。胎土に雲母の混入多く、焼成堅緻な

## VI 近世墓

精良品。口径9.8cm、高さ1.25cm。18は銅錢。片面が剥落しているが残り全面に砥面を有する。貞石製。以上はいずれも副葬品と考えられる。

### 第3号木棺墓 (Fig. 1-74)

墓壇部分は両側が未掘であるが長さ1.1×0.9m程度の不整な長方形を呈すると考えられる。同軸でやや東寄りに同形で72×45cmの浅い掘込みがあり、ほぼこの範囲に厚さ1.5~2cmをはかる棺材の木板が遺存している。木板の中央には銅錢6枚、北東側に2個重ねの漆器碗がおかれ、これと近接して北側に齒と頭骨骨片が残り、年令は30才前後であり、性別不明。遺存歯についてはTab. 1-5に示す鑑定を得た。他に若干の棺材の小片がみられる。

**出土遺物 (Fig. 1-75)** 遺物は副葬と考えられる漆器碗、銅錢である。漆器は調査時の乾燥によって損耗した。銅錢1~12は全て「寛永通寶」である。大きさは径2.4cmのものが半数を占め全て背無。個別法量はTab. 1-4に示した。

①85×47、②78×47、③72×47、3基の木棺墓は棺全体の遺存があまり良くないが、比較的残りの良い第3号例からすると墓壇内の浅い掘込みは規模と棺底板の形を反映していると考えて良い、いずれも縦横が約80×50cm程度の箱形棺が想定され、跪坐の姿勢で入棺されたと考えられる。

## 2 棺墓

### 第1号漆棺墓 (Fig. 1-76, 1-77)

後世の削平によって上半部が失われている。墓壇は甕の大きさにあわせて無駄なく掘られている。棺内には若干の人骨片と副葬の銅錢6枚が遺存した。出土した銅錢は全て「寛永通寶」であり、通用銭であろう。内訳は径2.5cm~4枚、同2.4cm~2枚である。個別法量はTab. 1-4に示した。前者のうち2枚

は背「文」を有し「通」の字  
の頭が「コ」になっている  
点で寛文8年(1618年)鑄  
造のものと考えられよう。  
棺使用甕は外面暗褐色~灰  
色、内面黒灰色を呈し、  
底部より10cm以上の外面  
には二次的に火を受けて  
煤が厚く付着し、荒れて  
いる。器表は幅3cm単位  
の荒い斜めの崩毛山調整  
を加えている。器形は内  
輪気味で粘土の接合部分  
が凹部となって、これが  
全体に特徴的である。底  
部はあげ底で厚さ0.5~

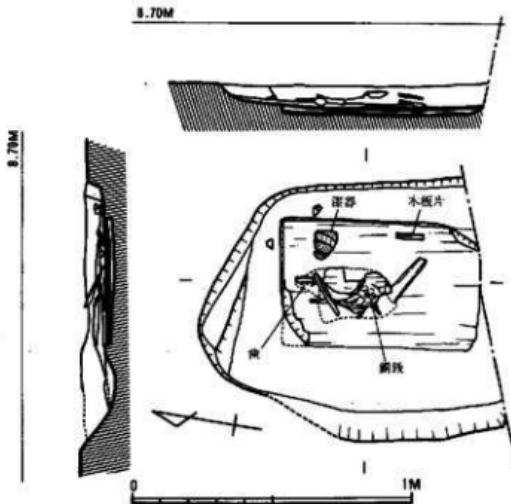


Fig. 1-74 第3号近世木棺墓実測図 (1/20)

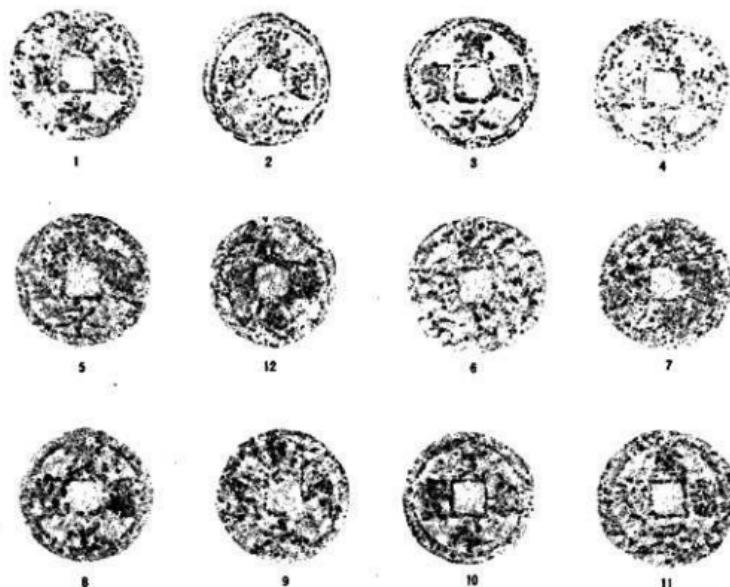


Fig. 1-75 第3号近世木棺墓副葬銅錢拓影図

Tab. 1-4 近世墓副葬銅錢法量表 (単位は長さがcm、重さ g)

遺構名	番号	径	孔		重量	遺構名	番号	径	孔		重量
			形状	孔径					形状	孔径	
第2号近世木棺墓	1	2.55	方形	0.55	不能	第3号近世木棺墓	1	2.35	方形	0.5	3.10
	2	*	*	*	2.44		2	2.4	*	*	4.15
	3	2.5	*	0.6	3.15		3	2.35	*	0.55	3.25
	4	*	*	0.5	3.1		4	2.4	*	0.5	3.33
	5	*	*	*	4.1		5	*	*	0.55	3.47
	6	*	*	0.55	3.3		6	2.5	*	*	3.4
	7	2.4	*	0.5	不能		7	2.4	*	0.5	3.07
	8	2.5	*	0.6	3.35		8	*	*	*	3.33
	9	2.45	*	0.5	2.9		9	2.4	*	0.55	2.90
	10	2.4	*	*	3.15		10	2.35	*	*	3.94
	10'	*	*	0.55	1.9		11	2.5	*	0.5	3.95
	11	2.45	*	*	3.15		12	2.35	*	*	3.85
	12	*	*	0.5	2.95	第1号近世木棺墓	1	2.5	*	0.6	3.67
	13	*	*	0.55	2.98		2	*	*	0.55	3.5
	14	*	*	0.5	3.43		3	2.4	*	0.6	4.0
							4	*	*	*	3.15
							5	2.5	*	0.55	3.55
							6	*	*	0.6	3.9

Tab. 1-5 第3号木棺墓出土齒咬耗度(プロカ)

⑧								①							
2° 1°								1° 2° 2°							
8	7	6	5	4	③	2	①	①	2	③	④	5	6	7	8
8	7	6	5	5	④	③	②	1	1	2	3	4	5	6	7
1°	(?)				1°	2°	2°								

●○印 残存齒  
■残存齒上下の度数は咬耗度をあらわす。

1 cm はかる。器表は中央部が生焼けで黒色となっている。焼成は堅緻。底径34cm、寛永以後の所産である。

第2号謫居墓 (Fig. 1-76)

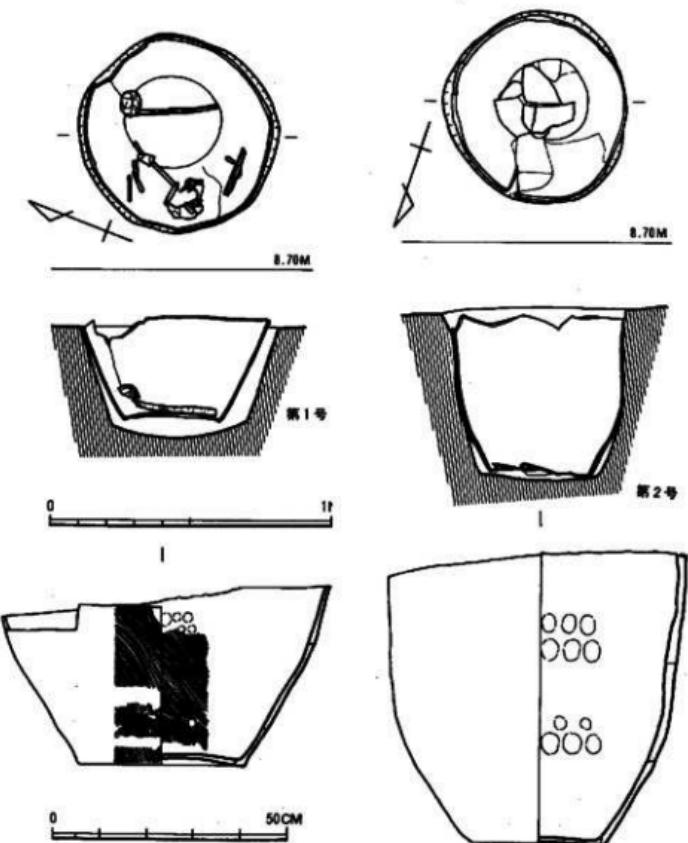


Fig. 1-76 第1・2号近世謫居墓と謫居実測図

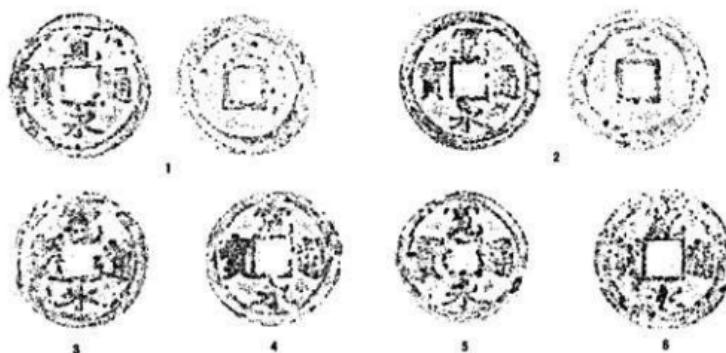


Fig. 1-27 第1号近世墳墓副葬銅錢折影図 (1/1)

第2号も第1号同様に上部を欠失している。棺内には遺骨その他の遺存はなかった。棺使用喪は内外面ともに明褐色を呈し、底部内面付近は黒色をおびている。胎土は砂質で器面は磨減がはげしい。製作には18~20cmの粘土帯を輪積み法によって造形し、器形にはこの技法が投影されている。器面は細かい刷毛目調整、撫で調整を加えている。内面の粘土接合部には指おさえが顕著に残っている。器壁は1.8~1.5cmでかなり分厚く半焼けで黒色となっている。底径28cm。

以上近世墳墓のうち豪富墓は寛文8年以降、木棺墓が寛永年間以降と大まかな上限を知りうるのみであり、今後の研究に待ちたい。

(横山)

註) 骨・齒の鑑定は九州大学医学部水井昌文教授、同木村幾多郎助手に依った。

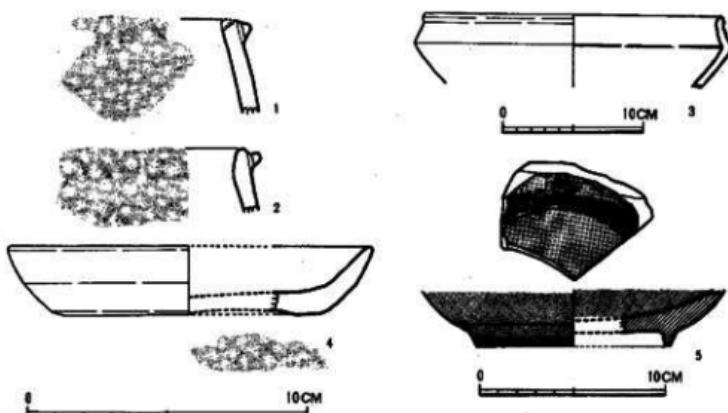


Fig. 1-78 表土・表様土器実測図・拓影図 (1/2)

## VII 表土・表土層の遺物

## 表土・表様の遺物 (Fig. 1-78)

1・2は夜白式土器甕。口縁に接して刻みの深い突帯を貼付けている。内外面ともに条痕を残す。器色は暗褐色を呈し、焼成は良好。3は同浅体。口縁は丸みを有し胴の屈折部は鋭い。黒～黒褐色を呈し、内面は横位の条痕調整後に同磨研を加える。胎土は精成され、焼成は堅板。口径10.6cm。4は土師器皿。底部に板目状の压痕を有する。器色は明褐色を呈し、胎土、焼成とともに良好。口径13.2cm、高さ2.5cm。溝状造構腹土内より出土。5は磁器碗。高台は低く、外面には高台に2本、胴部下端近くに1本、また底部外面に1本の藍色線文を巡らし、体部内面は見込みとの境界付近に2本の同心円文と6本の短直線を取込んだ藍色の濃淡文様を染付けている。底部外面は求心状の水裂が著しい。また外面には釉のかからない部分があり、胎土は白色である。底径10.4cm。

(横山)

## VIII まとめ

本地点は、弥生時代の窓棺墓・木棺墓、土塙墓・竪穴造構と、中世の竪穴造構・近世の窓棺墓・木棺墓の複合遺跡である。ここで、今回の調査の成果と課題についてまとめてみる。

## &lt;弥生時代の墓地&gt;

本地点は、43基の窓棺墓（3基は掘構工事中出土）、13基の木棺墓、11基の土塙墓が確認できたが、いずれも削平されていた。また種々の制約のため完掘できなかったが、ここでは墓地の主体をなす窓棺墓を中心として述べる。

窓棺墓はA区の中央部に集中し、北西・南へ広がる傾向をもち、8つの切り合い関係のある

グループが確認できた。要約すると次のようになる。

- 1 K 3 → K 2
- 2 K 19 → K 18
- 3 K 15 → K 14 · K 13
- 4 K 10 → K 23 → K 9  
↓  
K 11
- 5 D 9 → K 16
- 6 K 26 → K 27
- 7 K 28 → K 29 → K 25
- 8 K 30 → K 33 · K 32 → K 31  
↓  
D 12 · D 16

1 グループは第3号窓棺墓(以下K 3とする)が前期末の窓棺墓で、K 2は中期初頭の窓棺墓の切り合いである。2 グループはK 19が中期初頭の窓棺墓で、K 18は中期前様の窓棺墓の切り合いである。3 グループを除くと、2 グループと4 ~ 8 グループは、2 グループと同様の切り合い関係をもっている。K 3は金海式土器の組合せであり、前期末として位置づけられる。K 2 · 19 · 15 · 10 · 28 · 30を、本文中で中期初頭と位置づけしてきたが、これらの窓棺墓の棺について触れなければならないであろう。棺はいずれも菱形土器・壺形土器・鉢形土器の組合せである。菱形土器は外反する逆L字口縁をもち、口縁直下に三角突帯を巡らし、胴部最大径は胴部上位にある。底部はしまり、厚く、上げ底になっている。壺形土器は極端に広がらない補強された外反する口縁をもち、頸部つけ根に三角突帯を巡らす。最大径は胴上半部にある。これらの土器は城ノ越式と称されて、中期初頭に位置づけられている。以上から、前述の特徴をもつ土器を窓棺として用いた窓棺墓を、本遺跡においても中期初頭として設定した。すると中期初頭の窓棺墓は、K 4 · 17 · 21 · 35 · 36 · 38 · 43 · 39 · 42の14基であり、A区の中央部を東西に横ぎって分布している。墓塚は削平されているが、K 28 · 33 · 35 · 36でみられるように、隅丸長方形の下底に横穴を掘り棺を挿入しており、少なくともこの地点においては、この埋置法がとられたと考えられる。棺はK 2 · 4 · 38を除くと、N51°EからS75°Eの方位をとっている。棺の組合せは、K 17が単棺である他はいずれも合口で、菱形上器(以下菱とする) + 壺形土器(以下壺とする)が5基、壺+鉢形土器(以下鉢とする)が2基、菱+菱が1基、壺+壺が1基で、菱+壺がもっとも多い(他は削平されているが下窓には壺が用いられている)。また土器は、菱の胴部に煤の付着がみられるものがあることから、日用雑器の転用がしばしば行なわれたと考えられる(特に菱に顕著である)。以上の窓棺墓のとる方位、窓棺の特徴は、中期前葉のK 16が第9号木棺墓(以下D 9とする)を切っていること、D 10等の木棺墓塚に前期末の土器が含まれていること、中期初頭の窓棺墓と木棺墓・土塚墓の切り合い関係がないこと等から、すくなくともD 6 ~ 10 · 19 · 20は中期初頭の墓であるといえる。K 2 · 4はN75°W · S84°Wという方向をとるが、これはK 3に統くものとして1群を形成するものと考えられる。

中期前葉は、いわゆる汲田式土器を用いた窓棺墓で、K 1の成人棺1基を除いて、すべて小

## 総 ま と め

児用棺である。K1は埋葬人刺突と考えられる石剣鋒が出土していることから、特別の意味をもつものと考えられる。分布は中期初頭の腰棺をとりまく形で、K37・7・8の出土から、南北へ広がる傾向を示している。

板付台地では他に板付北小学校校庭・板付田端・F-9a地点(腰棺破片の出土から近くに墓地の存在が想定できる)・D-E-9地点の4ヶ所が確認されている。川端遺跡を除くと副葬品の出土例がないこと、いずれも板付台地の縁辺に位置すること等から、板付台地における人間集団の墓域の観念があったと考えられる。するとすくなくとも中期前葉において本調査地点は、成人未満の墓地といえよう。

### 〈弥生時代の豊穴遺構〉

削平されており、遺構の性格ははかりがたいが、第2号豊穴(以下P2とする)・P10・11~14が弥生時代の豊穴遺構である。

P2は覆土中に夜白式土器を主体とする袋状豊穴であり、すくなくとも前期に位置づけられる。夜白式土器を覆土中に含む袋状豊穴が、本地点に出土したことは、板付遺跡との関連から今後の調査に期待したい。P10は丹塗り土器を主体としてしめること、器台・高环等が出土していること、出土土器が板付遺跡・板付市営住宅遺跡(G-24地点等)の土器と類似点があること等から、祭祀的な意味合いが強いといえる。甕・壺・鉢・器台・高环のセットをもつこと、板付台地上に存在すること、しかも中期後葉に位置づけられることは、重要な成果といえ、今後の板付周辺の調査に期待される。P13が中期中葉の腰棺墓に切られること、福岡平野を中心とする北部九州の袋状豊穴が、中期中葉までに無くなること等から、出土遺物は貧弱であるが、P12~14は中期中葉以前に位置づけできよう。

以上から、生活遺構が本地点に存在することは、板付台地における弥生時代の人間集団の生活復元に役する点が多いといえる。

### 〈中世・近世の遺構〉

鎌倉時代末期から室町時代にかかる時期の井戸状豊穴を含む生活址が確認できた。また2基の腰棺墓・3基の木棺墓が確認でき、出土遺物から寛永年間以降江戸中期頃まで墓地として利用されたと考えられる。そして近世墓が破壊されているところから、この周辺はこれ以降に削平されたと考えられ、土地利用の変移のうえで画期をなすと思われる。

## 参考文献

- 板付遺跡保存会 板付遺跡
- 折尾学 (1970) 福岡市金環道路第一次調査概報 福岡市埋蔵文化財調査報告書7
- 折尾学 (1971) 福岡市金環道路発掘調査概報 福岡市埋蔵文化財調査報告書17
- 小田富士雄 (1973) 入門講座 弥生土器—九州— 考古学ジャーナル79・82
- 鏡山猛 (1952~54) 遺物累考(一)(二) 央湖53・55・62
- 後藤直・横山邦雄 (編)(1975) 板付周辺遺跡調査報告書(2) 福岡市埋蔵文化財調査報告書31
- 下条信行 (1970) 福岡市板付遺跡調査報告 福岡市埋蔵文化財調査報告書8
- 杉原莊介・小林行雄 (1964) 弥生式土器集成本編 I
- 高倉洋彰 (1973) 墳墓からみた弥生時代社会の発展過程 考古学研究20・2
- 高倉洋彰 (編)(1970) 宝古遺跡 日本住老公団
- 中山平次郎 (1917) 銅鋒・銅劍の新資料 考古学雑誌7-7
- 西谷正 (編)(1970) 津古内畠遺跡 小郡市教育委員会
- 松岡史・亀井勇 (1968) 福岡県伯玄社遺跡調査概報 福岡県文化財調査報告書36
- 森貞次郎 (1955) 弥生文化—北九州— 日本考古学講座4 所収
- 森貞次郎 (1966) 九州 日本の考古学3 所収
- 森貞次郎 (1968) 弥生時代における細形銅劍の流入について 日本民族と南北文化所収
- 森貞次郎・岡崎敬 (1961) 福岡県板付遺跡 日本農耕文化の生成所収
- 山崎茂孝・桜井康治 伯玄社道路研究報告土塙墓と木棺墓
- 横山邦雄 (編)(1974) 板付周辺遺跡調査報告書(1) 福岡市埋蔵文化財調査報告書29

## 第2章 F-8 地点

### I 位 置 (Fig. 2-1)

福岡市博多区板付5丁目7-124

本地点は板付丘陵の南西側にあり、1974年の緊急調査により弥生時代前期末の袋状竪穴群を主とする遺構が検出されたF-9a地点の北側にあたる。

### II 調査と成果

調査は対象地の耕土処理のため、南側に $2.5 \times 4.2$ mのトレンチを設定し遺構の探査を行ない、

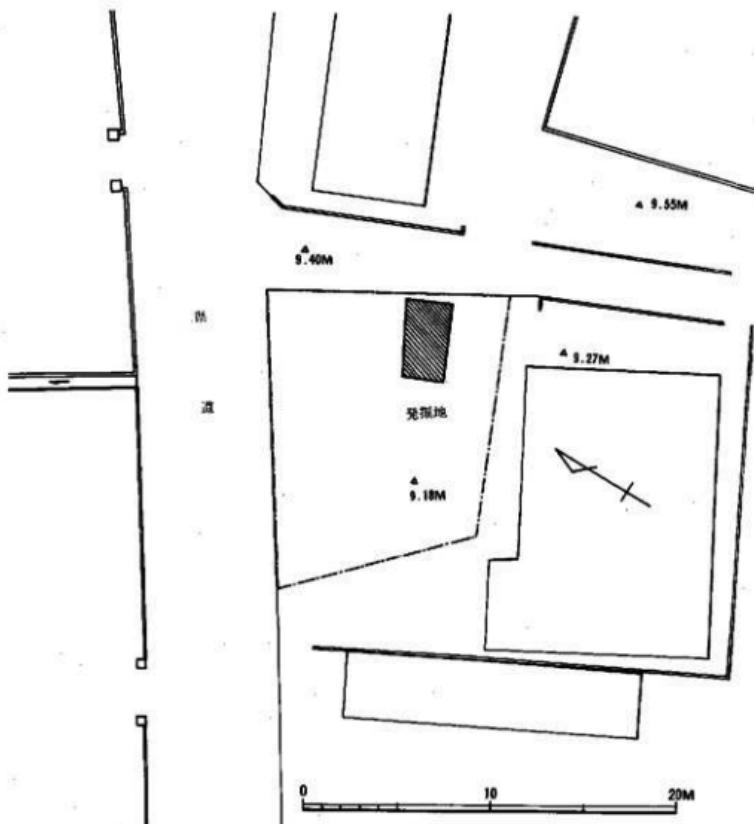


Fig. 2-1 F-8 地点測量図

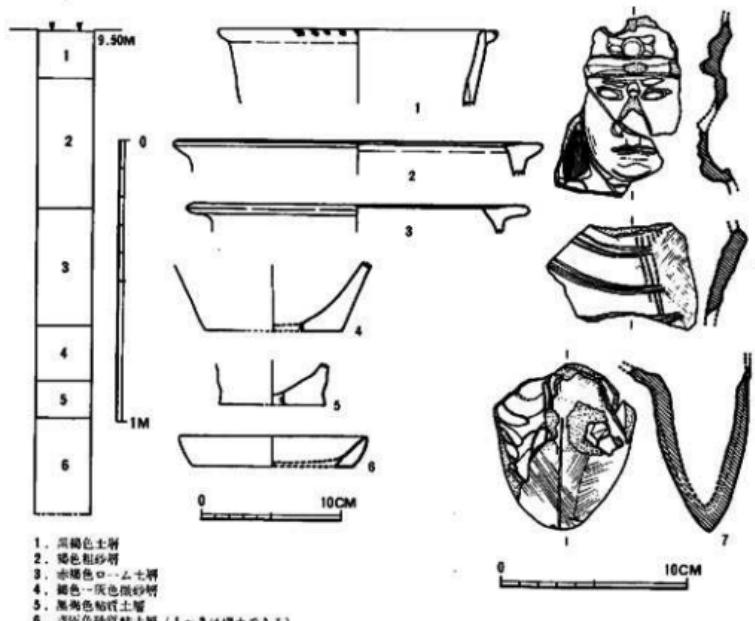


Fig. 2-2 F-8 地点上層柱状図・採集遺物実測図

土層図 (Fig. 2-2) を作成した。このうち第2層 (褐色粗砂層) は50cm弱の厚さで全面に括り、略東半部に限り舌状に認められた第3層 (赤褐色ローム土) 面が丘陵端部かと思われたが、層序の上で連続する八女粘土層と考えられる第6層 (青灰色砂質粘土層) との間に第4～5層が挟まり、第3層以上が埋土である事が知られ、他遺構の発見はなかった。遺物は若干が採集された。1は口縁に整然とした刻目を施した甕。胎土に石英混入多く、焼成不良。暗褐色。2は口縁の発達の弱い甕。胎土に石英混入多く、焼成は悪い。赤～暗褐色。器面横なで調整。3は外方に口縁の発達の良好な甕。胎土に石英混入多く、焼成は良い。褐～暗灰色。器面横なで調整。4は甕底部。胎土に石英混入多く、焼成不良。5も甕底部。石英の混入多く、焼成堅緻。褐～黄褐色。以上は弥生式土器。6は土師器皿。胎土は砂質で焼成良好。褐色。以上は第3層ブロック土内出土。7は土製神像であり、3点とも同一個体であろう。良質粘土を用い范型製作。内面に指頭痕を多く残す。下段部分は長軸に沿い左右別製のものを接合し、内面に粘土紐を貼って固着する。中段は鉛か。頭部からも神跡不明。褐色を呈す。第4層出土。

以上F-8地点では生活遺構の検出はなかったが、弥生時代前期末～中期上器の発見があり今後の調査が期待される。

(権山)

注) 後藤直・権山邦雄(編) (1975) 板付周辺遺跡調査報告書(2) 福岡市埋蔵文化財調査報告書第31集

1975年3月

## 第3章 B-12a地点

### I 調査概要

本地点は御笠川の左岸標高10mの沖積地にあたり、中世の館址と推定される礎石、瓦、古銭を出土した警察学校遺跡の東側に位置している（緊急調査地点図参照）。調査は水田畦畔に平行して16×4.5mの規模でトレーナーを設定し造構の検出にあたり、北壁で土層断面図（Fig.3-2）を作成した。トレーナー東側では、地表下約1m（標高9.3m）で厚さ30～50cmをかる黒色粘質土層（第6層）中に土器破片、流木の混在造構、杭列があり、さらにこの西側には上部に鉄分の沈着の多い黒～灰黑色粘質土層（第7層）に掘られれば南北に走る不整な2条の溝造構が認められた（Fig.3-1）。これらの造構はともにかなりの土器片をともない、時期的には併存したものと考えられる。なおトレーナー西側には遺物、造構の発見はなかった。また第8層（淡灰色土）は「八女粘土」層と考えられ標高8.7m前後である。以下検出された個別造構について説明を加える。

### II 造構と遺物

（Fig.3-1, 3-2, 3-3）

造構は溝、杭列、流木群であり、第6層（黒色粘質土層）でも土器片の出土が多くあった。出土した遺物には全て番号を付したが紙数の都合から実測図は若干にとどめ、それ以外

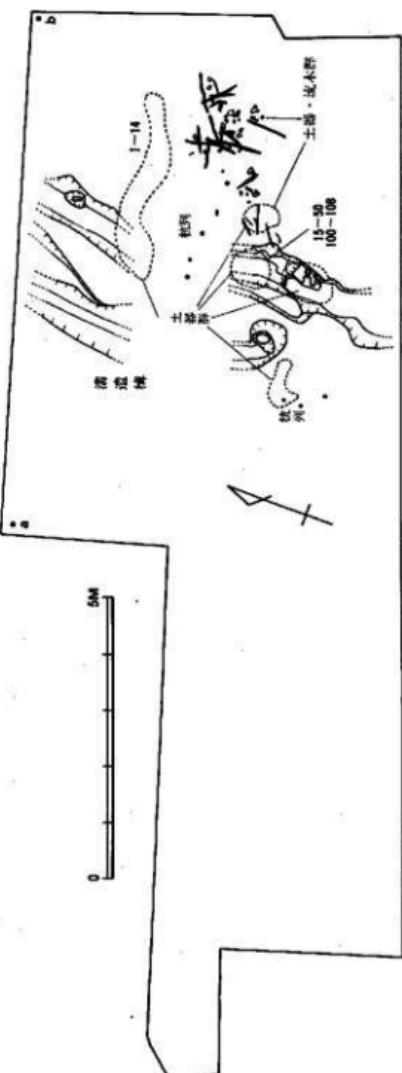


Fig. 3-1 B-12a地点造構出土状況図

については表にして末尾に付した。(Tab. 3-1)

〔参考〕  
1. 覆土・土器  
2. 黒褐色粘土質土 (第6層)  
3. 黑褐色粘土質土 (第5層)  
4. 黑褐色粘土質土 (第4層)  
5. 黑褐色粘土質土 (第3層)  
6. 黑褐色粘土質土 (第2層)  
7. 黑褐色粘土質土 (第1層)  
8. 黑褐色粘土質土 (底層)

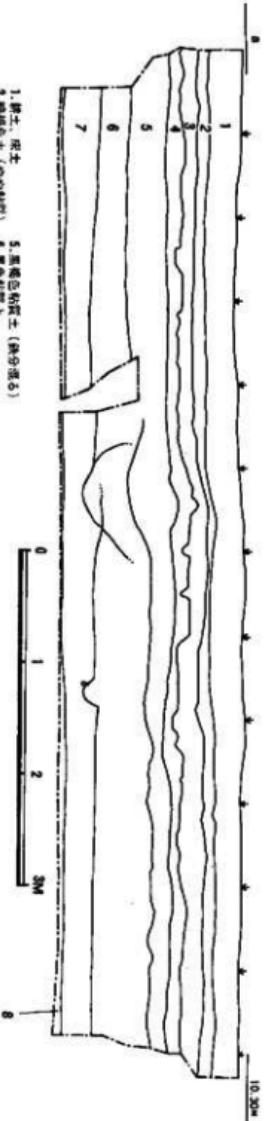


Fig. 3-2 B-12a地点北壁土層図

1. 溝 (Fig. 3-3) 溝遺構は2条が検出され、それぞれがほぼ平行して走っているが、トレンチ中央部では平面観察で明らかにし難く、掘下げのために失なった。東側の溝(東溝)は幅員1~0.7mで長さは6mまで追求できた。北側では20×40cm程度の長円形ピットに円礫が落込んでいる。溝の深さは約30~40cm程度。南側は肩部や底面にかなりの乱れがあり、各所に凹凸が甚しく、土器破片の流れ込みがみられる (No. 15~50, 100~108)。また西側の溝(西溝)は東溝とは40~80cmの間隔をもって走り、南側で切れる。北側では幅員が1~0.8mを測り、比較的整然としており、長さ約4.8mをたどる。東側の肩部は段状となる。溝の深さ約40cm、南側はプール状の溜りとなっており中央部は約30cmの豊穴状となる。覆土中より土器破片が出土している (No. 116~120)。東・西溝は第6層(黒色粘土質土)より埋込まれたものと考えられるが、上層図によれば第5層(黒褐色粘土質土層)堆積前には未だ完全に埋りきっていなかった様である。

出土土器 (Fig. 3-5~3-7) 東溝で66点、西溝5点の土器片が出土した。これらのうち復元可能なものの、器形の判明するものについては図に掲げ、他は表として末尾に付した。No. 16は小形鉢。器色は褐色を呈し、器面は荒れている。底部端はかなりいびつで、外反する脇部は凹凸が多い。外面は僅かに横の鼓目を残し、底部内面には指調整を加えている。胎土は砂質で、焼成は悪くない。口径8.2cm、高さ3.5cm。No. 42も小形鉢で手捏ね製作。器色は明褐~褐色を呈し、器面は荒れている。外面指調整後に横なで。胎土に石英粒の混入は少なく、焼成は悪くない。口径8cm、高さ2.5cm。No. 47は器台か。外面褐色、内面暗褐色を呈し、頭部は赤褐色~褐色で全体に器面の荒れがひどく混入石英粒が多く露出している。頭部に径6mmをはかる焼成前の穿孔がある。また外面端には煤状

のもの付着。No. 90・127・130は甕。外面は荒い縱横の刷毛調整を施し、上部に煤が付着しており、下半部は褐色を呈する。内面は褐～灰褐色で、横・斜位の箒削りを加えている。胎土に石粒の混入多く、焼成不良。胴部最大径26cm。No. 135は高坏。脚部は短く、中位がやや膨み、ゆるく外方にひらく形態。器色暗褐色～褐色を呈する。外面は荒い縱刷毛調整後に指で撫でおろしている。一部に煤付着。内面は下半部を幅約2cm程度の細い刷毛目調整。胎土、焼成とともに良好。No. 140は高坏か。器色は暗褐色を呈し、外面は横撫で調整を加え、全体に煤が付いている。器壁は均一で端正な造り。径12cm。(以上Fig. 3-5)。No. 24は甕底部付近。内外面褐色を呈する。外面はかなり荒い縱刷毛目調整。内面は

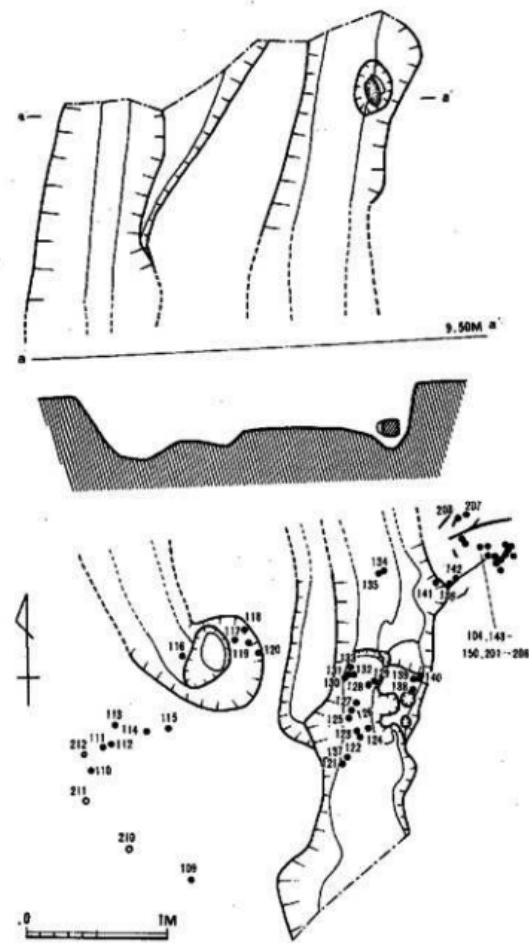


Fig. 3.3 B-I2a地点溝出土状況図

幅2～2.2cm程度の細い刷毛を下方より上方に向って使用調整。胎土に混入物少なく焼成は悪くない。No. 31は内外面ともに灰褐色を呈し、各々横・縦の細い刷毛目調整。外面に焼成時の黒斑あり。胎土精成され、焼成良好。No. 48は胴部破片。内外面褐色を呈する。外面は斜め～縦刷毛目調整。全面に煤が付着。内面は横位の強い調整。胎土は精成され、焼成良好。(以上Fig. 3-6)。No. 125は須恵器蓋。器色は灰色で、外面に削りがみられ、内面ともに輪轆撫で。胎土、

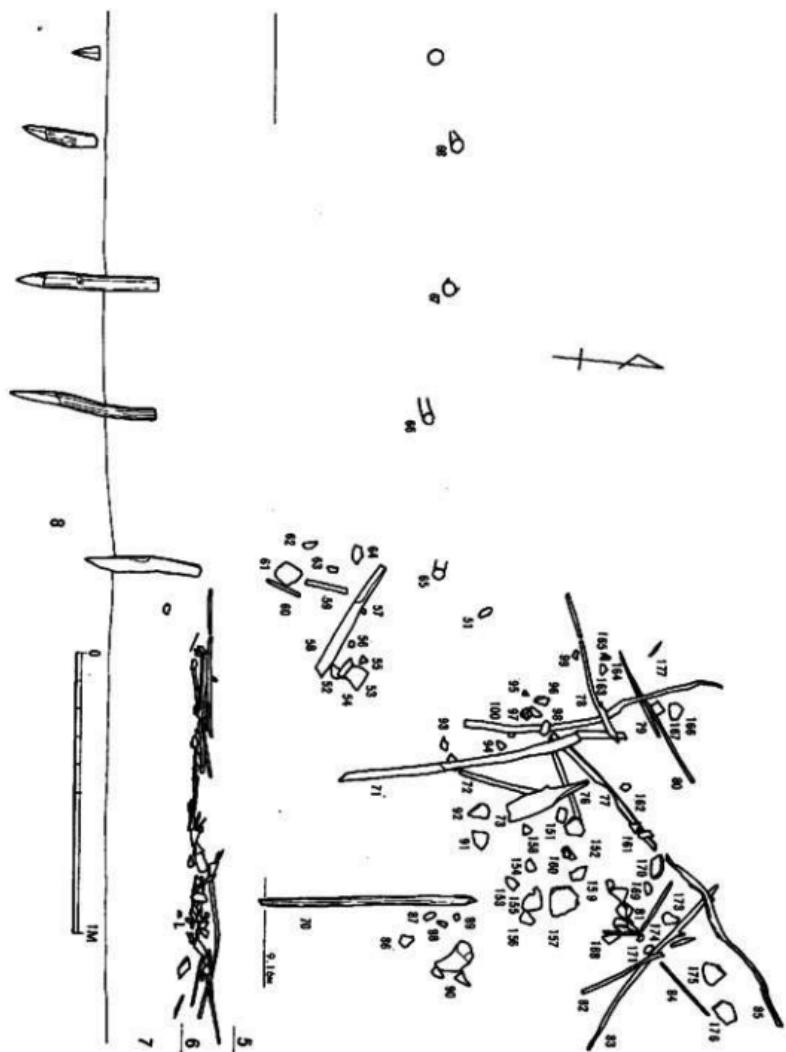


Fig. 3-4 B-12a地点木材·土器出土状况图

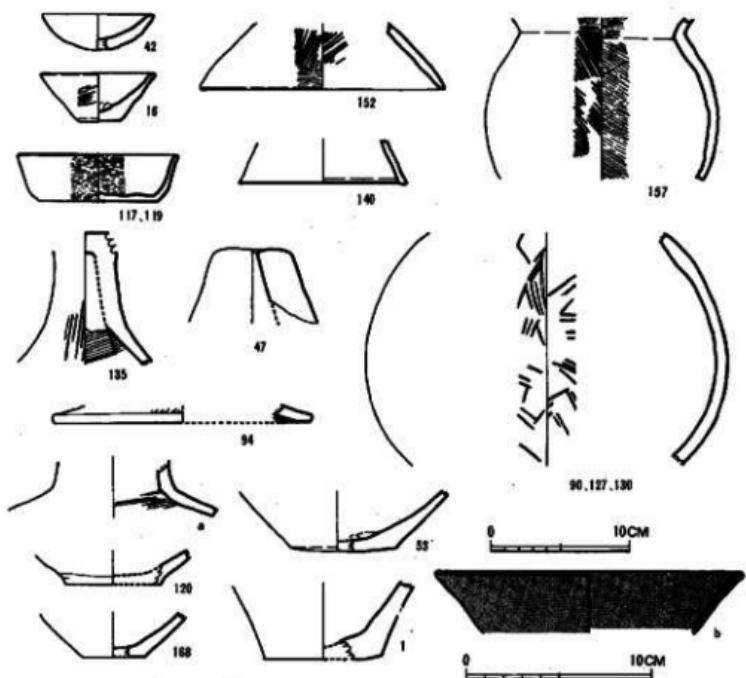


Fig. 3-5 B-12a地点出土土器実測図

焼成とともに悪くない。No. 139は縦頸部か。外面は暗赤褐色で細かい横刷毛調整。内面暗褐色。上半に同様の横刷毛目、下方は横撫で。胎土砂質で焼成は悪くない。(以上Fig. 3-7)。これらは全て東溝内出土。

次に西溝では南端に遺物が集中している。No. 117・119は須恵器杯。口縁は僅かに外反し平底の完形品である。外面は赤味を帯びた灰褐色で横撫で後に幅1.5~1.6cmの刷毛目で縦横に仕上げ撫で。胎土精良。口径11.6cm、高さ3.4cm。溝底出土。No. 120は外面褐色。内面灰褐色の底部。底部は強い撫でによって凹線状となる部分があり、いびつである。胎土には砂粒の混入少なく、焼成良好。底径6.8cm。(以上Fig. 3-5)。No. 118は内外面褐色。外面は非常に荒い縦の刷毛目調整。内面細い横へ斜めの刷毛目調整。胎土砂質で焼成はよくない(Fig. 3-7)。また同図中のNo. a(表採)は同一個体の可能性がある。これらは西溝出土。

以上のように東・西溝ではNo. 16・47・118等先秦時代終末期の様相をもった土器片が多く出土するが、一方両溝ともに溝底付近に少量ながら須恵器を包含し、特に西溝の平底杯(No. 117、119)は須恵器第V期の特徴を有し、従ってこれらの溝の使用時期は6C末~7C前半頃と考え

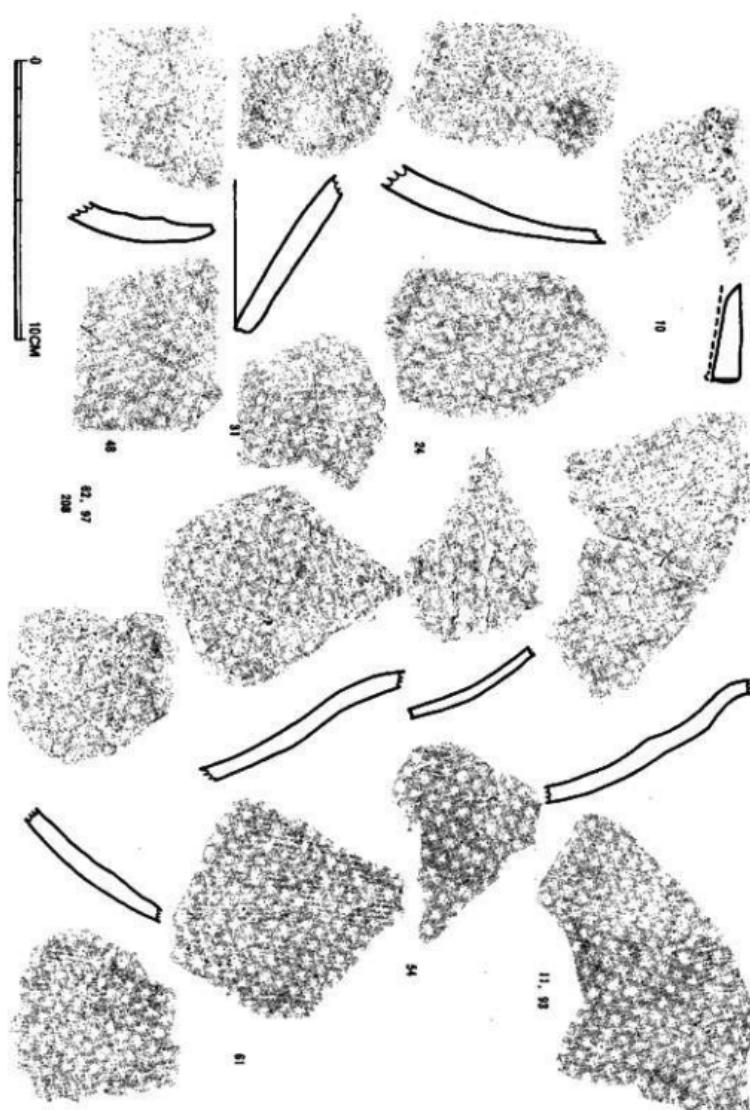


Fig. 3-6 黑色粘质土层出土土器拓影(1)

## II 遺構と遺物

られる。いずれにしても調査区が小範囲であったため構の性格・機能には触れ得ない。

### 2 流木群と杭列 (Fig. 3-1, 3-4)

前記の溝遺構の東側には第6層(黒色粘質土層)中位(標高9m前後)に土器片を多く含む流木群が長さ約3m、幅1mの範囲で北東から南西に向けて堆積(No. 51~100, 151~177, No. 104, 136, 142~150, 201~208)し、更にこれらの北側(No. 1~14)や西溝に近接する土器群(No. 109~115)が同レベルに見出された。そして流木群は殆ど径が2~3cm程度で表皮を残す小枝類であるが、それらのうちには端部に削りを加えたり、木製品らしい板状品等(No. 70, 72, 73, 76, 84)を混じている。また杭列はこれらの西側にN 86.5°Wの方向で直線的に約2mがたどれ、約50cmの間隔をもって5本(No. 65~69)が打込まれている。また西溝の南に3本の杭列がある。杭は最も東側例で(No. 65)残存する杭頭の高さが標高9mであり、他も8.6m程度であって長さ50cmを測り、いづれも第8層(淡灰褐色土層)まで達している。杭の打込まれたのは少くとも第6層(黒色粘質土層)か第5層(黒褐色粘質土層)からであろう。このことから流木群と杭列とは時期的に併行する可能性がある。杭はすべて径4~6cm程度の木材先端を削り尖らした丸杭である。杭の個々についてではFig. 3-8に示したが、現地より取上げ後の破損がある。No. 65は径5cmを計り各所に瘤が多い丸木材の約半周を3回以上削って先端を仕上げる。この際突出する瘤も削ぎ取られている。長さ37cm。No. 66は径4cmを計る丸木材の先端に3面の削りを加えている。長さ55cmをのこす。No. 67は表皮を残す径5.5cmの丸木材の端部に3面の削りを加えて先端を作る。長さ47cm。No. 68は径4cmを測る丸木材の一端に3面の削りを加え先端を作る。長さ28cm。これらの杭はいづれも先端形成に2~3回の削りを加えるが完全に全周を削ぎ落しておらず、端部にまで丸木材の原形を残すのが特徴である。次に西溝の南側杭のうちNo. 210は小木片となっているが、もとは径3cmの丸木材を使用したらしく、端部の削りは4面で鈍く、残りは材の原形を保っている。長さ6.5cm。No. 211は原径3.5cm程度の丸木であったらしく、先端部は鈍いが無駄のない2面の削りを加え、他は丸木の原形を保っている。長さ28cm。No. 212は原径4.5cm程度の丸木材で端部近くは体部の半面近くを鋭い刃物で削ぎ取っている。先端は4~5回の削りで仕上げられ、使用時の衝撃によって潰れている。長さ19.5cm。

次に流木群とこれに混在する土器および土器群の遺物のうち器形の判るもの、復元可能なものについて個別の説明を加える。

**土器 (Fig. 3-5, 3-6, 3-7)** No. 1は弥生式土器底底部。器色は外面暗褐~灰褐色で一部に煤付着。内面は明褐色で撫で調整。底部も撫でを施しているが凹凸が著しい(端部は変異が大きい)。No. 53は弥生式土器底部。内外面暗褐色~灰褐色を呈する不安定な平底で外面が丸みをもっている。底部外面は細い刷毛調整で一部に煤付着。また内面は指おさえ。胎土に石英粒の混入多く、焼成は悪くない。径7.8cm。No. 94は高环脚か。内外面明褐色で、端部は丸く撫で仕上げ、内面はかなり細かい縦横の刷毛目調整。外面はかなり荒く痕跡的である。胎土に石粒の混入少なく、焼成堅緻。径18.4cm。No. 152は鉢あるいは高环脚か。内外面は褐色~暗褐色を呈し、器面は斜め刷毛目調整後に両面とも口縁近くを横に撫でている。胎土に石英粒の混入少なく、焼成は良好。No. 157は内面暗褐色、外面は全面に煤が厚く付着する甕。扁球状の胴部に強く外反

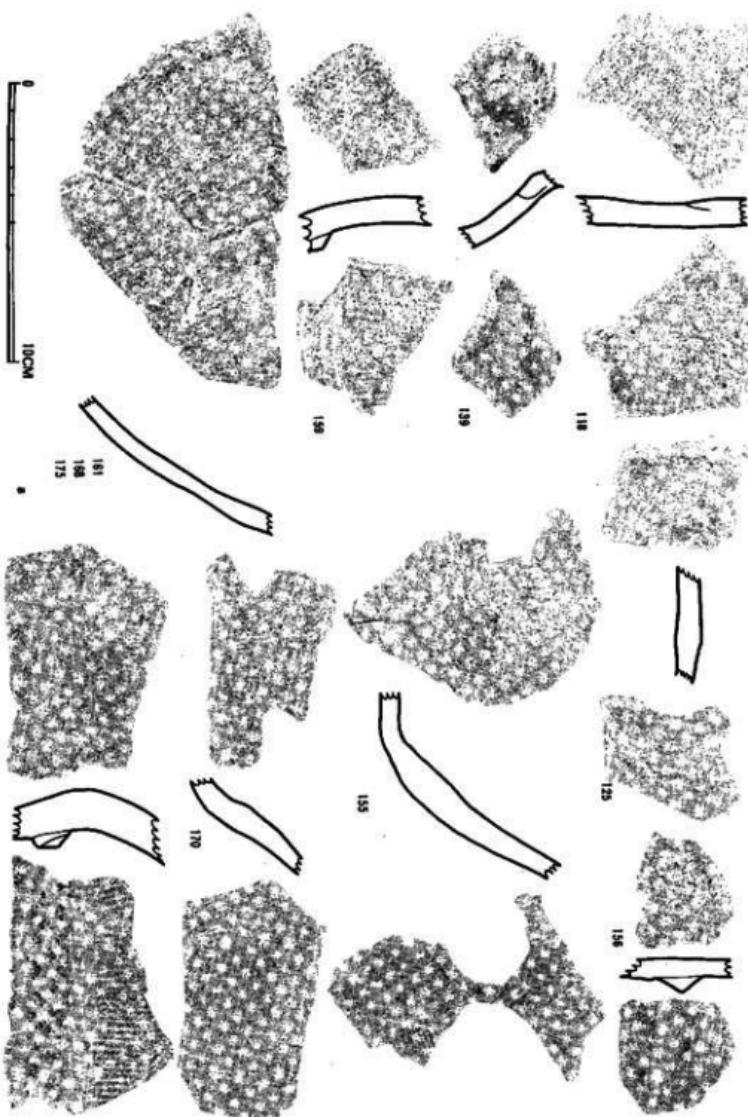


Fig. 3·7 黑色粘質土層出土器拓影 (2)

## II 造構と遺物

する口縁をもつ。内外面ともに斜め刷毛調整後に頸部を横撫で、胴部内面は更に斜めの強い指撫でを施す。胎土に石英粒の混入多いが焼成は良好。胴最大径17.8cm。No. 168は鉢か。内外面暗褐色～褐色で外面胴部に継刷毛目が痕跡的に残り、また焼成時の黒斑あり。胎土、焼成とともに不良(以上Fig. 3-5)。No. 10は口唇外側に先端が櫛齒状のもので斜格文を施した壺口縁である。外面は剥落しているが内面は細い横刷毛調整。胎土に石英砂の混入多く、焼成不良。No. 11・93は腹部部か。内、外面は褐色～黒褐色。内外面は幅2cm程度の荒い斜～横位の刷毛調整後に頸部を強く横撫で。胎土は砂質であるが、焼成は悪くない。No. 54は器色暗褐色。外面は細い乱雜な刷毛目調整で煤が厚く付着。内面は強い荒削りで混入の砂粒が起きている。胎土に石英砂多く、焼成不良。No. 61は甕か。内、外面は褐色～暗褐色。外面は非常に荒く深い継刷毛調整で下半に煤付着。内面は上部に横の刷毛目を残し、他は横撫でを加えている。胎土は砂粒を多く含み焼成は悪くない。No. 62・97・208は底部付近。器色は内、外面ともに煤が厚く付着して黒色。外面は細い乱雜な継刷毛調整。内面は下半に横位の指調整。胎土に石英砂の混入多く焼成不良(以上Fig. 3-6)。No. 155は不安定な腹底部。内外面ともに暗褐色で縱横に浅く幅広い刷毛目を施した後、底部内外面に撫で調整。胎土に石英粗砂を多く混入、焼成は良好。No. 156は突唇胴部。内外面ともに褐色。外面は鈍い三角突帯、内面は細かい斜め刷毛。器面の荒れがひどく、焼成不良で脆弱。No. 159は弥生式土器壺。内外面とも褐色で、頸部に低い肩のない貼付突帯を施し、これの上下は強い横撫で。また上部には幅約1.4～1.5cmの荒い刷毛目、内面も斜め刷毛目調整。胎土に石英粒の混入多く焼成不良。No. 161・168・175は底部付近。内外面褐色。外面は斜めの荒い刷毛目調整で上半部に煤付着。内面は痕跡的に残る。胎土、焼成ともに不良。No. 170は高环坏部か。内外面は褐色で荒い刷毛調整後に粗雜な横位の荒削り、内面は荒い継刷毛目調整後に丁寧な横撫で。胎土は非常に精成されており、焼成良好(以上Fig. 3-7)。これらのうちNo. 10・18・<sup>(a)</sup>157等の資料から流木群を包含する第6層(黑色粘質土層)は、弥生時代後期末にあたる孤塚Ⅰ・Ⅱ期から古墳時代前半期にわたると考えられる。尚ここで溝・流木群・土器群を通しての接合作業で接合した土器の番号をあげると、No. 117・119・94・172・136・141、62・97・208、11・93、166・167、161・168・175、90・127・130、147・148、53・98、204・205、であり、更に土器片の器面調整、胎土、焼成等の特徴からNo. 49・128・140、10・16、33・38・108、146・150・201、7・17・18・20・23・29・43・107・134、139・206、145・147、201・21・152、22・40・54・56・171・203等が各々同一個体と考えられる。

### 木材・木器 (Fig. 3-8)

木材類は取り上げ後の破損が大きい。No. 70は径が3.5cmを測る丸木材の一端に二面の削り先端を作り、裏面に材の原形を残す。全体に腐朽がはげしく、縦の亀裂もはげしい。長さ28cm。No. 72は径2cmを計る小丸木材。両端は鋭利な刃物で切り離されている。上端の部分は周辺からの細かい削り、下端は両面から「楔」状に削いでいる。長さ36.8cm。No. 73は厚さ0.5～0.8cmの板材で図の右辺に面取りを行ない、下方に向って若干厚さを増す。農具の一部かと考えられるが全体を知り得ない。長さ29cm。No. 76は径2～2.5cmの丸木材のあらゆる面から縦の長い削りを加えている。材は腐朽が進み縦の亀裂が多い。長さ32cm。No. 84は径約2cmの丸木材の一端に削りを加えている。まず端部に向って一削りし、この後に細かい調整を行ない丸みをも

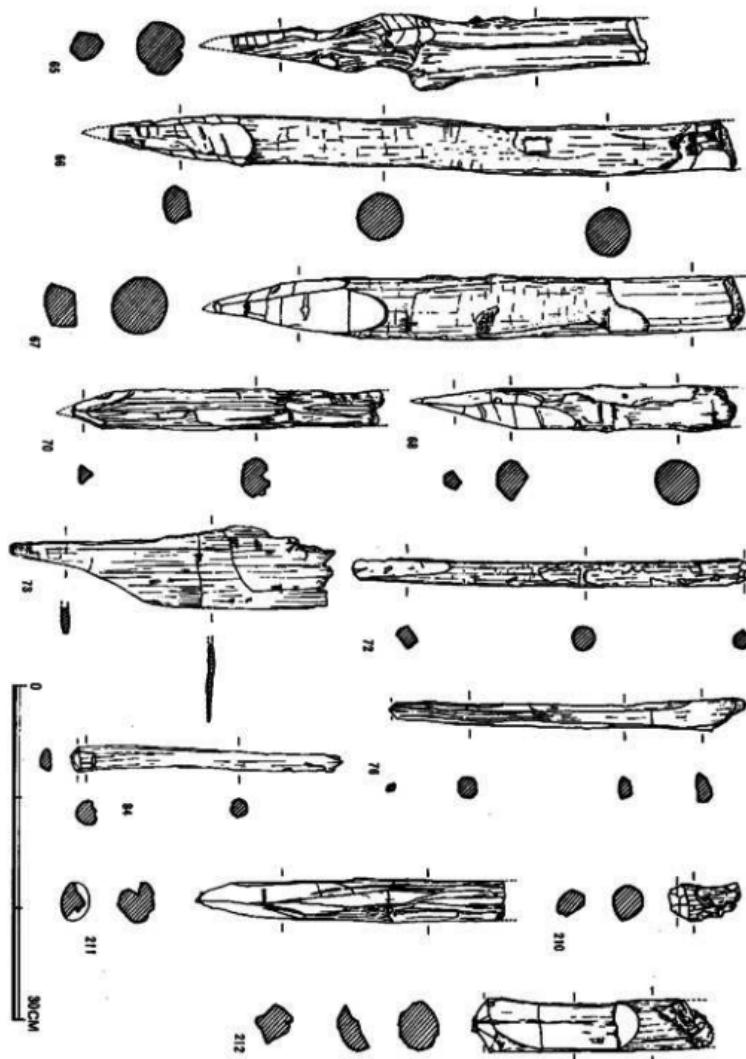


Fig. 3-8 出土木器・杭実测区 (1/5)

## II 遺構と遺物

たせて扁平に仕上げている。長さ24cm。

### 3 表面採集の土器 (Fig. 3-5)

No. aは内外面とも褐色一黄褐色を呈し、口縁部の直立する壺。上端には外反する可能性を部分的に残している。幅1.5cm程度の横刷毛目が頸部内面にみられる。胎土に砂粒の混入が多いが焼成は良好。No. bは白磁碗。直線的に上方に延びる脚部は肥厚しながらゆるく外反する。内外面とも灰色味を帯びた白色釉を施し、口縁は口禿となっている。口径16.6cm。

## III まとめ

B-12a地点では弥生時代後期末～古墳時代にかけての流木群・枕列とこれを切るほぼ7世紀前後の溝造構が標高9m前後の位置で認められたが、検出された遺構は非常に部分的であったため、解明された成果は多くない。今後の同地域の広範囲な調査が期待される。

註1) 福岡市教育委員会(編)(1971年)『福岡市埋蔵文化財遺跡地名表一總集編』 (横山)

註2) 九州大学考古学研究室(編)(1965年)『狐塚遺跡—福岡県筑後市上北島集落遺跡の調査一』

Tab. 3-1 B-12a地点出土遺物一覧表

No.	品種	器形	色調	備考	図	No.	器種	器形	色調	備考	図
1	弥生式土器	壺 突唇 壺	褐色			19	土 壺 器	不明 (頭部破片)	褐色		
2	小 円 壺	壺		花崗岩		20	土 壺 器?	不明 (頭部破片)	褐色		
3	角 壺			石英		21	土 壺 器?	不明 (頭部破片)	褐色	瓶付壺、刷毛目	
4	土 壺 器	壺または直口壺	褐色			22	*	不明 (頭部破片)	褐色	瓶付壺、刷毛目	
5						23	*	不明 (頭部破片)	黒灰色	瓶付壺	
6	土 壺 器	不明 (底部破片?)	暗赤褐色			24	*	変? 刷毛	褐色	瓶付壺、 変? 刷毛目	Fig. 3-6
7	?	不明 (頭部破片)	褐~灰色	刷毛目		25	*	不明 (頭部破片)	褐色		
8	小 円 壺			粗粒砂岩		26	?	不明 (頭部破片)	青褐色	磨滅がひどい	
9	角 壺			石英		27	?	不明 (頭部破片)	褐色		
10	土 壺 器	不明 (口縁部)	褐色		Fig. 3-6	28	土 壺 器	不明 (頭部破片)	褐色	黒斑あり	
11	土 壺 器	不明 (側面部)	黒褐色	刷毛目、瓶付壺	Fig. 3-6	29	?	不明 (頭部破片)	黒色	瓶付壺	
12	*	不明 (頭部破片)	褐色	黑曜石		30	?	不明 (頭部破片)	褐色	磨滅がひどい	
13	弥生式土器	圓突唇壺	褐色	變形瓶片であ る?		31	土 壺 器	高 扇 壺 (?)	灰褐色	磨滅がひどい 刷毛目	Fig. 3-6
14	二次加工のある 角 壺			黑曜石		32	*	不明 (頭部破片)	褐色		
15	土 壺 器	不明 (頭部破片)	暗褐~黑色	蓮瓣		33	*	?	?		
16	*	体 (?)	褐色	盤目をのこす	Fig. 3-5	34	?	不明 (頭部破片)	褐色		
17	*	不明 (頭部破片)	黒灰色	蓮瓣、刷毛目		35	瓶 片		褐色	黒曜石	
18	土 壺 器	不明 (頭部破片)	黒~墨褐色	蓮瓣、刷毛目		36	何であるか 不		黒色	タカシ小僧?	

No.	器種	器形	色調	備考	図	No.	器種	器形	色調	備考	図
35	骨であるか不明	不明 剥離破片	暗褐色			90'	土師器	剥離破片	暗褐色	横毛目 黒斑あり	
36	土師器壺	壺	暗褐色			90"	共生式土器	口部	灰褐色		
39	?	不明 剥離破片	暗褐色			91	土師器	不明 剥離破片	淡黃褐色		
40	土師器	不明 剥離破片	暗褐色	剥付着、刷毛 タグリ		92	?	不明 剥離破片	褐色	表面がぼけしい	
41	?	不明 剥離破片	暗褐色	黒蓋がぼけしい		93	土師器	焼(?)葉部	緑一黑色	剥付着、刷毛目	Fig.3-6
42	土師器	小形 輪唇 燒(?)葉部	褐色	手捏ねか	Fig.3-5	94	共生式土器	口部	不明 剥離破片		Fig.3-5
43	土師器?	燒(?)葉部	暗褐色~黑色	剥付着、刷毛目		95	土師器	不明 剥離破片	褐色		
44	土師器	不明 剥離破片	暗褐色	刷毛目		96	土師器	不明 剥離破片	褐色	刷毛目	
45	?	不明 剥離破片	黑色			97	?	不明 剥離破片	暗褐色		Fig.3-6
46	土師器	不明 剥離破片	暗褐色	剥付着、刷毛目		97'	土師器	不明 剥離破片	褐色	刷毛目	
47	共生式土器	器台(?)	褐~暗赤褐色		Fig.3-5	97"	?	不明 剥離破片	褐色	剥付着、刷毛目	
48	土師器	不明 剥離破片	褐色	黒斑あり	Fig.3-6	97"	?	不明 剥離破片	褐色	刷毛目	
49	*	不明 輪唇 口部	褐色			98	土師器	不明 剥離破片	褐色	刷毛目	
50	瓦器質土器	不明 剥離破片	灰色	黒斑あり、焼き は非常に堅硬		98'	共生式土器	不明 剥離破片	暗褐色		
51	小円壺			花崗岩		99	土師器	不明 剥離破片	暗褐色	刷毛目	
52						100	泥	木			
53	共生式土器	壺底部	暗褐色	研磨	Fig.3-5	101	?	不明 剥離破片	暗褐色		
54	土師器	不明 剥離破片	暗褐色	焼付着、刷毛目 タグリ	Fig.3-6	102	土師器	不明 剥離破片	褐色	刷毛目	
55	*	不明 剥離破片	暗褐色	焼付着、刷毛目		102'	共生式土器	不明 剥離破片	褐色		
56	*	不明 剥離破片	暗褐色	焼付着、刷毛目		102"	?	不明 剥離破片	褐色		
57	角	壺		花崗岩		103	土師器	不明 剥離破片	暗褐色	剥付着	
58	直	水				104	*	不明 剥離破片	褐色		
59	*					105	共生式土器(?)	不明 剥離破片	褐色		
60	*					106	土師器	不明 剥離破片	暗褐色	刷毛目	
61	土師器(?)	不明 剥離破片(?)	暗褐色	窓・横毛目	Fig.3-4	107	*	不明 剥離破片	黑灰色	剥付着	
62	土師器	不明 剥離破片	褐色	剥付着、刷毛目	Fig.3-6	108	共生式土器(?)	不明 剥離破片	褐色	剥離(?)	
63	?	不明 剥離破片	褐色			109	須恵器	不明 剥離破片	灰色	青海波文	
64	土師器	不明 剥離破片	灰褐色	タタキ		110	?	不明 剥離破片	暗褐色	黒斑あり	
65~65	泥木					111	?	不明 剥離破片	褐色	刷毛目	
66	土師器	不明 剥離破片	暗褐色			112	土師器	不明 剥離破片	褐色	剥付着、刷毛目	
67	共生式土器(?)	不明 剥離破片	褐色			113	*	不明 剥離破片	暗褐色	焼付着、刷毛目	
68	?	不明 剥離破片	褐色			114	*	不明 剥離破片	褐色	焼付着、刷毛目	
69	?	不明 剥離破片	褐色			115	*	不明 剥離破片	暗褐色	刷毛目	
70	?	不明 剥離破片	褐色		Fig.3-5	116	?	不明 剥離破片	暗褐色		

## 田主とめ

No.	器種	器形	色調	備考	図	No.	器種	器形	色調	備考	図
117	角匙器	杯	赤褐色	赤褐色	Fig.3-5	147	土鍤器	不規則破片	褐色	爆付着、刷毛目	
118	土鍤器	不明 圓盤破片	褐色	褐色	Fig.3-7	148	*	不規則破片	褐色	爆付着、刷毛目	
119	單匙器	杯	赤褐色~灰色	赤褐色	Fig.3-5	149	*	不規則破片	褐色~赤褐色	爆付着、刷毛目	
120	?	不明 圓盤破片	褐色		Fig.3-5	150	*	不規則破片	褐色	爆付着、刷毛目	
120'	土鍤器	不明 圓盤破片	暗褐色	褐色		151	?	不規則破片	褐色		
121	小円壺			黄褐色		152	?	体形	淡赤褐色		Fig.3-5
122	*			黃褐色		152'	上斜器	不規則破片	褐色	爆付着、刷毛	
123	流木					152''	*	不規則破片	褐色	爆付着、刷毛	
124	?	不明 圓盤破片	褐色			153	土鍤器	直口 底部附近	褐色~赤褐色	刷毛目	
125	直毛器	圓盤部近 底付近	灰色		Fig.3-5	154	土鍤器	不明 圓盤破片	褐色	刷毛目	
126	土鍤器	不明 圓盤破片	明褐色	褐色		155	*	不規則破片	褐色	刷毛目	Fig.3-7
127	*	不明 圓盤破片	褐色		Fig.3-5	156	土鍤器	不明 圓盤	褐色	刷毛目	Fig.3-7
127	*	不明 圓盤破片	褐色			157	土鍤器	直口 底部	褐色~黑色	葉が釋くつ ついている	Fig.3-5
128	*	直环壺	褐色			158	*	不明 圓盤破片	淡褐色	刷毛目	
129	*	不明 圓盤破片	褐色	褐色		159	弦生式土器	直口 底部	暗褐色	刷毛、刷	Fig.3-7
130	*	不明 圓盤破片	褐色		Fig.5	160	土鍤器	不明 圓盤破片	褐色	爆付着、刷毛目	
131	?	不明 圓盤破片	褐色			161	?	不明 圓盤破片	褐色		Fig.3-7
132	?	不明 圓盤破片	褐色			162	土鍤器	不明 圓盤破片	褐色	爆付着、刷毛目	
133	?	不明 圓盤破片	灰褐色			162'	*	不明 圓盤破片	褐色		
133'	上斜器	不明 圓盤破片	褐色			163	*	不明 圓盤破片	暗褐色	爆付着、刷毛目	
133''	*	不明 圓盤破片	褐色			164	?	不明 圓盤破片	褐色		
134	*	不明 圓盤破片	褐色	爆付着、刷毛目		165	土鍤器	不明 圓盤破片	褐色	刷毛	
135	?	不明 圓盤破片	黑~褐色		Fig.3-5	166	*	不明 圓盤破片	褐色	爆付着	
136	土鍤器	直环脚部	暗褐色	暗褐色		167	*	不明 圓盤破片	褐色	爆付着	
137	*	不明 圓盤破片	褐色			168	*	不明 圓盤破片	褐色~暗褐色	褐色目 黒度あり	Fig.3-6
138	?	不明 圓盤破片	褐色			168'	*	不明 圓盤破片	暗褐色	爆付着	
139	土鍤器	不明 圓盤破片	暗褐色	褐色	Fig.3-7	169	*	?	褐色	刷毛目	
140	*	直环脚部	褐色		3-5	*	不明 圓盤破片	褐色	爆付着、刷毛目		
141	*	不明 圓盤破片	褐色				弦生式土器	不明 圓盤破片	褐色	3片あり	
142	流木						土鍤器	不明 圓盤破片	褐色	爆付着、刷毛目	
143	土鍤器	不明 圓盤破片	翠褐色	爆付着			*	不明 圓盤破片	褐色		
144	*	不明 圓盤破片	褐色	爆付着		169					
145	*	不明 圓盤破片	褐色	爆付着		170	土鍤器	直环脚部	褐色	爆付着、刷毛目	Fig.3-7
146	*	不明 圓盤破片	黑色	爆付着、刷毛目		171	*	不明 圓盤破片	暗褐色	爆付着、刷毛目	

No.	器種	器形	色調	備考	図
172	土器器	不明 刷毛板片	白褐色	刷毛目	
173	*	不明 刷毛板片	褐色	焼付着、刷毛目	
174	?	不明 刷毛板片	明褐色		
175	二重器	不明 刷毛板片	暗褐色	焼付着、刷毛目	Fig.3-7
176	*	不明 刷毛板片	暗褐色	焼付着、刷毛目	
177 ~ 200	甕				
201	土器器	不明 刷毛板片	暗褐色	焼付着	
201'	*	不明 刷毛板片	暗褐色	焼付着、刷毛目	
202	?	不明 刷毛板片	暗褐色	刷毛目	
203	土器器	不明 刷毛板片	暗褐色	焼付着、刷毛目	
204	*	不明 刷毛板片	暗褐色	焼付着、刷毛目	
205	*	不明 刷毛板片	褐色	刷毛、黒斑あり	
205'	*	不明 刷毛板片	暗褐色	焼付着、刷毛目	
206	*	不明 刷毛板片	暗赤褐色	刷毛目	
207	?	不明 刷毛板片	暗褐色	刷毛目	
208	土器器	不明 刷毛板片	褐色	焼付着、刷毛目	Fig.3-6

Tab.3-2 溝底出土土器

No.	器種	器形	色調	備考	図
1	土器器	不明 刷毛板片		2	
2	不明土器			2	

Tab.3-3 B-12a 表探

No.	器種	器形	色調	備考	図
1	甕	口 刷毛	刷毛1		
2	土器器	口 刷毛	刷毛3		
3	弥生式土器	刷毛	刷毛1		

Tab.3-4 黒色粘質土直上

No.	器種	器形	色調	備考	図
1	土器器	直 刷毛	刷毛1		
2	弥生式土器	直 刷毛	刷毛1		
3	不明土器	直 刷毛	刷毛1		

Tab.3-5 杖列及び流木付近

No.	器種	器形	色調	備考	図
1	土器器	直 刷毛	刷毛5		
2	弥生式土器	直 刷毛	刷毛1		
3	不明土器	直 刷毛	刷毛1		
4	小甕			花 刷毛2 の 直1	

Tab.3-6 B-12a 黒色粘質土層

No.	器種	器形	色調	備考	図
1	須恵器	环口縁部			
2	小瓦			花 刷毛3 の 直1	
3	土器器	口 刷毛	刷毛34 刷毛1		
4	弥生式土器	口 刷毛	刷毛2 刷毛1		
5	不明土器	刷毛	刷毛5		
6	陶質土製品			土質か(まさ れ込み?)	

## 第4章 諸岡遺跡E区

### I 調査概要

(註1) 今年度は1974年調査のD区東側の段落ち平坦部分を調査した(Fig. 4-1) D区では土師質焼形土器・磁器類を出土する中世期の墳墓遺構群が検出され、今回調査区でも類似遺構のひろがりが予想された。E区での出土遺構は、溝、土塹、小豊穴群、それから昨年度未掘の第6号地下式横穴東端部である。各れも後世の削平によって遺構の上端は失なわれている。

### II 遺構と出土遺物 (Fig. 4-2~4-5)

#### 1. 溝

調査区西側の段落ち部分に沿い、北西~南東に走るほぼ平行な4条の溝が検出された。なお出土磁器類については亀井明徳氏の分類に従って記す。

#### 第1号溝

調査区北端に位置し、褐色ローム層に掘込まれ、北側を失う。溝幅約1m、長さは4.8mを残すにすぎないが、他の同遺構と比較して整然としている。またD-2号より切られている。覆土は黒色の腐植質土層で、内部より白磁器2、青磁器1、陶器1、土師器2、土師質土器9、ナイフ形石器1、剝片2が出土した。遺物はいづれも小破片であり、個々についてTab. 4-1に示し、復元可能なものは図に描かれた(Fig. 4-3 4-5)。95は内外面に淡緑色釉を薄く掛けた小形の磁器皿。青磁器か。内外の水裂が著しく、口縁は使用のためか禿げている。胎土は灰色をおびた白色。口径7.8cm。88は胴部外面が暗赤褐色。口縁~体部内面が黒褐色を呈する。小形變形陶器。小さく平坦な口縁を有し、内外面とも輪轉なで。全て生地が見えており、粒状の隆起が廻りに見えガサガサしている。焼成堅緻。口径12.2cm。104は褐~明褐色を呈する。土師器碗。器厚は均一で焼成良好。口径13.6cm。aは内外面ともに灰白色釉をかけた白磁碗。口縁は玉縁状となり仕上げは非常に良好な秀品。内外面ともに細かい水裂が著しい。口径15cm。白磁碗II-a類。bは褐色を呈する上師質土器塊。内壁気味に直口する口縁は端部で尖る。胎土は精成されており、焼成は脆弱。口径15.6cm。94は黒曜石製の削片であり、96は黒曜石製のナイフ形石器の先端部で一部に二次加工が加えられている。99は黒曜石製のナイフ形石器で縦長剝片を素材とした打面を基部として左の側辺部に刃溝し加工を加えており、98と同一個体であり類例は佐賀県平沢良遺跡等にみられる。

#### 第2号溝

北西から南東にゆるく蛇行しながら走る不整な溝であり、北側で消滅している。現存部では長さ約35m、北部で幅1m程度と狭く、中部では約2mの幅を有し、内部は長さ10m、巾50cm程度の狭長な段となっており、遺構の切り合いによって生じたものかも知れない。東部では急に幅員を減じて切れる。覆土は黒色の腐植質土で内部より白磁器9、青磁器5、磁器6、土師器13、土師質土器33、土製品1、瓦1、弥生式土器2、鉄器1、礫6点の各遺物が出土した。

第4章 諸岡造林E区

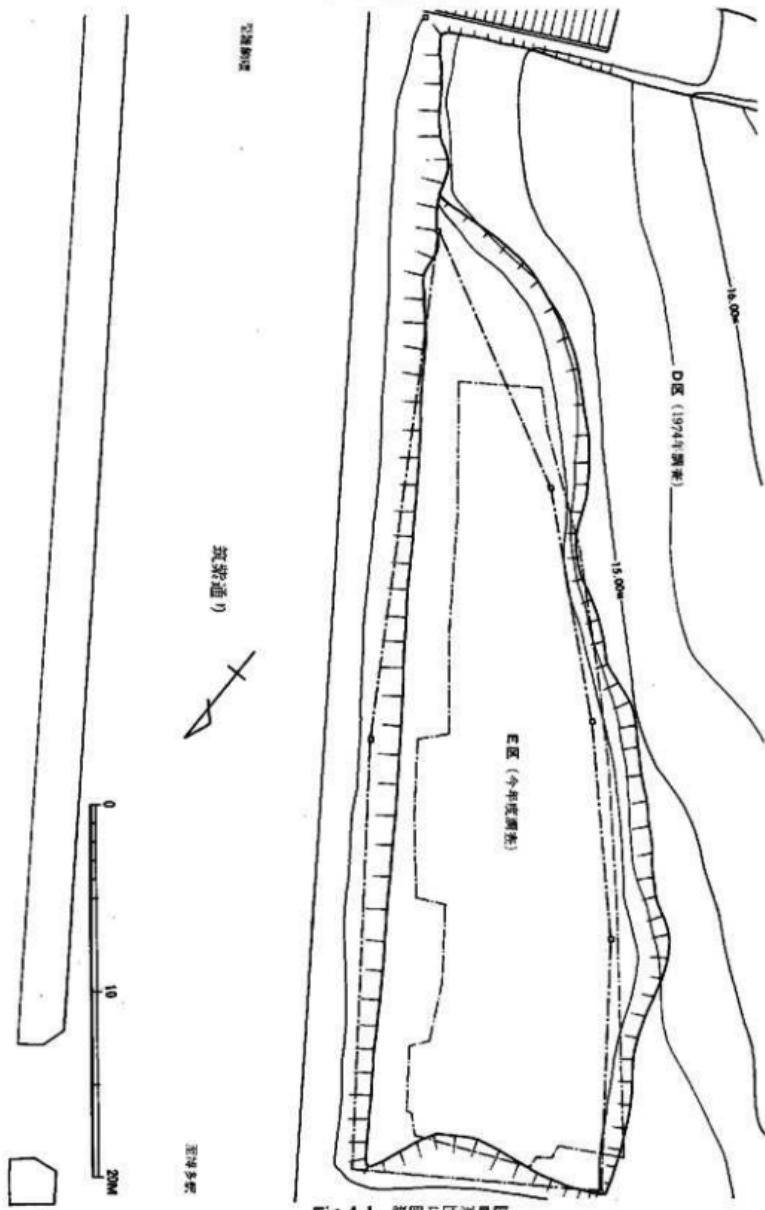


Fig. 4-1 諸岡E区測量図

II 造構と出土遺物

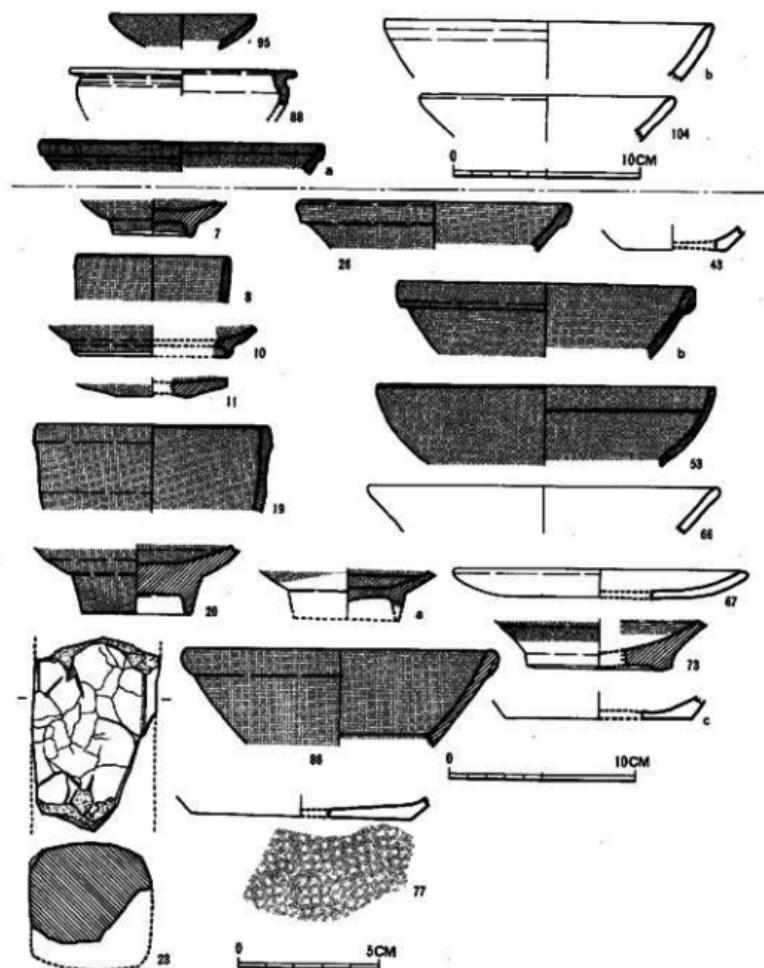


Fig. 4-3 造構出土遺物実測図(1)  
(上段・第1号構、下段・第2号構)

小破片のため個別形状は Tab. 4-1 に示し、復元可能なものののみ図に掲げた (Fig. 4-3)。7 は内外面に淡い青色釉を薄くかける白磁器碗。高台の脛付部分と内外端部は落胎となり褐白色を呈する。高台は低く、胴部は内側気味に上方に伸びる。底径 4.2cm。白磁碗 I-a 類。8 は薄い淡灰色釉をかけた白磁器 (?) 碗。口縁はほぼ直立しており、外面に釉が厚い。胎土白色。口径 8 cm。10 は内外面に薄く白色釉をかけた白磁器 (?) 碗。低い高台は端部で斜めに荒削り

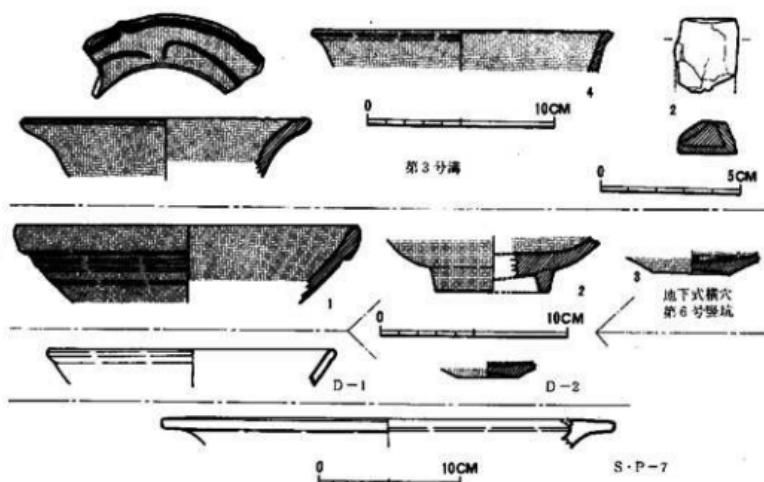


Fig. 4.4 遺構出上遺物実測図② (Dは上塙、S・Pは小堅穴の略)

を加え、尖っている。底径 8 cm. 11は外面上方と内面に淡緑色釉をかけた青磁器皿。底部は上げ底で、端部より 0.5cm あがった部分から胴部が屈折する。胎上褐色。底径 4.1cm. 19は外而淡い緑色、内面淡灰色釉を厚くかけた白磁器碗。ほぼ直立する胴部は口縁に至って玉線状に膨らみ、端部は施釉されていない。口径 12.4cm. 20は内外面に薄く褐色釉をかけた白磁器碗。高い高台と分厚い底部が特徴的で疊付と底部外而は施釉されない。また見込みと体部内面との

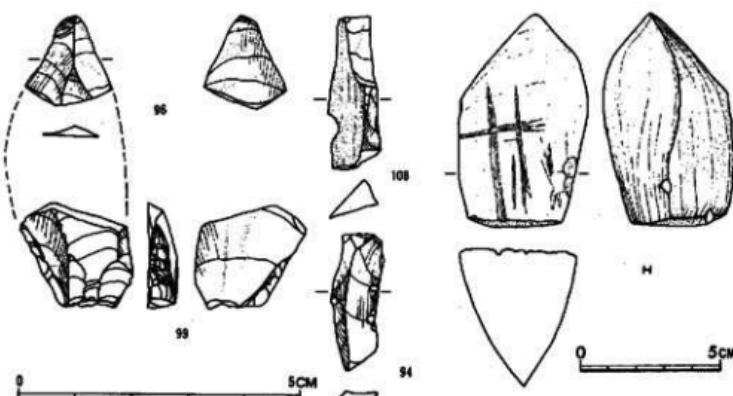


Fig. 4.5 E区出土石器実測図

## II 遺構と出土遺物

境に棱をもち、内外面に細かい水裂が著しい。胎土は褐色。底径 5.8cm。白磁碗 II-a 類。a も同様の形態をもつ白磁碗。高台外面と胴の一部を除き底部内面淡緑色釉を施し、内面見込みとの境に一条の沈線を有する。23は方柱状土製品で欠損部が多い。断面形は正面が隆起して丸みをもち、側面は直線をなす。表面は網目状の細かい亀裂が多い。外表近くはクリーム色で内部になるに従って灰色を呈する。支脚か。胎土に混入物は全くなく、焼成は悪くない。26は内外面ともに淡い褐色の釉をかけた白磁碗。口縁部は折返しの玉縁状となり、造りは整っている。内外面ともに細かい水裂が多い。胎土は褐色を帯びた白色。口径 14.2cm。白磁器碗 II-a 類。43は暗褐色を呈する土師質上器皿。胎土に石粒の混入多く、焼成不良。底径 5.6cm。b は内外面に淡灰色釉を施す白磁碗。口縁は折返しの玉縁状となり、胴部外面下半は施釉しない。胎土は白色。白磁碗 II-a 類。53は内外面に淡緑色釉を薄くかけた青磁器皿。胴は内側に、直口する口縁は使用のため禿げている。口縁より少し下った体部内面には横位の沈線一条がひかれる。胎土は淡灰色。口径 18cm。66は褐色を呈する土師質土器皿。直線的に外方に伸びる胴は変化なく直口する。口縁付近に黒斑がある。口径 19cm。67は褐白色を呈する上師質土器皿。非常に浅く、口径 15.8cm。器高 1.4cm。胎土は精成され焼成は脆弱。73は淡緑色釉をかけた白磁器碗。低い安定した高台は外側端部を斜めに範削り。外面は高さ 1.5cm の部分以上に施釉し、やや上った部分に横位の沈線を描く。また内面見込みとの境は棱を有する。胎土は褐白色。底径 6.6cm。白磁器碗 II-b 類。77は褐～赤褐色を呈する土師器皿。底部に粘土巻き上げの状態をよく残す。胎土に石英粒を若干含み、焼成は脆弱。底径 7.8cm。c は赤褐色を呈する土師器皿。胎土精成、焼成不良。底径 10cm。86は内外面ともに褐色釉をかけた白磁碗。口縁は折り返しの玉縁状となる。シャープさに欠ける仕上げで内外面は水裂が著しく、見込みとの境は棱を有する。胎土は褐色。口径 16cm。白磁碗 II-a 類。これらのうち 8・10 の白磁器類は近世国産であり、流れ込みであろう。

### 第3号溝

第2号溝に近接して幅約 1m、長さ 8m を残し、南端で消滅する。覆土は黒色の腐植質土に褐色ローム土のブロックを混じ、内部に青磁器 2、磁器 1、土師器 2、鐵器 1、碟 1 点の遺物が出土した。磁器・鐵器は図に掲げ (Fig. 4-4)、他は Tab. 4-1 に示した。1 は内外面に分厚く緑色釉をかけた青磁器皿。口縁は不揃いな小さな波状の口縁をなし、これに沿う内面に範描きによる 2~3 本の沈線文が描かれる。また体部内面にはこれより幅ひろい範描き曲線文を施す。外面は縱横に、内面は縱の水裂が著しい。胎土は灰色味を帯びた白色。口径 15.8cm。4 は淡い青緑色釉を厚くかけた青磁器碗。直線的に上方に伸びる胴は口縁で小さく外反する。口縁端部は若干肥厚し、沈線を施す。胎土は白色。口径 16.2cm。2 は断面蒲鉾形となる鐵器。現存部分で長さ 2.6cm、幅 2.3cm、厚さ 1.15cm をかかる。三角柱状の芯に板状鐵を被せている。

### 第4号溝

調査区北端に位置し、第2号溝に切られる。幅約 60cm、長さ 6m を残し、北側で消滅する。覆土は黒色の腐植質土で内部より石鍋かと考えられる滑石片 (78)、磁器 (79) 等二点が出土したが図に供し得ない。

## 2. 土塙

土塙は3基が検出された。各れも小形の堅穴であるが性格は不明。

### 第1号土塙 (D-1)

不整な隅丸長方形土塙で長さ0.75×100cmをはかり、深さ5cm程度である。内部より土師質土器8、須恵器1、弥生式土器1点の遺物が出土した。Fig. 4-4の図は外面黒灰色、内面暗灰～暗褐色を呈する土師質土器塙。内面横なで、胎土精成され、焼成は悪くない。口径15.2cm。

### 第2号土塙 (D-2)

隅丸長方形土塙で長さ1.7×1.2mをはかり、深さ約20cmを残す。内部より青磁器1、土師質土器12、石鍋片1、剥片2点が出土した。Fig. 4-4の図は淡緑色釉をかけた青磁器皿。底部端および外面には施釉しない。内面には細い油溜りをもつ。胎上は灰色を帯びた白色。底径3cm。石器類 (Fig. 4-5) では105が表面に自然表皮を残す剥片である。また108は縦長剥片で縁辺には使用痕がみられる。いずれも黒曜石。

### 第3号土塙 (D-3)

比較的整った隅丸長方形土塙で長さ0.95×0.65mをはかり、深さ約10cmを残す。内部より弥生式土器かと考えられる土器口縁部、突帶が出土したが図に供し得ない。

## 3. 小豈穴群 (S-P 1-9)

掘立柱柱穴かと考えられるピット群であるが建物としてのまとまりは窺えない。径は1-28cm、2-24cm、3-22cm、4-18cm、5-40cm、6-24cm、7-24cm、8+9-26cmをはかり、

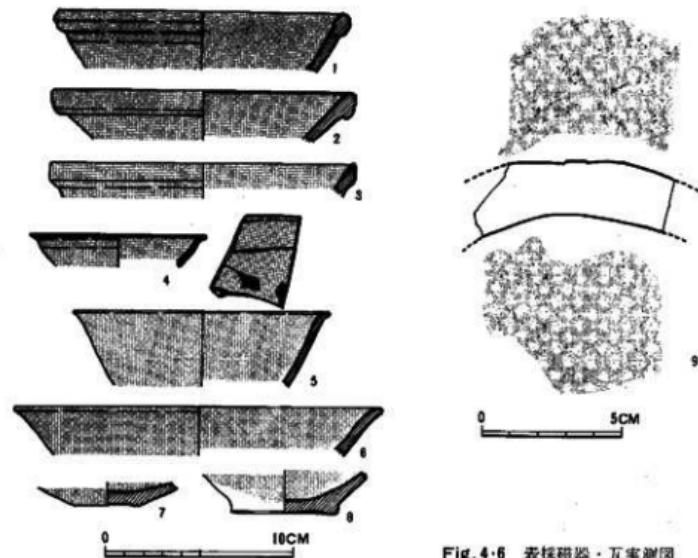


Fig. 4-6 表様磁器・瓦実測図

## II 遺構と出土遺物

深さ10cm程度。各れも不整な円形である。櫻土内から若干の遺物が出土しており、S・P-1-土師質土器2片、S・P-5-土師質土器2片、青磁器片、S・P-7-弥生式土器片2片、S・P-8-弥生式土器片、土師質土器各1片等である。このうちS・P-7出土のものは、Fig.4-4に掲げた。器色は淡い赤褐色～褐色を呈する弥生式土器壺。口縁部は上端がうねり、内唇を欠失する。胎土に砂粒の混入多く、焼成は不良。復元口径32.4cm。中期中頃の所産であろう。

### 4. 第6号地下式横穴堅坑

同遺構は昨年度調査が行なわれたもので、長軸をS-70.5°-Wに向け、主室が不整円形を呈し、全長4.54mをはかる施設であるが境界線外に伸びる部分の上面は未掘であったため今回これを調査した。内部より磁器5、土師質土器1、弥生式土器1点が出土した。このうち磁器3点のみが復元可能であった（Fig.4-4）。1は淡い灰白色釉を内外面に厚くかけた白磁器碗。口縁は玉縁状となり、折返し部の下端には釉が厚くとまる。また胴外面は整形時の削りによるものか凹凸が著しい。胎土は褐色を帯びた白色。口径18cm。白磁器碗II-a類。2は高台疊付、底部外面を除いた内外面に厚さ約0.5mm程度の淡緑色釉をかけた白磁器碗。高台外部端は小さく覓削りを加えている。胴部は内壁し、高台の幅広い疊付は安実感を与える。露胎は灰色。底径6cm。白磁器碗II-b類。3は淡緑色釉をかけた青磁器皿。内面見込みを2本単位の横描き沈線文で7～8区画に分割している。油滴り部分はかなり不規則である。底部あげ底。露胎は淡灰色。底径4cm。

### III 表面採集遺物 (Fig.4-5, 4-6)

Fig.4-5の5は花崗岩製の砥石で、表面には鉄器等の研ぎ痕がみられる。時期は不詳。磁器・瓦 (Fig.4-6) 1～3は各れも折返しの玉縁状口縁を有する白磁器碗。やや褐色色を帯びた淡い灰色釉を全面に施釉。胎土は褐色をおびた白色。2では口縁下外面に水裂が著しい。口径は1-15cm、2-15.8cm、3-16.2cm。白磁器碗II-a類。4は淡く緑色をおびた白色釉を内外面にかけた小型の白磁器碗である。内壁気味に上方に延びる胴部が口縁部に至って小さく外反し、平坦面をつくる。内外面ともに細かい氷裂が多い。胎土は褐色をおびた白色。口径9.4cm。5は内外面ともに僅かに緑色を帯びる灰色釉をかけた白磁碗。ゆるく内壁しながら上方に延びる胴部は口縁に至って小さく外反する。体部内面では口縁よりやや下った位置に一条の横位沈線、更に下部には11本単位の横描き文を内面下部より下方に向って施す。胎土は白色。口径13.8cm。6は内外面ともに若干緑色をおびる白色釉をかけた白磁碗。口縁は全体にゆるく外反している。胎土は白色。口径19.8cm。7は淡い褐色釉を施した白磁皿。やや上げ底の底部外面および端部付近には釉をかけない。胎土は褐色。底径3.4cm。8は白色釉を薄くかけた白磁碗。胴部から高台への移行点は不明瞭で端部は削りを加える。全体に安定した感じを与える。胎土白色。底径5.4cm。9は軒平瓦。上面には2.0×2.5cm角程度の粗大な格子目敲きを加え、下面は1cm四方に5～6本の絆縫が数えられる荒い布目痕を有し、長軸に沿ってなで調整を加えている。器色は灰白～灰黒色を呈し、胎土に石粒の混入は殆どなく焼成は堅緻。

## IV まとめ

諸岡丘陵東側の斜面部分は1973~74年と今回の調査によってほぼその全貌を知り得た。C区を中心として朝鮮系無文土器と弥生時代前期土器とが共存した竪穴群やA区の弥生時代中期中葉~後期古墳墓地等の諸遺構は南側に位置するが、D・E区では遺物の上でも殆ど見出せず、中世期の竪穴群、溝によって占められている。主なものを列記すればA区で青磁器A群I-b類碗2個(1個は内面見込み『金土漢堂』の刻印銘がある)、小刀、砥石を同時副葬した竪穴。D区では第31号竪穴(土師器高台付塊・白磁II-a類出土)、第33号竪穴(土師器皿・白磁II類・青磁器A群I類出土)、第41号竪穴(土師器高台付塊・白磁II-a類出土)等があつて鎌倉時代前半とされる遺構群である。E区で出土した溝、土塁等の遺構は後世の地形改変によって旧状とその性格を知る事は困難であるが第1、2号溝、第6号地下式横穴竪坑それに表採では白磁碗II-a、同II-b類が他の青磁器、土師器とともに出土しており、これらから前記の年代に相当する時期を考えうるが、また地域的な変異が大きいとされる中世土師器の編年研究が待たれるところである。それから第1・2号溝より出土した打製石器は表面の風化度から先土器時代の遺物であるが、包含層は確認できなかった。また先年度までの調査で石器包含層を鳥栖ローム層としてきたが、古川博恭氏の御教示により「新期上部ローム層」と訂正する。

(横山)

註1) 後藤直・横山邦雄(編)(1975)板付周辺遺跡調査報告(2)福岡市埋蔵文化財調査報告書31

註2) 亀井明徳(1973)九州出土の宋・元代陶磁器の分布―太宰府出土品を中心として―考古学雑誌58-4

註3) 横山邦雄(編)(1974)板付周辺遺跡調査報告書(1)福岡市埋蔵文化財調査報告書29

Tab.4-1 諸岡E区出土遺物表

No.	器種	器形	色調	備考	No.	器種	器形	色調	備考
1	青磁器	直口縁部	褐色		Fig.4-4	14	土師質土器	壺口縁部 (内)黒 (外)褐	
2	鐵器	斬頭	新面は平らな かまぼこ型	Fig.4-4	15	土師器	直口縁部	褐色~黄褐色	3片
3	土師質土器	不 明	褐褐色		16	欠 番			
4	青磁器	*	浅い青緑色	Fig.4-4	17	土師質土器	直(?)	褐~明赤褐色	
5	甕		灰岩質		18	*	壺(破片)	褐~暗褐色	
6	土師質土器	不 明	褐色		19	白磁器	直口縁部 (内)淡褐色 (外)淡褐色		Fig.4-3
7	青磁器	直口縁部	淡青色	Fig.4-3	20	*	直 縁部	褐色	Fig.4-3
8	白磁器	直口縁部	淡灰色	Fig.4-3	21	甕		花崗岩 自然礫	
9	土師質土器	不 明	暗黄褐色		22	土師質土器	直口縁部	暗褐色~黑褐色	
10	白磁器	直口縁部	白色	Fig.4-3	23	方柱 瓦質品質片	支脚(?)	灰色	Fig.4-3
11	青磁器	直口縁部	淡褐色	Fig.4-3	24	土師質土器	不 明	暗褐色	多様な形状 のもの
12	土師質土器	不 明	灰褐色~褐色		25	甕	直(?)	褐色	袋付らしきもの あり水質
13	*	*	墨褐色		26	白磁器	直口縁部	淡褐色	Fig.4-3
					27	土師質土器	直(?)縁部	褐~暗褐色	

## 目　ま　と　め

No.	器種	器形	色調	備考	図	No.	器種	器形	色調	備考	図
28	土師器	不明 明		2片あり		65	土師質土器	不明	暗赤褐色	胴部片	
29	土師質土器	喇叭小片	暗褐色			66	*	塊(?)	黒~褐色	胴部片	Fig.4.3
30	*	不 明	赤褐色~ 暗褐色			67	*	直口縁部	褐色	2片あり	Fig.4.3
31	*	里底部片	暗褐色~ 暗赤褐色			68	*	不 明	暗褐色		
32	*		暗褐色			69	小 円 壶			花崗岩	
33	土 壺 器	壺または瓶	褐色			70	上 頭 部	直 近 部	黒~赤褐色		
34	*	直 口 瓶	明褐色			71	壺 器	直 口 縁 部	褐色		
35	欠 番					72	小 円 壶			花崗岩	
36	壺		無粒砂心			73	白 磁 器	直 頭 部	淡綠色		Fig.4.3
37	白 磁	碗口縁部	褐色	小形、水張あり		74	土師質土器	不 明	(内) 黒色 (外) 褐色	胴部片	
38	土師器頭部片	塊(?)	褐色~赤褐色			75	壺 器	碗口縁部	褐色		
39	先生式上唇 頭部破片	不 明	暗褐色			76	土師質土器	高 口付 壺	黑色		
40	土 壺 器	直底部片	褐色	2片		77	土 壺 器	直 底 部	黒~赤褐色	手切り(?)	Fig.4.3
41	白 磁 器	碗	灰褐色			78	滑 石 片	石 鋸(?)		片歯鋸落	
42	粗器頭部片	不 明	淡褐色	白磁心(?)		79	壺 器	不 明		胴部粗片	
43	土師質土器	直底部	暗褐色		Fig.4.3	80	白 磁 器	碗口縁部	褐色	永髪多し	
44	*	不 明				81	土師質土器	不 明	褐色	胴部片	
45	*	不 明				82	小 円 壶			石突	
46	*	里 底 部	褐~暗黃褐色			83	白 磁 器	直(?)			
47	*	壺口縁部	暗赤褐色			84	土 壺 器	直(?)	褐色	胴部片	
48	土 壺 器	直(?)	暗褐色	頭部片		85	土師質土器	不 明	黑色	胴部片	
49	*	不 明	暗赤褐色	頭部片		86	白 磁 器	碗口縁部	褐色		Fig.4.3
50	壺			花崗岩、一部 に剥落あり		87	土 壺 器	直 底 部	明褐色		
51	欠 番					88	陶 器	直 形	暗赤褐色		Fig.4.3
52	土 壺 器	直底部片	褐色			89	土師質土器	不 明	黑色	胴部片	
53	青 磁 器	直口縁部	淡褐色		Fig.4.3	90	*	不 明	黑褐色	胴部片	
54	土 壺 器	塊(?)	暗褐色~暗赤褐色			91	*	塊口縁部	黑色		
55	铁 器					92	*	直口縁部	暗褐色		
56	不 明 土 器 (角子式土器?)		黑色	胴部片		93	*	直(?)	褐~黑褐色	胴部(?)	
57	土師質土器	不 明	暗褐色	頭部片		94	削片 or 削片		黑褐色	透明である	
58	瓦 片		黑色	世世以降のもの の少		95	青 磁 (?)	直(?)	淡褐色	小形	4.3
59	土 壺 器	不 明	赤褐色			96	削 片		黑褐色	折られたもの かもしれない	Fig.4.3
60	*	直 底 部	暗褐色~褐色			97	上 頭 部	直(?)	褐~暗褐色	胴部片	
61	壺 器	碗口縁部	褐色	小形、白磁器(?)		98	*	壺底部片	暗灰色		
62	青 磁 器	碗口縁部	淡褐色			99	ナイフ形石器		黑褐色	残欠	Fig.4.3
63	土師質土器	不 明	明褐色	頭部片		100	土 壺 器	不 明	褐色	胴部片	
64	角 壺			花崗岩		101	白 磁 器	不 明	淡褐色		

第4章 諸同遺跡

No.	器種	器形	色調	備考	図	No.	器種	器形	色調	備考	図
102	土師質土器	不明	褐色	調査片		D-2	土師質土器	刷毛部		5片	
103	*	不明	褐褐色	調査片		号	青磁器	灰 部	淡綠色	1片	Fig.4.6
104	土師器	塊口縁部	褐~明褐色		Fig.4.3	D-3	土 (弦生式?)	器	口 縁 部	黒褐色	
105	削 片		黑褐色			号	*	灰 器	褐~黑色		
106	土師質土器	塊 細 部	灰色			S-P	土師質土器	刷 毛 片		2片	
107	*	不明	褐褐色				*	口縁部			
108	削 片		黑褐色	圓曲流理構造 全合字	Fig.4.5	S-P	*	削 毛 片		3片	
109	土師質土器	塊 底 部	灰色			5	青 磁 器	*			
110	欠 番					S-P	弦生式土器	吸 口 緹 部	褐色		Fig.4.4
111	石 磨 亜			面に煤付着		7	*	削 毛 片		2片	
112	土師質土器	不明	灰色味を含む 白色			S-P	*			1片	
113	*	不明	褐色			8	土師質土器	*		1片	
114	*	塊 細 部	明褐色			第 6 分 類 下 式 樣 六	弦生式土器	*		1片(壁板?)	
115	*	塊 刷 部	黑色				土師質土器	*		1片	
116	上 摺 器	不明		調査片6片あり		白 磁 器	塊 口 縁 部	灰白色	3片	Fig.4.4	
117	土師質土器	不明	(内) 黑色 (外) 明褐色	調査片		*	塊 口 縁 部	淡綠色	1片	Fig.4.4	
118	*	塊 刷	褐~黑色	調査片		*	底 部	淡綠色	1片	Fig.4.4	
*	*	塊	(内)褐灰~暗		Fig.4.4						
D	*	口 縁 部					Ka28-79 第4号窓				
1	*	刷 部					Ka1-6 第3号窓				
2	直 柄 器	調 査 片					Ka7-13, 15-77 第2号窓				
	弦生式土器	刷 部					Ka80-86, 106-118 第1号窓				
							Ka105-115 D-2号				

Tab.4-2 表面採集

器種	器形	色調	備考	図	器種	器形	色調	備考	図
弦生式土器	裏口縁部		4片		磁 器	底 部		6片	Fig.4.6
	高环脚片		1片		磁 器	調 査 片		3片	
	刷 部 片		18片		瓦 壺	削 丸		1片	參照 Fig.4.6
土 壺 器	*		2片		方形土製品			1片	
土師質土器	*		35片		小 瓦 片			1片	
瓦 質 土 器	*		1片		石 磨			1片	滑石
淡 灰 土 器	口 縁 部		3片		滑 石 製 品	石 磨 部		1片	
淡 灰 質 土 器	*		1片		磁 石			1片	
磁 器	*		14片	Fig.4.6	磁 石	川 壁		花崗岩5	
	刷 部 片		7片					酸化水1	

## 第5章 諸岡遺跡F区

### I 調査概要 (Fig. 5-1, 5-2)

春日丘陵に端を発する諸岡川は、春日市界町、竹ヶ本を北流し、須玖岡本に至る。ここで東北に向を変え、福岡市南八幡町で再び北流を始め、諸岡・板付の水田を潤し、那珂御笠川と合流する。諸岡川筋には弥生時代遺跡が多く、須玖岡本をはじめ春日丘陵の諸遺跡、板付遺跡など著名なものが多い。諸岡川左岸に存在する諸岡丘陵も、その遺跡の一つである。

諸岡丘陵は標高23mを測り、その頂上・斜面に襄棺墓地や朝鮮系無文土器と板付II式が共伴した竪穴などが調査されているが、一昨年、昨年の報告書に詳しいため、ここではそれらに譲る（横山1974・後藤・横山1975）。

諸岡丘陵が、筑紫バイパスにより切断された東側は、ゆるやかに傾斜して沖積層に達する。諸岡F区はこの沖積地で、諸岡丘陵の東麓にあたり、標高8.3mを測る水田である。この土地の所有者川上亮一氏が、有限会社川上土木の事務所を建設することになり、それに先だって緊急調査を実施した。

水田上面が盛土されていたために、まずユンボ盛土を除き、東西に幅1.3m、長さ7.3mのトレーナーを入れ、遺物・遺構の有無を確かめたところ、表土層下に西側の道路端から約3mの幅で黒色粘質土層が現われ、東側は諸岡川の氾濫原と思われる厚い砂の堆積があった。この黒色粘質土層中に遺物の包含があったため、まず両側に2m×7mのトレーナーを設定、その後北側にも2.5m×8mのトレーナーを入れた。このトレーナーをそれぞれA～Cトレーナーとよんだ。

土層は前述のように、約70cm程の盛土があり、水田面は標高8.3mである。約20～25cmの耕作土と、3～8cmの水田床土があり、その下は3～5cmの褐色砂層となる。黒色粘質土層の上面は標高約8mである。この層はAトレーナー内で最高約73cmの厚さをもち、Bトレーナーの南、Cトレーナーの北へ行くに従って薄くなり、特にCトレーナーではほとんど消滅する。東側は前に記したように、道路端から約2～3mで砂層となっている。黒色粘質土層の下は、Bトレーナーの南半および、Cトレーナーでは青白色粘質土層、AトレーナーとBトレーナーの北半では青灰色砂層が地山となる。黒色粘質土層はこの地山が、Aトレーナー付近で最も深くなる凹みに堆積したものと推定される。遺物はほとんどこの黒色粘質土層に包含されているが、褐色砂層中にも若干含まれている。なお耕作土・床上中には須恵器の破片も若干含まれていた。

黒色土層中の遺物は、ほとんど標高7.55mから7.96mの間に含まれている。特に完形品となつた107はBトレーナーや南寄りに、7.70mから7.80mまでの標高で、破片が一括して検出された。遺物としては、土器、扁平片刃石斧片、石斧片（？）、打製石錘、尖頭状石器、搔器、削器、剥片石器、砥石、石核などがあり、黒曜石破片が多かった。

なお、Bトレーナーに、黒色粘質土層に掘り込んで溝が穿たれており、杭が11本ほど打ち込まれていたが、伴出遺物が無く時期は不明である。

第5章 諸岡遺跡F区

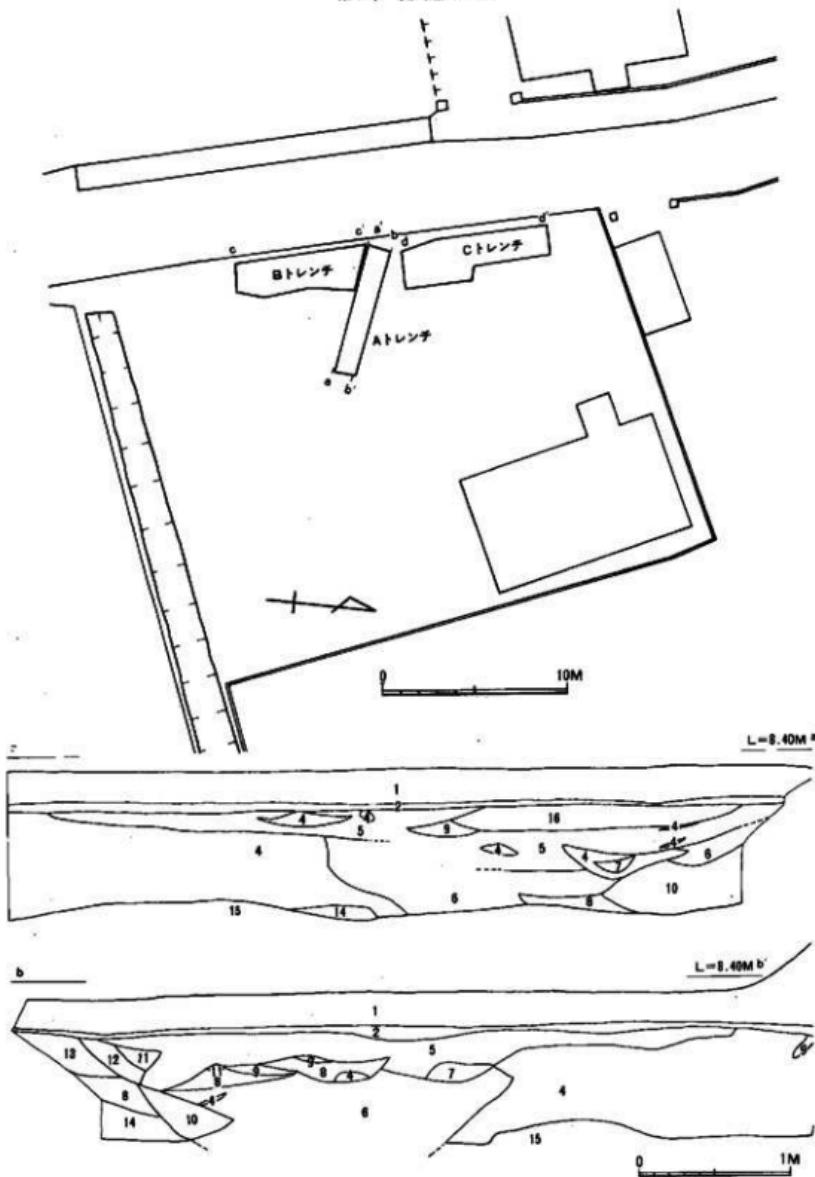


Fig. 5-1 諸岡F区トレンチ配置図およびAトレンチ南壁(上)、北壁(下)土層断面図

II 出土遺物

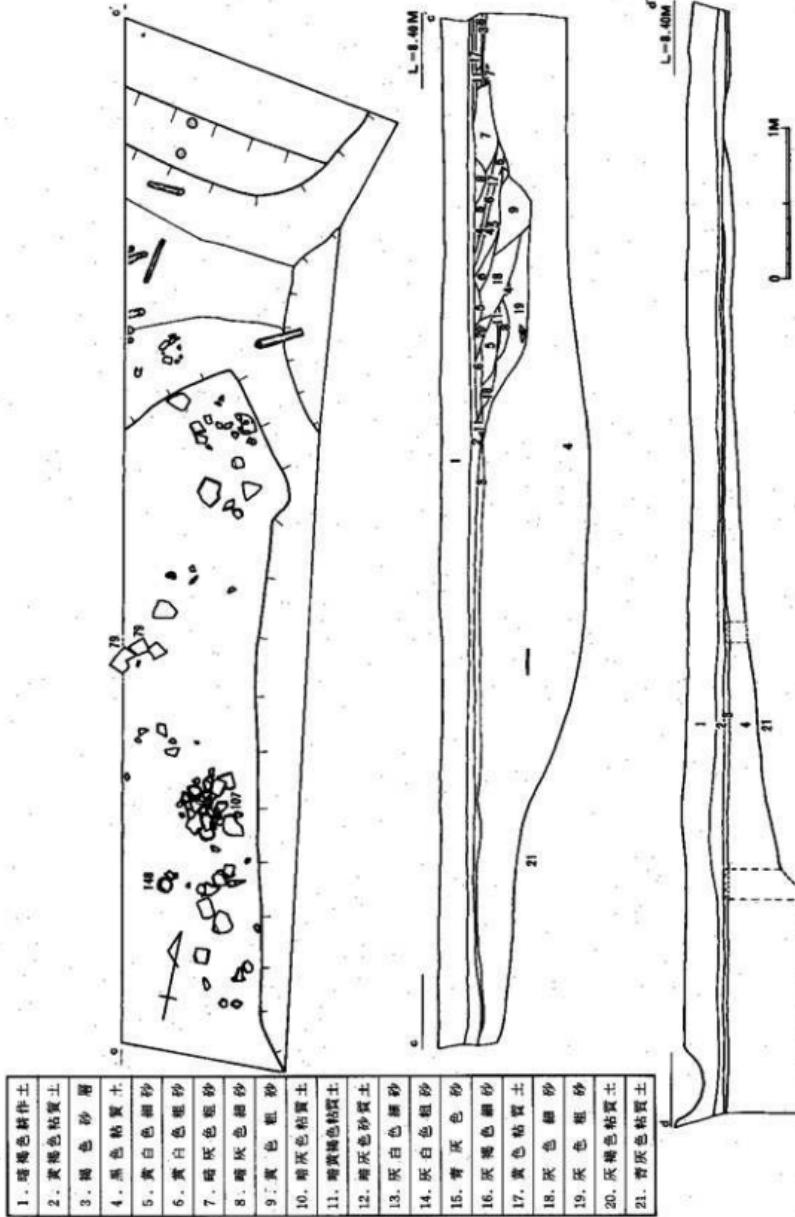


Fig. 5-2 諸岡F区Bトレンチ実測図およびBトレンチ西壁、Cトレンチ西壁土層断面図

## II 出土遺物

土器 (Fig. 5-3~5-10)

砂層中の土器 (Fig. 5-3, Fig. 5-10, 104, 106, 107)

**壺** (1~4・11~19) 1は外反する口縁をもつ。器面があれでいるため調整は不明。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。淡褐色。2は口縁が上部に向かってすぼまり、口縁端がわずかに外反する。磨研されており、横なで調整も認められる。若干の砂を含むが、胎土・焼成ともに良好。淡暗褐色。3は肩部である。器面があれでいるため調整不明。胎土に石英粒砂

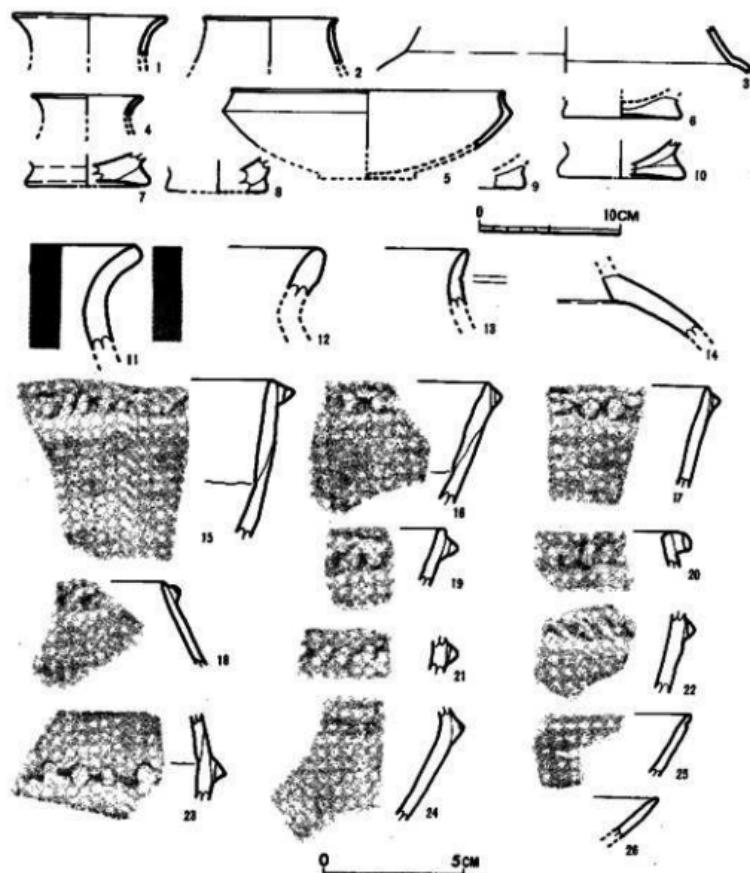


Fig. 5-3 諸岡F区砂層出土土器実測図・拓影図

を含み、焼成良好。褐色。4は外反する口縁をもつが小形のものである。横なで調整。胎土は精良なものであるが、焼成はあまり良くない。淡褐色。11も口縁端が外反する。横なで調整の後、丹塗り。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。淡褐色。12は11と同様な器形をもつと思われる。横なで調整。胎土は細砂を含むが、焼成ともに良好。赤褐色。外面口縁下にゆるい棱がつく。13も口縁端が外反する。口縁下外面に一条の沈線が認められる。器面があれでいるため調整不明。砂・雲母を胎土に含み、焼成は良好。褐色。14は肩部で、内面に明瞭な段がつく、胎土に砂を含み、焼成良好。黄褐色。

**甕 (15~24)** いずれも刻目突帯をもつ。15~20は口縁部である。15~19は口縁下に、20は口縁端に接して刻目突帯がつけられる。15~17・19は単純に外へ開く器形であるが、18・20は口縁部に向かってすばまる。おそらく胴部に「く」の字状の反転部をもつものであろう。15・16は接合痕が内面に段となって明瞭に残る。胎土はいずれも石英粒砂を含み、焼成は良好。黄褐色(15)、暗褐色(16・17)、赤褐色(18)、褐色(19)、黒褐色(20)を呈する。21~24は肩部破片である。23は内外面とも条痕がみられ、内面には接合痕が段となって明瞭に残る。胎土に砂(21・22)、石英粒砂(23・24)を含み、焼成良好。暗褐色(21)、黄褐色(22~24)。

**鉢 (5・25・26)** 5は胴部で「く」の字状に屈折し、口縁に向かってすばまるが口縁端は外反する。全体的に窓で磨研される。胎土に砂を混じ、焼成良好。黒色。25・26は単純に開く器形と思われるが、確証はない。25は横なで調整で、口縁下に一条の沈線を巡らす。胎土は緻密で、焼成良好。暗褐色。26は胎土に砂を含み、焼成はややあまい。暗褐色。

**底部 (6~10・104・106・107)** いずれも甕の底部と思われる。すべて底部が断面三角形に張り出す。6・7・10・144・147は上げ底。144と146は底面に木葉痕。147は底面を籠状の工具(?)で擦痕らしきものがつけられる。146・147は煤の付着が認められる。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗赤褐色(6)、淡暗褐色(7・10)、淡褐色(8)、黄褐色(9)、暗褐色(144・146)、黒褐色(147)を呈する。

これらの土器は黒色粘質土層を切っている砂層中出土のものであるが、すべて夜白式のものと思われるが、11・12などは若干新しいものかもしれない。

#### 黒色粘質土層出土の土器 (Fig. 5・4~9, Fig. 5・9~145・148)

**甕 (Fig. 5・4, Fig. 5・5, Fig. 5・6~75~79, Fig. 5・8~120)** 27~79はほとんどが刻目突帯をもつが、刻目ののみのもの(61)もある。27~42・76は口縁が内傾し、刻目突帯が口縁下につけられる。27は胴部で「く」の字状に反転するが、反転部に刻目や突帯などはみられない。外面は器面があれでいるが、内面は横の条痕がみられる。29は外面に縦の擦痕、内面は横の条痕。30は内外面とも条痕。32の突帯の刻目は大きく、下から押し上げたようにつけられる。34は内面に丹塗り痕がみられるが、外面は器面あれのため不明。35は外面に条痕。37の刻目は籠状の工具でつけられる。38の外面は条痕、内面は横なで調整。39の外面は擦痕、内面は横なで調整。40の外面は籠状の工具であらいなで調整で、煤が付着。内面は横なで調整。76は内外面とも擦痕がつけられる。刻目は籠状の工具でつけられる。43~48も口縁に向かってすばまるが、刻目突帯は口縁端に接してつけられる。44は、口縁端が若干外反し、胴部では「く」の字状に

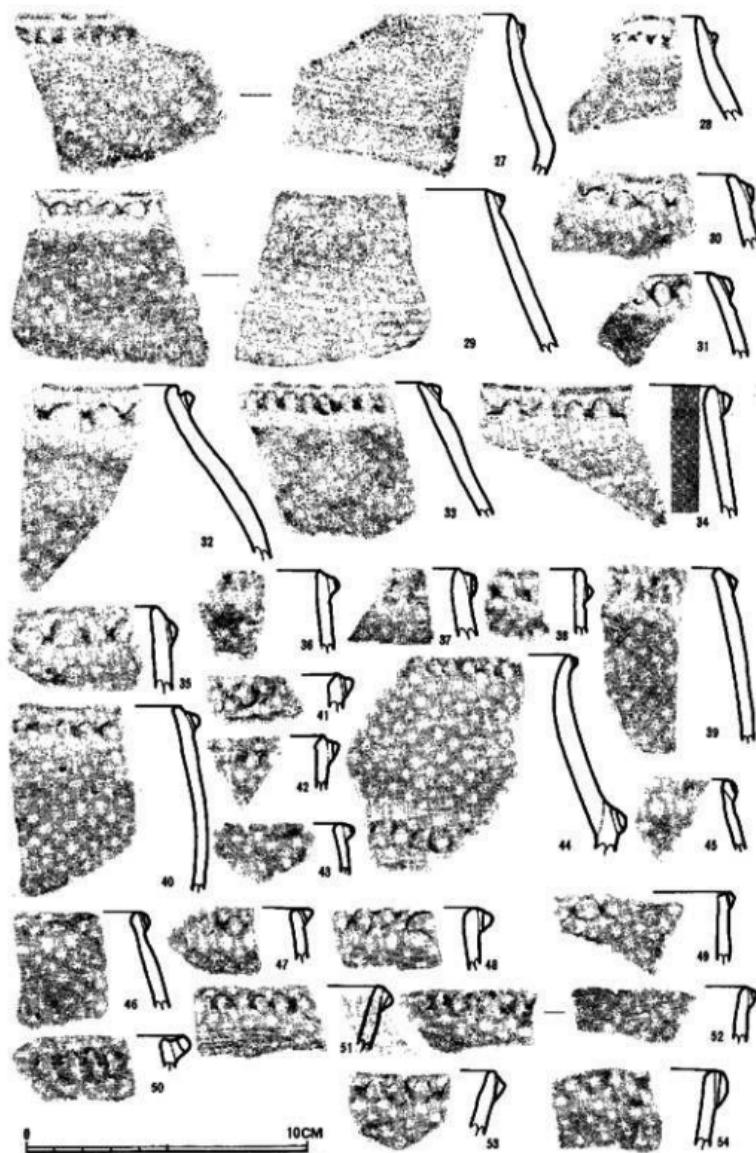


Fig. 5-4 諸岡F区黒色粘質土層出土土器拓影図(1)

第5章 諸岡遺跡F区

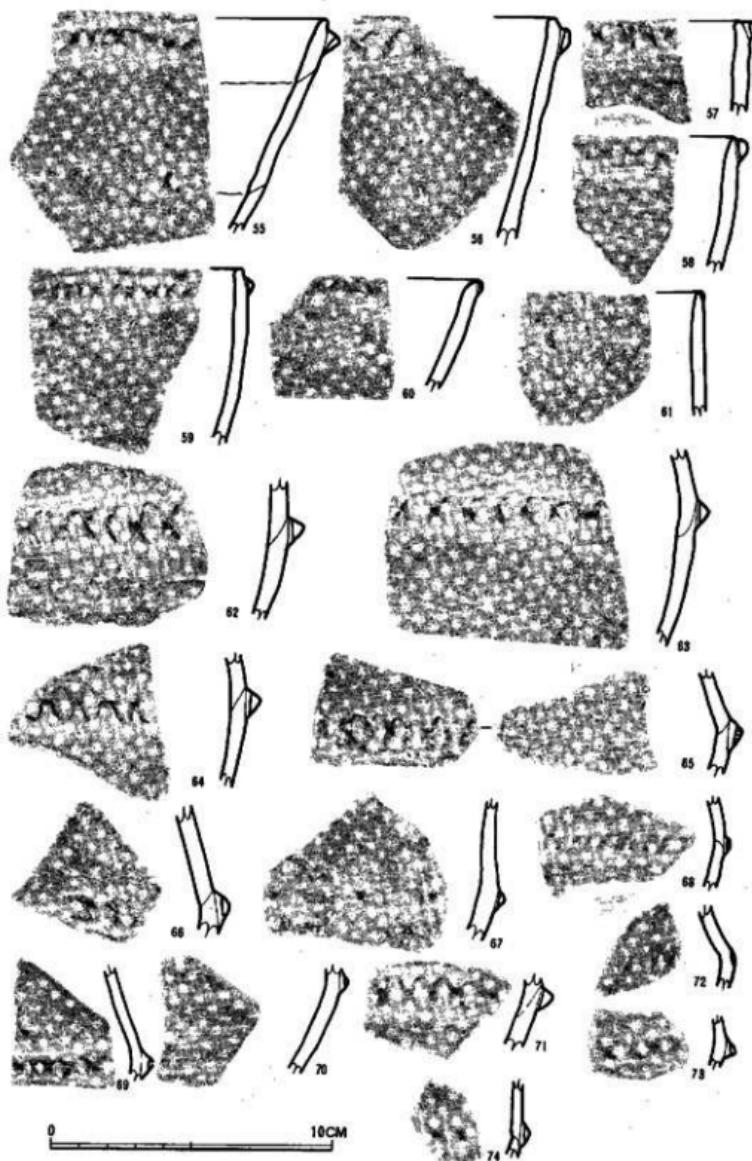


Fig. 5-5 諸岡F区黒色粘質上層出土土器拓影図(2)

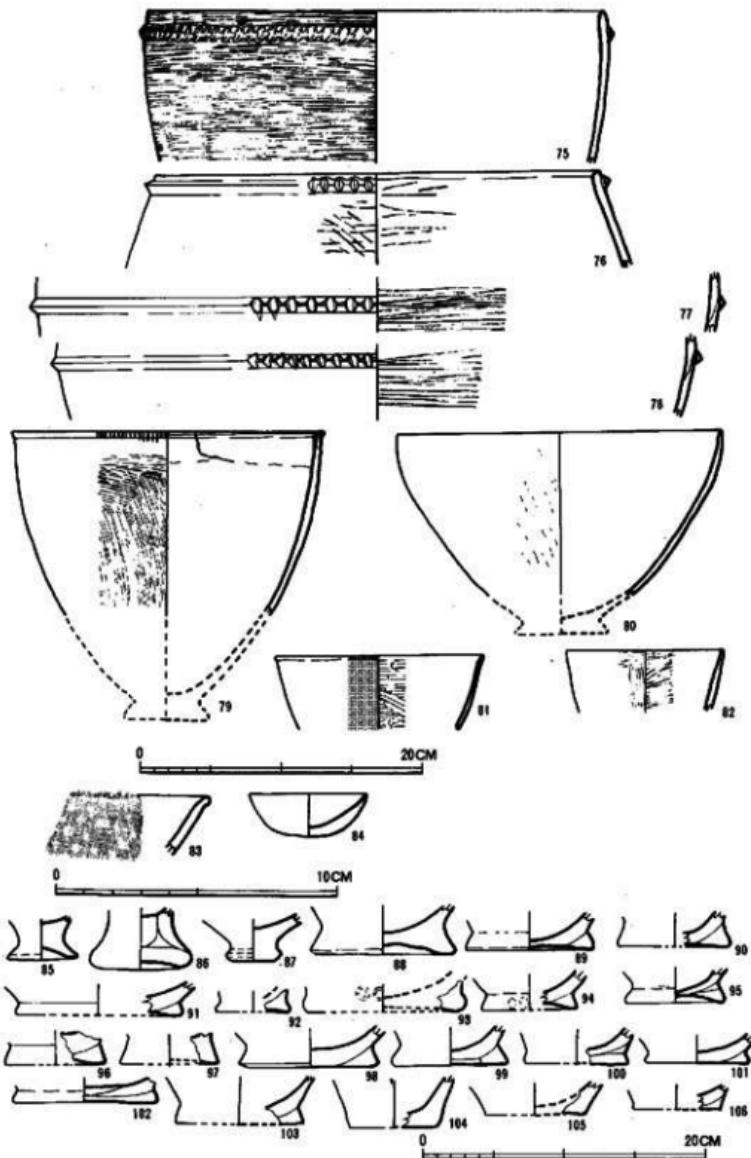


Fig. 5·6 諸向南区黑色粘質土層出土上器実測図・拓影図(3)

外反する。反転部には刻目突帯がつけられる。内外面ともに条痕。外面には煤の付着も認められる。45の突帯の接合は若干他と異なる。46は外面に擦痕。47・48の外面は条痕。49・50は刻目突帯が口縁に覆い被さるようにつけられる。49は内面上部が条痕。外面には煤の付着。51～54は口縁が単純に開き、刻目突帯が口縁に接してつけられる。51は外面、52は内面に条痕。55～59・75も口縁部が単純に開くが、59・75は若干内脅している。56も口縁端が内脅している。いずれも刻目突帯は口縁下につけられる。55は外面に横および縦の細い条痕があり煤が付着する。内面は接合痕が段となって明瞭に認められる。56の刻目は大きく、棒状の工具で押さえている。57は内面横なで調整。外面には煤付着。58は外面条痕。59の口縁内面は若干ふくらみ、横なで調整。外面に煤付着。75の刻目も大きく棒状のもので押さえている。外面は横の条痕で、突帯はその条痕調整の後に貼り付けている。煤付着。内面上部は横なで調整。79も単純に聞く口縁をもつが、刻目突帯は小さく、口縁端より高くつけられる。刻目は範状の工具で縦に細長く、一部は突帯下まで施される。外面は範状の工具で細い擦痕がみられる。口縁部内面に粘土を薄く貼り付けて強化しており、その接合痕が明瞭に認められる。その後に指で強くなっている。底部を欠失するが図示したような器形になると推定される。60も口縁端より高く刻目突帯を貼り付けているが、口縁内面が丸味をもち、外傾の度が強いため一見如意状口縁に近くなる。61は直立する口縁の外端がわずかにふくらみ、そこに小さな刻目を施す。62～71・73～75・77・78は刻目突帯をもつ胴部破片である。62は外面擦痕。刻目は上から施したらしく、突帯下にも一部ついている。63も刻目は同様であり、内外面とも擦痕。64の外面も擦痕。65は外面の突帯下に突帯貼り付けの接合痕が残る。刻目は棒状の工具か貝殻でなされる。内面は横条痕。67は突帯の一部が剥落している。68は刻目突帯貼り付けの後、上下両方を横なで調整しているが、下部が強く、その部位に凹みがみられる。70の外面は横条痕。71は内外面に横の擦痕。77・78は突帯貼り付け部は横なで調整。刻目は上から下へつけられるが、一部強すぎて突帯下まで施される。内面は範状の工具で横に不規則な擦痕。72は突帯ではなく、胴部屈折部に刻目のみが施される。120は胴部で反転屈折するが、突帯も、刻目もつかない。あるいは27と同様な器形をもつかもしれない。内面に横の条痕。胎土はほとんどが石英粒砂を含むが、量が少なくわりと良好なもの（34・64）、砂を含むもの（31・35～38・43・45・47・49・60・68～74）がある。焼成も良好なものが多いが、ややあまいもの（27・28・32・38・39・44・45・51・52・62・63・66・73・79）もある。色調は暗褐色を呈するものが最も多いが、暗黄褐色（27・32・68・73・74・77・78）、黒褐色（29・40・42・50・70）、黄褐色（34・45・61・63・64・69）、灰褐色（37・62）、赤褐色（38）、淡暗褐色（46）、暗赤褐色（60）、淡褐色（76）を呈するものもある。一部に焼成時の黒変が認められるもの（75～79）もある。

**深鉢形粗製土器** (Fig. 5-7, Fig. 5-8, -116～119) 基本的には前述の裏と形態は似ており、どちらも深鉢形土器とするべきであるかも知れないが、刻目突帯を持たないということでおわゆる板付I式と共に夜臼式と異なる。この点で、一応項を別にしておく。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する土器である。107はこの器形中唯一の完形品である。口縁部は直立し、ゆるやかに内脅しながら底部へとすぼまる。底部は断面三角形に張

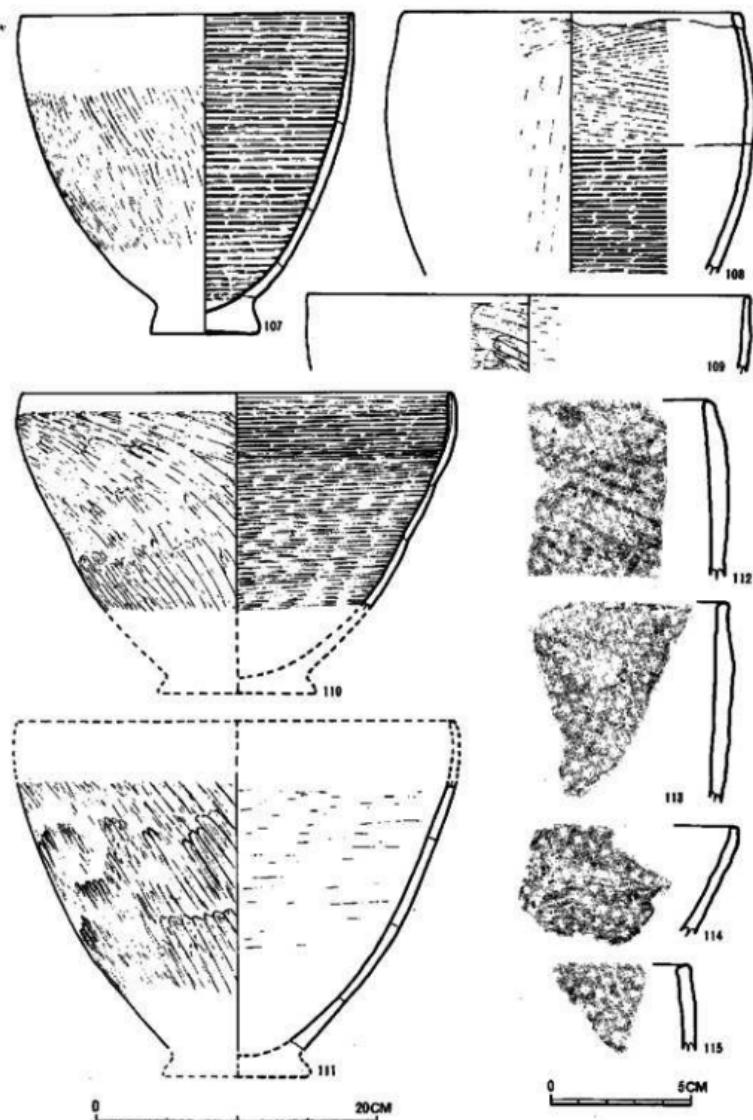


Fig. 5-7 諸岡F区黒色粘質土層出土土器実測図・拓影図(4)

日出土遺物

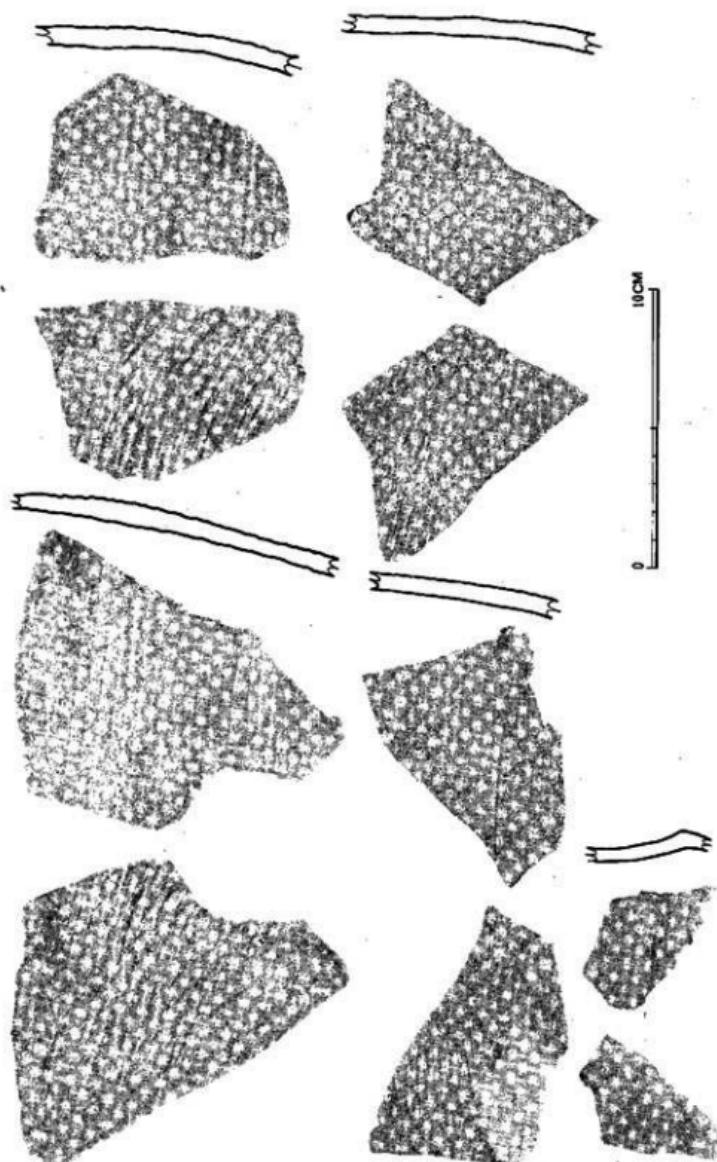


Fig. 5-8 路岡F区黑色粘質土層出土土器拓影圖(5)

り出し、わずかに上げ底。外面は範状の工具で斜めに擦痕。煤の付着も認められる。内面は横にわりと整然とした条痕。108も同様な器形であるが、口縁部は内傾し、最大径が胴部やや上部にある。口縁部は若干ふくらむ。口縁外面に横なで調整。それ以下には縦に範状のT工具で擦痕。内面は胴部最大径以上は擦痕。それ以下は横の条痕。接合痕が明瞭に認められる。109は107に似た器形である。外面は範状の工具で条痕状の擦痕。煤も付着。内面も擦痕。110は口径に比べ、器高が低い。口縁部は内脣しており、かなり急速に底部へとすばまる。口縁部は内面に粘土を貼り付けて強化して、肥厚氣味となる。口縁外面は横なで調整。それ以下は斜めに範状の器具で粗く条痕状の擦痕。煤も付着。内面は横にかなり整然と条痕。111は口縁部を欠くが、110と同様な器形である。外面は110と同様な調整で、煤も付着。内面は横に擦痕で、底部近くには炭化物の付着が認められる。一部黒褐色。112は直立に近いが、口縁端が若干内脣する。外面は110と同様な調整。煤も付着。113は直立し、口縁端が若干ふくらむ。外面は横条痕で、煤が付着。114は薄手の土器で、急速に底部へとすばまる器形であり、あるいは鉢かもしれない。外面は細い横の条痕。内面は黒色。115は107と同様な器形である。116～119は、胴部破片である。116・117は外面に斜めの粗い条痕。煤も付着。内面は横に整然とした条痕。118・119は外面に細い条痕。内面は擦痕。118の外面には煤も付着。

**鉢** (Fig. 5-6, - 80～84) 80は内脣しながら立ち上がり、口縁部では直立に近くなる。口縁外面から、内面全体にかけて、横に範状の工具で磨研。外面体部は斜めに擦痕。外面はあるいは丹塗りか。胎土に砂を含むが、焼成とともに良好で、外面淡赤褐色、内面黄褐色で、口縁部外面の一部は焼成時の黒変。81も単純に口縁部へと開く器形であるが、口縁部はわずかに外反する。外面は磨研された後丹塗り。内面も棒状か範状の工具で磨研されている。胎土は砂を含むが焼成とともに良好。外面赤褐色、内面褐色。82も単純に口縁部が開く。外面上部と内面は条痕。外面の体部には複に強い棒状のもので調整が行われる。胎土・焼成ともに良好。外面黒褐色で一部黄褐色。内面は暗褐色。83も単純に開くが口縁部が丸味をもって肥厚する。胎土に砂を含み、焼成良好。淡暗褐色。84は浅鉢のミニチュアである。胎土に砂を含み、焼成良好。黄褐色を呈する。

**壺** (Fig. 5-9, - 121～129・135～142) 壺は甕に比較してその数は少ない。121は口縁部に向かってすばまる傾向がある頸部をもつが、口縁部そのものは外反する。これは122・123も同様であるが、口縁部の外反は122が最も強く、123・121の順となる。121は肩部が張り、頸部つけ根の接合部は内面で段をもつ。外面は範磨研。内面は頸部中位以下に刷毛目に類似した細い条痕がつけられ、接合部の段の上部は横なで調整。胎土に砂を含み、焼成は良好。暗褐色。122は磨研後、外面と口縁部内面に丹塗り。胎土は砂を含み、焼成良好。暗褐色。123も内外面とも磨研の後、丹塗り。口縁内面が一部剥落している。砂を胎土に含むが、焼成とともに良好で、暗褐色。124も口縁部に向かってすばまるが、口縁端は直立に近くなる。器面があれでいるため、調整は不明。胎土は石英粒砂を含み、焼成良好。褐色を呈する。125は外反する口縁部で粘土を貼り付けて肥厚させ、そのために、外面口縁下に段がつく。内外面とも丹塗り。胎土・焼成ともに良好で、赤褐色。この土器は他の土器と異なり、弦生式土器の特徴をもつてい

II 出土遺物

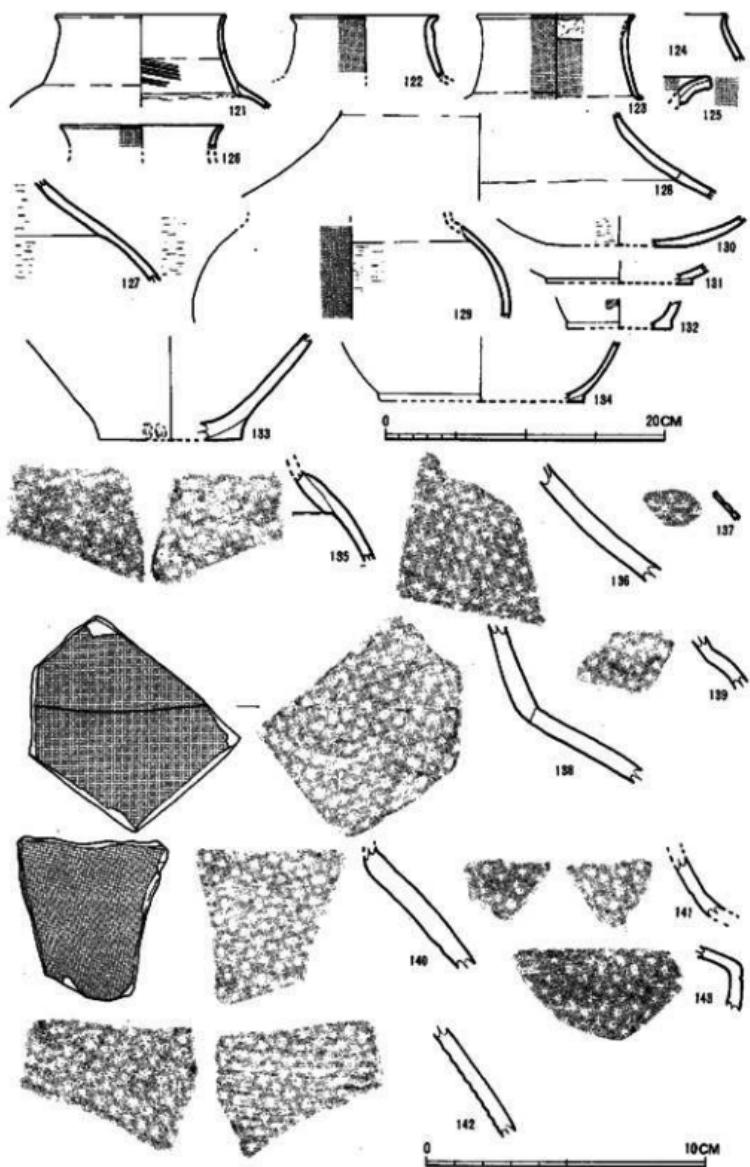


Fig. 5-9 諸岡F区黒色粘質土層出土土器実測図・拓影図(6)

る。これがはたして弥生式土器であるか、それに先行するものであるか、現状では不明。126は123と同様な器形をもつ。外面丹塗り。胎土に砂を含み、焼成良好。暗褐色。127・129・135～143は、頸部から肩部の破片である。127・128は大形の壺である。127は頸部付け根内部が若干肥厚して段がつく。内外面とも横の擦痕。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。淡暗褐色。128は肩部に接合部があるが、肥厚はせず、内面に接合痕が認められる。器面があれでいるため調整は不明。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色。129は胴上部破片だが、球形に近い張りを示す。接合部で割れているが、一部内面に肥厚して段がつく場所が残る。外面は磨研された後、丹塗り。内面は横の擦痕。胎土・焼成とともに良好で、外面赤褐色で一部焼成時の黒変。内面は暗褐色。135は接合部が肥厚し、内外面に段をつける。胎土に砂や金雲母を含み、焼成良好。暗褐色。136は大形の壺の頸部で、内外面ともに擦痕。胎土は砂を含み、焼成良好。外面暗褐色。内面黒褐色。137は非常に薄手の土器で、破片中に2本の沈線が施される。胎土は砂を含み、焼成はややあまい。淡暗褐色。138は頸部つけ根付近の破片で、明確な稜をもって肩部へと至る。外面は磨研の後、丹塗り。内面も磨研されている。胎土に砂を含むが、焼成とともに良好。外面赤褐色、内面暗褐色。139も頸部つけ根であるが、肥厚はしていない。胎土に砂を含み、焼成良好。淡暗褐色。140は肩部である。外面は磨研の後、丹塗り。内面は条痕。一部深く沈線状になるところもある。胎土に砂を含み、焼成良好。暗褐色。141は接合部内面に段がつく。胎土に砂を含み、焼成良好。暗褐色。142は胴上半部である。内面に整然とした横条痕。胎土に石英粒砂を混じ、焼成良好。暗赤褐色。143は肩部と推定される。かなり角張っており、肩曲部下に一束の沈線が巡る。発掘時には外面に丹痕が認められたが、大部分は剥落してしまっている。胎土に砂を含み、焼成良好。淡赤褐色。

#### 底部 (Fig. 5-6, - 85～106, Fig. 5-9, - 130～134, Fig. 5-10, - 145, 148)

85～87は特殊な底部である。85・86は上げ底であり、底部が非常に厚い。85の作りは良くない。85・86とも胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。黄褐色。87は胎土に石英粒砂を含み、焼成はややあまい。灰褐色。これらの土器はあるいは蓋のつまみかとも考えられ、特に87にその可能性が強いが、いかゆる蓋は板付II式期から出現するといわれており、蓋であるという確証はない。88～103・145・148は底部が断面三角形の張り出し部をもつ。いずれも甕、あるいは深鉢形土器や鉢の底部であろう。上げ底のもの (88～97, 148)、外面に指の押圧調整痕を残すものの (93・94)、外面縦、内面横条痕のもの (148)、内面斜め条痕のもの (145)、刷毛目のみられるものの (95)、接合痕の認められるもの (89・94・95・102) などがある。95の底面は窪で調整している。122は張り出しが小さく、外面に刷毛目調整。104～106は平底で、そのまま底部へとつづく甕と思われる。104には刷毛目調整がみられる。130は丸底に近い平底で壺の底部であろう。外面に擦痕が認められる。131・134は底部の角度がほぼ直角をなすもので、鉢か壺の底部であろう。134は内外面とも磨研されている。138は大型の底部で、壺のものであろう。外面に指の押圧調整痕がある。なお145の底面には木葉痕。148の底面には2ヶ所の植物種子斑痕があるが、未鑑定のために何の種子であるか不明。これらの底部は、胎土に石英粒砂を含むものが多いが、砂を含むもの (91・130)、良好なもの (134・148) もある。焼成は89・104を除いてお

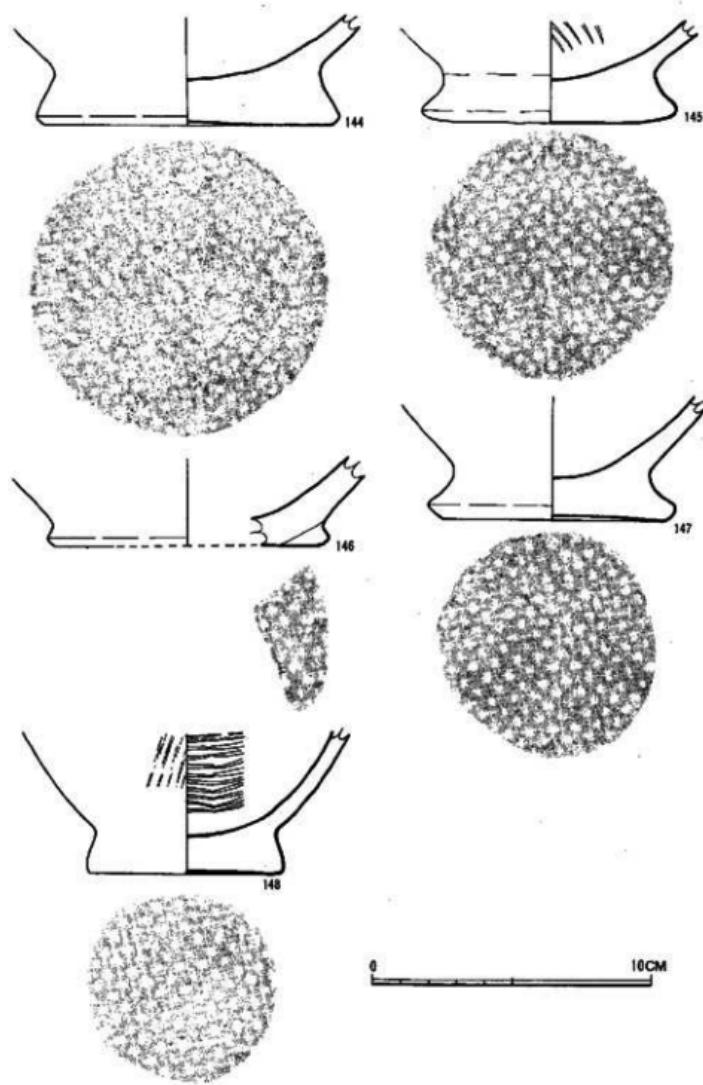


Fig. 5-10 諸圖F区黒色粘質土層出土土器実測図・拓影図(7)

おむね良好。暗褐色を呈するものが多いが、赤褐色（80）、淡暗褐色（93・102・105・133）、黒褐色（100・130）、淡赤褐色（101）、黄褐色（103・132）、暗黄褐色（104）、黒色（134）を呈するものがある。

(説文)

#### 出土石器 (Fig. 5-11~13)

**扁平片刃石斧 S1** は油質頁岩製の刃部片で器面は入念に研磨されている。刃部は片刃で刃こぼれがみられる。黒色粘質土層出土。

**石斧 S2** はホルンフェルス製の刃部破片で、入念に研磨されているが、小片のため石斧の形態は分らない。黒色粘質土層出土。S3は玄武岩製の両刃の刃部片で、表裏とも入念に研磨されているが細片であり、石斧とは断定できない。砂層出土。S4は砂岩製で、表裏は敲打整形されている。左側縁は研磨されており頭部片である。黒色粘質土層出土。

**石鎌 S9** は良質黒曜石製で、表裏とも粗い剥離加工で整形しているため、器面は凹凸がある。重量2.8g。S8も良質黒曜石製の不定形剝片を素材とし、特に表面には入念な剥離加工を加える。基部はやや内脛しているが、先端部は欠損している。1.1+ag。S7は乳白色黒曜石（姫島産出のものとは異なる）で表裏とも入念な剥離加工が加えられ、基部はやや内脛している。重さ0.5g。S10は気泡の多い黒曜石製で、表裏とも粗い加工で整形されているが、先端部は鋸歯状になっており、基部は抉りが入っている。片脚は欠損。1.3+ag。S11は気泡の多い黒曜石製短剝片を素材とする。表裏に二次加工を加え、抉りを入れて整形しているが、片脚が欠損している剝片鎌である。1.5+ag。以上5点は黒色粘質土層出土。

**尖頭状石器 S19** は黒曜石製の部厚い剝片を素材とする。裏面は入念に平坦剥離が加えられ、断面三角形の三稜尖頭器状に整形されているが、表面の先端から桶状剥離が加えられているところから刺突具としては使用されなかつたと考えられる。24.3g。黒色粘質土層出土。

**搔器 S13** は良質の黒曜石製不定形剝片の先端部に刃溝し加工を加えている。1.3g。S14は良質の黒曜石製の比較的部厚い剝片を素材とする。裏面に平坦剥離を加え、ここを打面として刃溝し加工を加え母指状に整形している母指状搔器である。5.1g。以上2点は黒色粘質土層出土。

**削器 S5** は粘板岩扁平礫の縁辺に二次加工が加えられている。砂層出土。S23はサヌカイト製の小剝片の縁辺に二次加工を加えている。ただし、先端部に抉りが入れられているところから石鎌未製品とも考えられる。黒色粘質土層出土。

**使用痕ある剝片石器 (U·Flake)** S21は良質の黒曜石製。すびまりの剝片の先端部に刃溝し加工を加えており、縁辺には使用痕がみられる。この石器は表面の風化が激しく、諸岡丘陵には、先土器時代ナイフ形石器文化期の包含層が確認されていることや、石器の形態がナイフ形石器そのものであるところから、ナイフ形石器が再堆積したものと考えられる。S22は黒曜石製の不定形剝片の一部に二次加工が加えられ、エッジには使用痕がみられる。S25は黒曜石製の縦長剝片の縁辺に使用痕がみられる。S26・S28は気泡の多い剝片の縁辺に使用痕がみられる。以上5点は砂層出土。S15は良質の黒曜石製剝片の一部に二次加工を加え、エッジには使用痕がみられる。S16・S17も良質の黒曜石製不定形剝片の一部に二次加工が加えられる。S20は良質のすびまりの黒曜石製剝片の先端に刃溝し加工を、右縁辺に二次加工を加えており、

## II 出土遺物

先土器時代の台形石器との類似点が多いが打面および打幅が残っている。器表面が風化していない等から先土器時代の台形石器とは考えられない。S30・S31・S33は黒曜石製のすびまりの剥片の縁辺に使用痕がみられる。S18は黒曜石製不定形剥片の一部に二次加工を加え、エッジには使用痕がみられる。S24はサヌカイト製剥片の一部に二次加工が加えられている。S27・S28・S34は黒曜石製剥片の縁辺に使用痕がみられる。以上11点は黑色粘質土層出土。

**砸石** S6は砂岩製で底面は表裏二面であり、右側面は磨かれている。

**剥片** S29は気泡の多い黒曜石製のすびまりの剥片である。S37も黒曜石製の不定形剥片。2点とも黑色粘質土層出土。

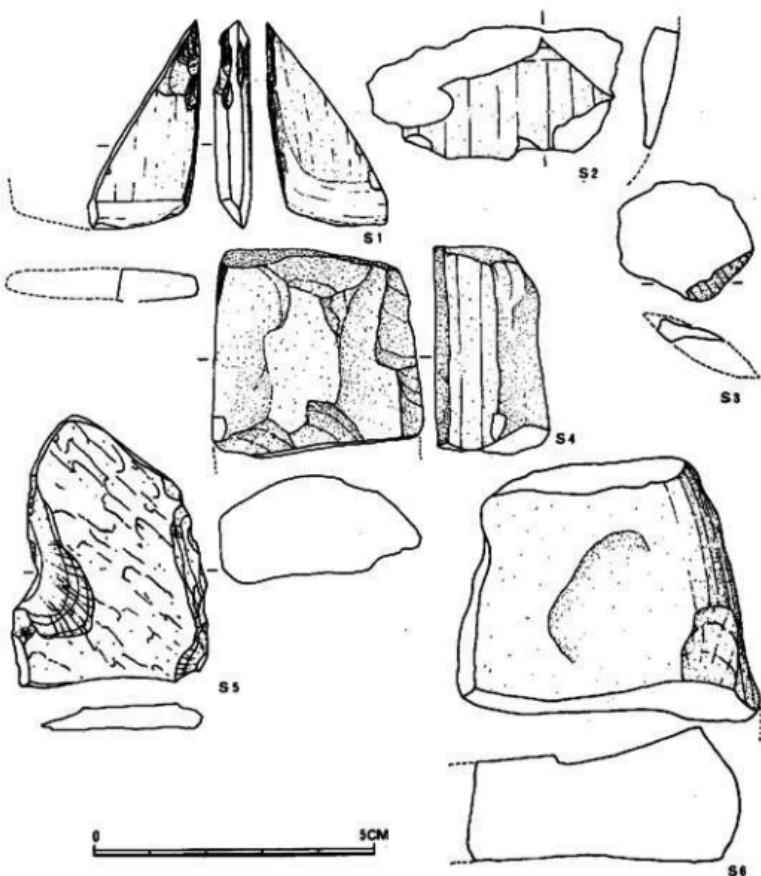


Fig. 5-11 路岡F区出土石器実測図(1)

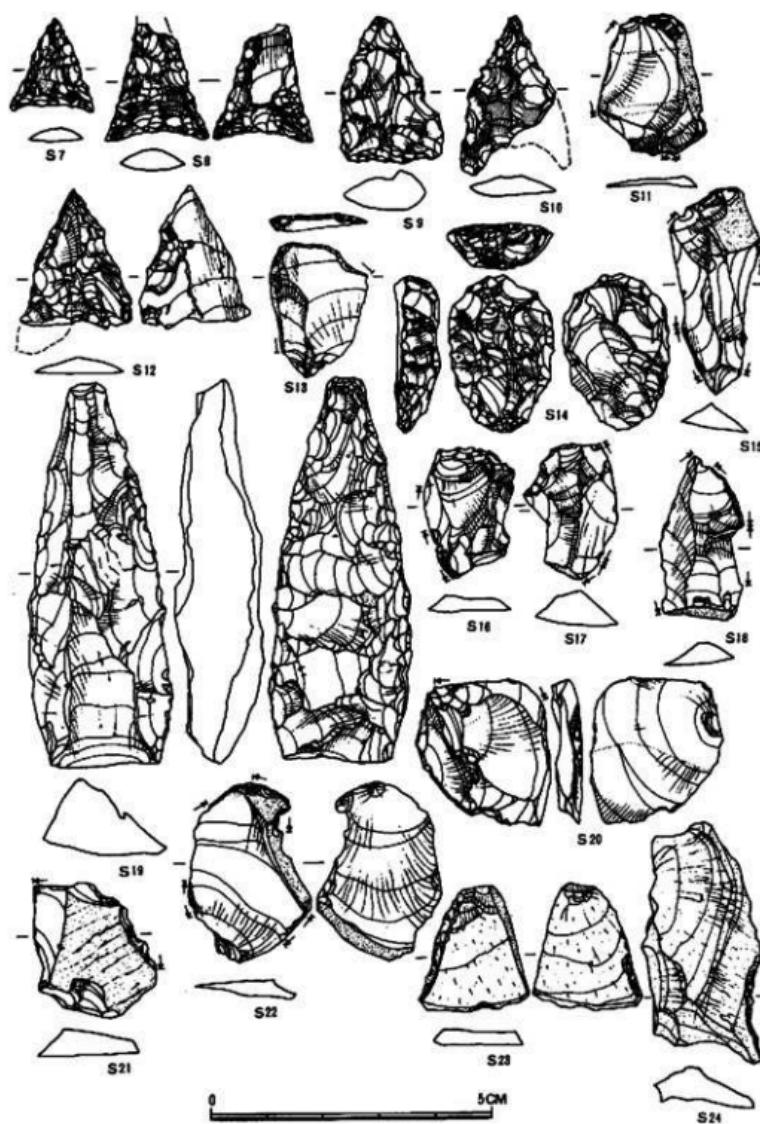


Fig. 5-12 諸岡F区出土石器実測図(2)

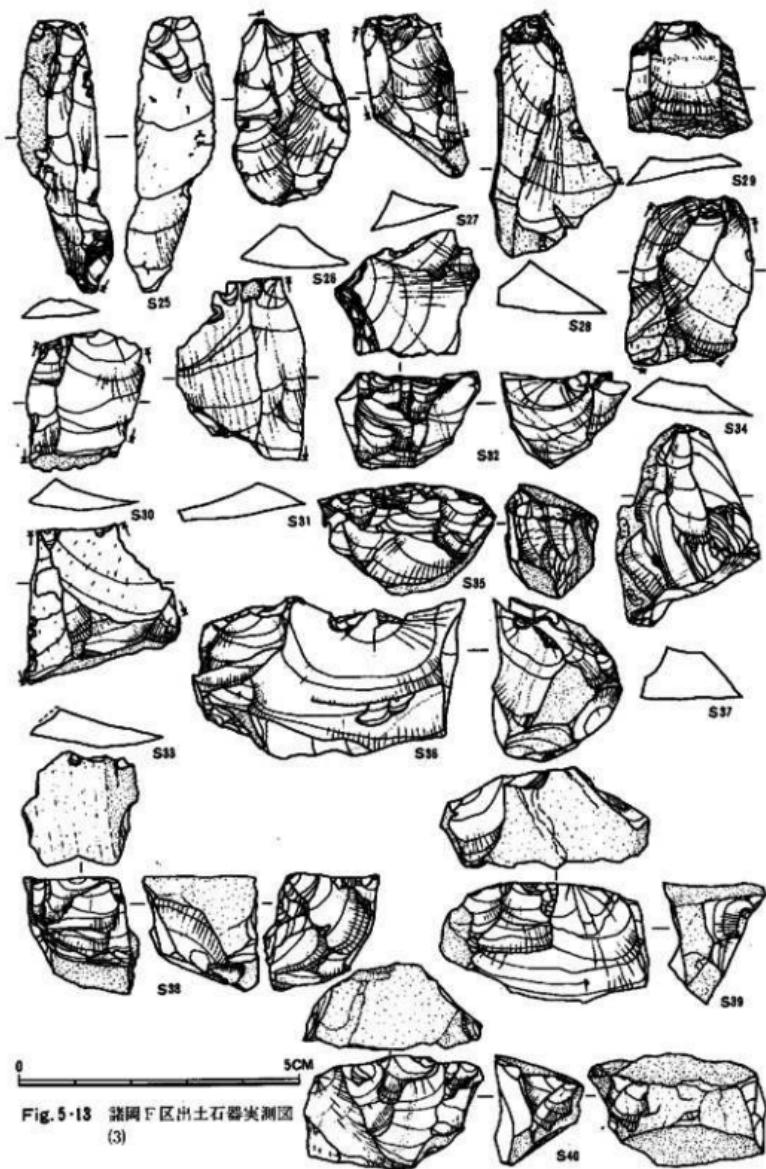


Fig. 5-13 諸岡下区出土石器実測図  
(3)

**石様** S39は良質の黒曜石製で、角礫を素材として比較的幅広の剥片が剥出されている。打面は自然面のまま、打面と剥出面の角度は70°である。砂質土出。S32は良質の黒曜石角礫を素材とし、半截面を打面として錐状に剥離を行なう。剥片の長さは1.8cm前後である。また打面調整が行なわれており、打面と剥離面の角度は70°前後である。S35は黒曜石角礫を素材とする。自然面を打面とし、1.5cm前後の剥離が行なわれており、打面と剥離面の角度は70°前後である。S36は黒曜石角礫を素材として、長さ2.5cm前後の幅広の剥片剥離が行なわれる。打面は打面調整が行なわれ、打面と剥離面の角度は70°前後である。S38は黒曜石角礫を素材とする。平坦な自然面を打面として、長さ1.5cm前後の剥片剥離が行なわれており、打面と剥離面の角度は80°前後である。S40は黒曜石角礫を素材とする。平坦な自然面を打面とし、2cm前後の剥片剥離を行ない打面と剥離面の角度は70°前後である。

以上40点の石器はS21が先土器時代のナイフ形石器である他は、夜白式土器包含層の黒色粘質土層出土のものである。しかし扁平片刃石斧は、弥生時代前期の板付I式土器共伴のものが最初と言われている。扁平片刃石斧は手斧として、木製品の仕上げに使われていたといわれ、大陸から農耕と共に入ってきたと考えられる。ここで本遺跡出土のものについて見ていくと、刃部は片刃であるが、直線刃ではなくやや丸味をもっている点は、北部九州の弥生時代遺跡から出土しているものと異なる。里山原遺跡において、夜白式土器を主体とする包含層から竖杵が出土しており、手斧の存在が想定される（安楽・森田 1975）。

以上からもし、刃部の違いを重視するならば弥生時代のものと用途が違うといえるし、手斧として考えれば、夜白式土器に木製品の共伴が想定できる。次に典型的な母指状搔器・先刃搔器が出土している。この石器は先土器時代に現われ、縄文時代早期に多く使われているが石鎌と同様、縄文時代から弥生時代前期まで使われた石器である。その他、この遺跡においては黒曜石製の多くのU・フレイク等の剥片石器が出土している。S20はもっとも特徴的なもので、組合せ石器として黒曜石製剥片が使われたといえよう。この遺跡が示す扁平片刃石斧・石鎌・搔器・削器・U・フレイクが夜白式土器に共伴した例は九州地方では現在のところないが、今後の調査に期待したい。

(山口謙治)

### III ま と め

以上、出土遺物について説明してきたが、これらの土器は一部のもの（104～106、125）を除いて、縄文晩期終末夜白式土器の範疇に入るものである。104～106の底部は包含層上部の出土であるが125は包含層中部の出土で、小破片ではあるが明らかに弥生式土器のものである。しかし、岡示しうる148個のうち144個が夜白式であり、他の図示しない破片中にも弥生式土器らしきものは存在しない。このために調査地域が狭く、若干の疑問の余地も残るが、おおむね夜白式土器の単純層とみて差しつかえないと思われる。

從来、夜白式土器は、福岡平野においては板付I式土器と共に使用されたことが知られてきた。すなわち、夜白式土器そのものは縄文時代晩期の系統を強く残す土器であるが、それは弥生式土器である板付I式土器と同時期に使用されたというもので、福岡市博多区板付遺跡（森・岡崎

1961)・同西区有田遺跡〔九州大学考古学研究室1968〕などで確認されている。そして、夜白式土器に先行する型式として、山ノ寺式土器、原山式土器などがあげられていたが、これらの土器はいずれも西九州の土器であり、ある意味では時期の下がる可能性があるとして山ノ寺式土器は夜白式・板付I式土器に、原山式土器は板付II式土器に併行するのではないかという意見が強くなっている〔春成1973〕。本遺跡出土の夜白式土器が、ほとんど弥生式土器を含まないことは前に述べた。現在のところ、夜白式の単純層として知られている遺跡は、福岡県遠賀郡芦屋町復井ヶ浜〔小川1973a・b〕、佐賀県唐津市宇木汲田〔小田1973a・b〕、長崎県北松浦郡田平町里田原〔安樂・藤田編1975〕の3ヶ所が知られているが、前二者は、未だ報告書が作製されていないため、詳細は不明であるが、貝塚を伴うところから縄文時代の伝統を強くうかがえる。

本遺跡出土の土器の中で、目に着くものは深鉢形土器である。これらの土器は、その祖型を縄文後期からの粗製深鉢形土器に求め得る。縄文晚期黒川式の時期には、口縁下に段を有するものが多いが、本遺跡出土のものは口縁部から、単純に底部へとすぼまる。外面は斂状の工具で、不規則な条痕あるいは擦痕状に器面を調整するが、内面は横に整然とした条痕を施す。底部は円盤貼り付けか、あるいはそれに先行するかと思われる断面三角形の張り出しの貼り付けを行い、夜白式に特徴的なものである。この土器の口縁部に刻目突帯をつけると79の様な土器となり、形態的には斐形土器の祖型とも言えよう。

また鉢でも砂層中出土ではあるが25のように古い特徴を残すものもある。

壺では、板付遺跡において刻目突帯の位置で、A「口縁端より下る」、B「口縁に接して下向の傾斜面をもつ」、C「口縁端と同高であり、口縁端にやや被いかぶさる感じの薄鉢形断面をもつ」に分類されているが、「この三形式が本遺跡において時期の先後があるとは考え難い」といわれている〔森・岡崎1961〕。このことは諸岡F区にも言えることであるが、基本的にはAが多く、口縁部片42個中Aが25個、Bが8個、Cが9個である。刻目も79のように繊細なものもあるが、わりと大きなものが多い。砂層中の29個体は壺8、甕10、浅鉢3、底部8、包含層の119個体は壺18、甕54、深鉢形土器13、鉢（浅鉢を含む）5、底部29で、全体では、148個体中、壺26、甕64、深鉢形土器13、鉢（浅鉢を含む）8、底部37となり、圧倒的に甕、深鉢形土器が多くこの二つで50%以上を越え、底部を除くと70%近くを占める。このことは貯蔵用の壺より、煮沸用の甕、深鉢形土器の用途が多いことを示している可能性がある。頗らしきものは出土土器中にはみあたらなかった。

出土遺物中には、稻作農耕を示すものはほとんど存在しない。わずかに扁平片刃石斧片と、148の底部に残る圧痕が様のものであれば、それらが消極的な証拠としてあげられる。しかしながら、これは調査範囲が狭く、包含層も台地下の沖積地のものであるためである。遺跡の主たる部分は西側に残る台地上に求めることができる。なお、包含層である黒色粘質土を採集して水洗中であるが、現在のところ何も出土していない。

以上、諸岡F区は、小範囲の調査とはいって、出土土器のほとんどが縄文時代晩期終末の土器であり、石器も縄文時代の伝統を強く残したものが多い。そのことは福岡平野においても夜白式の単純遺跡の存在の可能性を示すもので、弥生式土器の始まりについての資料となりうる

ものであろう。

(沢 皇臣)

### 参考文献

- 安楽勉・藤田和裕(編)(1975)黒田原遺跡 長崎県文化財調査報告書第21集
- 小田省士雄(1973a)入門講座・弥生式土器—九州2— 考古学ジャーナル77
- 小田省士雄(1973b)貝孢丁と鉄孢丁—五島列島民具採訪録 考古学論叢1
- 後藤直・横山邦樹(編)(1975)板付周辺遺跡調査報告書(2)福岡市埋蔵文化財調査報告書第31集
- 春成秀爾(1973)弥生時代はいかにしてはじまつたか 考古学研究第20巻第1号
- 森貞次郎・岡崎敬(1961)福岡県板付遺跡 日本農耕文化の生成
- 横山邦雄(編)(1974)板付周辺遺跡調査報告書(1)福岡市埋蔵文化財調査報告書第29集
- この他に
- 森貞次郎(1966)九州 日本の考古学即ち弥生時代
- 古田正隆(1973)山ノ寺櫛木遺跡 百人委員会埋蔵文化財報告第1集
- 古田正隆(1974)重要遺跡の発見から崩壊までの記録—繩文晚期原山埋葬遺跡— 百人委員会埋蔵文化財 報告第3集
- 福岡考古學研究会報第2号(夜臼特集)(1975)
- 杉原莊介(編)(1961)日本農耕文化の生成 などがある

## あとがき

1973~74年度に続き、今年度も板付周辺遺跡の緊急調査を実施した。

今回調査したG-5a地点は、弥生時代前期から中期中葉までの生活址・墓地と中世の生活址・近世の生活址・墓地の複合遺跡である。墓地は板付丘陵において、他に4ヶ所確認されているが、田端遺跡を除いて副葬品をもたないこと、丘陵周辺に位置することは、板付丘陵における人間集団の墓地の営み方から興味がもたられる。さらに、近世の墓地が出土したことは、当時の墓地の例として貴重であるといえる。また、近世墓地が削平されていることから、すくなくとも本地点では、近世墓地が営なされた以降に、大規模な土木工事が行なわれたことを示しており、今日の板付丘陵のあり方に大きな影響をおよぼしているといえる。F-8a地点は、板付丘陵の南北間にある塗みのあり方を知る上で重要である。B-12a地点は、板付丘陵南東部の沖積地であるが、占墳時代以後と考えられる溝状構造が確認されたことは、板付遺跡の生産遺構の広がりを知るうえで重要な成果といえる。

諸岡遺跡は、諸岡丘陵の北東部斜面（E区）と南東部の丘陵が沖積地に接する地点（F区）の調査を行なった。E区は削平されているが、弥生時代の遺構がなかったことは、当時の生活址・墓地の広がりを知るうえで重要である。F区では小範囲であるが、夜白式土器の単純と思われる包含層が確認された。不明瞭な点が多い夜白式土器期の様相を知るうえで貴重であるといえ、今後福岡平野を中心とする北部九州で、類例の増加が望まれる。

以上今回も5ヶ所の緊急調査を行なったが、いずれも重要な遺跡であり、緊急調査で調査を行なわなければならなかつたことは残念である。

**調査主体**

**福岡市教育委員会**

古村澄一、結城一義、青木 崇、志鶴幸弘、三島 格、清水義彦、橋崎幸利、草場九男  
安田正義、沢 皇臣、横山邦輔、山口謙治

**福岡市埋蔵文化財調査報告書 第36集  
板付周辺遺跡調査報告書（3）**

1976年3月31日

編集 福岡市教育委員会文化課板付遺跡調査事務所

福岡市博多区板付2丁目11-1

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区大神1丁目8-1

印刷 祐文社印刷株式会社



1. G-5 a 地点 A 区遺構出土状態（南から）



2. 第13~15号墓出土状態（北から）



1. G-5 a 地点A区遺構出土状態（南から）



2. G-5 a 地点B区遺構出土状態（西から）



1. 第1号墓棺墓出土状態（東から）



2. 第24号墓棺墓出土状態（南から）



3. 第33号墓棺墓出土状態（東から）



4. 第36号墓棺墓出土状態（北から）

3. 第14号木棺墓出土状態（北から）



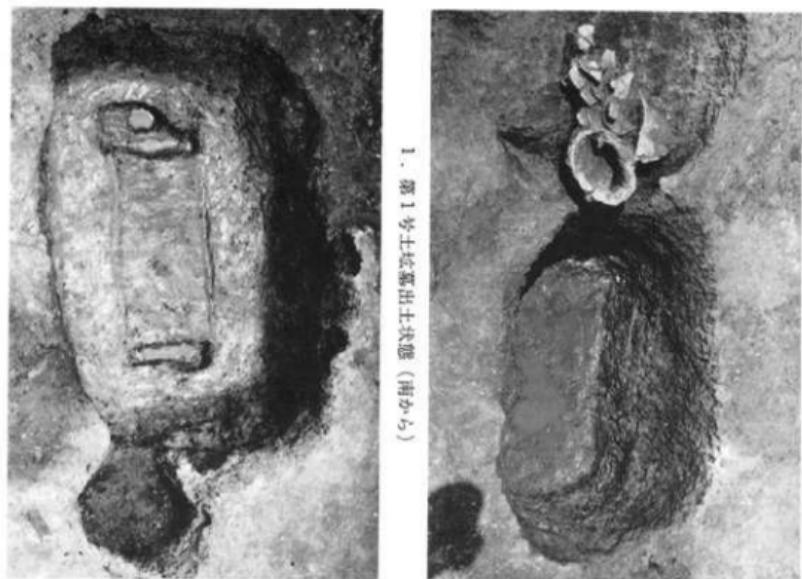
1. 第1号木棺墓出土状態（南から）



2. 第10号木棺墓出土状態（南東から）



4. 第10号竖穴墓出土状態（南東から）





第10号竖穴出土土器



1. 諸岡遺跡E区遺構出土状態（南から）



2. B-12a地点遺物出土状態（南から）



1. 諸岡遺跡F区Bトレンチ（南から）



2. 諸岡遺跡F区Aトレンチ南壁土層（北から）



3. 諸岡遺跡F区出土土器



4. 諸岡遺跡F区出土石器（分）

板付周辺遺跡調査報告書

3

福岡市埋蔵文化財調査報告書第三十六集

一九七六